

人の一生

はじめに

今回の調査地は南から大間々町の中央部を抜け、黒保根村と東村を経て足尾に至る銅街道の中間地域である。かつては桐生とは性格の異なつた、いわばこじんまりとした商業経済の中心をなしてあり、旧福岡村であつた浅原、長尾根、小平地区は、小平川に沿つて袋小路のような長細い地域に集落が点在し、塩原地区は渡良瀬川を隔ててはいるが、神梅地区と共に赤城山本麓の、浅原地区とはやや地勢の異なる地域である。共に山村の性格をもっている。

人の一生に関する民俗には、この山村のもののほか、他の地域的と同様に東毛的なのが聞かれた。そして浅原地区では、今でこそ機械場として、どこにいても威勢のよい機械音を耳にするが、それ以前は一般にはやはり貧しい山村であつた。このことは八十才前後の人々の話の端々から知られる。今では生活も大きく変つた。養蚕は衰え、山村でありながら山仕事の場合とした職も消え、押しよせる近代化の波をかぶつて、機械以外に特徴は失なわれている。

以下、人生の通過儀礼を中心に記述する。

「夫のつわり」は民俗書に時折みることだが、本県での調査では例が少ない。かつて桐生市梅田町で聞かれたが、この大間々でも一例があげられた。オトミマクという。夫も妻と同様な状態になつて助けるわけである。出産前に誰しもが願う安産、お詣りするまでの距離は遠

いが、勢多郡旧荒砥村の産泰本社まで行つた。明治から戦前までは、この地域も小平の奥まで産泰神信仰圏にあつた。

一方山村である旧福岡村一円に十二様(山の神)がお産の神として、特に隣村黒保根村桑の代の十二様が信仰されていた。そして後産がおらない時は、夫がホウキをかつぎ下駄と草履をはいて家の周囲を回る、お産の間夫が石を抱いて家の周りを回るなど、これも夫の力を借りる一つのあらわれである。また十二様とホウキ神の立会いでお産があり、子供が生れるという信仰はここにもあつた。そのお産はナンドで、坐産であつた。そしてお産の直前まで畑で働いた。近所のお婆さんに取上げてもらい、産後はオカユと焼塩、味噌汁、カツオブシだけの食事、油物、梅干、肉類、柿などはたべられなかつたという老婆の話、これは明治生れの婦人が誰しも経験したことであつた。

お七夜のオヒヤマイリに、近所と三軒の便所にお詣りすることによつて、「赤ん坊の仲間入り」をするという観念は注目される。その後のオビアキ、食いぞめ、初誕生祝、初節句の行事は他の町村と同様で、産後二十一日間産婦は汚れているとして、神、仏、井戸水には一切関与しないという禁忌はここでも守られている。

長尾根のオクマンサマはホウソウ神として信仰され、浅原を初め他の部落の人々も参詣し、オクマンマイリという言葉さえあつた。

今では若衆組、娘組という名の青年男女の自主的団体を耳にすることはできない。青年会、青年団、処女会などは、私達が幼少の頃から聞きあるいは属して体験したものである。二五〜三〇才位まで、そして村によつては結婚するとこの団体を抜けるのと、そのまま残るもの、

つまり結婚を一つの節にするか、年会集団をしての性格を重視するかによって異なってくる。前者の場合村人の結婚に関与し、古い時代の若衆組の性格を僅かなからもちこたえるのであろう。

こうしたことは別に、青年の力くらべは他の町村を同様に行われていた。娯楽の少ない山村での当然であろうが、然し、単に個人的な力量の比較のみであったのか、他村の若衆との力くらべであったのか、そこまでは聞けなかった。

この地域の青年の夜遊びは、機織屋が多いだけに、そこに働く女が対象で、かなり盛であったようである。而もそれは双方楽しく行なわれていたようである。これに対しヨバイは、明治末期から大正初期に青年時代を過した人々の体験である。そして嘗て多野郡鬼石町であったように、娘側との連絡のとれた例えば一定の場所に予め話し合った標識が出されていた話合のもとで行なわれた。

十六才の男子の祝いに、屋敷稲荷にオカミアゲを供え、喜寿、米寿の祝いが霜月十五日に行なわれることは、年祝いのなかに屋敷稲荷信仰と祖先信仰のかかわりがうかがえるのではないだろうか。こうした意識は厄はらいにもみられる。厄おとしが村民全般に広く行なわれ、屋敷神、村の鎮守様にお詣りして、年を一つ余計にもらうことによつて、厄年から逃げようとする。それは節分というトシトリの行事であった。

結婚はこうした山村では一般に家と家との結婚、従つて親が決めた相手と結婚する。年頃になると世話づきの人に頼んでおき、その人が仲人役をする。つまりせめて「見合い」で、「恋愛結婚」など到底考えられない。といつて異性が愛し合うことがないのではない。それが存在し、子供が生まれても取り合わないのである。一方若衆が娘衆を管理するということもなかった。

婚姻は、山を越えても距離の近い隣村（川内ノ黒保根、東村）が多く、大間々、桐生地区とのものは比較的少ない。その中でこれも山村

にいく程近視結婚は存在した。親戚を現在以上にふやさず、交際範囲を拡げないようにという、切実な事情に基づくものであった。それでも「仲人のナナデンボウ」「仲人のぞうりきらし」という言葉は、ここでも生きている。そしてあとあとまで仲人親として大切にもてなした。そこには義理が生きている。なかには大正の中頃、扶持をもち番頭、女中を連れて嫁入りした例も聞かれたが、これは特別のものともてよい。

話がまとまると先ずクチガタメをする。他村という樽入れ、婚約成立である。そのあとトマリゾメ（足入れ）があつて両人の関係は公認され、次いで結納、トリムスビという順序である。結納金には着物代、タンス代としてハネをつけ、ホカイを馬に片荷又は一駄つけ、あるいは迎えだんす、オシヤク着物か婿方から贈られ、嫁の荷物は両者から出るチュウゲンによつて運ばれる。これはイチゲンとは別に嫁を迎えるわけである。婿入婚の形はここでもみられた。次いで嫁の入家はタスマツが割竹に火をつけて掲げた中で、カドで青竹をまたぎ、姑が管笠をかぶせて行なわれる。

トリムスビは床の間で、イチゲン客を交えず行ない、ここにはお侍女房も坐る。前述の如く若衆組の機能のあらわでないここでは、若衆座敷も地味であった。一方御祝儀あとのオタイギ振舞、ヨメゴのお茶、村まわりの仁義、ミソメのオンナイチゲンはお堅くやっている。

初夏に麦が穫れると嫁は新粉をつくつて実家に行き、秋は新米をもつて里帰りする。そして神様に進げる実家が農家であるか否かは問わない。これをホカケという。これは東毛地区で多く聞かれることで、日本の農村としては然るべき行事であろう。単に新らしいものが出来たので実家の両親にたべさせるといふのではなく、そこには儀礼とその背景にある信仰があるとみてよい。恐らく古くから行なわれていたもので、それがいまなおしっかりと維持されていることに注目したい。

「嫁は里からもらえ」婿は床の間から、大尽から、里からもらえ」「嫁は台所からもらえ」とか「嫁はあしかけ三年」「嫁三年、婿八年」「嫁のつとめは十年」などという言葉がある。自分の家より大尽から、働き手をもらえとし他家から来た者はつらかった。働くことだけが求められたのである。身上廻しは親が死ぬことによって譲られる。ヘソくりはつくれず、自由になる金銭は実家の親からもらったものであった。現今では想像もされないもので、それだけに姑のいないノツツケガミサンは、皆にうらやましがられたのである。

科学的には説明し得ない死の予兆は、お百度詣り、魂よびと共に現実存在する。私自身その体験があるからいつも取り上げるわけではないが、どこの市町村の調査でも、語る人は一方で不思議なことだといひながら、目をかがやかせて強調する事柄の一つである。ただ「人玉は十二様から十二様まで飛ぶ」というのは、何を意味しているのであらうか。

お通夜は、以前は兄弟子供達は起きての徹夜のことであったが、最近は夜半の十二時まで、更に三時間位で終えるというように形式化する傾向にある。その通夜の夜湯灌が行なわれ、終るとタイヤのお膳を皆でたべる。

納棺のとき入れてやる金銭は、あの世での小遣銭とか三途の川の渡り賃とか説明しているが、そのほかに粟の穂も入れてやるのは興味ある習俗である。粒が小さいのでそれを教えていて、この世に帰って来られないようにするためだと説明しているが、何かほかに意味がありそうである。

藪塚本町で調査され、また東毛地区の各地で聞かれる「飾りだんご」はこの町でも行なわれている。ただ小平では六ヶの団子をさした六本従って全部で七二ヶ、神梅では七ヶずつさして四九ヶと多少の相違はあるが。

トコバン（穴掘り）は隣組単位で、妊婦のいる家を除いて、四〜六

人が組で、穴掘順番帳による順番制、若し葬儀が続いても必ず交代する。ただ神梅ではお寺でトコバンを決めるといふ。トメアナ（前日に掘った穴）は忌まれ、必ず葬儀の日に掘って、道具は共有物又は施主のものを用いる。

縁側から出棺すると、アナマワリは、庭に竹を四本立ててその周りを左廻りで三回半廻る。この出棺のあと部屋を掃き出し、メカイを座敷に転がす。これも東毛各地にみられる習俗である。

埋葬後その上にノベの灰をかけ、割竹で作ったメハジキをさす。これは山犬、テン、狼などの墓荒しを防ぐためのとされるが、その形式が、神梅、狸原、茂木、谷田でそれぞれ多少の相違がある。墓直しは埋葬の翌日にする村、埋葬して家に帰ってすぐ再び墓地に行つて行なう村、簡略化して埋葬直後に行なう場合とあり、また葬儀の翌日をナノカといい、ナノカのお経を葬儀当日やつてブツツケナノカという。最近葬儀が簡素化、形式化しつつある好例である。スエノカサで四九杯の白米を晒の袋に入れ、四九日間の新仏への供物をその日に和尙に渡してしまうのも同様の考え方によるものとみられる。

葬儀後の念仏はかなり盛であった。神梅では男衆がやったといい、念仏の始まる鉦の合図で子供達も多勢集まった。そして赤飯の念仏ダマ或は念仏団子を配り（今ではこれもお菓子に代った）盛大な供養をした。

葬式の夜泊ると一週間泊らねばならないといわれ、泊らないで帰る。もし泊らねばならない場合は、一度トボグチから家の外に出てから帰ったこととし、再び家に入って泊る。また風呂はわかさないことになつてゐる。こうした思みごとは今もなお守られている。

小平で七日毎の墓参の団子は、六個の団子の粉をとつておいて作るというの、古い形を残しているといえよう。以前は四十九日まで丁寧なお祭りが行われていたのである。魂は四十九日たつて座敷から仏壇に上る。これをオタナアゲといい、忌切りであつて、餅をついて塩

あんを入れ、忌切り餅といった。この餅をつく音で魂はグシを離れるという。それまで魂は家にあるので明りは絶やさないと説明する。そして最後の年忌の三十三年忌は、トムライジメ（トムライアケ）で塔婆はタテジマイである。これをトメトウバといい、杉の生木のイキトウバ（シンツキトウバ、ハツツキトウバ）を立てる。これをここだけの習俗と意識しているのは意外であった。

耳ふさぎについて、小平地区では馬糞で耳にふたをするといふ一般であるが、戸沢では二銭銅貨を半紙に包んで耳につけ、それを幣束と共に三本辻に捨て、他人にみられないように振向かないで帰るといふ。生れ代りも神梅では死者の背に、高津戸では手の掌に、字を書いた埋めた例があるように、こうした習俗には多少の相違がみられる。概してこの町にのみ存在する民俗というのはなかったが、離れて東毛地域に点在するものはみられ、またこの町の中でも部落によって多少異なるものがある。（池田秀夫）

一、誕 生

(一) 妊 娠・出産

妊娠 妊娠することをデキルといい、妊娠した女をハラミ女という。十人以上或は数多く子供を生むと、ブタツコみたいを生むという。（浅原）すっぱいものが食べたくなったり、顔色を見て姑さまが気がついて注意してくれた。五ヶ月のイヌの日に産婆さんに腹帯を巻いてもらった。今はてんづけ医者へ行く。（深沢）

妊娠しての注意 あるものをたべて、魚をたべるなど栄養は考えない。その日その日命つなぎをすることだけ考えた。高い所のものを取ったり、重たいものを持ってはいけななと考えなかつた。（浅原）つわり つわりがひどくて、うどんや魚が嫌いで食べられなかつた。

そのせいか、その時の子は魚がきらいで、ずっと魚を食べない。（深沢）オトミマケ 旦那がツワリと同じように、ごはんが食べられなくなつたり、ツワリの母親にかまつてもらえなくて、痩せてピーピー泣く子も共にオトミマケ、という（深沢）

腹帯 五ヶ月目の戌の日にする。お産が軽く済む。相手（夫）のフンドシを腹帯にすると軽いともいふ。（小平）

五ヶ月目の戌の日にしめた。犬は産が軽いという。赤子には産婆が額に食紅で「犬」という字を書いてくれる。（桐原）

安産祈願 村の天神様（鎮守様）、桑の代の十二様、さこの方の産婆様（大胡を通つて行き、歩きがあつた）に個人個人でお詣りした。

お産のときは十二様に頼むという。十二様には小さいボンデンをオガミヤに切つてもらつてお礼まいりに行つてあげた。人の死があつたときのローソクをもらつてきておいて、産気づいて腹が痛くなると、そのローソクを神様にあげる。これが燃えきるまでに生れるという。又、女は便所をよく掃除するとお産は軽いという。（浅原）

黒保根村大字八木原字桑の代（戸数は五・六戸）の十二様が安産の神で、祭日は四月十二日。産婦が妊娠三ヶ月位のうち、軽く出来るようにとオサゴ、ゴマメを持つて行つて進ぜる。軽くできるとボンデンを立てる。（浅原）

大室の産婆様に安産祈願をした。講はない。安産するとお礼拝りに底抜けいしやくを進ぜた。願はたしとして生まれたとき、子供の額に「犬」という字を書いた。（浅原、大間々町三丁目）

前橋の城南の産婆様へ親がおがみに行つてくれた。お礼詣りは金か赤飯を持つて行つたと思う。（深沢）

荒砥村の産婆様にお参りをし、底抜け柄杓をあげる。道がくどくて大変であつた。（小平）

十二様とホウキ神様 お産はこの二柱の神様の立ち合ひのできる。十二様の石宮からお燈明の短かいのを借りてくる。お燈明の火の消え

ないうちに生まれるという。お札参りはする。

また後産がおりない時には、ホウキをかついで、下駄と草履をチンバにはき、主人が家の周囲を回る。(小平)

十二様にはオオヤマズミの命をまつてある。山の神様。桑の代には十二様神社がある。子どもが軽く生まれるようにおがみに行くお産の神様。ろうそくをあげて火をつけ、それが小さければ小さいほど早くできる。ろうそくの火を消して、他の小さいのを拾ってもらって帰り、お産の時につけると、消えるところまでに生まれる。(神梅)

馬の荷鞍を枕にして生むと軽いという。(小平)

お産 水天宮のお札を飲むとお産が軽く、すむ。又、腹帯にお札をつけておくとよい。

建前のお供え餅が棟上げのときの四隅の小さいお重ね餅を拾って来て神様に供えると軽くすむといわれていた。

にわたりの初卵を飲むと軽いと聞いた。(塩原)

観音様に願をかけて、ろうそくを借りてきてとすと、ろうそくの火が消えるまでに産まれるという。(下神梅)

お産には晒のジバン、綿入れの胴着、ネルのきもの、綿入れのきもの。麻の葉のきものを青いのと、赤いのと用意した。

麻の葉は縁起がいいから。オメシを五、六十枚用意した。(深沢)

むかしは、お産はナンドでした。畳の上に俵を切り広げて敷き、その上にボロを敷いて産んだ。フトンを積んでこれにおつかぶさつての坐産であった。そのころは、お産でまちがいが出来たという。

お産のあとは、うすい布団を三枚ぐらい折りたたんで、よりかかっていた。よごれたものは畑に埋めた。むかしは、わら束を二十一把かさねておいて、一日に一把ずつ抜いて低くしていったという。二十一

日目がおびやきであった。(浅原)

むかしは脱脂綿もなかった。綿と油紙を入れたフトンを作った。お産がすむと、洗ってとっておいて次の子の時使った。

新聞紙とカツパガミ(油紙)をすいた。

畳を上げて灰を敷いてワラをかぶせ、ボロ布をかけてした人も居たそう。

初めはつぶぶしてお産をした。コタツヤグラにつかまったり、丸めたフトンを掴んだりした。

産婆さんの首が折れる程掴まった。(深沢)

家でお産をした。里の親がいいわけに一、二晩来て世話をする程度であった。(塩原)

お産の時に旦那が家にいれば取り上げばあさんを頼みに行ったたり、お湯をわかしてくるぐらい。

かみさんのお産の間ちゆう、石を抱いて、ウロウロしてた人や、家の回りをかけてた人があったそう。

夜中に腹が痛くなつた時「もう少し待ってろ。明るくなつたら産婆さん呼びに行つてやる」なんて言われたことがあつた。(深沢)

昔は生まれるその日まで働らいた。でっかい腹をブランドブランドさせ

て畑のさく切りなんかする人があつた。(深沢)

トリアゲバアサン 産むと汚水を飲まないように自分でかきのけて「オバサンのむよ」といって近所のトリアゲバアサンに取り上げて

もらった。これに對して盆、暮の礼は二、三年の間行ない、一生ではないのが多く、なかにはそのとき限りのも多い。戦後は産婆の手を煩

わし、今は病院でのお産が多い。(浅原)

姑か近所の馴れた人に頼む。特別なお札はしないが、お七夜にサンマと赤飯をあげる。(小平)

産婆さんは今は母子保健推進員といい、月に一度妊婦の家庭を回ったり、乳児やその母親の保健指導をしたり相談を受ける。(深沢)

ヘソの緒 ヘソの緒はしまつておいてなかなか治らぬ病気になる時せんじて飲む。埋める人もいるが、何れにしても粗末にするなといわれた。ヘソの緒を首に巻いて生れた子をケサガケという。(浅原)

後産 ハカバ、トボグチなどに埋けた。多くの人にふまれたりまた
がれると、のし上りにならないといった。今の子は親などふみつけて
のし上りになっている。(浅原)

へそのおは、人のまたぐほどいいといって、とぼにかけた。これは
むかしのことで、最近、墓へもって行っていけるようにしている。
(浅原)

お墓へ持ってっていった。今は大葬場でフトンごと焼く。(深沢)
あと腹が痛む時、本人が知らないうちに二尺ざしをふとんの下に差
し込むといい。よくなる(深沢)

納戸の下とか、人に踏まれるといいつてトボ口に埋ける人、ま
た方を見てそちらに埋める人などある。(小平)

産後の食事 オカユと焼塩がオカズである。油物は百日間悪い、青
物、草餅もいけないといふ。柿は血を騒がすといふ。お産があると実
家の親がカツブシを持ってくる。カツブシミソとフトカンピヨウはた
べてよいといふ。(浅原、小平)

お産の前は、力めし、力もちをくれた。産後は、おかゆに梅干とみ
そ汁だった。七日の夜には鯉を煮てくれた。甘いものはくれなかった。
流産のときは甘い湯をのませた。一ヶ月たつと甘いものでもよいと
されていた。

柿は毒であった。お産ばかりでなく、けがの人などはふさがった口
も開くといわれた。(塩原)

さとうは乳が細くなるからいけない。煮つけにもさとうぬき。さと
うぐらい入れないとまずくて食べられない。

柿も梅干もだめ。サンマもマスもだめ。
卵もだめ。三年前の古傷がおこる。

イワシ、サケはいい。フにミソかなんかでおかいを食べる(中神梅)
産すると実家からチカラゴメを一升持ってくる。一生食べられる
ように。一斗持ってきて「一升だよ」って言う。(深沢)

サンシの食物はオカイと、ミソにかつぶしを食べてれば間違いはな
い。イワシは食べていい。またマスはいけないがサケならいい。

産後百日ぐらい、油つけを食わない。子どもの目が悪くなるから。
ナベまで別にする人もあった。

イワシの字を三つ書いてひたいにはる。(深沢)
とこあげ ふつうは二十一日目にとこあげになった。家によつては、

三十日、三十一日の場合もあった。(浅原)
妊娠中の禁忌 柿冷えるから。スルメ血を荒す。マス血を荒
す。三年前の古血を荒すから。

火事を見ると赤いアザができる。死んだ人を見ると黒いアザがで
る。だからしじゅう鏡か半紙をふところに入れておく。(深沢)

今は柿は栄養があるから沢山食べるように指導する。(深沢)
兎の肉を食べると三つ口の子ができる。(小平)

産後一週間はナンドで過した。そのあとには明るい部屋に移った。二
十一日間は汚れているので、仏壇、神棚などの供物は一切禁じられて
いた。井戸水を汲むこともできなかった。(浅原)

子を産めば百日は不浄といつて男より先には風呂に入らない。母親
はオブスナ様には行かない。(浅原)

始めて勝手をする時 「ハライ給え、キヨメ給え」と言つて塩をま
いて勝手へ立った。一週間寝ていた。(深沢)

子ブク オビアキまで遠慮する。(深沢)
神社へおまいりするのには、お産のブクはいいが、死にブクはわるい
といふ。

鉄砲ぶちは、お産のあつたうちへ行って火をもらつていくと、獲物
が余計あるといふ。(長尾根)

間引 いかを食べると子どもが降るといふ。生のいかを食べすぎて
死んだ人もいふ。(塩原)

子のできない人 子のできない人は子沢山の人の腰巻きを借りてす

るとできる。(深沢)

生理帯 むかしはモッコを自分で縫った。腰巻きなんかで。心配でしかたなかった。薬局でビクトリヤを売るようになってから、とてもよかった。(深沢)

生理 女の子がメンスになった時、赤飯をふかしてやった。自分もそうしてもらったから。

今の子は早い。それをハバ^(自慢)にして話す。(深沢)

(二) 生 児 儀 礼

産湯 納戸の下とか便所に捨てる。(小平)

タライは嫁にくる時持ってきたものをおろして使う。お湯は畑へ穴を掘って捨てる(深沢)

大昔は、ナンドの下に穴を掘っておいて、そこへお産の洗水、とりあげ水などをながしたという。その後は、あきの方(これは暦をみてきめた)に穴を掘って、そこへあけた。(浅原)

産着 お宮参りに着せる。嫁の実家でカサネを作って贈る。産着の背中には小さなお守りをつけた。(小平)

オシメ むかしは浴衣とフトン皮、と相場が決まった。浴衣のきれいなのはお客に行く時など使うように上げておいた。

昔と今ではオムツの使いかたも違う。今はただ股にはさむだけでオムツカバーで止める。

昔はオシメカバーに苦労した。綿を入れて横に長いオシメの形のオシメカバーを縫ったり、毛糸で作ったりした。今は同じことでも言いがきれいなになった。(深沢)

オボタテ 産むと一生くえるようにと家人が御飯一升煮る。オボタテといって神様にあげる。大勢でたべるとオオグラシができるって、なるだけ大勢集めてたべてもらった。(浅原)

一生幸福なように、一升のごはんを炊く。オボタキごはんといい近

所の世話になった人や、年寄を呼んで食べてもらう。

その時、朱のもの、赤い色のものを燃すとウルシにかせない。おわんをひとつ燃した。

ごはんが残れば家の衆が食べる。一升ぐらいじゃ残らない。(深沢)

産見舞 組合、親戚の人が布をくれる。また実家から米、カツブシ、三十日にはオボギをもってきた。これを着せてシユウトが抱いてオブスナ様に詣る。この日赤飯をふかすがこの日のお祝いをオバヤキという。(浅原)

孫だき 子どもが生まれると、嫁の里の親が、うぶぎをもって孫だきに来た。子どもが生まれるとなるべく早く来た。(浅原)

おひやまいり お七夜に、赤ん坊をつれて、自分のうちと隣り二軒合せて三軒の便所まわりをした。うちで、赤ん坊の額に犬という字を朱で書いて便所まわりをしてきた。おさごをもって行って、便所にあげてきた。このとき、橋を渡ってはならないという。おびや(生まれで二十一日目)がすむまでは、橋を渡ってはならないという。その前に橋を渡ると、あたまの脳のかたまるのが遅くなるといわれている。

おひやまつりに、赤ん坊をつれて行くのはうちのとしよりがふつうであった。(浅原)

オヒヤ神参りはお七夜にやる。額に硯の筆で犬という字を書いて、自分の家と、両隣りの便所にお参りさせる。その時、オサゴを紙につんで持っていく。また、割箸を割らないで持っていく供える。(小平)

この日「犬」という字を額に書いて紙に包んだオサゴを持って三軒の家の便所に詣る。自分の家の便所だけに行っていれば他人のことは判らないから他家の便所にも詣るのだというオヒヤマイリといい、取り上げた人が抱っていく。(浅原)

お七夜に橋をよけて、近所の三軒の便所を回る。オサゴと豆煎りを持っていくって便所の中へまく。

それを拾って食べると虫歯にならない。これは赤ん坊の仲間入りで、

近所の家では五銭か十銭お金をくれる。これを子の貯金の始まりにする。

サンシはお七夜まで石橋を渡らない。土橋ならいい。(深沢)

お七夜に、赤ん坊をおぶって、おさごをもって便所をまわってくる。自分の家の便所に行き、近所を二、三軒まわってくる。便所をおへやという。(神梅)

三軒の近所の家を回った。額に犬の字を墨で書いてもらった。赤飯とおさごを持って行った。この日に、髪の毛をすり落した。(塩原)

名付け お七夜に間に合うようにつける。姓名学などによってよい名を選ぶ。ただし、名負けをする場合もあり、届けたのと呼び名と違う人もいる。

いくつかの名前を書いてカンジヨリにして稲荷様へあげ、子供に引かせてつける家もある。名前は半紙に書いて大神宮様に貼っておく。

トメ、スエ、ナカなど簡単な名も多い。(小平)

お産婆さんにつけてもらう。三つぐらいいい名前を考えてもらい、神棚へ上げておく。子どもにくじを引かせて選んだ名をつける。或は夫がくじをひく。

お寺でつけてもらう人も。名前をつけると命名〇〇と書いて、生年月日を書いて神棚にはる。(深沢)

生後七日目、命名する、いくつも名前を考え、大神宮様に教わってこいといつて、紙に名を書いてあげて、子供がひいてくる。(浅原)

名付親 太田の吞龍様や産婆につけてもらう。三つの候補名を稲荷様にあげてそのなかから選ぶ家もある。高島島断の姓名(判断)学などがあり、画数や陰陽、五行、満点はとれない。字の意味(干支)音、姓の最後の音、名の最初の音を合計した画数が最も重要である。女の子は名前だけよければよい。(上桐原)

オブアキ 男二十九日、女は三十日にする。女は汚れているから一日遅いのだという。狸原では観音様にお参りする。(小平)

男児生後二十九日、女児三十日、妻の実家から一番初めの男児、女児共に贈られるオボギ、黒紋付をきかせてウブスナ様(天神様―菅原神社―)に詣って(オボヤキという)から実家にお客に行く。(浅原)

宮まいりを塩原では生まれて二十九日目に宮まいりをしたが、桐原では二十一日目、川内村では三十日目に行っていた。

親もとからウブ着がとどく。それを着せて赤飯をもって神社へ行っておがむ。

たいていサンシのおばさんが抱いていく。居なければ産婆さんを頼む。子どもたちに赤飯を分けてやる。

お産見舞のお返しは赤飯にスルメを五枚ぐらいつけてくばる。重箱のお返しは豆かアズキを入れる。

なおオビアキは男の子二十九日、女の子三〇日。(深沢)

赤ん坊のとまりそめ ここでは、どの子どもも、とつぎ先で生まされた。生まれて三月目に入らないうちに、赤ん坊を母親の里へ泊りそめにやった。一晩ぐらい泊って来た。母親がたれて行った。このときお祝い着をもらった。(浅原)

食い初め 男女とも百十日目にする。石をオカズにして食べさせる真似をする。歯が丈夫になるといふ。膳碗は新しいものを買ってやる。

(小平)

男女共に百十日目、赤飯をふかし黒いマインを拾ってきてお膳にのせオカズとしてたべさせる真似する女児は高いお膳、男児は低いお膳で与えた。(浅原)

百日目に食初めを行なった。歯が強くなるように、膳の上に、ご飯と石二つをせて食初めをやった。(塩原)

食いぞめは百十日目にする。子ども用の茶わんとハシを買って一人前のお膳を用意する。

おかずは小石をきれいに洗って、二つ皿にのせて膳に置く。すぐ出してしまおうが、ごはん粒を口に入れてやる。(深沢)

食い初めは、お誕生から三、四カ月、百十日めで、男女とも同じである。この日は、赤ん坊に石をなめさせて、赤飯をくれて、お頭つきを飾って祝う。つぎの子ができるまで水ひきをかけちやうって大事にする。小学校に入っても乳をのんでいると、女の子のばあい、月のものが長い（おもい）、ふといから、いいかげんでやめるといふ。どんな豊かな母乳でも、八カ月過ぎると栄養がなくなる。ほとんど水だけになる。便も母乳なら、百日のたれつ子といって、やわらかい。ミルクはどうしてもかたくなり、おしりがきれる。授乳が順調だと、栄養がよくいきわたり、顔などめきめき大きくなる。母乳の少ない子には、お湯をとって飲ませた。ひきわり飯のおもいはいいという。（上桐原）

(三) 育 児

カニババ 赤子が生後、三日ぐらい黒いウンコをするが、これをカニババという。昔、ある産婆が胎盤エキスだといってもち帰った。しかし、カニババをもっていかれた赤子は寿命がちまるといわれた。カニババは難病にきいたとか。（戸沢）

初の糞をカナババといい、墓場あるいは畑に埋めた。（浅原）

七日め お便所参り。頭に「犬」という字を書いて、おさごをもって産婆が抱いて向う三軒隣りのお便所をお参りする。犬のように、じょうぶに育つようにという願いがこめられている。橋渡りについての禁忌はない。（上桐原）

うぶすな笑い 赤ん坊のねながらの笑いのことをいう。つまり、うぶすな様が胸中におられる、ということだろう。（上桐原）

初めてくれるもの ホウズキの根を煮じて飲ませた。又は、薬屋からマクリを買って来てくれた。（塩原）

毒をおろすために、産まれるとホオツギの根をせんじて飲ませた。虫がおこらないという。腹がへっているから一日位しやぶっていた。あるいはマクリをお湯をかけてしやぶらせておいた。（浅原）

お乳 一昼夜ぐらくれれない。泣くようだからさとう湯でもませる。ホーヅギのつゆをのませると虫がきれる。（深沢）

スリエ 乳が足りないと、米をふやかしてすって与えた。これをスリエといった。（浅原）

乳歯 はやい子では、四カ月の後半から、はえはじめ。はやすぎるのは弱いというが、そんなこともない。十月とお歯はよくない。（上桐原）

初誕生 餅をついて、背負わせて、十五個のあん入りの餅の上を歩かせた。歩けば一生丈夫であるとされていた。（塩原）

誕生餅をついて祝う。「寿」と餅に書いて組中、親類に配る。箕に餅を入れこれを踏ませたあと、餅を風呂敷に包んでしよわせる。踊ったものである。（浅原）

餅をつく。お金を背負わせて餅を踏ませる。餅は近所、親類に配るが、塩アンである。その子が甘くみられないようにだという。

反対に、四十九日の餅は甘いほどよいという。（小平）

モチをついて子にしよわせる。一升のモチを紅白二つに分けて丸める。それをしよわせる。ヨロヨロするから、すぐおろしてやる。実家へはタチモチ（切りモチ）にして持っていく。別に誰もよばない。くばるだけ。（深沢）

歩く いまは、はやく七カ月位で歩きだすのがある。ふつうは、誕生前後にはじめて歩く。はやすぎるのは弱いというが、そんなこともない。昔は、年寄りがいて、ひまにまかせて、おぶっていたため、どうしてもおそくなった。（上桐原）

初正月 男は破魔弓、女は羽子板。（小平）

初節句 たちのひらきの干物を二枚と吹き流しを現在も男子の場合贈る。女子にはおくりびなである。（塩原）

女の子はおひなさま。男の子には吹き流しをおくる。お返しはさくらもち、かしわもちを返す。（深沢、小平）

拾い子 身体の弱い子供は、仲人の人のカド（三本辻）にサンダワラにのせて捨てた。これを拾ってその家の子にする。それから連れてくる。拾った人はおもちゃなど買ってくれた。その後三十五年は節句に拾ってくれた人の口に合うものや暮にはお茶一本（四半斤）位届け。病氣見舞をしたり御祝儀には呼んだ。（浅原）

虚弱児は丈夫な人から腹掛を縫ってもらったり、身につけていたものをもらって着る。葬式の旗で三尺をつくる。三十三色の布をもらってきてチャンチャンコを作って着る。或は七軒の家から布をもらってきて七色ギモンを作って着る。こうすると丈夫になれるという。（浅原）生れつき弱い子は四才位になると、ムシが出ないように虫封じした柱に、オガミヤサンに書いてもらったり、柱に釘をうって、虫がおこると釘の頭を打つ。（浅原）

厄年子 「厄年子は役に立たない」といい三本辻に捨てて、拾ってもらった。その時拾った人に、お札を少し出すだけで拾い親ということはない。

成人して親子げんかの際に、「おれは三本辻から拾われて来た子だ。拾ってもらえなければ死んでいたはず。少しでも役に立てばよい」とけんかの種にすることがあった。（塩原）

サンダワラに乗せて三本辻に捨てる。トリアゲバアサンが拾ってくる。（小平）

おくまんまいり 一才にならない子どもが、ほうそうをしてすぐに、長尾根のおくまんさま（熊野神社）へ旧三月十五日におまいりに行った。それは、ほうそうが軽くすむようにということであった。ほうそうが無事すむとお札まいりに行った。つれて行くのは、誰でもよかつた。（浅原）

長尾根にあるおくまんさま（熊野神社）はほうそうの神社である。祭日は旧三月十五日である。この日は、むら中でおこわをあげに行つた。

むかしは、一才未満と小学校三年生ぐらいの子どもがほうそううえをした。ほうそうが軽くすむようにと、赤ん坊をつれておまいりに来た。おまいりに来る人は、おさごとおさけ（おみきすずを二本さげてきた）をもつて来た。おまいりには、よそむらからも来た。ここへおまいりに来たのは戦争前がさかんであった。これを、おくまんまいりといった。

なお、おくまんさまへおまいりに行ってから、さんだわらに、赤いへいそくをたてて、それを三本辻へおくりだした。（長尾根）

産育関係俗信 ほうきをまたいではいけない。便所をきれいにしておけば、お産がかかるという。おへやまいりはお七夜のときにする。

赤ん坊には産着をかけて、嫁の母親がだいて、三ところの便所をまわった。おさごをもつて行ってあげてきた。犬という字を、ひたいに書いてもらった。これは、イヌのように、世話なしに育つようにということであった。（長尾根）

子さずかり 昔から、三年子なきは去るといい方があった。草津の湯が効く。

男の不妊は、耳下腺炎がもとだという。

子どものさずからなかった夫婦が、離婚して、再婚すると、双方ともに、子宝にめぐまれる例が、よくある。（上桐原）

生まれかわり 死んだものが、よその家に生まれかわった話しもきかない。（上桐原）

生きかえり 死んだものの、復活した話しはきかない。（上桐原）

ともばらみ ともばらみはよくない。どちらかが重くなるという。（桐原）

死産児 生まれてすぐ死んだ子は納戸に埋けた。（小平）

子供の遊びの行動範囲 子供の頃には上の台、間坂、戸沢、桐原の連中がよく一緒になって戦争ごっこなどをして遊んだ。渡良瀬川まで

いったこともあるが、たいてい村内だけで遊んだ。青年会に入る時分になって初めて村の外に出ることが多かった。(上桐原)

水泳ぎ 渡良瀬川ではよく泳いだ。当時、水泳ぎができない子はいなかった。(上桐原)

ハダカで水あびした。男の子がいけない時にしかあびない。男の子とはケンカばかりした。(中神梅)

子守り 経済的に苦しい村中の人の場合は通いで子守りをした。戦前は沼田、黒保根あたりの遠くから来る子もいた。これは住込みである。これらの子守りは村の学校に半分位通わせ、先生もそれを認めていた。(浅原)

二、年 祝

七五三 女は七才・三才、男は五才の時に祝うが、昔ははでにしなかつた。かすりの着物に縞の袴をはいて、氏神参りをした。(神梅)

年祝い 男子は十六才で誕生日に赤飯をたいて屋敷の稲荷様にオカミ上げといつて供える。判を作つてもらつたり、せんす、脇差しがもらえた。女子の場合は十二才から十五才の間で赤けだしを作つてもらい処女会に入会した。昭和初期までであった。内祝いとして赤飯をたいたが本人には神様に供えさせなかつた。(塩原)

昭和九年生れの女の子に、十五年の時に長い袖のきものを作つてやった。おびときだから。

五つの時はハカマギだといつて服を買つて着せたぐらい。(深沢)

七十才 古稀の祝い。数年前に、六十年に一辺の年回りで、老人に紫の布団を送ることがはやつた。(神梅)

七十七歳の祝 火吹竹を作つて親戚に配つた。近所が火災の時にこれで吹けば、火を除けるといふ。(神梅)

七十七歳の祝いはとくに祝わないが、お祝をしたときには、おかせ

しに火吹竹をつくつてよこした。火事るとき、この火吹竹で吹くと、災難をまぬがれるといふ。

お祝いは霜月十五日にする。(浅原)

八十八歳の祝い 女は赤い帽子・赤いはんてんを着せて、酒・魚で祝う。身内の者が何か祝い品を買つてやる。神社参りはしない。(神梅)

八十八才の祝いは、米の祝いという。このときには、自分の娘たちが、赤い帽子、ちゃんちゃん、着物、はきものなどをつくつてくれた。

霜月十五日に、親戚の人をよんで祝つた。おかせしには、名入れの風呂敷などをくばつた。(浅原)

六十才の人(還暦)はとくに祝わなかつた。(浅原)

八十八才には赤い帽子、赤いチャンチャンコを子供が贈つてくれる。昔は親戚に紅白の餅をひとかさねづつ配つた。今は小さな写真を配る。(上神梅)

長生きの相 血統もあるが、耳の遠い人は長生きするという。女好きの人は長生きする。無理をした人は、長く続かない。(神梅)

厄年 男二十五、四十二才、女十九、三十三才が厄年で、成田山へお参りに行つた話も聞く。最近正福寺でも厄除けをやっている(三年くらい前からのこと)

男女とも四才も厄年だといふこともいわれている。(茂木)

男二十五、四十二才、女十九、三十三才、荒砥の産泰様へお参りして、護摩の灰に着物を合わせて来る。最近穴原・湧丸などへお参りするようになった。

二十歳で兵隊検査、その年に黒の縞の夏羽織を親が作つてくれた。番頭は主人が作つてくれた。そのほかの祝いは特別にしない。(神梅)

三十三の厄年には帯を作るもんだ。一方は黒ジュス、一方は柄もの帯を姑さまが作つてくれた。(中神梅)

四つの子どもは一月四日に反町の薬師様とか、一月八日に大間々の光栄寺へ厄除けに行く。

厄年は女性は十九才と三十三才、男性は二十五才と四十二才で、この年には厄除けをした。(浅原)

厄年になると大間々の神明様に詣る。屋敷稲荷に詣る人もいる、神様に行つて年をもらつてくるといふ。節分の日家で厄年のはらいをしてから年もらいに行く。本人だけ神様(天神様)に行つて豆撒きをする。こうすると年が一つふえて(一つ余計に年をもらったことになる)厄年を除けられるといふ。(浅原)

大間々の光栄寺にまいってゴマをたいてもらう。十九の時ウロコの帯を買つてもらつた。(深沢)

厄おとし 節分の豆を紙に包んで、中に金をいれて、あたまのいた人はあたまを、のどのいたい人はのどをというように、いたいところをその包みでこすつて、三本辻へおいてきた。このときふりかえないでおいてくるものといふ。これは、豆まきの晩に、まめまきをしてからやった。これをやくおとしといふ。(長尾根)

四つになると男でも女でもソリマチのお薬師さまにまいつた。大間々の光栄寺にまいってゴマをたいてもらう。太田の呑竜さまへ連れて行く人もある。(深沢)

三、青年 集 団

青年会と処女会 青年会・処女会とも、尋常小学校か高等科を出ると入つた。処女会の方は結婚までだったが、青年会は二十五くらいまで、結婚している人も中にはいた。補修学校(夜間)に行つていた。青年会は、個人の決つた家を借りて集会場にしていて、青年会が畑を借りて耕作していたこともあつた。(神梅)

青年団に学校を卒業するとすぐ入会する。十五歳から三十歳ぐらいまでで、結婚すると抜ける。青年畑といふ実習地があり、白菜・大根・馬鈴薯などの野菜を作つて、売つて資金を得た。危険箱を置いたり、

雪かきをしたり、奉仕活動をした。年一回剛健旅行といつて、徒歩旅行で、尾瀬・日光・菅沼・鬼怒川などへ行つた。映画会もよくした。結婚式には青年の座敷に呼ばれたり、お仲間として仲人のお供をしたりした。(神梅)

青年会には十六才から三十才まで男子は入られた。婚の場合は酒一升出して仲間入りになつた。

芝居や祭典の事を会として行なつた。(塩原)

夜学 青年は西山の中腹の学校へ、夜学に通つた。かすりの着物に地下たびをはいて、荷物を風呂敷に包んで行つた。男が夜学で、女は昼間に裁縫を習つた。店でヒヤス(豆腐の冷ヤッコ)をよく食べたが、盆暮勘定で借りて置いた。(神梅)

力くらべ かつぎごと、俵、天神様の拝殿前にあつた石、コマイヌ、等、棒押しもやつた。(浅原)

夜遊び 二、三人で川内村の方にも行つた。ハタヤの若い娘のいる所に行つたものである。(浅原)

ハタヤの住み込み娘はサトの方から来た。四十年前程には遠くは東北地方、県内では新里村、粕川村、下仁田などから来た。娘の賃金は盆、暮に湯衣、下駄を買つてやり、あとは小遣錢程度。前借があつて逃げられると結局はそれっきりである。流れ者のカイコビヨウと仲よくなって逃げた例もある。(浅原)

若衆が五、六人組んで、新里の方まで夜遊びに行つた。ノゾキが専門で、ヨバイなどは聞かなかつた。娘のいる家を一、三軒回り、寄りこんでトランプやカルタをして、しゃべつていた。先方でもよく待遇してくれた。着物にはんてんを掛けて、下駄ばきだつた。アシナカでは具合がわるかつた。(神梅)

夜遅く帰つて、朝早く草刈りに馬を引いていくので、居眠りして落ちたり、オカボの草むしりに出て、畑で夕方まで眠つたこともある。(神梅)

昔は道が悪かったから、夜遊びも提燈つけていった。目ざす機家の家に行くも提燈を消して、そのサマ(窓)にかけておいた。うっかり提燈を忘れて帰ってしまった。翌日、自分では行けないので、子供をやつて、自分も後からついていった。子供は、そのサマの前で、大声で「コレカー」「コレカー」とどなった、などという話もあった。(桐原)

高津戸や川内村に行った。川内には機織女が多く、そこに遊びに行った。村内は割合少なかった。(浅原)

ヨバイ 小平の奥ではお蚕時期にあつたという。女の許に行つて寝すぎて夜が明け、朝起きて「いい蚕だね」と挨拶したという。度胸のよい例である。子供ができて一緒にならないのが多く、どこかにくれてしまう。そのあと親が認める例は少ない。

若衆がひやかしに行くのを主人がやかましくいい、若衆のうらみをかつて、庭先に石塔を並べられたりしたという話もある。(浅原)

よばいに娘の家に行った。赤い布が窓から出ている印だつた。白い切れの場合もあった。その長短でいろいろと合図があつた。(塩原)

夜這いに壁に穴をあけて這い込んだ人の話を聞いた。(深沢)

四、婚 姻

(一) 結婚の条件

嫁入り前 好きな人があつても親は全然とり合わない。嫁に行つて姑さまの髪ぐらい結えないと困るって丸マゲのゆいかたを習つた。

でも実際に丸まげをゆつてやつたことはなかった。(中神梅)

ムコ いやな仕事、骨の折れる仕事はムコがする。ウワダには座れない。村づき合い、お精進などの時座敷へ座れないこともあつた。

三年ぐらいはシタデに控え目にする。(中下神梅)
婿は上座に坐るな、骨の折れる仕事は婿にさせろ、という空気があつた。(神梅)

婿は村づき合いのため、お精進の時などに酒一升出して新入りの意を表わす。特別に婿の仕事というのはないが、骨の折れる仕事に進んであたるようにする。(強戸では婿が池にほおり込まれたという)(神梅)

嫁取り 「嫁は里から貰え」、百姓するのに働き者だから。「嫁はオシッコするだけでも、里へ出ろ」、嫁は少しでも下の平地の方を希望する。「婿は床の間から、嫁は台所から貰え」、婿は財政の豊かな家から貰い、嫁は財政のいくらか低い方から貰う方が、働き者でいい。(神梅)

ことば 「嫁に行く時はシヨンベンするだけでも街へ出ろ」という。

「嫁は里からもらえ」「ムコは床の間から。嫁は台所から」という。

(中、下神梅)

「嫁は台所からもらえ、婿は大尽からもらえ」という。

また、「嫁は北からもらえ」ともいった。(長尾根)

「嫁は山手からもらえ、婿は里からもらえ」という。(塩沢)

嫁のつとめ 嫁は「あしかけ三年」といった。三年のあいだはがまんしろということである。また、「嫁三年、婿八年」ともいう。嫁が嫁ぎ先になれるのは十年かかるといわれている。(長尾根)

嫁といわれるのは、家によって多少のちがいがあがるが、子どもが学校へ行くくらいまでである。

嫁のつとめは十年といわれた。また、嫁婿十年ともいった。あしかけ三年ともいった。嫁は、その家に十年つとまれば、どんな家でもつとまるものだといわれた。(浅原)

嫁の生活 ああ、くたびれた、と腰を伸ばして空を見上げたら「鳥がとぶんなんか見てるな」つて言われた。辛い時はツゲでもきないか

なつて思つたこともあつた。

昼寝なんかとんでもない。横になつたらどんなに楽だんべ、と思つた。今はゴロゴロしてて天皇陛下みたいだ。(中神梅)

嫁にきた時、姑さまにまだ這えない子がいた。その子をおぶつて子守りしていると、恋愛みたいね、と人によく言われた。(中神梅)

姑さまが五時だよつて声をかける。もう少して赤ん坊が寝る、と思つても仕方ないから起きておぶつていろいろの火をつける。朝めしの用意をしておいて繭を煮る。

夜なべはつくろいもの。今夜は針を持たなくてもいいかな。と思つたが、毎晩かかさず針を持つた。子ども九人生んで、七人元氣でいる。

(中神梅)

嫁の年季 嫁の年季は十年と言つた。もの日にさとへ帰る時は一晩か二晩泊る。五十銭ぐらい小づかいを貰つて行つた。さとのおつかさに小づかいを貰つてきて、それを大事に使つた。

お客に行くときのおつかさんが送つてきて、一晩泊つていく。(深沢)

嫁の権利 親は自分の子どもが片付くまでは自分で切りもりするのが普通で、嫁に勝手はいっさいさせざるが、身上回しは死ぬ前に譲る。

(神梅)

シンシヨを譲る時。舅が丈夫なうちは遠慮する。昔は死ぬまで親がした。自分の子がかたずくまでゆずれない。

今は違う。そういう観念があるから嫁のきてがない。

親はもらうに苦勞、もらつてまた苦勞する時代だ。(中、下神梅)

見合 結婚は見合いが多かつたが親がきめておしつけるのもあつた。式のその晩まで顔を知らないで、初めて会うというようになつた。

(茂木)

昔もよく遊んだけれど、恋愛結婚は少なくて、見合結婚が多かつた。

(神梅)

むかしは見合いをただけでご祝儀になる。

昭和九年、粕川から嫁にきた時は馬に乗つたり、歩いたりしてきた。荷もつも馬で運んだ。子どもの頃から馬にのれたから特別どうということはない。(深沢)

恋愛 ナリアイといい、その機会はお盆、村の祭、正月、大間々祇園の時などであるが、これが結婚まで進むことは少なかつた。若衆が

娘を管理する風はなかつたという。(浅原)

恋愛結婚 くつつきあい、なれあいなどといった。福岡に八木節があるとかなど、祭りをきつかけにすることが多かつた。それがもとで、遊びに行つて、そのうち数多く行つて、好きになつたとかきれえになつたとかいうのや、ぐうぜんにはなしていて、好きになつたりするとい

うのもある。(上桐原)

恋愛結婚の仲人 おれのとこもつてこう、何とかしてやらあ、という男氣のひとに頼むが、頼まれたひとは、まとめあげるまでは、大ごと

だつた。できたものをまとめるのはらくであり、結ばれてしまえば、本人次第だから、ふたりがまじめなら、かえつて樂であるともいう。

(上桐原)

結婚年令 明治のころは、十三、四才の嫁がふつうで、早ければ十二、三才、男の方は十六才というのもあつた。(茂木)

婚姻圏 川内村が多い。最近では里方つまり佐波郡東村笠懸村なども多い。行くのは川内村はマバラであつた。山中筋もあり特にどの方面

が多いというのではない。(長尾根)

村内は割合少ない。川内との往来が多かつたので婚姻も村内より多かつた。その他新里村、山中が割合あり、大間々や桐生は少ない。(浅原)

嫁をもらうのは、国定では東村から、強戸では小作争議で有名な太田から、田沼在は栃木からなどである。むらうち同志での結婚はすく

なくなつてゐる。昔からも少ないが塩沢は、わりあいに多い。(上桐原)

東村や黒保根村との縁組が多く、川内の方とは少なかった。交通の便が大きな理由で、時間的にも、きよりのにも山を越えればすぐの所だった。

「方が悪い」というのは断わる理由にただで、どちらの方がいいとはいわない。(茂木)

血族結婚 結婚の相手は、だいたい親せきどうして七、八割くらいになった。交流が難しかったり、親せきをふやさない——交際を広げないためだった。(茂木)

この村では近親結婚は少ない。山の奥に行くとも多かった。これは親戚がふえないからよいとも云った。イトコ同志のトツケエコもあったという。また女の方が年上の場合もあった。近親結婚すると不具が生まれるからよくない。(浅原)

駆け落ち 親が許さなければ、駆け落ちをする。仲人がそのかして、既成事実をつくり、その後、嫁方の両親家族の説得にあたるものもある。そんなにいい人ならしょうがないということになり、たいていは、許される。同輩のものが、ふたりをとりもつということはない。(上桐原)

(二) 婚 約

仲人 部落の有志や親せきのおじさんになる。名付け親のような人がやる。

「仲人ナナデンボウ」とか「仲人のぞうりきらし」ということばがある。(茂木)

現今と違って以前は男女(男で二十四・五才、女で二十一・三才位)を仲人がみつくろって結んだ。なかには仲人を商売みたいに、専門的な人がいた。普通、年頃の娘をもつ親が仲人する人にふだんから頼んでおいた。式の時初めて行き合ったというのが昔は多かった。(浅原)

仲人のお礼 どのくらいということはなく、適宜やるもので、四分六

分で、もらい方が多く出す。日もきまっていないが、現在では近い日の日曜日にお礼に行く。(茂木)

仲人札は貰い方がくれ方の二倍くらい出して、両方からお礼をする。酒二升も付ける。「仲人ノゾウリッ切ラシ」「仲人の七デンボウ」などという。(神梅)

仲人とのつき合い たのまれ仲人なら三年。親の生きているうちはする。

三年たったあとは、できごとのあった時だけ。

「仲人はゾーリ切らし」って言うから容易じゃない。(中、下神梅)

お仲人さんには、ご年始お歳暮を三年する。あとは特別な事があった時だけ行く。(深沢)

頼まれ仲人は三年だが、普通は親の生きているうちはつき合う。盆暮やお産など、何かあれば顔を出す。(神梅)

仲人からのお歳暮 昭和十一年結婚したが、その年の暮に、お仲人さんがミを持ってきてくれた。舅さまが、その時一升マスを返した。ミマスも言うのだ、と聞いた。(深沢)

クチガタメ 縁談がまとまるとクチガタメをする。ちよつとした御祝儀なみのことをする。

仲人はもらい方へあいさつしてから酒一升もって(仲人が買う)くれ方へ行き、組合や親せきが集まっているところであいさつをし、酒を半分飲んできめて来る。一つのものと同じに分けるといい、もらい方に戻って来て報告をすませてからごちそうになる。(茂木)

話がまとまると先ずクチガタメで、仲人が婿の家から一升持って行って飲み、話をつけて嫁の親と共に組廻りする。「こういうわけで家の娘をくれることになりました」と挨拶する。帰って婿の家で式をし、仲人の名刺をもって隣組を廻り「この人の世話で〇〇から嫁をもらうことになりました」と挨拶する。これで婚約成立である。(浅原)

近所まわり クチガタメの日に、仲人は名刺をもって近所の家をま

わって挨拶して来る。手ぬぐい一本とか、半紙一帖くらいに水引きをかけたものなどをもってまわる。(茂木)

トマリゾメ クチガタメをすませたあと、嫁が婿の家に泊ることをいう。最近はないが、クチガタメをしたその日のうちにする場合もある。特別の事情のある場合、出入するため、もらう方の親の具合が悪いときなど、早くカタメておくためにするもので、あとは往来は自由である。婿の家の組合を廻っての公認だから仕事を手伝ってもよいわけである。トマリゾメをしたあと駄目になることもあるが、それは例外で、普通は仲人のいう通りにする。(浅原)

クチガタメができると、適当な時期に仲人が話をして娘を連れて来て泊り初めをする。(茂木)

アシイレ 口がためは、いい日を選んでする、このときは、嫁さんを仲人がつれてくる。近所の人(代表として一名ぐらい)を呼んで、酒を飲んだ。

口がためをすると、アシイレ(トマリゾメともいう)をするのが多い。中には、顔だけだして帰るというものもある。一日か二日泊って行き、式までのあいだ、双方、行ったり来たりする。うちによっては、その間に、嫁になる人が、仕事の手伝いに来る場合もある。口がためをして、そのまま先方へ行きっぱなしという例はすくない。双方のわたりがついても、お祝いをしないうちは、あまりおもてだつての行き来はしないのがふつうであった。(浅原)

結納おさめ 一週間前や当日とりむすびの座敷の前に、ヨメが、中宿にいる段階で、やる場合もある。組合の班長が、代表として受け取り、仲人がムコの両親にむかつて、目録と品物をつけあわせて、あらためて調べる。「確かに右の通り受け取り候ふ」と裏書きして、はんこを押す。(上桐原)

結納 式の前日、または数日前、吉日をえらんで結納を納める。仲人が背負って来るもので、式の当日、嫁は中宿に休ませておいて仲人

がもらい方へ結納納めをして、納まってからトリムスビということもあつた。これは縁組がきまつた時のきめでやればよい。(茂木)

三円か五円ぐらいだつた。(大正・昭和初期)十円は中流以上の家のみだつた。「はねをつける」といい、着物の代又はたんすの代としてつけた場合もあつた。(塩沢)

赤飯をホカイという入れものに入れて馬につけて行つた。片方の場合「片荷」といい、両方へつけた時は一駄と言つた。(塩原)

クレモン、モライモン、ウリモンではないからいらぬという家もあるが、負担にならない程度で、お互いにホンネをはいて、世間並みに、時代にまかして、そのうちの暮しにあわせて、中間をとることが多い。最近では、金五十万円が相場だという。(上桐原)

仲人が御祝儀の日を持って行くのが多い。タンスを買つてやるのはよい方で、着物をやるのは村の財閥級の家だけである。(浅原)

覚

一、金 五両也

一、金 三両也

一、金 七両也

右之通り儲二無相違受納仕候

慶応二寅年

三月廿日

同村

友衛門花印

結納

御代

但シ

蘭蔵

引清

浅原村

当六
同
組合惣代
長右衛門[㊤]

目録(智)

- 一、上下 壹折
- 一、小袖 壹重
- 一、帯 壹筋
- 一、扇子 壹対
- 一、多て紙 壹折
- 一、昆布 壹折
- 一、鯛 壹折
- 一、家内喜多留 壹荷

以上

何某殿

男は八品、女は拾二品

目録

- 一、御家内喜多留 壹荷
- 一、御結納金 一金拾五円
- 一、御肴 一折
- 一、御小袖 壹重
- 一、御帯 壹筋
- 一、御櫛笄 壹組
- 一、御紅白粉 壹包
- 一、御毛技鋏 壹個
- 一、御丈長 壹折

三次郎[㊤]

住所
氏

名[㊤]

一、御乙女麻 壹折
一、御末広 壹対
一、御熨斗 壹折
右之通幾久しく御受納致被下度候也
御目録壹通り幾久敷目出度正に祝納仕候以上
大正〇年〇月〇日

住所
何之誰殿

目録

- 一、小袖 一重
- 一、帯 一筋
- 一、櫛笄 一組
- 一、紅おしろい 一包
- 一、丈長 一折
- 一、結納金 一百円
- 一、乙女麻 一折
- 一、末広 一対
- 一、寿留女 一折
- 一、こんぶ 一折
- 一、さかな 一折
- 一、家内喜多留 一荷

大正〇年〇月〇日

以上

何某殿

住所
氏

名[㊤]

住所
氏

名[㊤]

(これは目録のうら書とす)

婚礼の祝儀受帳 (小平)

迎えダンス 結納の一つになるもので、もらい方から嫁方へダンス一棹を贈る。嫁はこの中へ着物とかその他の衣類などを入れて持って来ることになっている。(茂木、神梅)

お酌着物 もらい方では迎えダンスを贈るといっしよに、オシヤク着物というのを一枚つくってやる。式の日、花嫁衣裳を脱いで着かえる着物で、祝儀の席でお酌をする時に着るものというのでオシヤクギモンという。(茂木)

嫁入り衣裳 白もく二枚、それに黒の裾模様を重ねた。きものたモトを切ったような形で裏つきの綿帽子をかぶった。(中神梅)

ツノカクシになる前のもので花嫁は綿帽子をかぶって来た。トリムスビをするまではかぶっていて、すむととった。(茂木)

島田の道具はムコの家で買ってくれる。マルマゲの道具は自分ちから持ってきた。マルマゲはミツメの時に一度ゆっただけ。(深沢)

マルマゲは髪結いさんや、器用な近所の人に結ってもらった。「よめごちゅうものは金がかかる」って姑さまが嘆いたそうだ。(上神梅)

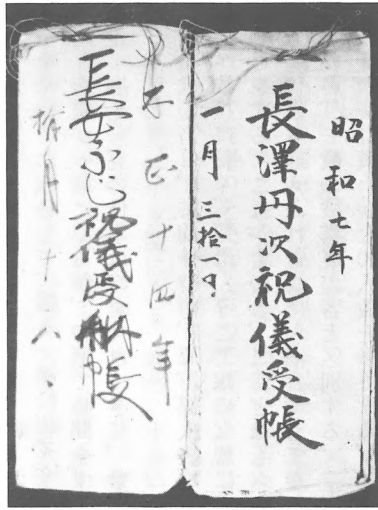
チュウゲン 荷物運びをする人で、昔は番頭さんがやった。くれ方から一人行きも

らい方からも一人来る。都合の悪い所は馬で運ぶ。この人にも

普通にふるまい、一見座敷の末座に坐らせた。

(浅原)

なお荷物が多いと近代の人が



長沢丹次祝儀受帳 (長沢利明 撮影)

紋入りの弓提灯をもって新栄橋の渡し場まで、或は新栄橋の手前の峠、川内から嫁を迎えるときは長屋根峠まで迎えに行った。

結婚の時荷物を運ぶ役、紋入りのハサミバコをかついで行った。ダンスは荷車で持つて行く。チュウゲンは番頭さん、近所の人に頼む。双方でお祝いが出るので、頼まれるのを喜ぶ人もいた。(浅原)

結婚式の役一つで、仲人のお伴になって結納を入れたはさみ箱を担いで行く役の人のことをチュウゲンという。昔は馬方にあたる人で、身内や組合の人の中から出た。いまでは自動車を持つていて、運転できる人がやる。

また、イチゲンのお伴もチュウゲンで、どちらも同じ待遇がうけられる。(茂木)

(三) 嫁 入 り

嫁迎え 一見とは別に、仲人のお仲間として若衆が一人、挟み箱(衣裳箱)を担いで、お供をして嫁方に行く。嫁方からもお仲間が一人出て、馬を引いて嫁を送ってくるので、二人の仲間が一緒になって、嫁を迎えて来る。挟み箱には結納品や着物などが入っていた。(神梅)

迎えイチゲン 遠方ならば朝、村内ならば昼すぎ、ムコと仲人、兄弟、おじくらいがもらい方からくれ方へ行く。イチゲンは縁側から入るものでトボグチ(玄関)からは入らない。

仲人が挨拶をして、ムコやイチゲンは喜んでくれ方の親族と顔合せをする。そのあとは酒が出るが、オシヤクツ子は近所の娘を頼むので、「嫁もらいに行つて次の嫁をもらつて来た」というような話もできた。

嫁は、したくができるイチゲンにあいさつに出て来て、そのあとはひっこんでしまふ。

イチゲンの宴がオツモリになると桜の花のお茶(サクラ湯)を出した。お茶をにごすことなくという意味という。(茂木)

ムコが嫁を迎えに行くのは男一見と一緒に、午前中である。嫁方で座敷をやってお祝いして、嫁と一緒に出てくる。ムコ一見（迎え一見）と送り座敷が一緒にくるが、中宿で時間をずらして、ムコ一見が先に来る。迎え一見の仕事は嫁を連れてきて、敷居をまたがせれば役は終る。（浅原）

結婚式の当日、午前十時頃、鞆、媒人夫婦、親戚代表数名の者が、嫁方へ挨拶に行く。鞆は、そこで嫁の父親に連れられて、近所へ挨拶まわりをする。これがすむと、こんどはもらいかたで嫁を迎え入れ、嫁方の代表も迎え入れられて、酒食でもてなしをする。これを一見座敷といい、一般の披露宴の客と区別する。（大間々）

イチゲンは貰いがたの人数を多くする。イチゲン負けするもんじゃない。（深沢）

一元客は、くれ方よりもらい方のほうが一人ぐらい多く行くべきだという。もらい方の一元はまけるものではないといった。（浅原）

ある席で、イチゲンで飲んできたから、遠慮しますと断わり、焼酎とうと称して、水をちびりちびりやっていたら、ばれてしまい、焼酎とうならいけるはずだと、こらしめられて、えらいめにあった。（上桐原）

もらい方で、嫁迎えの当日、はやく、ムコといっしょに嫁迎えに行く。（上桐原）

おしようばん イチゲンザシキは徹夜で飲む。イチゲンを酒でぶつつぶすまで飲ませるために村の中でも酒がたくさん飲んで座もちのよい人をオシヨウバンとして頼む。うっかりするとオシヨウバンが逆につぶされてしまうこともある。（茂木）

新客のイチゲン様には、オシヨウバンがでる。いわば、イチゲン座敷の進行係である。初めに、「ゆきとどかないものですが、オシヨウバンに命ぜられて参りました。何も知らないのですが、何分よろしくお願ひします。」と、頭をさげてあいさつする。たいらになつたら、おしゃくっこについてもらう。責任ある役なので、ことのおわらないうちは、

やたらひよろひよろ出たりはいったりできない。

いっばん座敷 イチゲン座敷のつきは、イッパン座敷になる。ムコの朋輩、青年団、つきあい仲間など、若い衆の座敷である。このとき、ヨメは、着物を着かえて、あっちこちとついで歩く。（上桐原）

いちげん座敷 いちげん座敷では、いちげんが顔合せをする。おじ、おば、いとこ、はとこなどをむかえ、夜八時〜真夜中にかけて約三時間する。

多いときは、十五人もで、かわりばんこでするほどのこともある。このときは、嫁が、用意してきた茶菓をだし、茶をつぐ。（上桐原）

女イチゲン 女のひとは、翌年のお節供にあとからよぶ。（上桐原）

送りイチゲン くれ方で、迎えイチゲンを送ってくるのをいう。送りイチゲンは、準備がすむまで中宿にいる。（上桐原）

出会いイチゲン 結婚式場で、初めて対面する現在のやり方である。昔も、ヨメ、ムコ双方が遠いときには、その中間に、式場を設営することがあった。（上桐原）

オチカヅキ 仲人が婿一見を連れて嫁の家に行き儀式（嫁方の親戚を一応紹介する。紹介が終るとこの座敷に嫁をちよつと紹介する）をする。オチカヅキという。これで嫁方の親戚は引込む。婿は床柱を背にして坐る。三宝にのつた三つ重ねの盃が全部廻って終ると、最後に仲人は「めでたくおさめます」といい、次で祝宴となる。これにはもらい方だけが出席する嫁はこの間仕度したり、氏神様に詣り、これから嫁をもらってくることになる。（浅原）

嫁の家でのオチカヅキが終ると婿は先に帰り、仲人と嫁は嫁方のオクリ一見と共に来る。組の者は中宿に迎えに行く。オクリ一見はトリムスビの終るまで中宿に居る。トリムスビの式が終って一見座敷となり、嫁が床柱を背に坐りムコ一見が行なった時と同じことをやる。なお婿取りの場合は嫁は一応出て中宿に行き、婿が入ってから嫁が入る。（浅原）

門送り 花嫁は、くれ方のイチゲンと一緒に行列をつくって行くが、村の人たちが、ちようちんをつけて村境まで送って行った。(茂木)

中宿 花嫁の行列は、直接もらい方へ行くことはせず、もどり道にならないような家を中宿にしてそこで休憩をする。お茶を一ぱいもらうくらいで、席についたらオチツキのモチ(トリノコモチ)スワマのようなものが紅白でお椀に入れて出された。

この間に仲人はもらい方へ行ってあいさつをして、座敷の都合などもみた。(茂木)

カミからきたひと、ヨメはノボリコミをするのがいいといって、いったん嫁ぎ先より、シモへくだって、シモから上る。中宿は、たいがい、嫁ぎ先よりシモの隣家、あるいは懸意の家設ける。ここで花嫁は仕度や化粧なおしなどをする。仲人はすでに家に入っている。(上桐原)

仲人が嫁と新客を一緒に連れてくる。中宿に居て、仲人が「向こうに行って連れてくる」といって世話役一人がついて行く。次で式が始まったからと迎えに行く。迎えに来てトリムスビとなり、それが済むまで一時間以上一見は中宿に居る。(浅原)

中宿から嫁入り(入家)まで、座敷仲人が中宿まで、迎えにでて、一行を案内する。(上桐原)

門謡い 中宿から、座敷仲人が、ヨメを案内して、当家の庭先まで致着すると、外と内の双方に、門謡いの若い衆が、謡いてとしてひかえている。内側を受人といつて、ひとりで玄関内、土間のところにか控えている。入家式を終えたヨメは、最後に、受人の「はやすみのえにつきにけり。」で玄関に入る。外の、小謡い連申会、十人余が行列のあとにつき従う。いずれの面々も、ちよつとソラではいえぬので、だれにでもできるように、節まですっかりかいておいた扇をちらちらとみながら謡った。ヨメゴの列のあとに仲人がついてきた。(上桐原)

嫁が婿の屋敷に入る時、カド(門)の所で一行が提灯を付けて明る

くして、近所の人が「高砂や」などのカド謡をする。カド謡が始まってから、嫁はカドに入る。三尺くらいの竹の先を割ってタイマツを作り、迎えの人が火を付けて明るくして待っていた。提灯は弓張り提灯を新しく貼り替へ使う。(神梅)

門迎え 花嫁の行列は、昔は頂上くらいまで迎えに行ったのかも知れないが、おぼえてからはちようちんをつけて庭先に迎えに出ることをやっている。門からは謡で迎えて来る。高砂の一部(コウタイ)で、格式の高い家では、本式にやるころは村の若衆に練習をしてもらったものだった。(茂木)

夕方弓張提灯をつけて嫁を迎えに出る。嫁が家へ入る前に、媒人がカドウタイをうたう。家の中へ嫁が入る時、入口に置いてある青竹をまたがせる。家の中に入ると、姑になる人が、嫁の頭に編み笠をかぶせる。(大間々)

中宿から女仲人が嫁を庭の門先まで連れてくる。すると玄関から上りはなまでしゅうとが連れてきて、ここで物干さおをまたがす。棹の上の上れといい、しゅうとは菅笠を、上を見るな(または笠の下にソマレという意)といつて嫁にかぶせ、手を引いて上り口から上げ座敷には仲人ばあさんに渡す。この間謡がある。(浅原)

嫁の一見が家を出る時、嫁は玄関から出て来る。婿の家に入る時は、嫁はトボから入る。(婿は迎え一見から帰ると、縁側から自分の家へ上る。)

嫁がトボから家に入る時、姑になる人が待ち受けて、菅笠を嫁の頭上にかざして、手を引いて家の中に引き入れる。「上を見るな」という意味だといふ。(神梅)

カドを入るときに「高砂」を謡いタイマツを掲げる。その「着きにけり。」で青竹をまたがせたあとこれを持ち上げる。これは、以後その嫁の住屋になったといふことで、マーセンボウ(ませ棒)代りだといふ。縁に上る時、しゅうとめが傘をかぶせて抱き上げる。傘は、上を

見るな、ということである。

雄蝶、雌蝶の取り結び等あり、ヨメゴノオ茶が最後。その時、みやげに菓子等を出す。(桐原)

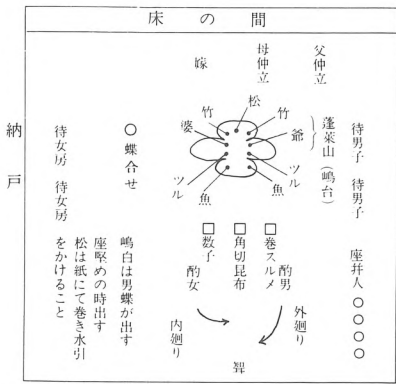
嫁を迎えるのはたいい暗くなる。紋のついた引張りちようちんを張り替えておいて、つけたり、男の子、女の子が枯れた割竹に火をつけたのを持って、アカリにする。火は門に入る時、ひとつきりだからタイムツでなく、竹でいい。(中・下神梅)

嫁の一行が婿の家の門を入る時、青竹一本を横たえて両方側から持って、嫁が竹をまたいで入ると持ち上げた。「もう帰るな」という意味だという。意地悪い人がいると、嫁が青竹をまたぐ時に持ち上げることもあった。(神梅)

花嫁が家に入る前、庭に竹の棒を一本出しておき、オシヤクの子が両端を持ち、タイムツ(竹の束)を二対にして照らして、花嫁が竹をまたいだらオシヤクの子が竹を持ち上げて、「もう後へは帰れない」ということをした。これがすむと縁側から上がった直接席についた。(茂木)

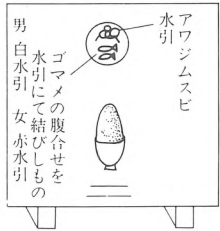
右住居家相取結 (納戸住居家相取結はこの逆となる)

表



嫁が入る時に、カイドーで組合の男しが二間位の青竹を二人で持つてる。嫁こ

おたかまりの御膳



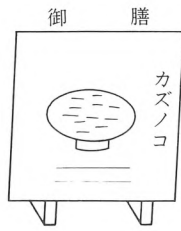
はそれをまたいで通る。みんなが面白がって、その時に竹を持ち上げろ、なんて冷かす。タカサゴのうたいをうたう。(深沢)

嫁が家のかいどうに来ると、おしゃくをする男女の子どもが、竹竿を向い合って持ち、嫁がまたぐ際高くしてまたがせた。

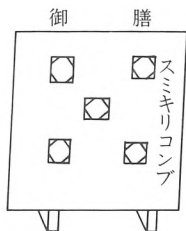
またいだら二度と、その家から出ないよというの意があった。(塩原) 嫁が玄関を出る時、姑さまがスゲガサを嫁の頭の上にかざしながら手をとって入れる。(深沢、中下神梅)

正福寺の辺では、嫁が家に入る時にシユウトが嫁の上にかサをかぶせて歩いたという。(茂木)

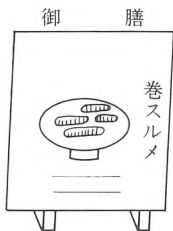
とりむすび とりむすびは、床の間のある部屋でやった。嫁は床柱をしよわせるもんだとい



女蝶が出す
座ガタメにて出し
女にはカズノコを
はさむ



男蝶が出す
座ガタメにて出す



座ガタメにて出す
男には巻スルメを
はさむ

をしよわせるもんだとい
った。なお、とりむすび
の座敷へは、嫁はとぶ口
から入って台所から上っ
た。むこは縁側から座敷
へ入った。(浅原)

一見の居ない所で別の
室でやる。オシヤクコ
(雄、雌蝶、小学校一、
二年位の子供)には親の
ない子は頼まない。(浅
原)

ウタイをうたいながら
奥の座敷で取り結びをす
る。男蝶女蝶が酒をつぎ
三々九度をする。(上中
下神梅)

座盃 座盃は「土地の

習慣によってトリムスビを行います」と挨拶する。これは土地によって座敷の内容、式の順序が異なるからである。(浅原)

世話方 トリムスビの世話をする世話方は、話をうたいながら三・九度をやらせる。最後は仲人に盃をとってもらって納めるが、大がいのことは仲人に納めてオヒラキにする(茂木)

オチ女房 嫁の仕度をしている。三人で、後家さんには頼まない。親類の人でも構わない。近所の人だと手伝ってもらわねばならないのに、お待ち女房を頼むと、いいこと幸いに頭をゆったりして役に立たないという。(浅原)

五組の夫婦 新婚夫婦、仲人夫婦、などとおまち女房とで三組そろ(上桐原)

トリムスビの席には、若い嫁さん(部落で一番新しい嫁)が江戸袂を着て夫婦で座る。男が部屋の中を向き、女は表に向かって座ることになっている。嫁いで来る女に好きな人でもいて、結婚に支障が出た時には、待ち女房が苦情をひきうける役になるという。(茂木)

床とり 仲人は、まるめた紙がながるまでいて、これで、安心したとひきあげる、という話をきいたことがある。(上桐原)

いっさいがおおると、ミウトが「そこらに寝具があるから、おめえら、どこそで寝ろ。」などという。泊る客もあるので、適当な場所をみつろってやすむのも、ひとしごとだ。

夫やシウトが、床を敷くのはきかぬ。(上桐原)

結婚式の料理 米がとれない土地だから、小豆やイモをよく使う。

イモヨウカンや、インゲンのキントンはどこでもつくるもので、百合の根のキントンをつくる家もあった。ウドンは組合の人がつくるもので、朝早くから出てつくった。(茂木)

料理番 イチゲンザシキでは、お勝手をまかなうマカナイ方・料理番が一番の権限をもっている。花嫁は出かける時には料理番にあいさ

つをして、料理番がだめだといえばくれぬことになる。そのかわり、ましがった料理は出せない。(茂木)

酒 結婚式の祝いは三日が最低で、三日から四日くらいはかかる。米がないからドロブロクは使わず、こもかぶりの四斗樽二本くらいは飲んだ。(茂木)

オチツキノ餅 餅をついておいて、嫁を迎えて三三九度のさかづきをする前に、座敷の客にこれをくばる。(大間々)

オタカモリ 嫁のオタカモリは、一升の米をたいて黒い椀二杯に盛り昔は三日位かかってたべた。しまいにはオムスビにしてたべたものである。今は仲人ばあさんが式の時少しくられて、これでたべたことにしている。(浅原)

嫁のみやげ 嫁入の時、髯の兄弟姉妹に、身のまわり品などを手みやげとして持って行く。お勝手の手つだい人にはお菓子などを持って行ってふるまう。(大間々)

若衆ザシキ 結婚式のときに若衆のザシキをすることはなく、一般のお客と一緒に、村を上げてのお祝いとしてやる。(茂木)

嫁を送り込むと外の庭でやった。これをノゾッコミザケという。(浅原)

オタイギブルマイ 仲人や、役の人たちのごくろうぶるまいで嫁がオシヤク着でオシヤクをすることをいう。実さいにはお茶を入れるので「ヨメゴのお茶」ともいわれ、御祝儀の夜の最後のことである。

お茶とお菓子を嫁が持って来るものというが、実際には施主が用意することが多い。菓子はこまかくて数の多いものがよく、お茶はお手伝いの人が入れてくれたのをお盆にのせて出す程度のことになる。(茂木)

結婚式が終ったあと、オタイギ振舞といって、特別オオゴト(骨折り)した者を呼んで御馳走する。これはジャンボン(葬式)にも行なう。(桐原)

二日目、あと片付けをして近所の手伝った人に振舞うことである。

(御祝儀の夜やる所もある) またこの日嫁はヒロメビローにしゅうとと一緒に近所廻りをして、帰るとオシヤクをする。なお十九区では婿に來た者は浅原村中を廻るので二、三日はかかる。(浅原)

ヨメゴのお茶 嫁さんはみやげの駄菓子などでお勝手の女衆にお茶を出す。そして菓子をはさむ。「嫁さんのお茶」という。(深沢)

一切の式が終つて朝方、列席した者全部、近所の女衆、男衆に配る。ヨメゴのオチャを飲まないといふ。客一人一人にお茶を注ぎ、お茶菓子をはさんだ。これは嫁が用意して持つてくるものである。(浅原)

嫁・婿のむらまわり 嫁に來た人は、姑がつれて組内をまわつたが、最近、式の当日にその場で披露するので、まわらなくなつた。

婿は親がつれてむら中をまわつた。婿の場合には、むらの人と顔をあわせる機会が多いのでこうした。「よろしく頼みます」といつてまわつた。(長尾根)

二日目には、披露といふのでしたくをしてツノカクシもして村をまわつた。しゅうとや近所にいるおばさんが連れて(主婦代理が多い)まわるもので、まわる順は都合でよかつたが、お寺と嵯峨神社にもお参りした。スシヨウといふので三尺帯か何かをだらり下げてまわつた。(細谷戸)

二日め 二日めは、ヨメの近所まわりの日で、半紙一帖か手拭をもつて、一日中、むら中くたびれる程歩いた。案内人になつた近所の老婦人が、元氣なうえに足早でげにこりた。島田を自宅で結い、しずしずと歩かなくてはいけないが着物は重いでせつせと歩いた。ムコなら、男としよりが案内する。(上桐原)

姑さまに、連れられて近所廻りをする。神社へもおまいりする。(深沢)

ミツメ 三日目に新郎新婦と両親が嫁の実家に行く。嫁方の家では

祝酒、御馳走で迎え、そのあと、むこは嫁の親の案内で半紙をもつて近所を廻る。嫁の実家からは両親が送ってくる。嫁の親は新郎の親の案内で組合を挨拶に廻る。「ふつつかなこいう娘をつかわしましたがよろしく御面倒お願いします」と挨拶、手拭をもつて廻る。(浅原)

御祝儀の三日目をミツメといい、里がえりをする。オンナイチゲンで、しゅうとやおばが送つて行く。ホンビ(式の日)に行けなかつた人が行くわけで、このときには中宿はない。この日には仲人はつかず、むこも一緒に持つてひと晩だけ一緒に泊つて來ることになっている。(茂木)

ミツメには実家へ行く。ムコと二人で。泊まれない。

ムコと嫁と、仲人さんで行く。オンナイチゲンと言つて帰る時叔母さんや姉妹など女衆が送ってくる。(以上深沢)

三日目の里帰りのことをミツメ帰りといふ。新郎・新婦・媒人・親戚の代表が嫁の里へ挨拶に行く。簪は手みやげを持参する。一行を迎えた嫁の実家では、酒食を出してもてなす。(大間々)

三ツメの里帰りは泊れない。(神梅)

(四) その他

嫁が里に帰れる日 嫁に來て三日目。農休みの日でふかしまんじゅうを持つて行つた。秋あげは赤飯、歳暮には塩びきのさけを持つて行つた。正月、節供、盆にも歸つた。(塩原)

年始は男衆がまわるので、女衆は行かなかつた。一月十五日、十六日には、嫁はお客に行くといふ。このときは泊つてくる。家によつては、婿も一緒に行つた。もつて行くものは、その時期にあつたもの。

ここは四月三日がひなの節供、このときは、サンマのひらきと、むきのもの(お菓子とか砂糖折など)をもつて行つた。

五月の節供のときは、タラのひらきと、適当なものをお土産として

もって行った。

七月の七夕のときには、トウナス（数は適当でよい）と土産（これも適当なもの）をもって行った。

八月の八朔の節供（旧八月一日）には葉シヨウガをもって行った。そのほか土産は適当なものをもって行った。嫁の里方では、このときまでのおかえしをした。八朔までは、おかえしなしであった。嫁に来て、三〜五年のあいだは、うちのために品物をかえしてよこした。最初の年は箕をよこした。

歳暮は、親の丈夫なうちをもって行くものだという。このときは、シヤケをもって行った。（浅原）

むかしは、五節供のときには、かならず、親元へつけとどけをするものだった。なお、そのとき、婿が嫁と一緒に嫁の里方へ行く場合もある。お節供には、一晩ぐらいは泊ってきた。

このほかはお客に行ったわけである。

むらのお祭りのときにはお客に行った。おかいの前には、これから忙しくなるからちよつと里へ行ってこいといって、嬢をお客にやった。このときは日帰り。

五月五日を中心にして三日間は、あそびじまいといって仕事を休んだ。これから忙しくなるからという。

八月二日を中心にして、祇園、農休みと続いた。このときには、嫁は一晩ぐらいは泊ってきた。このころ、新粉をもつて里へ行つたが、この粉のことをほかけといった。里の親のところへもつて行ったのである。

お盆のときにも嫁は里へお客に行った。しかし、嫁に来た年には、里へお客に行つてはならないといった。盆様をおくつてからお客に行けといった。

彼岸から盆には、親がなくなっている場合には、墓まいに行けという。

秋は、新米をもつて里帰りした。米は三升ぐらいで、十一日の末ごろ、日はとくにきまっていけない。里が農家であっても、米をもつて行った。（浅原）

嫁は五節供には里へ帰るものだという。五節供とは、（一月十五日）、四月の節供、五月の節供、八朔の節供、オクンチ。

一月十五日にはお客に行く。

四月の節供にはサンマのひらきをもつて行った。

五月の節供にはタラのひらき。

八朔の節供にはシヨウガをもつて行く。このおかえしは箕。オクンチにはおこわをもつて行く。

むかし、粉ができると（七月中旬）、農休みにかけて里へ新粉をもつて行った。一升でも二升でも三升でもよかつた。これは、毎年、親もとへ行つたものだが、嫁に来てはじめのうちぐらいであった。その粉で、ふかしまんじゅうでもつくって、とつき先へのおみやげとしてもつて来た。親もとへ新しい粉をもつて行くことをホカケといった。

米ができると、十二月になって、新米を里へ嫁がもつて行った。一升か二升、これも親もとへもつて行ったものである。これは、ホカケともいうし、お土産ともいった。

お歳暮はサケをもつて行った。親があるうちは、お歳暮はもつて行くものだとわれている。（長尾根）

嫁が里帰りする日は正月。節句。農休み。盆の十五日、十六日。秋あげには餅をついて大福餅を持って行った。これは米が取れて秋の終りであった。お歳暮には塩びきを持って行った。（塩原）

結婚したその年の暮に、実家へミを持って行った。ミが買えなければメカイでもいい、と言った。（深沢）

三日めは、最初の里帰りである。お茶菓子などを持って、ムコさんと兄弟がいっしょに行く。ムコもひとばん泊まった。はじめてなので、

だいじにしてくれる。里の近所、親族へのあいさつは、迎えいちばんの

時すましているのです、このときにはしない。(上桐原)

初嫁は、盆のときには里へ帰さなかつた。(長尾根)

節供の里帰り この日は、女衆も骨休めができた。(上桐原)

仲人札 仲人へのお札は仲人札という。ムコ方とヨメ方の負担金額の比率は、六分四分か七分三分で、財産次第である。「トンビのハネ」とはいわなかつた。(上桐原)

仲人とのつきあい 「仲人三年」とひとくちにいうが、子どもでもできれば、やっぱり男二人くらいまではかけるのがふつうで、きりがつかない。仲人札の額は少なくても、仲人とのつきあいは、七十になつても、二人で丈夫ならしたものだ。仲人すれば、あなはかがにぎやかだ、というくらい結局ながいつきあいになる。といっても、たいてい盆と暮れのつきあい程度である。(上桐原)

へソクリ へソクリができるのは姑さまだけ。嫁にはできない。くず繭を売つたりした金は姑さまのもの。嫁は実家のおっかさんに貰う。黙つてもおっかさんが渡してくれた。(深沢)

めまし 妻が夫より年上のことをめましという、「めまし夫をすごす」ということばがある。一つ年上のかみさんは「おつと」といふ。金のわらじをはいて尋ねてもいない」とまでいわれている。(浅原)

のつつけがみさん 姑のいないところへ嫁に行つた人のことをいう。これは、姑づとめがなかつたので、まわりの人たちは、うらやましがつたという。(浅原)

離婚 離婚のことを縁切りという。

結婚して、三年たつても子どものない場合には、ものもいわずに縁切りしてもよいといわれた。この場合は、仲立ちにたのんで縁切りをした。この場合には、たんすは嫁にかえすのがふつう。

仲人については、いい世話をするが、悪い世話(離縁話)はしないといつて、仲立ちをするのをいやがる人もある。

離婚の場合、子どもがいる場合は、子どもをつれて出る人もあるし、

おいていく人もあつて、どちらとはきまつていない。(浅原)

結婚式当日、花嫁が逃げてしまつて、母親が代わつて嫁の座について間に合つたことがあつたという(茂木)

扶持持ち 昔は扶持を持つて来た人がいた。女中も連れて来た。有名な話は、東村花輪の大黒屋から「三石十二人扶持、番頭一人女中三人」といわれた。五十四年前のこと。扶持といつても金で持つて来た。番頭は死ぬまで、その家に仕えた。女中は年頃になると嫁にくれた。(塩原)

五、葬 制

(一) 死の予兆と死

死の予兆 鳥が鳴きながら尻尾を動かしている。その方向に死人が出るという。鳴き方が違ふのである。(浅原)

鳥が静かにのろまげに鳴いたり、家の近くで鳴くと、人が死ぬといふ。(神梅)

シニ、シニといつて、四つ鳴いて、二つ鳴くと不幸があるといふ。また鳴に場があるともいふ。(茂木)

今まで来たことのない人が、訪れて来ると、暇乞いに来たと思はれて危いという。(神梅)

百度参り 天神様に行き百度拝む。木の葉を百枚もつて一枚ずつ神前におき、百回の数をあらためる。(浅原)

六合神社や相生の日限り地蔵で、病気が直るようにお百度をふんだ。(神梅)

ヨビモドシ 自音寺の住職の河内良存さんの父のはなし。脳溢血で倒れた時のこと、気が遠くなつて、ふと気づくと、川原に立っていた。向う岸は極楽のお花畑のように美しい風景が展開して、一人の女

が、川を渡って来いと、しきりに手まねきする。そこで川を渡ろうとすると、後から村人の声で、渡っちゃだめだと、大声で引きとめるものがあつた。はつとして気がつく、正気にもどつていた。村人が魂を呼びもどしてくれたのだ。(高津戸)

死にそこなつた人の話によると、川の向うに美しいところがあり、そこで誰かが手招きをしているので川を渡ろうとしたら、足をひっぱられたので行けなかつた。そこで気がついた。あのとき川を渡つていれば死んでしまつたのかも知れない。

また、耳もとで大声で呼ぶ人がいるので返つてきたら助かつた。今泉敬太郎さんもそんなことがあつた。(高津戸)

魂呼び 人が息が切れそな時に「センドウもうせ」と言いながら、二軒在家の神明様の杜殿の板をたたきながら回つた。それが聞こえれば助かるという。(戸沢)

ここでは特にない。座間からまた人に、オコリをとると生きかえると聞いたことがある。(茂木)

人玉 二十才前に見ないと、その人は一生見ない。直径十五〜二十五cmぐらいの火の玉が、地上十mぐらいの所を青火を引いて、波をうつように上下しながら行く。シラサギが尾を引く時も光るといふ。(神梅)

二十才まで見なければ、一生見ないといふ。人玉は十二様から十二様までとぶといふ人もある。(茂木)

死後 人は死ぬといふ処に行くといふ。十万億土に行くといふ。(戸沢)

葬式の総名 葬式のことをトムライ、ジャンボンといふ。大人はトムライの方を多く使い、子供はジャンボンと言つてゐる。(二軒在家)

葬式 ジャンボンともいふ。生れかわつた話はない。魂呼びを昔は行なつた。七日間は家の棟に魂があるとされてゐた。なお昔は四十九日目が「オタナアゲ」現在は三十五日になつた。ささかくし(神棚の

神々をかくしておいたさきのこと)を取り三本辻に出した。(塩原)
葬式の客は泊らない。遠かつたりして泊る時は一回仁義して、戸を開けて一旦出てから家に入る。

近場に兄弟でもいればそこに泊る。
その晩、施主の家では風呂をたてない(中、下神梅)

葬式に泊ると一週間泊る。だからたいがい帰る。ほんとうに顔を見るだけだ(中神梅)

葬式の客は泊れない。遠方の客で泊るには、一度トボをまたいで家を出てから、戻つて来て泊ることにする。(神梅)

葬式の夜 施主の家ではお風呂をたてないことになつてゐる。今でもたてない。(神梅)

葬式の仕事分担 亡くなる隣組の人に集まつてもらつて相談をし、仕事の分担を決める。医者、役場、寺に行く人、引物の注文、穴掘り、棺桶を作る人、告げなどである。女衆は主として煮炊きを受け持つ。(小平)

死人が出るとすぐ隣組が寄つて爾後のことについては組長が中心になつて役割を決め指図する。但しそのオカミサンが身持ちであると遠慮してもらふ。通知は身内の者から知らせる。寺には組の人が知らせをして寺の都合を聞き頼んでくる。(浅原)

なお、お布施などについての話し合ひは施主或は近い兄弟などがやつた。

死後、隣り組に話すと、組合の伍長が知らせてくれる。組合の者が集まり神棚を笹の葉で隠したり、諸準備をしてくれる。(神梅)

葬式組 葬式組といふのは特になく、隣り組でやつてゐた。(戸沢)

隣組への礼 故人の子ども連中が相談して、手伝つてくれた隣組の女衆にぞうりやエプロンなどを買ってお礼としてやる。これは最近や

るようになった。(神梅)

葬儀の日取り 隣組と施主が相談して、暦を見て日取りを決める。

友引や寅の日を嫌う。午後一時の出棺が多い。寺の都合も聞く。(神梅)
曆をみて決める(小平)

ご祝儀より広い範囲で呼び、遠い親戚、従兄弟まで来る。(神梅)

ささひき 死者が出ると神棚に笹の葉をあげ、葬式がすむとそれを三本辻へ捨てていく、このとき、サン俵と飯盛りしゃもじ、竈の灰、お祓いなどもおいてくる。(桑津戸)

人が死ぬと神様には半紙を張っておく。折の内では、笹を神様にあげておく家もある。

これは四十九日のお棚上げの時に取る。(小平)

死人が出るとすぐ、神様に不浄を見せてはならないといって、笹の葉をとってきて神棚に上げる。これをメカクシという。葬式がすむと、笹の葉を燃やして、その灰を飯盛りしゃもじといっしょにキヨツパシ(俵の蓋)にのせて、三本辻へ送り出す。(高津戸)

死人が出ると神様には紙をはり、笹の枝を立てた。これは仏様に縁故のない他人にやってもらった。(浅原)

白の絵 人が死ぬと、神棚に半紙を張り、その後すぐに白の絵を書き、それをトボグチに逆さに張っておく。(小平)

火伏せ 死者があるとイロリは使うけれども、新しく作ってもらった御幣を、四十九日間イロリのカギ竹に結えてつけておく。これを火伏せという。(浅原)

告げ 葬儀の回取りが決まると、親戚へ知らせるため、告げの使者が二人一組になって行く。弁当は持たず、先方でもらって食べる。先方では清めの酒を出したり、タバコなどを出す。(神梅)

死亡通知をする人をツゲという。ツゲは組合のひとつが二人選ばれた。ツゲに行く人には帳場からワラジ銭が出た。告げに行った家では必ず御飯を一杯出した。食べないと帰してもらえず、清めとして一杯頂いた。(戸沢)

不幸のあった場合、つげになるのはかならず二人で組んで行った。

つげの人がいくと行き先で食事を出してもらった。つげをむかえた家では、食事を出さないと義理がたないという風習があった。食事は何時であつてもかならず出した。これは米のめしであつた。箸だけはつけてくれといった。酒があれば酒を出した。(浅原)

隣り組みの人が二人で出る。そのとき施主はワラジ銭をもたせてやった。告げを迎えた家は、食事時でなくも一飯の用意をし、酒を出して浄めてくれという。二人揃つてくると告げがきたかという。(高津戸)

普通の仕度で二人で出る。迎えた家ではキヨメ酒、ナマグサなどをおひるに出した。今は施主がガソリン代・昼食代を持たせる。(浅原) かならず二人で組んで行く。昔は全部徒歩だったので、一日に回れる範囲はきまつていて、告げは幾組も出た。

告げにはかならず何か出して、箸だけは取らせるもんだという。しかし、ウドンは出すものではない。続くといつて嫌がる。(小平)

枕直し 死後、北枕に直したり、部屋をナンドに取り替えたりする。魔除けとして、布団の上に刀を半開きにして置く。鎌を置く家もある。この刀や鎌は施主が墓地まで持つて行って、棺を穴に降ろしたあと、縄を切るのに使う。(神梅)

死者は北枕に寝かせ、身体の上にはナタや鎌などの刃物を魔よけに置く。魔物が死者を飛びこえたと死者が息をふきかえすという。猫が死者に近づくとをきらう。(戸沢)

魔除けとして死人の上に刀、鎌、鉞などの刀物をのせる。(小平)

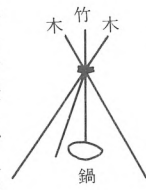
枕飯 組の者が寄ると、お茶を飲まないうちに、とがない米を釜に入れて枕飯を少したく。飯は煮ただけそっくり椀に盛って、箸二本立てて供える。(神梅)

枕飯を炊いた燃し屑と杓子とお寺で呉れるオハライ(篠竹に和紙をつけたもの)を、出棺の後、三本辻に捨てる。(小平)

枕飯は近女の女しが米をとがずに一合ほどたいた。室の外でサンマ

夕をたてて鍋でたき、いつも使っていたシャモジで盛りつける。サンマタと灰はサンタワラに入れて、その上にシャモジをのせ三本辻に捨てた。枕飯は死者の枕元に置き、使っていた箸をまっすぐに立てる。

(戸沢)



竹一本、木二本を結わえて三脚を作り、鍋を吊って炊く。火を燃す時には手でなく、足でつくくべる。普通の時、三本木とか、足で火をくべると叱られる。(小平)

昔は玄米を、外庭で木を三又にしぼって、これにナベをつるしてたいた。燃した炭火はサンタワラを起してその上に灰を入れ、オハライで家を祓ってそれを一緒に立て、シャモジを一緒に三本辻に出した。

(浅原)

死ぬとすぐ玄米を鍋でたいた。生木三本を立てて、そこに鍋を吊し、外でたいた。この枕めしを死者の枕のところにおくことが一番先だった。この時の灰、もえ残りを三本辻に出した。(塩原)

枕団子 (チヨコダンゴ)



チヨコ
ダンゴ

の白米を石臼でひく。石臼は反対回しにする。粉は臼の真中に集まる。その粉でチヨコダンゴを三組作る。これをしんぜると死人の枕を取る。楽にするという。だから枕団子という。(小平)

枕団子をゆでた汁は、枕飯のオツユにする。(小平)
米の粉は石臼を左回しにして(最初だけ)、粉をひき、庭に三本マタの棒を組んで、米の粉のだんごをゆでる。その灰はサンタワラパシにのせて三本辻に出す。だんごは二つ重ねて死者の枕元に供える。(神梅)
チヨコダンゴは死後すぐつくり、おちよこの上に団子をのせる。七日七日につくった。(戸沢)

四十九個こしらえて、葬式が終わると血の近い人が半紙にくるんもらって帰る。子供に食べさせると風邪をひかないという。(戸沢)

枕だんごはチヨコダンゴともいい、二個重ねて三組作る。水ノミダンゴ、「七日七日のチヨコダンゴ」といって、七日ごとに墓の前に供える。このダンゴを下げて食べると、かぜをひかないという。(神梅)
人が死ぬとすぐ枕めし、枕だんご(三つ、チヨコダンゴという。下にチヨコにしてその上に丸いダンゴをのせるのを三つつくるわけである)をつくる。そしてナンドに北向きに寝せて二枚屏風を逆さに立て枕許に供えた。これは葬式の時までにおいて、埋葬する所まで持つていく。(浅原)

(二) 葬 送

湯灌 兄弟、子供達がやる。ヨ(ユ)モク―湯沐―は今夜六時からというようにツゲに伝えさせる。湯灌の湯はカマドでわかす。繩のタスキ、オビを着てやる。(浅原)

しょう油樽に湯を汲み、線香を束でいぶしながら脱脂綿で男しが上の方を、女しが下の方をふく。ふいた脱脂綿は棺の下に入れる。湯灌をする人は血の近い人がやった。(戸沢)

葬式の前の晩、隣組の人が帰ってから、近親者が湯灌をし、納棺をする。男衆は揮一つになり、荒繩を腰に巻き、女衆は荒繩をタスキにかけてやる。上半身は男が拭き、下半身は女が洗ってやる。

湯灌した水は川に入らないようにいける。醤油樽は人目につかないようにつぶす。(小平)

納戸の死者の所へ近身者が集まり、遺体をきれいにする。男はふんどし姿で繩帯をたて結びに締め、女も薄着になり繩帯を締める。やかんか鉄びんに水を入れて、あとから湯を入れて沸かし、その湯でガーゼを濡らして布団の上の遺体をはだかにしてふく。線香をたいて匂いを消し、酒を吹きかけて遺体をやつてくもむ。湯はしょう油樽に入れて使い、あとで親戚が墓地へ運んで棄てたり、底を抜いてこわして、棺と一緒にいけたりする。(神梅)

ステバ 禪一本で湯灌に使ったものをしよう油樽につめて渡良瀬川に捨ててきて、家に帰ってから風呂に入り、塩で清めた。ステバは高津戸発電所の近くにあった。昔は馬の死骸を捨てたところで間坂の共有山であった。(戸沢)

お通夜 昔は、兄弟や子供は起きていた。葬式の日までやった。(小平)

坊さんはいいい家にしか来ないで、身内の者だけでやる。夜十二時ごろまで。(神梅)

タイヤのお膳 死んだ夜(従って子、兄弟、親戚の者などが寝ずにお通夜をする夜)湯灌を終えての夕食をいう。このときは豆腐の厚揚げ(ナマアゲ)をおかずとすることになっている。(浅原)

入棺 親子兄弟など死者に近いものが立合って納棺する。その際、死者の好んでいたものなど入れるほかに、ズタ袋をかけさせ、隠し金といって着物のあちこちに銭を結びつけてやる。六文銭は三途の川の渡し賃だが、この着物につけていった銭は、途中でとられないようにという。(高津戸)

以前は立棺だったが、最近は寝棺が多い。遺体の下へ座布団を入れたり、回りに又力袋をかけて動かぬように固定する。棺の蓋は裁せて置き、行き会いたい人がいれば蓋を取って会わせる。棺巻き布と、棺かけの布を掛けて、台の上に前向きに置く。(神梅)

棺は坐棺が多い。寝棺だと死人の足のの上に乗って拜むことになるし、坐棺の方が経済的に安い。(浅原)

タテガンが普通であった。土葬。(戸沢)

経帷子を左前に着せ、裾のところを六道銭を入れてやる。六道銭は今では紙でできている。

その人の生前の好みの物を入れてやる。煙草好きには胴乱やキセルを入れる。ただし酒だけは入れない。仏様がにぎやかだとか、異常の子が生まれるという。(小平)

晒しを一疋(二反)買ってきて経帷子を作る。戻し針をしないし、結びも作らない。物差も使わない。出来上ったものは釘に掛ける。だから新しい着物を釘に掛けてはいけないという。(小平)

カタビラを縫う時は麻の糸で結び目をつくらずに皆が寄って縫った。(戸沢)

カクシゼニ 棺には文久銭をキヨウカタビラの端に麻でしばって入れてやった。これをもってあの世に行くのだが、途中でみつかるトンマ様に取り上げられるという。死んでいてあの世での小遣銭である。その他棺には普段使っていたものを入れてやる。(浅原)

頭陀袋 頭陀袋の中には六文銭を入れた。三途の川を渡る時の渡り賃が六文だという。六文銭の他に栗の穂を入れた。栗の粒は小さいので、死者がそれを数えていてシャバに帰ってこれられないようにするため。(二軒在家)

死装束 遺体には男はわらじ、女はぞうりをはかせる。カタビラはさらし布を、しまいを結ばないで縫い放しにして作り、左前に着せる。手甲・脚絆に杖(長さ約1m)を持たせる。(神梅)

飾り団子 六個の団子ともいう。前日に作っておき、式の当日に飾る。六升の米をひいて作った。ひき方は、秋団子と違って普通である。

竹の串に六個の団子をさしたものを六本、両側に供えるので、団子は七十二個になる。団子は麦藁をまるめた芯につける。芯の頭には色紙で作った花(赤で花、青で葉を作り、竹を割ってはさんで花の形にしたもの)をさす。(小平)

葬式の日、といた米の粉三・五升または四・五升をこねて、四十九個の飾りだんごを作る。径一寸ぐらいのだんごを七個ずつ串にさして、高さ30cm、径15cmほどの麦わら束にさし、麻紐でしばって立て、上に金・銀紙や色紙で花を作ってかぶせて飾る。二つ作って祭壇の前に飾るが、最近では皿に盛って供える家もある。だんごはあとで近い親戚や隣組に配る。(神梅)

道具 葬列の道具はその日に組の者が作る。前日には作るなどという。午前十時の出棺だと間に合わないので、出せない時だけ、前日に用意する。花籠（色紙や小銭を入れる）、六角塔婆、六地藏、四本旗、穴回りする竹と旗、シヨウコウバナ（長さ15cmぐらいの竹に色紙を付ける）などを作る。（神梅）

共有の物があり、使用した家で預かって置いて、次の家の時に送る。（神梅）

床番 葬式の穴掘りを床番といい、六人ずつ組んで順番に当る。家の女衆が妊娠していれば除外される。（深沢）

穴掘りは穴掘帳面ができていて、順番にやってもらうことにし、妊娠している家はのぞく。穴掘りは四人でやった。昔は穴掘り銭を村中から集めて歩き、掘ってくれた人にやった。昭和五年頃、穴掘り銭は一銭であった。（上桐原）

穴掘りは六人（四人、五人の所もある）が、順回りの番で当り、施主の決めた所に穴を掘る。順番なので女世帯では女も出る。穴は必ず当日掘り、トメ穴はできない。

穴掘り道具は共有物（非常小屋に預けて置く）または施主の物を使う。使った道具は一週間墓地に置いて、七日に家へ持って来る。

穴番には清めの酒と、ムスビ・おかずも出すが、余すものではないので、小さいものを出し、残さず食べる。（神梅）

寅久保（第十七区）一〜三班では穴掘り順番帳があつて、上の組一人、下の組一人（家族に妊婦があると除く）、石の多い所に墓があると四人で掘る。穴掘りは必ず葬儀のその日、朝から出て掘り、掘っておくことはしない。前日に掘った穴はトメアナといい、いけないこととされている。葬式が続いた場合、第一回に掘って同じ隣組内で次のときは掘らない。同じ人は続いて掘らず、掘る人が交代するということがある。二つあることは三つあるとあって、同じ隣組で二年続いて葬式があつたとき、年を越えても同じ人が二回続いて掘ることはしない。

穴掘り道具は施主の家のナタ・トウグワ・シャベル等を用い、使用後一七日の間、穴を掘った所に置く。オキヨメといってツمامミ、酒を出し途中に飲んで作業をする。穴掘りはいやなことなので順番にしたという。穴掘りに報酬はない。（浅原）

村中六十軒で順番に穴掘りに当る。六人だったが、四人になった。穴番には清め酒が出て、穴を掘る。穴番が葬列の時に墓標を担ぎ、音頭取りになる。（神梅）

穴つ堀りは隣保班単位でおこなつた。たとえば、むらの上かみに不幸があつた場合には、下の隣保班から穴つ堀りがでることになっている。むかしは、大勢の人をたのんだ。以前は二隣保班の人が出たが、現在は一隣保班の人が出るようになっていた。

一回で四、五人で穴掘りをした。穴つ堀りの人が棺をかついだこともあつた（四人でかつぐ）。

穴つ堀りの人には、清め（酒）を出した。また、わらじせんも出した。（浅原）

葬式は穴ばんが音頭とり。穴ばんは隣組の人とは別に、帳面があつて、寺で決める。こんだはあの人を頼もつ、つてことになる。穴ばんがあれば、全部世話してくれるかららくだ。今でもある。

おらが方は自然消滅した。（以上中、下神梅）

穴掘りの時にボヤでたき火をする。墓を埋める時も火を燃して、灰を墓にかける。（神梅）

本膳 昼食を本膳にして食べてもらうが、ブツツケ本膳にして早くすませたり、七日の膳も、ブツツケハダンとあって、その日に略してする家も多い。野辺送りから帰って食べる。（神梅）

葬式の日の食事として、御飯に豆腐汁と生揚げを出す。これを本膳という。手伝いの人には、朝食がわりに、また式の前にくる親戚にも出す。（小平）

飯・豆腐汁・ガンモドキ（平ひら椀）・煮豆などが付く。隣組の大人も

子供も坐る。膳碗は二、三軒の倉のある家が持つていて、共同のものはない。(神梅)

オチツキ 坊さんが来ると、オチツキと言って団子で汁粉を出す。

その後でお茶を出す。お茶を下げると読経になる。(小平)

坊さんが来ると、お茶を出し、落チツキとして粉餅・吸い物を出し、

本膳に坐ってもらふ。食事後、拝み始める。(神梅)

オベントウ 僧侶がお経をあげている間に、重箱に飯を入れ、箸一本で隣組の代表の人がはさんで参列者全部にやり、オテノクボでたべ

る。(浅原)

焼香 家の中で親族だけの焼香をし、庭のところを外来者の焼香が

ある。(小平)

葬儀の知らせ 近所の人が念仏鉦をたたいて回ると、村中の人が集

まって参列する。(下神梅)

葬列の役割 役割は前に決まっている。施主が位牌、膳はその連れ

合い。松明と提灯は身内の人。松明、提灯、棺、位牌、膳の順序であ

る。(小平)

高張提灯(身内の者)、位牌(後継ぎの子か、施主が持つ)、膳(看

病した女)、六地藏、花籠、竜タツ、のぼり旗、棺(穴番の人が六人い

て四人ずつ交代して担ぐ)、一般の人の順で行列を組む。子の葬式には、

親は見送りしない。露払いは出ない。(神梅)

1 六地藏 隣組の人が行列の前に墓へ

2 灯籠 親戚の人

3 四旗 親戚の人

4 花かご 組の人

5 天蓋 目上の人

6 膳 長男の嫁

7 位牌 長男

8 棺 組合の人

9 墓標 親戚代表

(高津戸)

出棺 坊さんがドラをジャジャンボンと鳴らすのを合図に出棺

となる。そのため、葬式のことを「ジャンボン」という。坊さんは

墓地へ行かないが、行く所もあって、そこでは穴回りするいっぱいド

ラを鳴らす。出る時に竹鳥居はくぐらせない。(神梅)

親族や組の者が庭に降りて葬列を組む。竜頭^{たがしら}2、花籠2、のぼり4、

六地藏、六角塔婆、メハジキなどは組の人が作って置いて、それぞれ

持ち、葬列を組む。庭に竹四本を立てて、その回りを三回半回り、墓

地に行く。家によって、墓地へ行つてから、穴回りを三回半すること

もある。(神梅)

座敷から縁側へそこから出棺するが、そのとき相続人は肩にサラシ

の袴のような布をかけて出る。嫁は頭に三角の布(ツノカクシ)をつけ

る。(浅原)

棺は縁側から出る。庭でアナマワリといって左廻りに三回半廻った。

そこで坊さんが拝んで引導をわたし墓地へ行った。(上桐原)

親しい男性は紙で作ったカムムリをつける。施主は布のカムムリを

つける。(小平)

アナマワリ 棺は穴掘りの人がかつぐが、庭に出てから左廻りで三

廻り半する。これをアナ廻りという。竹を四本立て、寺から借りたハ

タを立てその廻りを廻る。そのとき行列はハナカゴなど持って廻った。

行列の順番は僧侶が指示する。そして墓地に行くには紙で作ったハナ

オを草履にはさみこれをはいて行った。肩には紙で作ったカミシモを

かけて行く。これらは墓地に置いてきた。(浅原)

穴の回りに四本の竹を立て、半紙四枚を張り合わせた紙に坊さんが

書いたものを広げて四隅をカンジヨリで止めて蓋にする。葬列は穴マ

ワリを三回半回る。(神梅)

庭でやる。葉のついた竹を四本たて、それに、車西南北と南無阿弥

陀仏と書いた紙を張り、この回りを和尚が先導して左回り三回半をやる。



この時、大人の場合には花籠を振る。昔は一銭銅貨で、今では十円銅貨。この銭を捨てて鉤竹に吊るすと縁起がよいという。年寄りの人のを拾うと長生きするともいう。また、種銭にする。(小平)

近親者が出す。今は百円玉で千円から二千円ぐらい入れる。「供養せん」ともいう。(塩原)

花籠の中に文久銭をいれて、まいて歩った。(間坂)

ミオクリ 野辺送りのことをミオクリという。(戸沢)

野辺 出棺して野辺に出る時は、馬を鳴かせるな、あとを引くから。馬には餅をうんと食わせておけという。(神梅)

墓地に着くと、穴の中に棺をおろして土をかける。埋めた土の上に、ノベの灰をかける。ノベの火は穴掘りの時から、ボヤを焼しておく。竹を七つに割って貝ハジキを作って、土の上に六本折り曲げてさし、一本をハジイテ立てて置く。オオカミ除け、マミ除けという。(神梅)

草履 半紙で草履の形を作り、靴のところにに入れて野辺送りに行く。その紙は墓場に置いてくる。それ拾って尻をふくと痔がなるともいいう。(小平)

出棺後 棺が出ると、竹笹の箒で掃き出す。掃き出すのは隣組の女衆がやる。そしてメカイを座敷に転がす。そうすると家族が淋しくなるといいう。(小平)

座敷を親のそろった子供が、男と女ではき出す。隣組の者が一七日の飾り付けをする。(神梅)

埋葬 棺を穴の中に降ろす時は、縛った縄を持って下げる。その縄を、刃を向こうに向けた刃物で切る。その後、親族が土を少し埋めて、

あと穴番の者が埋める。(神梅)

お墓に行つて和尚が拝む。棺を穴に吊るしこむ。そこで施主が縁切り綱を切る。線香を一本ずつコウロウにさして、土をかける。(小平)

埋葬すると相続人が魔除けの刀を腰にさしていったのを抜き、棺をさげていた縄を切る。エンキリ繩という。そのあと参列者が少しずつ土をかけ、次で穴を掘った人が残り全部をかける。家に帰ってくると塩を撒き、御幣でハラライ、庭に転がしておいた臼に腰をかけ、タライの水で足を洗った。(浅原)

エンキリ 棺をはこぶのに使つた竹をアトトリ(相続人)が切る。これをエンキリという。(戸沢)

埋ける場所に清水が湧き出たりすると、棺の上に大きな石をのせて浮きあがるのを防いだこともある。(上桐原)

新墓の葬送施設 (深沢)

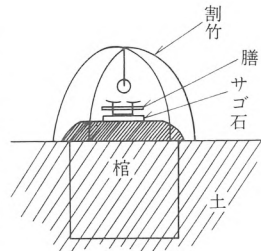


新墓(深沢)
(長沢利明 撮影)

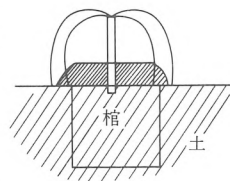
メハジキ 大ハジキともいいう。埋葬後、親戚の人が帰ると、隣組の人がやる。竹を割って、土饅頭の上に弓形にさす。その場合、青いのが内側になるようにさす。割竹の中心から荒縄で石をさげる。石の下にはお膳を置いておくが、石が落ちて、お膳が早くこわれる方がよい

という。膳の下には平らな石を置くが、これをサゴ石という。メハジキは墓荒しを防ぐためにする。テン死人をかじるといって一番嫌がった。

以上は狸原と茂木のやり方であるが、下の谷田では丸竹の上部を割ってさす。膳はメハジキの外に供える。



(狸原・茂木)



(谷田地区)

メハジキは、そのまま放っておき、改めて片づけるといふことはしない。一周忌になると風化してしまっている。(小平)

ハカナオンをするとき或は埋めてすぐ棺をかついだ竹を四つに割って・曲げてメハジキをつくって立てる。山犬に掘られぬようにするのである。(浅原)

葬式の日に棺をかついだ竹を使って犬が掘られないようにメハジキをこしらえた。メハジキは一日だけ。(二軒在家)

竹を七つに割って、六本を曲げて墓の上にさし、一本をはじめて立てる。盛り土の上にノベの灰をかけて置く。(神梅)

四十九院(印) 葬式の前に寺に書いてもらう小さな塔婆で、七本木と同じようなもの、四十九日まで毎日持っていく、四十九日には七本木を持参し、百日目は塔婆のたてはじめ、三十三年忌は塔婆のたてしまいいい、杉塔婆をたてる(高津戸)

今では四十九院といって、土饅頭に囲いをする。この場合はメハジキをしない。四十九院は丁寧な葬式のときにやる。(小平)

ノガエリ 野辺から帰ると、家の入口に白を横に描いた絵が貼ってあり、そこで塩をふりかけて、たらいで足を洗うまねをして、身を清める。座敷に上って、清めの冷や酒を一杯だけ飲む。(神梅)

野辺送り から帰ると、玄関先に用意されている洗面器の水で手を洗い、塩で清める。その後、冷酒を盃に一杯飲んでもらう。(小平)

墓直し 今は野辺から帰った夜、身内の者が墓直しに行く。念仏の水を持って供えに行き、青竹を七本に割って一本を立てたまま、他の六本を折り曲げて土にさし、メハジキを作る。割った竹を土まんじゅうの上に四角に並べ、正面に横に何本も並べて階段を作る。墓前に花をさしてきれいに飾る。土まんじゅうは高いほどよい。うんと食った人だという。(神梅)

四十九位 や四方鳥居は葬儀屋で買って、墓の上に置く。(神梅) 家に帰ってきて客はオキヨメの膳につく。その間に親戚の者行って

ハカナオシをする。ハカナオシは埋葬直後にする家もある。墓直しに行っている間に、近所の人が残っていて位碑を飾り直したあと僧侶に拜んでもらう。これを七日のお経という。葬式の次の日をナノカといひこれを葬式の当日やってしまう。これをブツツケナノカという。従って今ではオキヨメをやっている間に七日のお経をあげるわけである。

(浅原)

葬式の夕方、近親が行ってやる。杉の葉を持って行って、土饅頭の回りを囲い、垣根を作る。(小平)

墓直しの時、川原などからサゴ石を拾って来て、位碑の台石として土盛りの上に置く。この石は後まで残る。(神梅)

トムライの翌日に墓なおしをやった。土まんじゅうを整地し、杉の葉をふせて竹をはさむ。(二軒在家)

七日の膳 野辺送りの間に女衆が座敷の用意をしておく。清めがすむとすぐに座敷に上がってもらい七日の膳になる。和尚にはその時、七日の拝みまでしてもらう。

昔は、魚は出なかったが、今では魚のバックでやる。その他、里芋やキンピラが出る。

酒は最初の一杯だけが冷酒で、あとは爛酒になる。

下手をすると御祝儀以上で、年寄りの時などは天寿を全うしたというので歌まででることもある。

七日の膳に坐ったとき、引き物の外に、位牌と飾り団子を二つぐらい紙に包んで渡す。位牌は紙のもので、和尚に頼んで葬式の時に持ってきてもらう。(小平)

ブツケ七日 野辺送りから帰ると手をきよめ、家に入ると本膳が出される。これを「ブツケ七日」という。七日目には近所や近い親戚が集まって七日の行事をする。(塩原)

四十九杯 七日の膳のあと、お布施と引き物の他に、白米をスエノカサ(椀の蓋)で四十九杯計って、新しく作った晒の袋に入れて、和尚に持って行ってもらう。それを四十九杯と言っている。お寺で、四十九日の間、新仏に供えてくれるという。(小平)

念仏 墓場から帰って、ブツケ七日のお経がすんで、組の人や親戚の者が念仏をする。親戚や身近の人が、桶に水をおき、一方コップを二つ三つ置いて、それをコップに入れ、次でこれを別の桶に入れるという事をひっきりなしに繰返す。音頭とりがいて十三念仏がすんだところで念仏ダマといって、強飯をふかした握飯、煮しめを配った。

(今はお茶菓子となっている)これは概ね念仏の真中頃でいわば中休みである。そこに居る人にも念仏ダマをやる家もある。昔は念仏を始める前にカネをたいた。これを聞いて、念仏が始まるというわけの子供が集まった。これらにも念仏ダマを出してやり、子供はそれを楽しみにしていたものである。(浅原)

葬式後の夕方、男衆が主体でやる。鉦を叩いて、十三仏を唱和する。最初三べんがえしを三回やり、十三仏を十三回唱える。(小平)

念仏 夕方、身内の者や近所の人が寄って、念仏を唱える。夜、近

親者が念仏の水あげに、墓参りに行く。(神梅)

念仏玉 葬式を出したあと、念仏供養をするが、その時に赤飯を握って茶椀ちawanくらいの大さの真丸い念仏玉を作り、念仏をする人々に配る。食いきれないほど大きい。最近はまだじゅうを使うようになった。(神梅)

六個の団子のあまりの粉で念仏団子を作り、念仏を申ししてくれる人に配る。(小平)

あと念仏 一七日ヒトナカから四十九日まで、念仏をあげる。四十九日に餅はつかない。(深沢)

喪服 男は黒、女は白無垢だったが、最近も黒となった。(神梅)
コウデン コウデンは金が多かった。必ず施主に「線香代です」と言って渡すのが一般的。(戸沢)

十三仏 葬式があるとオタナアゲまで十三仏の掛軸をかけておく。十三仏の掛軸は十二区中でつかっている。(二軒在家)

位はい 家から出た兄弟は戒名を紙に書いてもらっていき、自分の家の勝手の流しの隅にはっておき、水、めしを毎日供え、四十九日目に仏壇の中に入れて線香を上げた。(塩原)

告別式 以前は祭壇がなかったので、座敷に箱をならべて台として、その前で坊さんが拜んで引導を渡し、タイマツを庭に投げた。親族が焼香してから出棺になった。(神梅)

火葬 五、六年前に赤城霊園ができた影響で、火葬がはやり出し、土葬は少なくなつた。石塔もカルウトで組んだ納骨式に変わりつつある。

(神梅)

カルウト 六、七年前から火葬にしてお骨を納める形式の、カルウト式の石塔がふえて来ている。(神梅)

ハカバ ハカバは共同と個人持ちがあり、埋めるところと詣るところは同じである。(二軒在家)

(三) 葬後の祭り

一七日 親戚や隣組の人もお参りする。チヨコダンゴを作って持っていく供える。

七日、七日にお参りする折の団子は、六個の団子の粉を取っておいて作る。(小平)

一七日には坊さんを招き、近所の人も来て墓参りをする。(神梅)

一七日まで、毎日夕方墓へ灯りをつけ墓参りに行く。(神梅)

一七日、身内、隣組の人がお墓詣り

昔は七日毎に四十九日まで丁寧をやった。今は三十五日でオタナアゲとして、近しい人呼び、集まってお寺を頼み、拜んでもらって焼香する。昔は精進料理だった。(浅原) 百ヶ日は四十九日に同じ。一週忌、三年忌、七年忌、十三年忌、十七年忌、二十三年忌、三十三年忌で塔婆のタテジマイといい、杉の木の前上を葉のついたまま削って戒名を書いてもらい立てる。三十三年のトメトウバともいい、これはここだけの習俗だといっている。(浅原)

シヨナノカ(初七日)には近親に話をして供養する。(戸沢)

四十九日(または三十五日) 坊さんを招いて拜んでもらう。家の人や身内で用意をして、他人様の手にはかからない。昔は餅をついたが、今はまんじゅうを配る。

これで魂が仏壇に上がり、座敷は壇払いになる。忌切りで、以後生仏でなくなる。それまで線香を一本ずつ立てたのが、以後は二本ずつ立てることになる。(神梅)

四十九日には、いい家では忌切り餅をついた。(神梅)

四十九日のオタナアゲには酒を少し飲む。この日は餅をついて塩あんを入れた。これを親戚に配ったが餅つきの音で死者の魂がグシを離れるという。餅つきは必ず家の中で臼の音をさせてやった。これで忌があけるといふ。(戸沢)

四十九日は死者は屋根裏から離れないから明りはたやしてはいけない。(桐原)

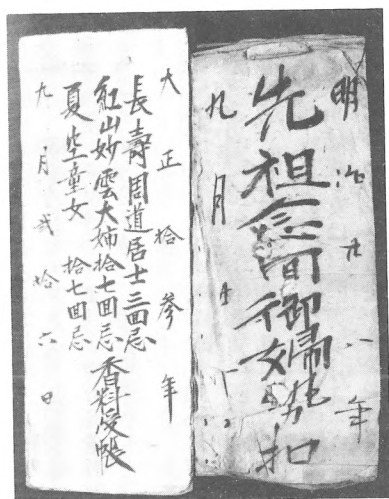
死後の供養 シヨナノカ、フタナノカ、ミナノカ、ヨナノカ、イツナノカ、ムナノカ、シジュウクニチと供養する。墓に詣り、チヨコダンゴをあげた。シヨナノカとシジュウクニチには必ずおはぎをこしらえ、来た人に食べてもらった。(戸沢)

お棚上げ 昔は四十九日であったが、最近は早くなる傾向がある。三十五日とか三七にやる家も多い。しかも日曜日を利用してやってみよう。(小平)

棚上げ餅 白を四十九日まで使用しないで四十九日に餅をついて、塩あん入りのものを二個ずつ紙に包んで親類、近所に配る。水引きは白黒のものを使う。(塩原)

(四) 年忌

年忌 一年忌(一週期)・三回忌・七年忌・十三年忌・十七年忌・二十三年忌・二十七年忌・三十三年忌と続く。七年忌ぐらいたたないと石塔は立たない。(神梅)



先祖念回御布施帳 (長沢利明 撮影)

イッシュユウキ、三年忌、七、十三、二十三、二十七、三十三年忌をやった。三十三年忌はトムライジメ(トムライアゲともいう)である。トムライジメには杉の芯木を削って戒名を書いてもらった。

イキトウバという。(戸沢)

三十三年忌 トムライジマイで位牌を位牌堂に入れてしまふ。墓地

にシんツキハトウバ(葉ツキ塔婆)を立てる(神梅)

塔婆の建てじまいで、枝つきの塔婆を建てる。(小平)

三十三回忌の盆になるとトムライジマイに位牌をもしてしまった。

(桐原)

先祖念回御布施帳、回忌香料受帳控 (小平)

(五) その他

流れ灌頂 お産で死ぬと赤い旗を川に立て、皆が水をかけて白くなると、普通の仏様と同じになるという。赤いままだと血の池地獄が渡れず、白くなると渡れるという。(浅原)

お産で死んだ人、赤い腰巻を道ばたの堀に竹で立てて、通る人が左手でひしゃくに水を汲んでかけた。昔したのを見た。(無梅)

ながめの四丁目に、四本の柱があり、赤い布とヒシヤクがあつて水を通る人がかけてやった。子供の死んだ特などにした。(高津戸)

流れ灌頂という言葉はないが、実際を見たことがある。(小平)

お産でなくなつた場合には川に四方を竹でさして、赤い布を麻でしぼつたのをとりつける。そばにひしゃくと水桶を置いておき、通る人に水をかけてもらった。(戸沢)

産死者が普段身につけていた肌着を裏庭につるしておいて家の者が朝晩乾かぬように濡らしておいた。(桐原)

盆に産死した場合 盆中に産でなくなつた人は地獄に行つて往生できないうのでスリ鉢を頭にかぶせた。(桐原)

暮、正月に不幸があつた時 暮や正月に人がなくなつた時は仮埋けをする。坊さんと組の人に来てもらう。ツゲは血のつながりのあるところだけにした。枕団子や枕飯はちゃんとこしらえた。正式な葬式は早くても正月二日すぎにやつた。(戸沢)

七日ザラシ 死人の着ていた着物は、家の裏に北向きに向け、毎日水をかける。仏様のノドが乾かないようにとの意だという。(浅原)

葬式の翌日、死者の着ていた物を洗濯する。布団の皮をむいて洗うか、燃やす。洗つた着物は北向きに乾し、七日間水をかける。(神梅)

耳ふさぎ(同齡者拘束) 同齡の人が死んだ時に、二銭を半紙に包んで耳につけた。それをすぐ幣束と一緒に三本辻に捨ててきた。人に見られないよう、ふりむかずに帰ってくる。(戸沢)

同年輩の人が死ぬと、馬糞で耳に蓋をしろという。(小平)

わら人形 一年の中に一軒で二人亡くなると二人目の葬式のときわら人形を作り、墓地に持つて行つて穴を掘り埋める。(塩原)

生まれ替り 死者の背中に字を書いて埋めたら、違ふ家の子の背中に同じアザがついていたという。だから死者に印しを付けるな、書いてやるものではない。(神梅)

桐生に手のひらに字を書いて埋めたら、何年か後にその字の書いてある子が生まれた。お墓の土で洗つたらなくなった。(高津戸)

蘇生した話 塩原の不動滝の上のくるまやのせいやんがなくなつて、組合の人たちが買物に行くとか、ツゲに行つてくれる相談をしていたところ、棺に入れておいたせいやんがムーンと大声を出して起きあがつた。家に居た人は皆逃げてしまった。明治時代のことだという。

死者と猫 今泉三三氏の何代か前の人が死んだとき、棺の上を黒雲が覆つたので、自音寺の和尚に珠数で雲を払ってもらつたら、片目つぶれた猫がいたので、和尚が猫に引導をわたしたらおとなしくなつた。(高津戸)

生前供養 生前に戒名をもらつておくと長生きをするという。また、子孫がやぐらでも安心してられる。生きているうちに自分の葬式をした人もあつた。(高津戸)

ホカイ 親が死ぬと、地家へ嫁や舁に行つて居る者、家を出て独立している者などが、ホカイ(器のこと)に米三升入れて持つて来た。建

てまえの時も同様にした。(大間々)

お祝いの時、餅を入れて持参する容器で、二個で一駄^{イチダ}として馬の背に付けて行く。(神梅)

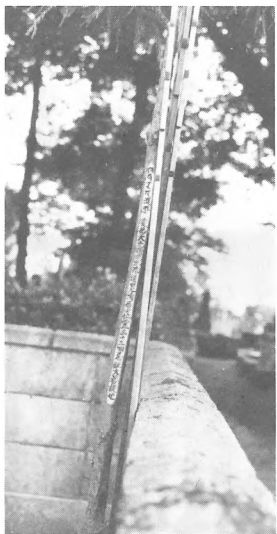
盆棚 組立式で四隅には新竹を立て、三方をチガヤの縄で周らす。この上下両段の縄にホウズキ、色紙などを挟んで垂らす。上の段には生のウドンを掛ける。盆棚の上の段の端に大きなどんぶり様の器をおきイモの葉を敷いて、その中にキュウリ、ナスなどを入れ、別に水の入った壺を置き、一方ミズハギで箒の形のものをつくってもとを紙でくるみチガヤでしばった約二十センチ位のものをつくり、この頭の方をツボの水で浸して、線香を上げに来た人がキュウリやナスにかける。お盆様にあげる物はお膳に乗せて進せる。

盆棚の下にはチガヤで編んだゴザを敷き、素焼のカワラケには、ボタモチ、煮付けなど上段のと同じものを少量のせて進せる。これは無縁仏(石塔に判らなくなった者)にやるといっている。一方一人前にならずに死んだ者も盆棚に上れないといつて下に一緒に祀る。この盆棚の下の仏様をシヨウリユウ様といい、シヨウリユウ様にあげるといってカワラケに入れて供える。(浅原)

新盆 新盆には新しい盆棚を作る。一代替りのはじめになる。前の仏は古い盆棚に置く。したがって新旧二つの棚が出来る。シヨウレイ



イキトウバ (桐原世音寺境内) (板橋春夫 撮影)



イキトウバ (桐原) (板橋春夫 撮影)

サマといい無縁仏を古い棚の下におく。(塩原)
お盆様を飾る。親戚はウドン、フ、瀬戸物などを持って新盆見舞に
来て線香を立てて行く。盆棚は組立式で竹は新しい竹を用いる。(浅原)

寺へのあげものをする。昔は施主が菅笠、ワラジ、草履などを、今は
こもりを寺に納める。寺から塔婆をもらってきて、僧侶が拝みに来
たときお布施を包む。(新盆の塔婆は五、六尺のもの、普通の先祖代々
塔婆は三尺のもの。新盆のときは両者を立てる)

新盆迎えは施主が行く。昔は提灯もって本堂に入った所の前の座敷
にある盆棚の灯明からつけて来て、自宅の盆棚に移した。

盆棚は、チガヤを廻らし上の二段に色紙、ホウズキを飾り、棚には
スイカ、カボチャ等を供え、御先祖様に供えるお膳は台の上におく。
棚の下にはサトイモの葉の上にボタモチを入れて供え、ソウリヨウ様
にあげるといふ。(無縁仏はもと家があったが遠くに出て誰も供養する
家のないのをいい、一人前にならないで死んだ者も盆棚に祀る。)(長
尾根)

迎え盆 紋付きの弓張提灯、ローソクを持って、寺の本堂入口にあ
る盆棚から火を提灯に分けてもらってくる。途中で消えたと再び寺で
もらってきた。今は五百円持って行き、マッチ三本寺からもらってくる。
家にもらってきて盆棚の種油の行燈にともし三日間は火を絶やさ
なかった。(浅原)

送り盆 十六日は墓地に送り、
盆棚の竹や花などそこで燃す。仏
様はその煙で帰るといふ。また生
竹のはねた音で仏様は帰るのだと
いふ。送迎にカドで藁束を燃す
ことはしない。(浅原)

年中行事

はじめに

大間々の年中行事を見ると、ここが東毛地方にあつて北部は赤城山や黒保根村に通じ、勢多郡東村にも連らなるという、地勢の特色が出ているので、そちらとの比較が必要になつてくる。目立ったことがらをいくつか取り上げてみよう。

正月棚はナラかクヌギの木を割つて編んで棚を作り、天井から吊るしたというが(塩原)、前橋市城南地区などのやり方と類似している。利根郡などの山間部で、松坂をコビキでひいて一杯板を棚にしたものと対照的である。平坦部に近い地帯では入手し易い雑木を使つたものであるが、常設の神棚になる以前の形を示すものといえよう。なお、棚板は二十日正月の朝、屋根へ上げて、年神を送り出した。

三が日の食事の家例として、里芋を食べる家があり、ふつうは二日ごろトロロ汁を食べる風習が多いのに、ここでは六日ドロロといって六日に食べることにしている。芋類は稲作以前から大事な食物とされていたので儀礼の日に使われるのであろう。また、三が日に餅を食うとデキモン(腫物)ができるといつて、餅を食べることを禁じた家例がある。餅は神への供え物で、供えた後に下げてからでなければ食べられなかつたためであらう。餅に対する考え方が現われている。

竹ぼうきの作り方にまで、平年は十二本、ウルウ年は十三本の技を使うという区別をつけていたのは興味深い。昔の人が年回りや暦に深い関心を示していたことがわかる。

正月四日のオ棚探シには、三が日に供えた物を下げて、四日ガユに作つて食べたというが、正月にはカユや雑煮など、祝い物らしからぬ食物を作る例が多い。これらは直会(ナオライ)に起因するもので、神に供えた物を下げて人間が食べる食物として作られたためであると考えられる。

山入りが六日というのは遅い方であらう。この日に十二様にオサゴ(米)、オミキ(酒)、カケオ(懸魚)などを供える。その後、枯枝などを拾つて来て、湯を沸かして家の神々に供える(浅原)。県内では六日の行事は六日年というだけで、行事らしいものがない所が多く、ふつうは「六日爪」というが、ここでは「七日爪」といつて、七日に爪を切ることにしている。大正月から小正月へ移る区切りの日だったのだらうか。

初市は一月七日で、八坂神社から神輿を担ぎ出して飾る。市神を祭るのであろうが、冬の神輿渡御はあまり見受けられないものであろう。

小正月は東毛の特色として、道祖神焼き(ドンドン焼き)がほとんど見られない。正月の松飾りのシメ縄は下げたあと、ほぐして田植えの時に苗をしばる苗バにする。正月と稲作との関連が伺える。正月十四日は蚕の祝い、十五日は田の祝いだとか、小正月を蚕正月ともいい、十四日に女衆が針を持つと、蚕の口を縫うといつて禁じられる。小正月の飾り物にしたケズリバナを集めて、養蚕させるのに入れて置き、春蚕のハシリズウ(最初の熟蚕)を五、六匹付けて、マユを作らせる風習は、西毛の藤岡市上日野などにもあるが、養蚕農家が正月にその年の豊蚕を期待したことがわかる。

オカマ様（カマ神）を祭ることも東毛地方に著しい。オカマ様は三十二人の子どもがいるというので、マユ玉を三十六個以上供えるものだとされる。子だくさんの神という点では北毛地方の太子様に似ている。ハラミバシをわらで十文字にしばって、オカマ様に上げると、歯痛が治るといふが、なぜ十文字にするのだろうか。よそでも見られることだが。

正月十五日におむすびを十二個作って、一つ一つにハラミバシを突きとおして、箕に入れて年神様の隣のオミタマ様に供えたという。このようにしておミタマ様を小正月に祭る風習が県内各地にあったことがわかってきた。十五日カユは、柿の木の皮をはいでカユを付けてやり、実が成る呪いをしたり、食器などを洗った水を家の囲りにまいて、蛇・ムカデが入らない呪いをしたりする。十六日はしょうゆ飯を作ってジオウ様に供えるなど、小正月には多くの行事が入り混んでいる。

一月二十日のエビス講について、商人のエビス様は帰って来る祝い、農家のエビス様は出かける祝いとしたり、商店は朝エビス、農家は夜エビスとしたりして、区別している。利益をもたらす福神として、生岳に祀られて信仰されたものであろう。なお、エビス様は北向きにしたり、一段低い所に置いたりして、いじめる方がよいというものもある。

一月二十四日に愛宕精進をして、火伏せの神として祭り、下神梅では寒中に水ごりをとったというきびしい行事だった。ふつうは夏七月二十四日の愛宕精進が多いのだが。

節分の豆まきを下神梅では大晦日にしたこともあったというが、県内では藤岡市中島や多野郡万場町などにも例がある。節分とか、年取りとかいうことは、年に何回もあったものが、次第に二月初めに固定したのであろう。

初午にオシラ祭りをして、蛭影大明神の掛地を掛けてマユ玉や里芋、デンガクを供えて祝ったり、屋敷稲荷を祭るが、仕事をするな、火を

燃すな（火にたたるから）などと、禁忌も厳しかった。ここでは秋には屋敷祭りをしないという（上神梅）。

三月節供のヒナ祭りの時、ヒナ人形を出して飾らないとヒナ人形が泣くので、しまったままにして置かない。人形を飾らなければ川へ流すものなどいい、「淡島様へあげます」といって流せという（塩原）。ヒナ人形は本来流されるべきものという意識が伺える伝承である。

五月節供のショウブ酒を飲むと、ムカデに刺されないというが（塩原）、ふつうショウブは蛇除けとされているのに、ここではムカデ除けとなっている。蛇もムカデも同類視されていたものか。

七月二十八日はアフリ神社の夏祭り、川で水ごりをとる。川の中に一升びんを立ててまわりから水をかけ合い、一杯にする行事で、雨乞いと災難除けを祈る愉快な祭りである。

八月一―三日の祇園祭りには、山車に獅子頭二個が飾られる。まず、神馬が大間々の町内を駆け抜けてから、祭典の儀式が行なわれる。そして神輿の渡御と山車の巡行がある。祇園祭りの典型的な形が残っているといえよう。

七夕には笹飾りに対して、箕の中にキュウリやトウモロコシなどの農作物を入れて供える（上神梅）。笹飾りは神のヨリシロであるという意識が残っているからであろう。七夕から七日間、七晩焼きといつて、夕方門前で妻を燃して疫病除けをする風習があった。（浅原）

盆は月遅れの八月に行なうが、盆棚は組立式の木の枠を用意して三日に表座敷へ組み立てる。四隅に新しい竹を立て、カヤの縄を張り回す。棚の上に新しいごさを敷き、棚の奥は一段高い壇を置き、位牌を並べる。盆棚の下に板一枚分の壇を作り、チガヤとかマコモで編んだごさを敷いて精霊様を祭る。（浅原）精霊様の壇がはっきりした形を取っているのは珍しい。

盆迎えには寺の盆棚から提灯の灯をもらって来て、家の盆棚の灯に移して迎え入れるが、寺の遠い所では代表が灯明代を集めて寺へ代参

し、マツチをもらって来て各戸へ分け、盆棚の灯明へ灯をつける形に
変った。(長尾根)

新盆迎えには、寺へ笠とぞうりとお金を持って参詣し、先祖様にこ
れで旅仕度をして来て下さいと、納めてくる(神梅)。盆の十三日には
盆魚を必ず食べる。ナマグサ物を食べないと仏様に口を吸われるから
という(長尾根)。盆が純粹な仏教行事でないことがわかる。

十五日夕方、または十六日の盆送りには、三本辻へ盆棚に使った笹
竹やナス馬や花などを各戸から、持ち寄り、麦わらなどを焚き付けに
して送り火を焼やす。竹がはねる音によって仏様があの世へ出発する
という。送り火の煙に乗って仏様が帰るので、この煙で身体の悪い所
をこすって、持って行ってもらうように呪う人もいる。(神梅)

盆様には水をたっぷり飲んでもらうように、必ず水を供える。盆送
りの時も、お茶を供えてから送り出し、仏様の茶碗にお茶を入れて行っ
て、三本辻でもお茶を注いでやる。

盆の十六日は馬屋肥いを出してから遊ぶことになっていた。五月十
六日も同じで共通している。この日はカテ飯(五目飯)を作って十王
様に供える。

旧八月十七日に下神梅では山上で百八灯をする。本来は盆の送り
火だったものであろう。

八朔には新嫁婿は、ゴボウやシヨウガを持って里帰りをする。前橋
市城南地区でもゴボウを持参したので、共通しているが、一般にはシヨ
ウガの例が多い。

旧十月十日の十日夜には「九日餅二十日ダンゴ」といって、餅をつ
く。餅はサイノメに切つてわらのツトッコに入れて、家の外の稲荷・
地神・氏神・十二様などの神々に供えて回る。ツトッコは十本も二十
本も作る。供え餅を十個、田や畑に供える家もある(浅原)。供え餅は家
の中の神棚・仏壇・米俵などにも供える。(長尾根)ダンゴを柤に山盛
りにして、床の間のオシラ様に供え、初午と同様に祭る家もある。(下

神梅)。「麦蒔きは十日夜までにしておけ、十日種はおろすものではな
い。」といわれ、取り入れ・蒔き付けの目途になっている。

麦蒔きが終ると、イヌコロ餅をついて、畑の真中に供えてマクラブ
サゲにした所もあり(深沢)、十日夜が収穫感謝の祭りだけでなく、麦
作とも深い関連を持つことを示している。

十二月八日は正月のコト始メだといひ、木の葉を入れる大籠を庭に
伏せて、ヒイラギの枝をさし、ダイマナク除けにする(塩原)。籠の目
によって魔除けを祈るもので、ふつうはメカイを用いる所が多かった。
以上、気づいたことの中から、この地域の特徴を示すようなものを、
いくつかり上げてみた。

各項目の記述については、北部の山村地域から南部の平坦地域の方
へ順に並べて、地域の変化を比べて見る便を考慮した。

(関口正巳)

一 月

旧正月 明治四十年頃、旧暦から新暦に変わった。旧正月だった頃
の方が雪もたくさん降って正月らしかった。(塩原)

正月様 正月様は卯の日の卯の刻に帰る。(塩原)

年男 その家の主人公(総領)がなる。若水を三が日汲んで来て飯
を炊いたりする。(塩原)

正月中のお神のことをいっさいとりしきる男性のことをいう。例え
ば、元旦には、若水を汲み、神に供えることからおろすまでする。(下
桐原)

成人に達した男子で、たいていは、その家の大将である。成人した
息子があれば、それがかわる。正月のおカミのこといっさいや、節分
のときには豆まきをする。(上桐原)

若水 たきものをするのに、主人が早くおきて、ごはんの中に若水

を入れた。煮物をするのにも入れてたく。(神梅)
若水をくむのを初くみといって、年男の仕事である。神棚にあげたり、ゾウ煮用の水としてつかう。また湯をわかす。神棚に供えるのはすべて年男の役目で、三元日はやった。

正月に最初に使用する火は、豆ガラを燃す。(小平)

朝湯 各戸毎にたて、年男から順に入った。特に一族などで順に朝湯をたてる風習はなかった。(高津戸)

三方日に、朝湯はたてるが、イツケうちでの、あるいは、近所同志での、朝湯のもらいっこの風習はない。(下桐原)

初詣で 元旦に鎮守様である八幡神社に詣でる。(塩原)

初詣では、午前中にすます。昔は、とうのくぼ稲荷や、八幡様に集まったので、特別な年始まわりはいらなかった。(上桐原)

元旦の朝には、先ず屋敷稲荷にお参りする。そのあと、近くの神社に、初詣です。どこに参るかは、その家でまちまちである。八の宮には、戦時中には、よく集まったが、現在は、その風習はない。(下桐原)

初もうでは一升ますに米を入れて、地元の神社に行った。元日の朝。(神梅)

正月の一日、元山城の跡に祀られた要害山頂の神社におまいりする。要害神社といい、高津戸部落の鎮守である。はじめ、自音寺七世(現在二十二世)の住職高海和尚が、四国の金比羅様を勧請して来て要害山頂の天主閣跡に祀った。明治になって赤城様を合祀して、現在の要害神社となった。高津戸から六キロほどはなれたところにある貴船さまに初詣りするものもいる。(高津戸)

くわ入れ 二日には、くわをもつて畑にでて、かたちだけの、くわ入れをする。畑仕事のはじめである。(下桐原)

二日は仕事始めで、初夢の日である。(小平)

書き初め 二日に書いて、神棚や床の間にさげた。親戚のひとや近

所のひとがお客に来たとき、ほめてもらって、お年玉でももらう。これを燃すということはなかった。(下桐原)

書き初めは二日にやる。(実際は暮にやっておく。)懇意のところ配って、小遣いを貰う。書き初めは十五日正月まで飾っておく。(小平)

初夢 二日には、初夢をみるため、紙で宝船をおって、枕の下においてやすむ。どんな夢でもぼつとねがえりをする、忘れてしまうのはきたいだ。(上桐原)

元三大師 正月三日、せいおんじの元三大師には、昔は、桐生や尾から臨時列車も出て、そのにぎわいは、前橋の青柳大師に匹敵するものがあつた。寺では、当日参詣する講中に雑煮を用意した。このためについたもちは、二俵から二俵半にもなる。講中の宿をした藤生家な



貴船神社の初詣で風景 (塩原)
(長沢利明 撮影)

ども、早朝から来るひとには、朝食を用意するなど来客の接待でたいへんだつた。参道や境内には、「ちよいちよい買いな、何でも買いな。」とはやしながら、景気をつける店もあつた。これをちよいちよい店という。(下桐原)

三日は元三大師で、正福寺(天台宗)でゴマをたいて祭る。そのゴマにあたりと厄除けになる。皆がお参りをして、そこで飲み食いをする。ネギヌタ、キンピラなどの精進料理である。(小平)

年始回り 組合中回る。誰が一番早かったとか言った。今のよう
にせわしく回らず、上がりこんで一杯呑んでくる。泊まりこんだりする
こともあった。せいぜい一日五、六軒回る。(塩原)

年始は元旦に要害神社(赤城神社)と琴平様を合祀した神社)に集ま
ったが、今は公民館で初顔合せをし、このときは会費もとって酒も出
るので各戸から一名出て年始をした。(高津戸)

昔はご年始回りをしたが、今は村中が、一か所に集まって、新年会を
する。会費三百円で酒を飲む。(深沢)

日は定まらない。いつでも、自分の都合のよい日にいく。女の年始
は、三月のおひな様まで(四月三日)いいという。(上桐原)

年始の品物は茶や下駄が多い。正月にはたいていもちまわりである。
(上神梅)

寺への年始 元旦の朝、その家の主人が一番はじめに、お金を包ん
で(今は五百円)年始に行く。これを寺しげんという。このあと先達
さんのところへ年始に行く。(浅原)

普通の年始回りは四日をいやがる。寺の始日である。(小平)

寺への年始日は、正月一日である。ぜんしやう寺へは、壇家では、
金と米を年始としこのとき、藤生家では、「お年玉」と書く。せいおん
寺の壇家は、「御年賀」と書く。(下桐原)

寺の年始は四日に行く。(塩原)

四日に坊さんが各戸を年始回りする。お供を連れて来て、シャモジ
を配ったが、今は回り切れない。(深沢)

一般には「四日のご年始はするものでない」という。(深沢)

四日は坊さんが村中を回る。鬼のような絵のあるお札を配る。お札
は門口にはっておく。(小平)

四日は寺の年始で世音寺から大師様の御姿を書いた御符としやもじ
を配り歩いた。御符はトボグチに貼る。四日の夜には頂いたしやもじ
を使って家の人たちの御飯をよそる。すると一年間病気をしないで無

事にすぐせるといふ。御符は風かなにかで吹きとばされてなくなつて
しまつと神様が災難をしようといつてくれたと考えた。(桐原)

四日の日に和尚さんがまわってきた。このときお札とシャモジをく
れた。ときには高野山の箸や暦をくれていった。(高津戸)

壇家からの年始に対する、寺からの年始は、四日で、一日に百軒余
もまわるので、何といつても、はやいのが特徴である。あがる家は、
前もって決めておき、たいていは、玄関先であいさつをして、そのま
ま帰る。(下桐原)

四日は、寺の年始の日である。三カ日は、坊さんの方で神様に遠慮
しているのだらう。四日は、坊主の年始だから、一般の家庭はご年始
に行くなという。善慶寺は、おしやもじと暦に藤森稲荷というお札を
もつてくる。こちらは、ご年頭として、お金を包む。(上桐原)

寺の年始日である。なべかりともいふ。ヨメは、実家に帰って、泊つ
てきてよい。(上桐原)

五日正月 「ごかにち」といふが、特別には何もしない。(上桐原)
七草がゆの七草を、野にとりに行く日である。(下桐原)

五日から、年始受け、年始まわりが始まる。一月いっばいくらいだ
った。名入れのてぬぐいと塩釜(お菓子の名)を持っていった。(神梅)

門松 カイドの入り口の両はじに、松と竹を立てる。門のそばでも
よかった。それを門松といった。

また、オクザシキ(テエ)の前の庭にお松を三カ所たてる。横にな
らべて、松だけを立てる。それは、オマツ、メマツ、コマツの三本で
ある。

門松やお松を立てるのに十二月二十八日から三十日までのあいだ、
一夜かざりはするものではないという。

お松は一月十四日のあさ、さしかえる。そのあとにはまゆ玉をさし
た。(浅原)

元旦は門松にごはんを少しずつあげた。(神梅)



イナリ様に飾られた正月のシメ縄 (小平)
(長沢利明 撮影)



門 松 (狸原)
(板橋春夫 撮影)



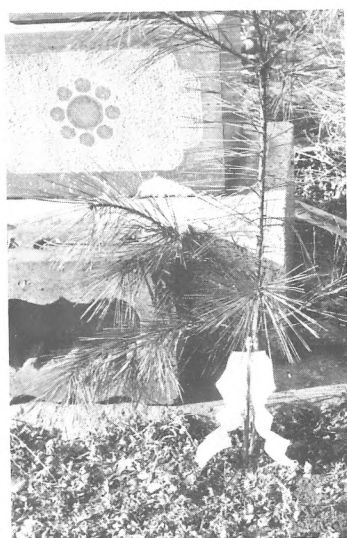
元旦には庚申様にも幣束をあ
げる (深沢) (長沢利明 撮影)



門 松 (塩原)
(長沢利明 撮影)



三方辻に幣束をたてカマドの灰の包みを置
く。(塩原) (長沢利明 撮影)



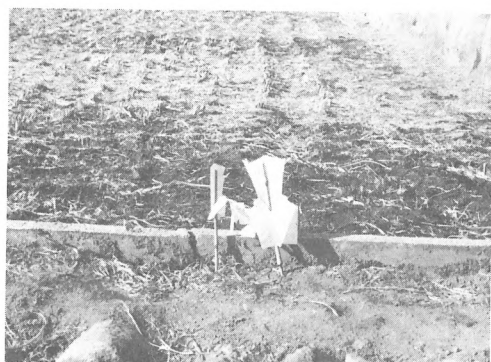
墓地に立てられたお松 (塩原)
(長沢利明 撮影)



三方辺に立てられた幣束 (塩原)
(長沢利明 撮影)



畑に立てられた幣束 (塩原)
(長沢利明 撮影)



水田に立てられた幣束 (塩原)
(長沢利明 撮影)

松飾りはナ

ラの木クイ
をうって、そ
れに竹と松を
つける。松飾
りは、門ジメ
といって、ク
ヌギにシメを
はったもの
下に作る。門
ジメは一年中、

そのまましておく。ただし葬式の時にはとる。(小平)
ゴボウとサトイモとニシンのオスイモノを朝お松にあげる。(小平)
稲荷さまのしめなわはハッチョウじめといい、なわを三ツ折りにし



貴船神社境内の小祠に供えられた幣束、オヒ
ネリ、お守り、供え餅等。一月一日 (塩原)
(長沢利明 撮影)

て作る。これに
御幣束をつける。
(神梅)

正月棚 (十二
月三十日に作
る) ナラカク
ヌギの木を割っ
て板にし、これ
を棚に作って天
井から吊るす。
この棚に幣束を
一本立てて歳神
様をまつ。正
月棚はアキノカ
タに飾るものだ。
(塩原)

正月棚にカキ・コンブ・炭などを供える。(深沢)

正月棚は、部屋の角に飾るので三角になっている。その位置は、本
来はその年の恵方で毎年変わるが、最近は一定して、上の棚に飾る。
棚には、穴が二つあいていて、はめこみ式の鳥居を立て、これに、
鳥居のかたちをしたしめ縄を七、五、三にして結わえつける。しめ縄
には、板昆布の中に、住み住みよいといって、すみ、まめにといい、
大豆の枝とお頭つきのごまめを二本入れる。やぶこうじを両方にま
めて結わえて、その台として、ゆずり葉と半紙を折ったものを用意し、
干し柿を三つ、その下にみかんをさしこんでつける。正月棚は、松が
とれても、飾っておいて、二十日正月が終えてから外す。(下桐原)
お飾りは、オシメの外、ミカン、コブ、豆のカラ、ゴマメ・スミ(木
炭)、カキ、ユズリハ、手拭などである。(小平)

家例正月の料理（一日〜三日） 小倉家では、三が日、五日、十一日、小正月、二十日正月、初午には里芋と大根の吸い物を必ず作り、

雑煮を食べる。（塩沢）

三が日の朝食は家によってきまりがある。雑煮エンギ、ソバエンギ、ウドンエンギなどの家では各々、雑煮、ソバ、ウドンを食べる。大晦日に赤飯を炊いておいて三が日に食べる家もある。また、三が日のうちにトロを食べると風邪をひかぬという言い伝えのある家もあり、正月の餅をつかない、二十三夜餅以降に餅をつかない、という家もある。（塩原）

正月にはソバ家例・赤飯家例・餅家例などと、家によって決まった食事を作った。三元日の間は守った。（深沢）

正月三ヶ日の食事は（話者の家では）モチは食べない。サトイモやごはんを食べるが、おわんを、とり変えて使う。

昔の苦勞を忘れないためといい、部落に、何軒かある。他に、ウドンが食べられない家がある。これは、ウドンを持つ板、めん板を、歳神様の神棚として使ってしまったため。（神梅）

正月の食事のはしは、白木のはしを、いずくの木で作って、使った。木は山から年内のうちに切ってきて、寒水にひやしておいた。そうすると皮がよくむける。それをはしの長さに切って、はしを作った。（神梅）

新井イッケでは三が日の朝、トガス飯（とがない飯をたいしたもの）を食べる。

籾木イッケでは暮の三十日がソバ、大晦日は飯、三が日の朝は芋吸物（芋・大根の汁）で、大晦日に残した冷や飯を食べる。「ムカデにかじられない」という。三が日に餅を食うとテキモンができるという、四日にならないと餅が食べられない。（下神梅）

星野イッケは赤飯をふかす。餅は少ない。（下神梅）
反町イッケは三が日はメンバ板が出せない。大晦日にうどんをうつ

て置く。（下神梅）

家例として、大晦日に炊いたアズキ飯を三元日の毎朝あたためて食べる家がある。（小平）

オゾウ煮をミソ汁にする家がある。前日からミソでサトイモをどろどろに煮ておいて、それに餅を入れる。オゾウ煮は、三元日に、十一日、十四日、二十日にする。二十日のゾウ煮は、オソナエのカチカチの餅を使用した。（小平）

今泉氏は三元日はお雑煮で四日がそば、浅原の宮田氏は正月に餅をつかない。また二渡氏も餅をつかないで近所の人が持参していった。

このときお返しにオナメをくれた。（高津戸）
竹ぼうき 竹ぼうきを作る時、ふつうの年は竹の枝を十二本、うるう年は十三本使って、もとを締めた。（下神梅）

お年玉 お年玉をくれることはなかったが、年内にかきぞめを書き、年始まわりについていってそれを出すと、二銭ほどくれた。家には、

かけじく、かきぞめなどが、かけならべてあった。（神梅）
オタナサガシ（四日） 四日ガユは三が日の供物をさげて、あげ直す。供え餅をおろす。（十一日まで置く家もある。）（塩原）

三が日に供えた物を下げて、一緒におカユにして食べる。棚サガシという。（深沢）

正月四日にすべてのおそなえをさげて、煮つかえしてあげた。（上神梅）

三が日に供えたものをオジヤにして食べる。（下神梅）
四日の棚ざらい 四日には、三カ日の間、お神にあげたものを、お

じゃにして食べる。（上桐原）
お棚さがしは四日で、オゾウ煮の具をゾウスイにしてたべた。（小平）

年神様 豆から、昆布、炭をみずひきでしぼりつけて串柿とみかんをつけて年神様に飾った。（上神梅）

山入り・十二様（六日） 正月六日、十二様にオカシラツキ、オサ

ゴ、塩、餅、竹で作ったオミキスズ二本をもって行って供え、帰りに

山からカレツコ（枯枝）一把拾ってきてお湯を沸かし、茶を入れ、家の中の全部の神様にあげる。（浅原）

六日山入をした、この日までは山へ入らなかった。

十二様へ、もち、菓子、おかしらつき、おさご、塩をもって行って、清めてから、山へ入った。おみきすずを二本つくって、酒を入れてもって行った。帰りに、山の木（かれつこ）をひろってきて、家でお湯をわかして、お茶をいれて、うちの中の神様（神棚にまつてある神様）にあげる。

なお、山の神様は、酒がすぎだという。（浅原）

主人が山入りして、十二様に御幣束を持っていく。ごまめの頭つきとおさごに米を入れて持って行き、そなえてから仕事をした。小正月に使う木、みずぶさの木を切ってくる。マユ玉をさす木。（神梅）

山入りは正月六日、正月の仕事始めに山へ、オサゴ（散米）とカケオ（掛魚）を持って、ボク伐りに行く。（下神梅）

六日は、山はじめ、山入りの日で、山へ入るひとがおしめなどを持って、神を祀ってくる。（下桐原）

六日には山入りといって、小正月の飾り物の材料集めをする。ボク（白ハギ、水ブサ、ノデンボウ（ヌルデ）を切ってくる。（小平）

六日は、寒の入りである。この日は、また、消防の出初め式の日でもある。（上桐原）

六日下口・トロ口飯（六日） この日はトロ口（山芋）を食べる。（塩原）

六日ドロといって、夕食の時、トロロ汁を御飯にかけて食べる。夏負けしないし、病気になるという。（小平）

正月六日には六日ドロといって、トロロの御飯をした。トロロは消化によいので食べた。（上神梅）

七日爪 正月の七日に七日爪とおけば、あとはいつともいい。（塩原）

七草・七草ガユ（七日） 本式には春の七草全部を入れて作る。春の七草とは、セリ、ナズナ、ニンジン、ゴボウ、ホトケノザ、スズナ、スズシロ（大根葉）である。普通はナズナだけ入れる。ナズナは一つで七草という。（塩原）

七草ガユは七色の草を入れてカユを作る。七草は節供の一つ。（下神梅）

セリタタキは主人公が歳神棚の前で俎を叩く。包丁を両手に持って太鼓を叩くように刻む。菜切包丁ではなく、うどん包丁を用いる。唱えごとは、「トウトノ鳥ト、ニホンノ鳥ガ、ノ橋ヲ渡ラヌウチニ、七草ナズナヲ」とか、「七草ナズナ、トウトノ鳥ガ、ワタラヌウチニ、ミズホクニノ」とか言う。（塩原）

正月五日にナズナ、にんじん、大根、ホウレンソウ、ミョウガの根、ホトケノザ、はこべの七つをとっておき年神様にあげておいた。それを七日の朝にとって七草粥をつくった。「七草ナズナ、唐土ノ鳥ガ日本ノ土地ニ渡ラヌ先ニストントン」と唱えながら刻む。（上神梅）

七草のおかゆを作る。

「七草ナズナのセリはたき。唐土の鳥が日本の国へわたらぬ先に、七草ナズナのセリはたき。」と言って、おかゆの中に七草を入れて食べた。このいわれは、唐の鳥が、昔鳥取県にきた。そして悪い病気がはやっただ。それが飛んできて、川上で羽をはいたんで、非常に病人が出た。そこで七草のいろいろな草を食べたら病気が直ったというので、それを言ったものだ。そのまな板は、柳の木だったので、お勝手の台所のまな板は柳にしろという。（神梅）

いまでもやっている。セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロこれぞ七草といふ全部そろわぬときは、「ナナクサ」で代用する。これ一種で、その役を果す。どろくさい、ギザギザのあるものである。他のものが欠けても「ナナクサ」は必ずいれる。七草は、前日の六日の寒の入りに、野にとりに行く。七日の朝になっ

て、すぐ仕度できる(きざむ)ように、前の晩、ニンジンやゴボウとともに、洗って用意しておく。

春の七草は、セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロをいう。五日に、野に七草をとりに行き、六日の夜には、もうすっかり準備をととのえておく。七日には、はやくから、主婦が起きて、「トウドノトリが、ニホンノシマニ、ワタラヌチニ、ストトントントン」と、七草ナズナのセリたたきをする。(下桐原)

七草ガユは、セリ、ナズナ、大根、人参、ゴボウ、コブ、カキ、フキノトウなどを入れる。カユには塩気を入れない。

厄年の人のいる場合には、セリを家の中に入れてはいけない。一年中家に入れない。

「唐土の鳥が日本の土地に渡らぬ先に、七草ナズナのセリたたき。」と三回ぐらいやる。マナイタをスリコギをたたいた。年男がたたく。カユとどうしても食えという。ふいて食べてもよい。(小平)

「ナナクサナズナ、トウドノトリが、ニホンノハシヲ、ワタラヌチニ、ストントン」といって、キウリ板をたたいて音させながら、きざむ。七草がゆは疫病を防ぐという。(上桐原)

初市(七日) この日は、祇園祭りの当番町が神輿をかついで、一丁目から六丁目までまわる。夜の明けないうちに八坂神社からかつぎ出し、大通りを一丁目から六丁目までかついでまわした後、当番町内に飾っておく。七丁目は、ワリダシと言ひ、戦前までは町内の公の行事には仲間に入れなかった。戦後祭事にも参加するようになった。(大間々)

初市は、大間々は二・七、桐生は三・八の市で、大間々の一丁目と六丁目に市がたった。(高津戸)

クワダテ(十一日)

サクタテは暮の三十日、門松を立てる日に、作神様(畑の神)にも門松、幣束を立てる。正月十一日まで畑に入らないが、この日御幣、お

松におサゴ、オカシラツキを供える。そして鍬で農作物を作る真似を、家の主人がやる。小平ではミノ、カサつけて、裸足になり、前もってきれいに洗っておいた鍬でサクを切る真似をするという。(浅原)

この日、おかしらつき、おさごをもってはたけへ行き、暮(十二月三十日)にたてたお松のところへそなえものをし、その近くのところを一さくでもさくをきってきた。これは、その家の主人がいつてやった。

(小平のかたい家では、みの笠をつけて、はだして、鍬をあらって、はたけへ行つてさくたてをしたという。)

その日までは、はたけへ入らなかった。(浅原)

畑に行つて二尺くらいサクを切る。仕事始めである。(塩原)

クワダテは一月十一日、畑にお松を立てて、サク切りを三サクして、米一升・頭付きの魚を供える。(深沢)

正月十一日はクワダテで、箕の中に一升ますを置き米を入れる。その米を少しとって半紙にのせ、頭付きのゴマメ二匹ものせて、田に行つてあげてくる。鍬でサクを三ヶ所くらいきる。今でもやっている。(上神梅)

十一日、畑でさくを切る。米を一升持つていきそなえ、持つて帰つて床の間にかざる。この米を十五日のおかゆにする。白かゆの家、あずきがゆの家とある。(神梅)

十一日はクワ立で、年神様にあげたものを持つていって、サクを切る真似をする。オサゴも持つていく。主人公の仕事である。

十一日はクラ開きともいう。(小平)

正月十一日は十一月ともいう。お松を畑に立て、煮しめを皿に盛って上げる。畑にサクを三サク切る。(下神梅)

蔵開キ(十一日) 蔵のある家は蔵を開く。(浅原、塩原)

十一日に鏡餅を、ぞうにして食べた。蔵を開いた。(神梅)

倉に入っているコメ、ムギなど五穀を閉じてあけるといふ。衣類に

ムシがつかぬように倉をひらく日でもある。(上桐原)

倉開きは正月八日、何かしたか不明。(下神梅)

十二様・山の神 (旧二月十二日または一月十二日) 山仕事をしている人は、旧二月十二日に、黒保根村桑ノ代の十二様へお詣りに行く。(塩沢)

十二日は十二様に詣る。この日は木を切ったりしてはならない。十二様におこられる怪我をする。この日は十二様が木の数を数える日であるという。(塩原)

十二日は十二様の日で、その日は山に入らない。十時前には、木を切るなどという。(塩原)

十二様は山の神で、山に十一山神社の石宮がある。山へ入る人が祭る。正月のお松迎えの時、お散米・オミキスズ・カケオ(掛魚)を持って行き、拜んでから、松を取る。オミキスズは竹二本を切つて、麻でしぼり酒を入れて供える。カケオはゴマメの魚を使う。(下神梅)

十二日は山仕事をする人が集つて祭り、昔はバンダイモチもついた。(高津戸)

十二日は、山仕事をする人たちの初十二様である。桐原には、山仕事専門のひとはいない。(下桐原)

十二日は山の神様の日で、山仕事ができない。十二講をやった。山にボンデンをたて、バンダイ餅をついて食べる。炭火をおこして、砂糖入りのミソを煮て、それを餅につけて食べる。サンシヨの菜をミソに入れるところもある。(小平)

十二日は十二様の日であるから、山に入つてはいけない。山仕事をさける。(小平)

小正月

ボク迎エ 十四日の朝、家の主人が自分の山へボク迎えに行く。根っこ(とこ)いでもつてくる。小正月が終わるとそれをもとの所に植えてくる。(狸原)

正月飾りを取る日。玄関などの松飾りはずして稲荷様のそばにでも捨てる。門松の杭だけは残しておいて十五日の朝、カユを供える。

(塩原)

松は、十四日の朝さげ、カキ花、まゆ玉ととりかえっこする。ドンド焼きはしない。(上桐原)

十四日はハナカキで普通二段のもの作るが、大神宮様には、十六段のものを作つた。ニワトコの木で作る。(小平)

一月十四日に正月のかざり、しめなわをさげる。しめなわは、ほぐして、ナエバといって、苗をしぼるのに使う。どんど焼きはしない。

神さまのものだから、むだにしないという。(神梅)

正月十四日に針を持つと蚕の口を縫うといつてお針をしない。(上神梅)

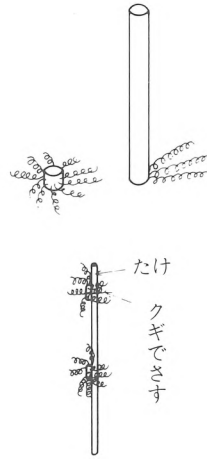
モノヅクリ ヌルデ(ノデンボともいい、護摩を焚く木)を削つて、ハラミバシヤカユカキ棒・木刀などを作る。木刀は長さ二・五尺ほどで、つばの所にハナをかいたのを二本作る。座敷のボクの所へ供えて置く。(上神梅)

ヌルデンボウ刀といって、カユカキ棒と同種の木で作つた刀を、マユ玉をさした木にたてかけておいた。刀の柄の部分は皮を残しておいてバツテン印をつけた。(小平)

ニワトコの木を小正月の三日前にとつてきて皮をむいて蔭干ししておいた。ニワトコの木をハナカキナタで削る。十六の段をつける。(二軒在家)

大門から小判やハナを売りに来た。ハナはニワトコやノーデンボで作る。小判は四日のオタナサガシのとき下げるが、暮の三十日墓に立てた門松は正月十四日にハナをとりかえる。このハナは家の門外の門松をあげた所には全部あげる。そして二十日の風にあわせるなといつて十九日中にさげる。門松は十四日にさげるが年神様と大神宮様のオマツは二十日まで置く。そして正月のオタナイタは二十日朝にその

まま屋根にあげる。二十日正月で正月は終りである。(浅原)
 小正月を蚕正月ともいう。十六段のハナを初めすべてのハナを集めておいて折って養蚕ザルの中に入れ、蚕室の隅におき春蚕のハシリズーを五・六匹つける。蚕は繭を作りやすいのである。繭をかけたあとハナは畑で燃す。蚕の足は十六本あり、蚕神を十六善神という。(浅原)



ハナ、アーボヘーボは一月十五日に、ニワトコの木をハナカキナタで削ってハナを作る。アーボヘーボは、竹にハナを幾つもさしたもので、マユ玉もさしてつける。これはコヤシ場に立てておく。

(塩原)
 ニワトコをむいて、二段バナをかき、屋敷稻荷様など、松飾りした所に飾る。

ニワトコの長い枝一本に十六段のハナをかいて飾ったり、ツボミを飾る家もある。

大間々にハナの市がたつて、小正月のハナやマユ玉を買った。(上神梅)

正月十四日、ハナをかいて、おシメと一緒に、白や墓地にまで上げた。

ヌルデの棒を短く伐って、



小正月のジュウロクギ (狸原) (板橋春夫 撮影)

皮をむいたのと、皮をむかないのと、十五個くらい、ハナをかいて所の枝にさして、それを堆肥場に立てた。名は不明。(下神梅)
 一月十五日にハナをかざる。ハナは、ニワトコの木を皮をむいて作る。神棚にそなえる。(神梅)

ノーデンボウで家人数だけのハラミバシを作り、十五日のカユを一ハシでも食べる。カユを食べる時に、吹いて食べると田植えに風が吹くといって、禁じられる。(下神梅)

小正月にノーデンボウの皮をむいて、四つ割りにしてハラミバシをつくる。歯が痛い時に藁で十文字にしばってオカマサマにあげると歯痛がなおる。(上桐原)

山へ行って、ノーデンボウの木を切ってくる。割って、ハラミバシを(どちらが外といことはない)作り、十五日のおかゆを食べる。山くわといハラミバシう、山の木のかぶつを毎年こしらえておいて、それをざしきにとつてあげてきれいにさす。



(神梅)

ノーデンボウの木(ウルシに似る)でカユカキ棒とハラミバシを作り、マユ玉をはさんでカユをかき回す。カユカキ棒は苗代を作った時に刺しておく。(塩原)

オシラマツリ 一月十三日の晩、まゆ玉をこしらえた。

かいこには足が十六本あるという。前足が六本、腹に六本、尻に二本ある。そのためにかいこの足になぞらえて十六本まい玉をつくるのだという。特別大きいまゆ玉をつくって、やまつくわにさした。(浅原)

いい繭ができるようにと、正月十四日の朝、家中で米の粉で繭玉をこしらえた。この繭玉をジュウロクデンジといった。ジュウロクデンジはハギにさして、ハナと一緒に神棚に飾った。(狸原)

マユダマ 粉は三升位なければ足りなかった。十六マイダマが主で、エビス様、大黒様、作神様等に供える。(浅原)

ハナを作るとき一本は必ず十六段のを作る。またマユダマを作ると

き十六マユダマといって特に大きいのを作り、山桑にさす。十六マユダマというのは蚕の足の数によるのである。(浅原)

マユ玉を十五日にザシキのまん中に飾る。ボクの木(ヤマクワ)を二本庭に植えておき、小正月の毎に交替で根ごと掘り起こしてきて飾る。終わるとまたいけておく。ナラ、シラハギの木も用いる。枝にマユ玉をたくさんつけて飾るが、コバンという餅米で作った小伴型のものもつける。五升くらい米をひいてマユ玉を作った。また、子供のおもちゃにマユ玉をニワトリの型などに作ったりもした。(塩原)

十六メエダマは十六デンヂといった。ボクにさしてかざる。十四日はカザリつけという。(小平)

大きいマユ玉を十六個作って木につけ、オシラ様にあげる。(塩原)
山桑のかぶつを二つ取ってきておき、蚕室にかざる。マユダマを十三日の晩につくり、十四日の朝ふかして飾る。大きいマユダマを十六個つくって小さいマユダマと一緒にミズブサの木にさした。ミズブサは火災よけの木だという。ミズブサは梁のまん中につるした。(二軒在家)

山桑をつかい、十三日の晩に米の粉で繭の形にこしらえて、十四日にふかして飾る。一緒に小判もさした。十四日に正月のお飾りをとってから繭玉をあげた。ザシキに飾った。(上神梅)

正月十四日に卵大の十六個の繭玉をつくり、小さい繭玉と混ぜて、一升マスに入れて、年神様に飾った。カマガミサマには小さい繭玉を三十六個、ナラの木にさしてあげる。(上神梅)

マユ玉は白二個、黒三十四個、計三十六個のマユ玉をミズブサの枝にさして、カマ神の柱(水がめの傍)にしぼり付けて供える。

座敷のマユ玉は山クワかナラのボク(木)にさして飾った。
シラハギの枝にマユ玉を十一・十二個さしたものを八組も作って、大神宮・年神・エビス・仏壇・床の間・便所・屋敷稲荷・水神様などに供える。マユ玉はマユ形と丸形と雞の形なども作った。(上神梅)

十六マユ玉は米の粉一升で十六個の大きいマユ玉を作り、カキの枝にさして、年神様に供える。(上神梅)

一月十四日にマユ玉をミズブサの枝にさして、十二様に供える。早く下げられると縁起がいい、いつまでも下がらないとよくないという。

(下神梅)

十四日にマユ玉を作り、ボクにさして飾り、蚕を祝った。マユ玉をひょうたん形にして、紐を付けて吊るした。(下神梅)

山クワのボクにマユ玉をさして、座敷に飾り、箕に野菜・果物などを盛って供える。オシラ様とはいわない。(下神梅)

正月十三日を、まるめ正月という。まゆ玉を夜まるめて、十四日の朝ゆでる。養蚕農家では、大きな十六まゆ玉をつくる。ナラの根物、ヤマツクワ、はらみ箸もつくる。十六団子、十六でんじという。三方荒神には大きな三つ丸いものをそなえる。座敷の真中にござをしいて、桑のボク(かぶつ、根のある)をおいて、それにつるすうちもあるし、つるさない家もある。いまは、もつたないからかきとりといって縁起がいいから、柿のかぶつを利用する。洗った水を家のまわりにまく。できものが家に入らない。ぜいたくなひとは小判をつけた。小判を飾らない縁起のひとつもある。

大神宮の歳神様には、特別にウメのボクをとってきて、まゆ玉をさす。(上桐原)

まるめ年越しといって十三日は、その夜、小正月のまゆ玉をまるめるので、まるめ年越しという。(下桐原)

十三日にマユ玉を作り、十四日の朝ふかす。年神様の棚作りであまつた木や門松の回りをおさえた木でマユ玉をふかした。

マユ玉は山クワの木にさすのが一般的である。家によっては、年神様にだけは梅の木に十二個さして供えたり、その他の神棚にはハキにさしてあげたりする。その家では、水ブサの木の大きな杖を使う。門松の先を残しておき、そこにはY字型のもの供える。

マユ玉をゆでた水をとぎれさせずに家の回りにまくと、蛇が入ってこないという。(小平)

まゆ玉正月といって小正月には、松飾りをとった後に、ニワトコで花(かき花)を作つてさす。

まゆ玉木には、最近では、シラハギを用いる。昔は、かぶつごとのものをとつてきて、まゆ玉木とし、座敷の真ん中に飾つた。まゆ玉は、米の粉でつくり、ふつうのものほかに、特大を十六つくつたが、何故十六かは詳かにしない。まゆがあるようにと、祈りをこめてつくるのだが、真ん中がくびれているので、なかなかむずかしい。粉は、前の年にてたくず米を、自分の家でひく。大きな家では、一斗五升もつくるが、子どもが多いと、二升くらいは、作っているうちに食べてしまふ。ほかに、印刷したかぶの絵や、米の粉でできた色と味のついた小判や大判を市で買つてきて飾る。(下桐原)

小正月の飾りは、十三日の晩に繭玉を作り、桑の木にさした。エゴ、ナラなどにもさした。繭玉の外に餅の紐もつくつた短ざくとしてかけた。

削り花はニワトコの木でつくり、十一日につくつた。十六段菊、ハラミバシ、カユカキ棒なども作つた。(高津戸)

オカマサマ 小正月にまゆ玉を作つて山桑の木にさして供える。この神様は三十二人の子どもがいたといわれ、「三十二上げろ」といわれた。山桑家の近くに植えておいて用いる。三本置いて三年に一回ずつ使用する。植木鉢のまま供える。(塩沢)

オカマサマには三十六個以上マユ玉をあげる。オカマサマには三十二人の子供がいて、親の分を含め、それ以上の数を供える。(塩沢)

稲刈りの始めに、稲を一株抜いてきてオカマ様の所に下げた。

小正月のマユ玉を三十三個—三十六個以上ミズブサの三段ついた枝にさして、オカマ様の柱に掛けたり吊るしたりして供えた。十六日に下げて煮て、いくらか取つて置き、二十日正月に煮てお神に供えた。

モロコシの粉や黒いコゴメのダンゴもオカマ様に供えた。(下神梅)

若餅 正月十四日に新井イッケで餅をついて供えたり、近所の餅縁起でない家に上げた。(下神梅)

穴原一家と蘭田一家は正月餅をつかない。小正月の十三日についた。大正月には、餅は原則としては食べないが、貰つて食べるのはよい。

穴原一家では十三日に、おんかはれて餅をつく。その時に始めてオソナエをとり、諸々の神様に供える。狸原では、遠藤一家と星野一家では大正月の餅はつけない。(小平)

小正月のもちを昔は、大正月と同じくらいついた。少くとも一人一うす(三升うす)位はついた。正月といつても、他にご馳走があるわけではなかったから、たくさんついたのである。

現在は、つかぬ家の方が多い。(下桐原)

オミタマサマ 正月十三日にむすびを十二個こしらえ、ひとつひとつにハラミバシをつつとす。年神棚の隣りにこしらえた。十八日にさげて、あつため粥をして食べる。風邪をひかないし、金にこまらないという。(上桐原)

正月十四日に二合五勺の白い御飯をたいおむすびを十二個つくつた。ニワトコの木でこしらえたハラミバシをひとつひとつのむすびにさし箕に入れてオミタマサマにそなえた。七八年前までやっていた。

(上神梅)

年神棚を作つて、年神の隣にオミタマ様を並べ、年神と同じに進ぜた。

重箱にご飯を十二個握つて、ハラミバシを十二本立てて、オミタマ様に供えた。大神宮の脇のお札はりの前に供えたが、重箱を田人ほにたとえて、稲株の形だという。うるう年には十三本立てた。(下神梅)

道祖神 ドンド焼きはしない。カド様は個人ごとに燃した。青面金剛の石碑は建つが、祭りはしない。(深沢)

ドンド焼きはなし。ただ、道陸神はある。ドウロク神淵という所に

ある。(小平)

どんどん焼き、鳥追い 小正月に、どんどん焼きや鳥追いの風習はない。(下桐原)

十五日ガユ 一月十五日の朝、あずきがゆをつくった。このあずきがゆを食べた茶碗、うつわなどを洗った水を、うちのまわりにまいた。こうすると、へび、ムカデが家に入らないようにということであった。

(長尾根)

十五日ガユをかき回すカユカキ棒はとつとおいで苗間の水口にさす。ハラミ箸もとつておき、田植への時の食事に使つた。

ハラミ箸には稲がよくはらむようにというのと子孫繁栄の意味がある。また、カユカキ棒で女の尻をたたくと子供ができるといわれている。

十五日ガユはふいて食べてはいけない。ふくと田植えに風が吹くという。

カユは普通のものとはアズキのものと、家によって違う。(小平)

小正月には小豆ガユを作る。このカユは吹いて食うものではない。

(風が吹くから)さまして食べる。小正月の餅をつく。(塩原)

コタネガユ 十五日ガユには、アワ・ヒエ・小豆など、小粒のものを入れる。カユカキ棒でかき回して煮る。ハラミバシを使って食べるが、ハラミバシはあとで、水田に立てて、穂バラミするように折る。(深沢)

正月十五日の朝は粟の粥を食べた。コガネで祝うという。(上神梅)

十五日カユはヌデンボウの木でカユカキ棒を2本作り、アズキガユをかき回す。米粒が多くはさまれば豊作だと占う。このカユが固ければ豊作だという。

カユカキ棒は半紙にくるんで神棚に上げて置き、あとで苗代の水口に二本立てる。

正月十四日は蚕の祝い、十五日は田の祝いだという。(下神梅)

女衆の年始 正月十五、十六日。(上神梅)

正月十五日に新婚夫婦は里に行く。(神梅)

嫁の正月 正月十五日で、餅に酒一升添えて嫁は里にお客にやった。

(高津戸)

成木責め(十五日) 柿の木の皮を鈍で剥いでカユをくれてやる。

(塩原)

ジオウサマ(十六日) 一月と盆の十六日の晩、しょうゆめしをつくって、仏様にあげる。これはジオウサマにあげるといった。ジオウサマがどういふ仏様かわからない。(長尾根)

ジオウサマには一月十六日醤油飯をあげる。醤油飯は仏様にだけあげるものといひ、盆の八月十六日の夕食にもあげる。(浅原)

まゆかき 十六日に、小正月に飾つたまゆ玉をおろすこと。おろしたまゆ玉は、焼いて食べたり、煮て食べたりする。相当硬いものも、寒水に冷しておく、やわらかくなる。(下桐原)

十六日はまゆかきで、小正月にあげたまゆ玉は、十六日にさげる。

さげたまゆ玉は、ほうろくで焼く。大神宮様のまゆ玉は、二十日正月にさげて、煮て食べる。(上桐原)

十六日はマユカキで、アズキのつぶのまんまのオシルコを作つた。(小平)

十七日はマユカキといって繭玉をさげる日である。繭玉木は軒下に集めておいて、初午に繭玉をこしらえる時にもやす。(狸原)

観音様・石山観音(十八日) 馬頭観音のまつり。馬小屋にしめなわをはった。石山(現在前橋市東大室町、旧勢多郡荒砥村)まで馬をつれていった。(神梅)

石山観音へ正月十八日に初嫁ゴがお参りした。馬持ちは馬を連れて参拝した。座布団を三、五枚重ねて、毛布で馬の背にしぼって飾りにして、新しい荷鞍を付けて引いたり、乗ったりして行った。(下神梅)

馬の正月は正月十八日で、この日は馬の敷藁を交換し、ふすまなども多く与えた。餅ものしはくれ、石山の観音様に馬をひいてお参りに

いった。(高津戸)

十八ガユ 十五日のカユを残して、十八日の朝食べる。(下神梅)

二十日正月(二十日) 一月二十日で正月が終るといふ。

二十日の朝、正月棚をそのまま屋根の上にほうりあげておいた。(浅原)

小正月に作ったマユ玉などを煮て食べる。神棚にも供える。(塩原)

二十日正月に桐生の西の宮へいった。これが正月の最後とし、年始に親類へ出かけるのもこの日でおわりにした。(高津戸)

エビス様とカイコ神様には正月のおそなえをさげないで、正月二十日に繭玉とハナを取りかえる。(狸原)

えびす講 あきんどのえびす様は、一月の二十日に帰ってくるという。

農家のえびす様は、旧十月二十日がえびすこうで、この日に帰ってくるという。そのために、農家では、盛大にえびす講をする。(浅原)

朝エビスといってエビス様を送り出す日。エビス大黒をまつり、米の飯を炊いて、鯛、サンマなどの頭つきの魚を焼いて供える。エビス様の膳は左膳である。家の主人がこれをおろして頂く。算盤、金、家計簿、帳簿などもエビス様に供える。身上が良くなったら山盛りにするといはる。ほんの少しだけ飯をあげる人もいふ。(塩原)

二十日には年神様の棚を片づける。またエビス講でもある。エビス様の旅立ちの日であるといわれている。夜お供え物をして、希望をのべる。お供え物は御飯、ケンチン汁、オカシラツキ、コブマキ、果物などである。

一升マスに財布を入れてあげておき、お供え物を幾らで買いますといはる。供え物は家族以外に食べさせるといふ。(小平)

二十日正月には朝エビスで、エビス様を棚からおろしてきて、御馳走をした。(上神梅)

正月二十日。店は朝えびすで、農家は、夜えびすという。(神梅)

二十日正月はエビス様を座敷に出して、机の上に祭り、一升ますに有り金を全部入れて供えたり、種銭を入れて置いたりする。春はエビス様が働きに出るので、お膳のご飯は少く盛り、頭付の魚を添えて供える。秋には働いて帰って来るので、ご飯をテッコ盛り上げて供える。とくにサンマの大きいのを、エビス講サンマといはる。

エビス様は南向きを謙うので、カネノテ(斜め北)に中央に向けるか、北向きにする。人通りが多い所がいいといはるので、お勝手に祭つたりする。(下神梅)

正月エビスはあきんどエビスと言はる。たいしたごちそうはしなかつた。床の間へかざり、「今年は、うんともうけさせてください」と願をかける。朝おまつりする。エビス棚は神棚と反対側の北向きの棚に安置してある。ふだん北向きにかざっておき、もうけさせてくれたら、エビス講の時に南向きの床の間にかざってやる。エビス様は、うんといいじめないと、もうけさせてくれないからである。(大間々)

二十日えびすは商人がまつる。一月のえびす様は、これから一年かせぎにいくわけで、食事もおそばか何かそまつなもので出て行く。そのえびす様を、みおくる日である。旅立つえびす様を、おーいえびすこういと呼んでやるのがこの日である。この日旅立ったえびす様は、旧の十月の二十日に帰ってくる。えびす様は貧乏で、大黒様は金持ちな神様である。(上桐原)

二十日正月には、モチはつかず、まゆ玉を煮て食べる。まゆかきのとときも、さげなかつた大神宮様の、ウメのボクにさしたマユ玉を、この日さげて煮る。(上桐原)

正月二十日は、一年で最初のえびす祭りである。えびす様にお頭つきをあげたり、畑でとれたものを供えれば、もうそれでご馳走だった。

他には、いもの煮ころがしやきんびらくらいだった。(下桐原)

愛宕精進(一月二十四日) 愛宕様祭りに日を合せて、米一升ずつ持ち寄って会食をして、三食食べる。下神梅には精進小屋があり、

火を清める行事だという。竹筒に酒を入れて、オサゴを持って愛宕様の石宮に供える。

お精進なので宿の女衆は外に出して、男衆がうどんぶちや、料理を作った。シンカンモリといって、大皿にニンジン・芋・コンニャク・ミカン・切りイカなど、五品を盛って、懐石膳に並べた。(深沢)

男衆が回り番の宿に集まって、米一升、たくあんなどを持ち寄り、愛宕大明神の掛軸に供えて祭る。火伏せの神。その席で一年の仕事をとりに決める。村の役、衛生委員・道路委員などを選ぶ。新年の初会合だった。(中神梅)

高岸の山頂に石宮もある。戦後、昭和二十七年ごろまでしていた。深沢では今もする。(中神梅)

下神梅では栃久保十二戸と下組二十戸と、2か所の宿で会食をする。茶碗・箸などの食器は倉に預けてあるのを使う。アマダ式のくじ引きをして、お金を出し合って茶菓子などを買ひ、オゴリをする。「神ヲカズケニ、己が食ウ」と悪口をいわれたが、昔の人は、寒中なのに沢の水や井戸水で、水ごりをとった。

入婿がお番衆(炊事係)をする。婿や長男が組に入る時は、酒一升持って仲間入りする。

朝たいたご飯を全部食べないと、「火ガ上ガラナイ」(全部片付かない)といい、鍋・釜を洗った水まで飲んでしまふ。「火ガ上ガル」と、女衆を入れて、夕食のご騒走を用意して、オゴリとなる。

新しい家ができる、とくに順番を抜いて宿にする。(下神梅)

シマイ正月(二十八日) オシリマクリとゆい一月二十八日に、子供達が人の着物の尻をまくって歩く。「オシリマクリに御用心」などと言った。(塩原)

しまい正月は二十八日、遊ぶだけ。(下神梅)

正月二十八日で、この日は不動様の日、しまい正月ともいったが、たいてい二十日までで正月のことは終えた。(高津戸)

一月二十八日のことを、しまい正月とはいわない。(上桐原)
初絵売り 宝舟、七福神など目出度い絵をもって売りにきた。主に香具師の人などが売りにきた。(高津戸)
門付 佐野から獅子舞、三河から漫才がよく来た。ササラなども来た。(塩原)

畑入り 新しい年に、はじめて畑にでることを、畑入りというのが特定の日はない。(上桐原)

納戸の掃除 納戸は三之日掃除をしない家がある。その他の部屋の掃除をする場合、最初は松でやり、次にホウキを使用する家例の家もある。(小平)

二 月

二郎の一日(一日) 栗飯を炊く。奉公人の入れ替え日。(塩原)

二月一日は、二郎のついたちである。あわのおかゆを食った。(上桐原)

節 分(三日)

ヤカガシ イワシの頭を二つ、つばをひっかけながら焼き、豆ガラに刺してトボ口に刺しておく。焼く時に「七十二色の虫の口を焼き申す」「四十二色のこうさくの虫を焼きます」「油虫の口を焼き申す」とか唱える。(塩原)

ヤカガシは、豆ガラにイワシの頭をさしてやく。「四十二いろの耕作を害する虫の口を焼き申す。」ととなえて、ツバをかける。豆をいっているいっぱいやっている。(小平)

ヤカガシは年取りの豆をいる時、豆の木のザンマタにイワシの頭をさして、ツバキを三度トットツとかけながら焼く。この時の唱え言。

「四十二色の耕作の虫の口を焼く。
耕作にたかる虫の口を焼き申す。」

菜や大根にたかる油虫の口を焼き申す。

ノミ、シラミの口を焼き申す。」

ヤカガシは玄関にさして置く（深沢）

イワシの頭を豆がらの木にさしてやく。「耕作の十二いろの虫の口を焼き申す」と言いながら唾をペッペッペツと三回はく。このヤッカガシはトボグチにさしておく。（上神梅）

いわしを、豆の木か、ヒイラギの木の枝のふたまたになつているところにさす。頭を、二つさして、節分にまく豆をいりながら、いろいろな呪文をとなえる。

「油虫の口をやきもうす。」

といった風に、「の口をやきもうす。」という。そして、イワシの頭につばをかけて、火であぶる。豆がいり終ると同時に戸口にさす。（神梅）

梅

豆まき ホウロクで豆を煎る。

豆ガラ、ナスガラ、菊のカラ（良いことを聞くように）などを焼く。年男が豆をまく。まず年神様からまき、大神宮、家の中の神様、外に出て十二様、稲荷様などにもまく。家の中は隅から隅まで「福は内」を二回、「鬼は外」を一回どなつてまき歩く。（塩原）

節分には鎮守（八王子村）でまず豆まきをし、家の各部屋をかけ声に合わせて、戸の開閉をきちんとやる家もある。

福茶は、豆だけの家もあるし、

豆に茶を加える家もある。（小平）

節分の豆は、大豆の豆がらや菊の枝を乾しておいたもの（菊がら）をもし木にして、「良いこときくから」と唱え言しながら、大きなほうろくで煎る。このとき、イワシの頭をすまたにさしまものに、三度つばをかけて、「油虫の口あけ申す」と唱えて、虫封じをする。

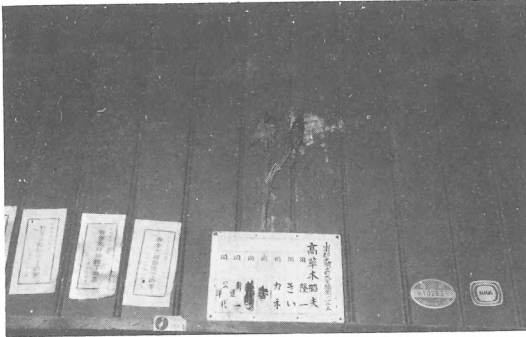
煎った豆は、歳男がまくが、男がいなければ、最近は、女でも子どもでもまく。まく場所の順番は、戸をあけて、神棚・座敷と、「福は内、鬼は外」と唱える。まきおわったら、戸をしめる。つきには、外に出て、蚕室、家畜小舎、外（下）便所、物置、屋敷稲荷、井戸神様などにもまく。夕方には、どの家でも、競争するようにして大きな声でまいた。

また豆は、歳の数だけ拾って食べると、丈夫になるといわれ、子どもたちは、競って拾った。また、豆を入れた福茶を飲みながら、冬至につけたコズの味噌漬を食べる。これは好きなものでないと、何度食べても、にがくて食べられないものだった。残った豆は、袋に入れて、神棚や囲炉裏の鉤竹につるしておき、初雷様が鳴るとき、主人が跡取りのねえさんかのどちらかがとってきて、家族そろって食べる。子ども心に、不思議なことをするものだと思っていた。（下桐原）

節分の豆を、ほうろくで煎るときには、はじめは豆から、足りないときはふつうのもしきをつかう。良いこときくから、借金なすがらとなえたり四十何種類の害虫の口封じ申すとか、家内安全お願い申すといひながら、イワシの頭に三べんつばをはく。（上桐原）

二月三日の節分の豆は、ほうろくに入れて、豆がらをもして、生豆のないようにいる。また、このとき、イワシの頭につばをかけながら、四十何種類の○○○の虫の口を封じ申すと三回となえる。イワシの頭は、ヒイラギにつつとおしてとほ口の柱の割れめにさす。

豆まきをするのは、成人男子で、ふつうはその家の主人があたる。これを節分の歳男という。豆は、まず屋内の大神宮様などのお神、それから、部屋部屋にまく。まきおわったら、玄関の戸は、鬼は外、福



やっかがし（塩原）（板橋春夫 撮影）

は内と書いて急いでしめる。ついで、外へ出てからは、稲荷様、井戸神様、外便所の順である。

豆は、自分の年齢の数だけ拾って食べる。歳をとれば、そんなにたんとも食べられないので、56歳のひとならば、五つと六つ合計十一食べればよい。そして福茶をのむ。このとき、冬至に砂糖づけかみそづけしたゆずを食べる。

拾った豆は、袋に入れて、昔は、いろりのかきだけにつるしたが、いまは、神棚かどこかに進せておき、初雷のとき、袋をあけて、これを食べる。鬼の食べ物を食べているんだぞ、と雷様をなだめ、知らせの意味でもあろうか。(上桐原)

主人が長男が、神棚からまき始める。

「福は内、福は内、鬼は外」という。家中、すみずみにまいて、神社に行つてまく。納屋などにも行く。帰ってきた時、「福の神さまが入ってきたよ」と言つて入っていく。そして福茶をのみ、年の数だけ豆を食べた。年をもらった人は、その数だけ。余った豆は、とつておいて、初雷の時、鬼が来ないように食べた。(神梅)

ずつと前、大晦日に年取りの豆まきをしたが、ちよつとやつて、すぐ止めた。話を聞いた程度である。(下神梅)

一二〇一三〇年も前に、川ゼンと伊勢松の者が厄ばらいにただけで、全部ではない。(下神梅)

家で豆をまいてから、神さまのところに行つてもう一度まいてくる。厄年の人は、一つ年をもらつてくる。(神梅)

豆 節分の豆は紙袋に入れて、いろりのかき竹にさげておいた。初夕立のときに、だして食べると雷の難にあわないという。(浅原)

節分には年の数だけ豆を食べる。豆を入れた福茶を飲む。節分の豆はとつておいて雷様が鳴つた時に外にまく。「鬼の豆」といって茶袋に入れ、カギ竹にしばつておく。とてもいぶ臭くなる。(塩原)

豆まきの豆を鬼豆、福豆などといい、あとで福茶に入れたり、砂糖

豆にして食べた。豆は自分の年だけ食べる。

豆は紙に包んで、いろりのカギ竹に吊るして置く。初雷の時に、蚊屋の中で食べると、雷が落ちない。(上神梅)

年取りの晩に豆をいり、その豆を袋に入れてイロリの鉤につけておき初雷の時に食べる。(上神梅)

豆を紙につつみ、その中に金を入れ、家の者の頭や肩がいたくならぬようになぜしてから三本辻に捨ててくる。捨てたら後ろをふりむかず帰ってくる。(上神梅)

年占い としよりの豆を、ほどのほじて十二粒やいた。これは各家でやった。

十二粒の豆を、一月から十二月までの月に見立てて、そのやけぐあいを見た。赤くやけたときには天気、黒くやけたときにはどうのといった。豆を灰の上にならべてやいた。これはとしよりの晩にやった。

なお、この日福茶を飲んだ。また、冬至につけておいたユズのみそづけをこのとき食べると風邪をひかないといった。(浅原)

豆をいれる時、囲炉裏に豆を十二個置いて、ポウポウ燃えたと風がくる、その反対は平穏であるという。(小平)

ヒイラギ 魔除けにカドへ植える。墓地にも植えてあるが、何軒もなかった。(深沢)

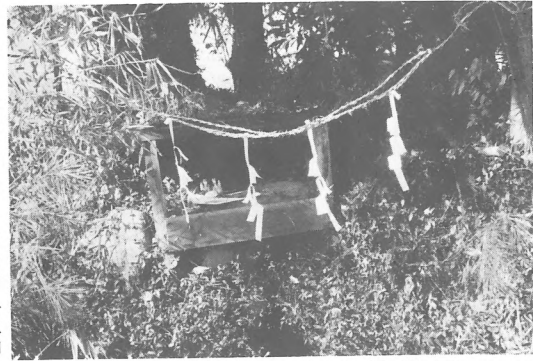
初 午 (二月初午日)

稲荷様 家の稲荷様に旗を飾り、赤飯をふかしたり、マユ玉を作つたりして供える。(塩原)

団子をアッコにくるんだものを作つて食べる。(塩沢)

初午に仕事はするな、火にたたるという。色紙に「奉納正一位稲荷大明神」と書いて旗を2本作り、正月のおシメを飾つた竹にしばり付けて、屋敷稲荷に飾る。最近では文字を白く抜いた色紙(赤・青・黄・白の四色)を売っているので、それを供える。

屋敷稲荷は、稲荷のほかに、地神様や八幡様、天満宮などがある。



屋敷森の隅に祀られたイナリ様 (塩原)
(長沢利明 撮影)



長沢イツケのイッケ稲荷 (小平)
(長沢利明撮影)

秋に屋敷祭りはしない。(上神梅)

二月の十日か十二日、赤飯をたいて、正一位稲荷大明神の旗を書いて立てた。しるこを作った。(神梅)

初午の旗を杉森稲荷と自分の家の稲荷様と両方にたてる。旗には、杉森稲荷大明神、昭和〇〇年二月〇日初午、〇〇氏と書く。杉森稲荷大明神は、無格である。(下桐原)

初午には、奉納稲荷大明神と書いてあげる。(小平)

初午の日には、針供養をする。この日、おんなのひとは、針をもつものではない、ひばやいという。豆腐に、かけ針を全部つととして、針の御魂を全部まつてやって、埋めるということをした。(上桐原) 神棚にあるオシラ様を祀る。また蚕影山の掛軸にオマイダマを供える。

初午にはオマイ玉を作って、オシラ様に供える。枡に入れてあげる。

蚕に馬蹄形の紋があるが、それは馬にふまれて蚕になったからだという。(小平)

初午の日には十時までは裁縫をするなどという。火にたつといって、お湯もわかさなかった。(長尾根)

女衆が針供養をし、針仕事を休んだ。火にたたるといって、茶も立てなかった。(神梅)

オシラマツリ 初午の日にやった。まゆ玉のようなだんごを作り、「蚕影大明神」という、かけじをかけて、いわった。(神梅)

初午の前の晩がオシラマチで、マユ玉を一升ますにのせられるだけ入れて、床の間に供えた。里芋を串にさしてつなげて、砂糖みそを付けて焼いた芋レンガクを供えた。松葉はいぶさない。(上神梅)

初午にはナラの木に繭玉をさす。(上神梅)

初午の前の晩、マユ形のマユ玉をますに盛って、床の間のオシラ様に供える。

また、芋田楽(イモレンガク)を作って供える。芋を串に数個、十個もさして、砂糖みそ(たれ)を付けてオキで焼いて、二本、五本くらいを皿に盛って供える。焼くと香ばしくてうまいので、下げて食べる。(下神梅)

火ニタツ 初午のときには、まゆ玉を一升ますに山もりにして、年神様のところに供えた。

初午の日には、十時までお茶を飲まない。また、この晩には、風呂もたてない。初午に仕事をすると火にたつ(火事になる)といつて、仕事をしなかった。また、早く初午が来ればよいといった。(浅原)

芋デンガク 芋をゆがいて串にさしたイモデンガクをこしらえて食べた。イモデンガクには山椒と味噌をすり鉢ですってあえた山椒味噌をつけた。イモデンガクは初午の前の晩に食べ、初午には繭玉を屋敷稲荷にそなえた。(上神梅)

三 月

コト八日(八日) 二月のコト日は「コトじまい」である。キノハツカゴという木の葉を入れる大きなカゴ(直径三尺、高さ四尺)を庭にかぶせて置き、ヒイラギの大きな枝一本とイワシの頭を刺す。ダイマナクをよけるためのものである。ヒイラギは家の南の方に植えておき、鬼門を守る。(塩原)

コト八日は二月八日、十二月八日。(上神梅)

こと八の日に、「霜柱、氷のはりに雪の下駄、雨の樽木に露のふきくさ」と書いて、かぎ竹につるしておく、火事にならないという。このとき、鉄びんが鳴ると、その年に、天変地異や大火事がある。(上桐原)

コト八日には、ヒイラギをメカイにさして竹竿につけ、門口や表口に立てた。目がいっぱいある、トゲがあるというので、魔除けになる。草刈り籠がダイマナクで、メカイはシヨウマナクという。

コト八日には針を使わない。(小平)

ダイマナク・小マナク 二月八日・十二月八日、メカイを庭に状せて、ヒイラギを立てておく。

ダイマナクは大きい籠、小マナクはメカイなど小さい籠で、籠をかぶして庭に置き、ヒイラギの枝をさして、魔除けにした。子どものころした行事。(深沢)

大きな草刈りがマを出して、それに、ヒイラギの葉をさして、庭に立てておく。ダイマナクという、大きなかごを出して、ヒイラギの葉をさして、かまを入れて、立てておく。かまの刃を、風の向きに、悪魔を切るというので、北向きにしておいた。(神梅)

ダイマナクに、カマ、ヒイラギを入れて立てた。(神梅)

二月八日はコト八日。水もならさぬコト八日という。この日は「大魔なく、小魔なく」といってヒイラギの木にメカイをさして、庭先においておいた。(上神梅)

雛市(二日・七日) 三月二日。きわもの屋が、一丁目に雛市を開く。四月三日が節供であるから、三月に入ると二日と七日に開かれる。

いわゆる二・七の市で嫁にやった娘の長女に贈るヒナサマを買い求める。地主の地処に住むタナ子たちは共同で雛を買って贈る。(大間々)

ヒナ様は大間々に出て買った。小平にヒナ市は無かった。(小平)

雛祭り(三日) 大間々に雛市が立つ。初節供はダイリ様を飾る。昔はすわり雛ばかりだった。雛人形は飾らないと雛様が泣くのでしまったままにしておくものではない。飾らないのだったら川に流すものだ。雛人形を流す時には「淡島様へあげます」と言って流す。(塩原)

餅をついて草餅と白餅の菱餅をつくり、近所に配った。古い雛人形は川に流した。(上神梅)

ひな段を作り、人形をならべて女衆が祝う。モチをついて、男衆も一緒にあって、一日あそぶ。おとそをいただく。家だけで祝った。(神梅)

雛祭りまでが女の御年始という。(小平)

女の子の節句は、旧でやるので、四月三日である。三月二十七日には、大間々にひな市が立ち、ひなを出す日は、二十八日と決っていた。

昔のひなは、立ちびながふつうで、ひな段には、ほかに、大きさがそれぞれちがう五枚の菱もちや、草もちを飾った。当日は、客呼びをし、

もち、甘酒、赤飯などで祝った。

女の子の初節句には、母の実家、近い親戚、近所で懇意の家などから、ひな人形が贈られる。三月二十七日に、大間々にひな市が立つので、そこで買う。初節句の人形は、もらったなら、すぐ飾るのがふつう

である。四日には、これらのひとたちを、客として招くが、このときは、もう何ももってこないで、お返しは、赤飯だった。何事にも、祝

い物のお返しは、もらった半分くらいだろうか、正確には、勘定できないが昔は、ていねいにやっただけれど、今は軽くすませます。(下桐原)

贈答 三日はヒナ節供という。長女を祝う節供である。次女以下は祝わない。嫁の里から雛人形が贈られる。地主の家では、タナ子の井戸組合から共同で買った雛人形が贈られる。その他、仲人、親戚、知人なども贈る。雛人形でなく、衣類、履物などを贈る者もある。贈ってくれた家へは、四月二日に餅をついてお返しをした。節供の料理は、海苔巻きと稲荷ずしを作る。料理と酒二合を雛壇にそなえる。

(大間々)

流しびな 昔のひな人形は、たちびながふつうだった。古くなった人形は、ひまなとき、近くのはや川(昔は藤生沢川)に、持ち主の女の子が持って行って流した。(下桐原)

古くなったヒナ様は川に流すのがよいという。(小平)

春彼岸 墓参りに行く。(塩原)

墓まいりをし、だんごと、せんこうをあげる。墓そうじもする。親せきがくる。(神梅)

「中日ボタモチ食いたくないが、ならば半日あすびたい」というた。(深沢、中神梅)

彼岸ダンゴ 粒が小さいダンゴを、中日に多く作った。走り口にも作った。供えたダンゴを下げて食べば、カゼを引かない。(下神梅)

四 月

赤城神社例祭(三日)

塩沢部落の鎮守である赤城神社の例祭は、四月三日、十月十九日である。(塩沢)

奥沢観音(三日) 桃の節供の時にお参りした。(下神梅)

花まつり(八日) おしゃかの花まつりという。お寺に入って一合

か二合入る入れ物を持って、あま茶をもらってきた。おしゃかさまの像にあま茶をかけた。(神梅)

八幡神社例祭(十五日) 塩原部落の鎮守神である八幡神社の例祭。

(塩原)

近戸神社例祭(十五日) 秋は十月十五日が祭り日。(下神梅)

霜除け観音(十八日) 霜除け観音は光栄寺にあり、四月十八日が縁日とされ、この日は町中つっじ、ふじの花がかざられて花観音などともい。桑の霜害を防ぐ信仰があった。(大間々一、二丁目)

神梅神社例祭(十九日) 四月十九日は、神梅神社の祭り。明治初

年に、栃久保の神社の日枝神社と鑄木家の氏神である神明宮が合社して、神梅神社ができた。昔は、盛んで、すもう大会があった。祭日には、赤飯をふかしてそなえ、神宮が来て、のりとをあげた。(神梅)

春四月十九日、秋十月十九日(旧九月十九日)をオクンチといい、

神梅神社(日吉・神明を合祠)のお祭りをする。(中神梅)

妙見さま(十九日) 北辰妙見大菩薩といい北斗七星を祭る。三大妙見の一つである。昔、徳川家康の遺言で久能山に葬ったが、分骨を日光東照宮へ移して権現として祭った。天海僧正が分骨を持って日光裏街道を通って行く途中、神梅で一夜の宿をとり、もてなされた札に金の独鈷と守り本尊の妙見菩薩を授けた。それを覚成寺の境内で祭る。元の薬師堂の建物を山からおろしてトタン葺にした。なお、天海僧正が来た時に道を踏み違えた所を「フンヂガエ」と呼び、二また道になっている。そこに権現様の腰掛石(高さ六五、たて一三〇、横九五センチ)があったが、寺の境内に移した。

妙見さまは白蛇がからまり合っている木像である。以前はやぐらを組んで盛大に祭った。(上神梅)

角地藏縁日(二十四日) 角地藏は二十四日が縁日で、回り番で二

人ずつ当番になって、太鼓をたたいて参詣人を集め、お茶や煮物をくれる。(上神梅)

五 月

五月節供（五日） 子供が強く育つように鯉のぼり、カブト、鍾馗様などを飾る。屋根にシヨウブとモチグサをさして飾る。菖蒲湯、菖蒲酒もする。菖蒲酒を呑むとムカデに刺されない。（塩原）

シヨウブとヨモギを軒先に三ヶ所さした。神棚、稲荷、仏壇にもさした。この日はシヨウブ湯に入った。（上神梅）

五月五日には、ヨモギとシヨウブを屋根にさす。藤もさす。またカブトを新聞紙で折った。

シヨウブ湯に入る。シヨウブ酒は、蛇の子をはらんでいるのをおろすという。（小平）



五月節供のシヨウブとヨモギ（浅原）
（長沢利明 撮影）

男の節供、ごんちの節供という。春蚕が近くて急がしいので、のぼ

りを立てるくらい。男の子の初節供の家には、里方や親せきから大のぼりやざしきのぼりが送られた。（神梅）

前日からコワメシをし、ゴンボウやイモを煮たりして御馳走を準備した。この日は農休みであった。ヨモギとシヨウブを朝早くとってきて神棚にあげたり、軒先にさしたりした。夜はシヨウブとヨモギをさげてシヨウブ湯をした。子供の背中をヨモギとシヨウブで「夏やみせんように。悪い病気にたからないように。」

神様、仏様、お稲荷さま、お願いします。お願いします。」と三回唱えながらこすってやった。（桐原）

男の節供という。長男だけを祝う。大店の長男は、里親から鯉職が贈られる。吹流しには両家の紋を入れる。仲人や親戚や知人は、五月人形（ヒナサマとは言わない）を贈る。鯉職の上げ下ろしは店子が行なう。この日の料理は赤飯と煮しめである。（大間々）

赤城登山（八日） 皆で赤城山に遊びに行く。お産をした人は行っ

てはならない（塩原）
赤城山の五月八日の山開きには、深沢六十戸から、会費百円ずつ集めて、二人ずつ代参が出て赤城山へ登る。赤飯・四合びん酒を持って、小沼の宮に供えてくる。十九才の娘は赤城山へやるものではないとい

う。ここからは、赤城三里といった。（深沢）
五月八日には赤飯をたいて、竹筒に酒を入れて毎年二人づつ赤城の大沼まで行った。現在でもやっている。深沢部落だけで廻り番でやっている。（上神梅）

赤城山の山開きで、五月八日には大洞の赤城神社（歩いて参拝した。回り番に2人ずつ、代表が出て、春四月の都合のいい日に赤城山へ登り、悪病除、五穀豊穰のお礼を受けて来て、三本辻に竹に付けて立てる。（下神梅）

赤城登山は五月五日にする。水沼から鳥居峠を経て登った。（桐原）
旧四月八日には、藤をとって来て、軒にふいた。（桐原）

八十八夜の別れ霜 山を伐採する時、八十八夜が限度で、それから

六 月

忌日（いみび） 毎月わるい日がある。六月がタツ、十月がイヌという。

田植はウとタツの日がわるいという。また半夏の日にも田植をして

はわるいという。

ムギまきは、イヌの日をきらう。(浅原)

麦まきは戌の日をきらう。田植えは卯の日と辰の日はいやがる。また地蔵日してもいけないといわれている。(小平)

田植えは辰の日にしてはならない。寺の田植えをする日だという。

この日に田を植えても、米が取れないという。(深沢)

イヌの日に小麦を蒔くな。昔、弘法大師が中国に行つて、杖の先に小麦を付けて持つて来た。犬が見付けて吠えたので、その犬をたたいたら、ころりと死んだ。五戒の殺生戒を犯したから、犬を気の毒に思ひ、供養するために、イヌの日には小麦を蒔かない。もし取れてもそれを食わない人が出るとか、犬も食わないとかいふ。(深沢)

八丁ジメ 六月にやつた。大きなワラジを作つて村の出入口にさげた。(小平)

七月

フセギ(一日) 下神梅と中神梅の境界で坊さんが拝んでから、でかい馬のわらじを下げた。径三十cmもあるアシナガのでかいものを、村境の道路に繩をまたがせて、下げておくと、悪い者が来ても、おれよりでかい足跡があるのを見て、入つて来ないからだという。繩は栗の木が何かにしばつた。(下神梅)

土用 うなぎとか、どじょうとか、なるべく栄養のあるものを食べる。(塩原)

土を動かすのはいけないという。土用には小麦藁を燃す。(小平)

水ごり 七月二十八日はミズゴリをする日である。この日はアフリ神社の夏祭り、村の当番の八戸から人が出て、神社の前の渡良瀬川に入る。一人が一升びんを川の中に立て、これを七人がまわりから水をはね上げて、びんの小さな口から中へ入れる。一杯になるまで水を



大間々祇園祭。仮宮の入魂式八月一日
(大間々) (長沢利明 撮影)



大間々祇園祭。樽神輿への入魂式(大間々)
(長沢利明 撮影)

かける。雨乞いと夏の災難よけにするのだという。(高津戸)

半夏生 ハンゲソウをトボロにさげた。(小平)

八月

祇園祭り(一〜三日) 大間々町の祇園祭りは元禄年間に始まつたと伝えられる。戦前までは一丁目から六丁目まで祭に参加したが、七丁目はワリグシだからという理由で、参加できなかった。六丁が上三丁と下三丁とに、更に分れていて、上三丁はよくまとまったが、下三丁とは仲が悪く、祭のたびに喧嘩した。夜中に山車をひっくり返しに行つたりした。

七月三十日に当番町内に仮宮を設置し、各丁内にシメ繩を張りめぐらし、店先に祭り提灯をさげる。祭り当番は、上と下と交互にし、一



おぎよんのやぐら (大間々町)
(板橋春夫 撮影)



樽神輿への入魂式 (大間々)
(長沢利明 撮影)



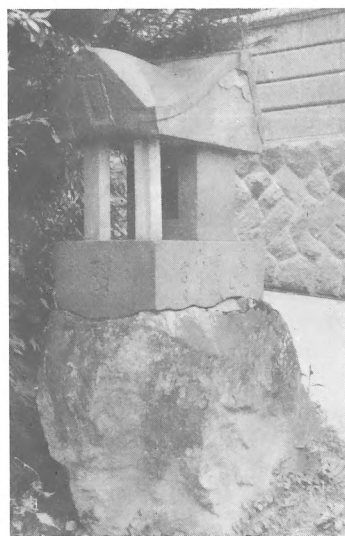
子供の樽神輿 (大間々祇園祭)
(根岸謙之助 撮影)



祇園祭の神輿の渡御 (大間々)
(根岸謙之助 撮影)



山車の引きまわし (大間々祇園)
(根岸謙之助 撮影)



天王宮 (文化七年歳六月吉日
(上神梅) (関口正巳 撮影)

目まで駆けぬける。誉取が集まり、仮宮で神事を行なう。串奉奠を行って儀式は終る。

丁目の次が四丁目、その次が二丁目にもどり、次が五丁目という順序である。頭番丁の山車には獅子頭二個が飾られる。
八月二日の午後に神輿の渡御が行なわれるが、その前に、味噌こしぎるの中に塩を入れ、大道りを撒いて清め、そのあと櫛で祓ってまわる。塩まき修祓のあと、神馬の背に幣束を立て、紅白の手綱を二本つけて片方に十人ずつ、ねじりはちまき、シャツ、サルマタ、白足袋といういでたちの若者が手綱につかまって馬を走らせ、一丁目から六丁

神輿は白丁を着た長男十二人が担いだ。大間々の神輿は女御輿だからあばれず、静かに担いで丁内を渡御する。渡御の順序は次のとおりである。

先頭から、神主、鉦、祭典長、大神、大太鼓、柏子木、塞銭箱、地区役員代表、稚児（一五〇人ぐらいで山車を引く）、天狗、大傘、本部崇敬会役員・招待者・各区付祭の山車四台の順で行列を作り大通りを練り歩く。町内によつては、子供神輿を造つて各丁内の通りをまわるのもある。表通りから裏通りまでくまなく、一軒一軒まわる。昭和の初年ごろから子供神輿が出るようになった。（大間々）

天王様 以前、八月一日に祇園祭りをした。石宮が石の上におり、「文化七午歳六月吉日」と彫つてある。（深沢）

農休み（一日〜三日） この三日間、大間々で祇園祭が行なわれており、仕事を休んで見物に行く。（塩原）

農休みは八月一、二、三日で、大間々のギオンを見物に出かける。（小平）

農休みは八月一日〜三日、村で一斉に仕事を休んだ。（神梅）

貴船のテンノ様（八月一日） 貴船神社でテンノ様の祭がある。お菓子をくれたりする。（塩原）

カマノクチアケ（一日） 八月一日をカマノクチアケといい、この日は、地獄のかまのくちあけで、仏様がお客に来る日という。ヤキモチをやいて仏様にあげるが、とくべつの行事はない。（浅原）

盆の月の一日のことを、カマノクチがあいたという。この日のことをカマノクチアケという。この日はやきもちをやいて食べるものという。やきもちはまだ仏様にお供えした。仏様が地獄からでくる日といった。（長尾根）

カマノロアキは七月一日、盆月の一日のこと。地獄のカマの口が開く日なので焼餅を仏様に供える。（塩原）

カマノクチアキの名称はいわない。鬼の首も許される日で、オンカ

デ（公然と）休めた。焼キ餅は作らない。（上神梅）

七夕（八月七日または七月七日） 七夕飾りは新コの竹でかざりをつくつた。これに短冊をさげた。「天の川、七夕の……」という歌の文句を何枚にも分けて短冊に書いた。そのほか、いろいろの歌を書いた。

短冊に書く墨は、イモの葉のつゆをあつめてきてすつたものである。かざりの竹は、六日の晩に飾つて、七日の夕方川へながした。竹を飾る場所は縁側の柱のところ。七夕様には、うどんをあげた。

七夕の晩には、一年に一回お星様が出会いをするという。

七夕の日には、女衆が朝早く水浴びに行つて、あたまを洗つてきたりした。

飾りの竹は、うら（先）の一枝をかいて、大根はたけへもつて行つて立ててきた。その意味はわからない。（浅原）

新しい竹でかざりものをつくつた。これに色紙で短冊をつくつたり、つづみのかたちをつくつて、竹につるした。短冊には、百人一首を書いたり、自分の願ひごと、天の川とか七夕などと書いた。かざりの竹は六日の晩にのき下（えんがわの中央）とか、玄関のところへ立てた。

ここへはうどんをつくつてあげた。この竹はあとで川へ流した。

七夕の日には川へ水およぎに行つて、ネブタをながした。

六日の晩と、七日には、桐生川内の機神様へおまいりに行つた。（長尾根）

竹に短冊を飾る。サトイモの葉にたまつた汁を習字の墨汁にすると、字が上手になるといふ。箕の中にキュウリ、スイカ、トウモロコシなどの農作物を供えた。（上神梅）

竹にかざりをつける。イモの葉のつゆで、墨をすつて字を書く。女の子は人形を作るとお針がうまくなる。飾りは、大根をまく畑に持つていってさしておく、虫がつかない。（神梅）

七夕に芽っ葉の露で墨をすつて、字を書いて上げると、字が上手になるという。女の子は人形などを作って上げると、裁縫が上手になる

という。

新粉でゆでまんじゅうを作る。

「七夕やいつ来る年もゆでまんじゅう」

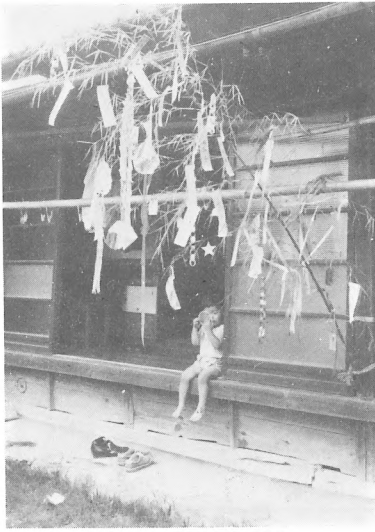
ゆでまんじゅう、ナス・キュウリなどの野菜、果物をちやぶ台に上げて供える。ネブタや豆の葉は供えない。特別に洗いなさい。天道柱とはいわない。(上神梅)

七夕飾りはあとで菜大根の畑に立てておく。(上神梅)

八月七日は、七夕祭り。おおやの家でタナバタかざりをする。店子はしない。子供が、里芋の葉にたまった水を集めて来て墨をすり、これで七夕かざりの短冊に字を書く。(大間々)

朝早く起きてネブタの葉を流す。新しく出た竹に、短冊を切って歌を書いたり、天ノ川と書いたりして吊す。そうめん、うどんを作って七夕様にあげる。竹にひっかける。この竹は後で大根畑だの菜畑だのに立てておく。芋の葉にたまった露を硯に取って字を書くと書道が上達する。

七夕には雨が降った方がよい。雨が降ると天ノ川の水が増える。この日に水を浴びるとカッパにひかれるから泳ぐものではない。



七夕飾り (上神梅)
撮影 (板橋春夫)

七夕には墓

掃除をする。

草を刈るだけ

で何も供えな

い。今泉家で

はふかしまん

じゅうを作る。

(塩原)

七夕には、

竹に短冊やノ

ロシ(紙で作

った網状のものをいう)を下げる。

字を里芋の葉にたまった露で書くと、上達するという。

七夕に水あびをしてはいけない。河童に尻を抜かれるという。(小平)

七夕には、雨が降った方がいい。一緒になったんじや病気がふえる。

(塩原)

機神様(七月七日) 川内の白滝神社の機神様は七夕の日にさがつ

たといってお詣りに行く。札を受けてくる。(塩原)

七晩焼き これはむかしやった。

七夕から一週間、夕方、門先で麦わらの束をもやした。子どもたちがやったことで、唱えことはとくになかった。

疫病神が入らないようにということであった。(浅原)

盆(十三〜十六日) 盆行事はおぼえて八月十五日。(浅原)

盆は、もとは旧の七月十五日であった。いつから変更になったかわからないが、現在は八月十三日から十六日までである。(長尾根)

盆は八月十三日から十六日まで。農作業の都合で、一年だけ日取りを違えてみたが、結局この日になって安定した。(上神梅)

盆の日は昔は七月十三日から十六日まで。その後八月二十三日から二十六日までとなったが現在では八月十三日から十六日までである。

お蚕の関係でこのように変ってきた。盆の日から逆算してお蚕を掃き立ててきた。(上神梅)

旧の七月を盆月という。(神梅)

迎え火、盆迎え(盆ぶち、盆打ち) 盆は、十三日の迎え日からは

じまる。お寺さんに提灯をもって迎えに行くのが、ふつうだが、お墓に行く家もある。せいおん寺では、提灯をもって寺に行き、坊さんの

拜んだ、ほやほやの明りをもらってつけてくる。このとき、墓参りは

しない。たいていおとなが行くが、養蚕があがるまぎわで、農繁期と

ちあうため、子どもが行くところもある。子どもは、十〜二十銭を

もらって、往復一時間くらいかけていった。寺からは、仏様のおみや

げとって、小さな半紙の包みに入れた抹茶と、みじんの菓子を二、三ヶもらう。禅宗の善慶寺では、マッチ（二十本くらい）と茶、それに如来像の名前を書いた五色のお札を、5枚紙につつんでくれる。帰ったら、マッチは、家に、しけないように箱をうつして、お灯明のそばにおき、盆中には、他のマッチはつかわぬ。お札は、祭壇を飾ったところに、さす。（上桐原）

西福寺 門徒寺である六丁目の西福寺は、お盆そのものはやるなどいい、盆迎えも、何も全然しない。坊さんは、毎年盆と彼岸に来るが、盆棚も飾らず、ふだんと同じである。（上桐原）

新盆の迎え方もほとんどかわらぬ。（上桐原）

生き盆 盆の十五日に、両親が丈夫なうちに、ヨメが、嫁ぎ先で

きた野菜や粉をもって実家に帰ること。（上桐原）

盆のあいだは生き物を大事にすること。

盆のあいだは、生き物を殺すな、さかなをとるなど、むかしからい

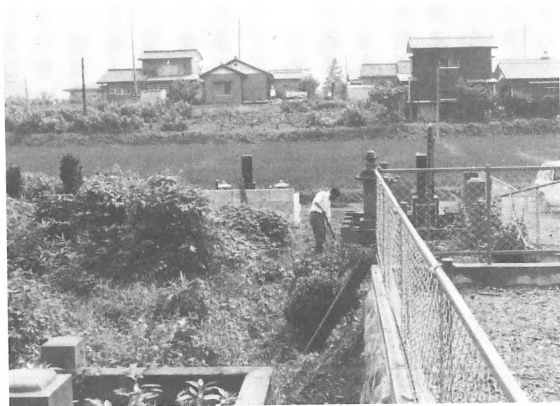
われてきた。（長尾根）

盆月になってからなくなった人は、埋葬するときに、かわらけ（すりばち）をあたまにのせた。これは、仏様はお客に来るといふのに、なくなった人は反対に行くといふので、仏様におこられて、頭をはたかれるという。（浅原・長尾根）

盆中の墓参り お盆の最中、仏様は盆棚にきているから、墓地は留守になっている。特別なお客のばあいは、例外だが、二度行くことはほとんどない。十六日の送り盆には、墓参りする。（上桐原）

墓掃除 上桐原では、ほとんどが、家々の墓地をもっている。七夕の日に、その家の主人か跡とり息子が墓地に行き、墓掃除をする。七夕と盆との関連は、不詳だが、七夕は星まつりというから、仏教であると理解している。また、七夕に入ったら、盆月だから、よそ様に、病気見舞やお産見舞いに行くものではない。（上桐原）

墓掃除は七夕前にやった。おそくとも七夕の日の昼前にやった。墓



8月7日の墓掃除（二軒在家）
（板橋春夫 撮影）

の墓地を掃除する。七夕にする家もあり、十一日に共同墓地を掃除する組もある。自分の家の墓地のほかに、古寺の墓も掃除する。花立ての竹や香竹を、二〇〜三〇cmの長さにして、二本ずつ墓石の前に立てる。（上神梅）

七月七日の七夕の日にめいめいが自家の墓掃除に行く。また八月十一日には朝八時頃、各戸一人ずつ出て「中の墓地」の掃除を共同で草を刈ったり、墓地から大通りに通ずる道の整理をする。この地区には「上の墓地」と「中の墓地」と墓地が二つある。「上の墓地」からはすぐ大通りに出られるので共同作業はしない。（上神梅）

道刈り 八月十一日に共同で道路を清掃する。（上神梅）
盆の用意 十二日に、朝、草刈りに行って、盆花をとってきた。十三日は、仏の足を切るから、行ってはならぬとされた。（神梅）

掃除をして七夕をむかえることになる。個人の墓を掃除した。また、墓地への道もきれいにした。この辺では、一家共有の墓地が多く、一家では、一戸一人ずつ出て墓掃除をした。（浅原）

十日に墓掃除をした。うちのものだけでやる。

（長尾根）

十日に墓掃除や道刈りをするにきまっていた。（小平）

盆月になれば、十三日までの適当な日に、各自

盆市 黒保根村萩原で開かれた。新暦八月十二日。盆市では盆棚に飾るゴザや造花、線香、提灯、瀬戸物類などが売られていた。小平の方からも行った。(狸原)

二日と七日が大間々の市日、大体このころ大間々の町まで盆の買いものに出かけた。これを、盆買いもんといった。買いものに行くのは女衆が多かった。買ったものは、盆迎え用の提灯、ごぎ、盆花、線香、ろうそくなど。

なお、このとき、子どもたちのしきせも買ってきた。(浅原)

むかしは、二、七が大間々の市日で、この日大間々へ盆買いもんに行った。

買ってきたものは、ごぎ、花、かわらけなどであった。

むかしは、桐生の人が盆花売りに来た。造花の盆花で、これを一本ずつ買った。(長尾根)

大間々の市へ行って、盆ゴザ、七色紙、線香、かわらけ、花(造花)、

ちようちゃんなどを買ってくる。(塩原)

盆買物はごぎ、盆花(造花)、提灯(新盆の時)などを買う。(上神梅)



トボグチに盆棚に使うチガヤが干してある。(狸原)(板橋春夫撮影)

盆買いもんは現在では農協で買っている。以前は大間々へ買いに行った。大間々では二・七の市がたつていた。(上神梅)

盆棚 本体

は、大工に頼んで作ってもらう。茅を刈って干しておき繩にない、その繩で竹を結わえる。繩に色紙をたらず。

シンコ(その年の竹)四本の、枝三段を残したものを繩で結わえて作る。色紙とホオズキを下げる。

ナスで馬を作る。馬にはトウモロコシのチンケをつけ、芋の葉の上におく。そのそばに水鉢を置き、ミソハギの筆で馬の背中に毎日水をかけてやる。

盆送りには、シヨイナワといって、生の手打ちウドンをチガヤの繩にかける。

送盆の晩には、トウナスとフを使った料理を作る。(小平)

盆棚は木の枠があって、盆のときに出して組み立てた。新しい仏様がでた場合には、盆棚を大工につくらせた。つくりかえる場合には、盆の時期をえらんだ。

盆棚をたてるのは十三日の午前中。表座敷にたてる。

棚の四方に新竹を立てる。先から三枝きつたものを立てる。カヤのなわをなつてまわりに張った。棚にはあたらしいごぎを敷く。

棚の正面の奥に壇をつくつて、そこへ位牌をかざった。位牌は全部だしてかざった。

色紙で幣束のようなもの(短冊)をつくつて、棚の正面のつなにさげた。そこへはホウツキもさげた。そこへはうどんの生のものをさげた。これは竹様の背負い繩という。

棚の下には板一枚分の壇をつくつた。そこへは、チガヤとかマコモでつくつたゴザをしいた。そこへは、一人前にならない仏様(独身者)の位牌をかざった。これを、シヨウリヨウボトケとか、シヨウリヨウサマという。(浅原)

仏壇の前に、ちやぶだいを利用して盆棚にする家もある。また、盆棚のわくがあつて、それを組立てかざる家もある。まわりに新と竹を



盆 棚 (上神梅)
(関口正己 撮影)



盆 棚 (下神梅)
(関口正己 撮影)

四本たて、チガヤでなつたなわを三段にはつた。なわには色紙を切つてゴ幣のようにしてさげたり、ホウゾキをさげたりした。棚の上にはゴザをしいて、その上に位牌をならべた。(長尾根)

十三日の昼頃までに、次の間、サシキなどに飾る。組み立て式の棚にゴザを敷いて、新竹を四方に立て、節が四段になるようにする。(四段にするなという家もある)その竹にチガヤの繩を張つて七色紙の垂れとホオズキをぶら下げる。

今はアラ盆でもなけりや本式の棚は飾らぬ。仏壇に竹を二本立てて略式にする。アラ盆の時には新しい組み立て棚を新調する。(塩原)

八月十三日に盆棚を作る。棚は枠が組立て式になっているので、これを拵げて据えつける。そして、四方に竹をチガヤでなつたなわでむすびつけ、前には色紙を五箇所さげ、またホーゾキもかざりつける。チガヤのなわは右なわでなう。(左ではない)仏壇の中のもの、この盆棚に全部移してしまい、なにも残さない。

無縁仏は盆棚の前の方に低い台をもうけてそこにまつる。新盆の家は盆棚を作る。表座敷のお客に見える所に作る。組立式の棚があつて、竹を四本回りに立て、チガヤの繩でしぼる。チガヤの繩

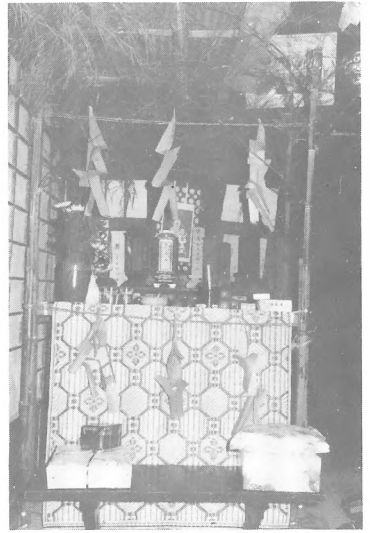
にホウズキや色紙を下げる。杉の葉は下げない。棚の上に盆ごぎを敷き仏壇の位牌を全部出して並べ、後ろに掛軸を下げる(チガヤの敷き物は敷かない)。

盆棚は組立式で三尺四方で高さ六尺の棚があつて、回りに四本の竹を立てる。このごろは新盆の家は盆棚を作るが、ふつうの家では仏壇で間に合わせたたり、仏壇の前に机を置いて供え物を上げて済ませたりする。(上神梅)

戦争前は盆棚を作つたが、敗戦を機に、世の中が変つたといふので、作らなくなつた。今は略式で、仏欄の前に二本竹を立てるだけ。かざりを少しする。昔は、組み立てて、かざりをつけた。寺や神社の仏画や字のかけじをかけ、いはい他、盆花、茶、おはぎ、もらつたものをおいた。ナスとキュウリの馬をおいた。ナスを細かく切つて、かいばといつて、イモの葉に入れ、萩の葉でほうきを作つて、水をあげ、ほうきをしめして、かいばをしめした。上のだんは大人がいて、下のだんには子どもがいるといつて、盆棚の下に机をおき、かざつてやつた。(神梅)

供え物 ウマはナスでつくつた。これには盆棚をかざるときにつくつた。これをナスウマといつた。盆中に、ウマは壇の上においた。足は四本で、棒をさした。尻にはトウモロコシの毛でしっぽをつけた。盆中、仏様をおがむときにミソハギを小束にまるめたものを水にぬらして、ウマの背に水をかけてやつた。

仏様は、ナスウマに乗つ



盆 棚 (茂木)
(板橋春夫 撮影)



盆 棚 (狸原)
(板橋春夫 撮影)



盆 棚 (上神梅)
(関口正巳 撮影)

は小さめにつくってあげた。上の仏様には、ふつうのうつわにのせてお膳であげる。上の仏様へあげたものはさげて食べるが、シヨウリヨウサマへあげたものは、あげっぱなしにしておいて、おくりぼんのときに、墓へもって行った。(浅原)

盆棚の上にはどんぶりにイモツバを入れてそこに水を入れ、山から取ってきたミソハギを束ねて別の皿に入れ、ミソハギの束で水を皿に

てかえるといった。シヨウリヨウサマへの供えものは、カツラケ(土器)を買ってきてそれにのせてあげた。おはぎなど

葉の上ののせて、中にナスでつくったウマを入れておいた。ミソハギの小枝をとってきて、その先をすこし切って、三とくろしぱったものをつくる。それを、どんぶりの水にひたして、片方のどんぶりに水をうつした。これは、ウマに水をかけてやることである。(水手向け)

(ナスのウマは、足をマツチ棒かしの竹でつくり、しっぽはトウギミのチンケ)

仏様はこのウマに乗ってきて、ウマに乗って帰るといふ。(長尾根) ナスとキュウリに四本棒を刺して、トウモロコシのチン毛のシッポをつけた馬を作る。ボタモチ、菓子、果物、スイカ、トウナス、トウモロコシ、うどんなどを供える。仏様の食事は十三日の晩から供え始めて、三度三度とりかえる。(塩原)

棚の上や前の机の上に、カボチャ・スイカ・ナスなどの供え物を置く。

芋葉をハスの葉の代用にして、露受けに敷き、井に水を入れて供える。萩の枝で井の水を散らして、供え物を濡らした(子作の頃)。

ナスの馬を一文作り、トウキビの毛を尻っぽにつける。お膳の箸は萩を使う家もある。(上神梅)

移す。仏様に水をあげるののである。またカワラケにボタモチを入れて供える。

送り盆ではナス製の馬に四足をつけ、うどんをのせて送り出す。墓地にボンダナの竹など持って行って燃す。(長尾根)

盆棚の下に台をおいて、その上にどんぶりを二つならべた。片方に水をいれ、片方はイモの



盆棚の供え物（小平）
（板橋春夫 撮影）



盆棚（小平）
（長沢利明 撮影）



盆棚に飾った十三仏の
掛軸（上の台）
（板橋春夫 撮影）

盆棚の供え物は膳に茶碗を九個並べ、六個には白飯、三個には煮物を盛って供える。午後白飯を下げて、お茶を上げてから送り出す。

また、茶碗六個に水を入れて、寺から貰った茶の葉を入れて供える家もある。コップに水を汲んで供える家もある。

チカヤの縄を張って、ホウズキ三個ずつ下げる。（下神梅）

盆花 造花の盆花は大間々へ行って買って来た。これは、盆様へ飾った。（盆棚の向って左側、位牌と同じ壇に立てておく）盆が終ると、仏壇に供えておいた。古い盆花は、盆のあいだは盆棚の下に飾っておいて、盆おくりのときに、送り出した。

山からとってくる盆花は、キキヨウ、オミナエシ。ボウズ（カルカヤ）をとってきてあげることもある。これらは、花瓶にさしてあげる。

盆棚の柱に、しばりつけてあげるうちもある。（浅原）
造花の盆花は大間々へ行って買って来た。盆花は毎年とっておいて、

を、盆棚に飾った。

翌年はかばへもって行った。
草花はキキヨウとかオミナエシを、十三日にとってきて、盆棚にそなえた。（長尾根）

盆花はキキヨウ、カルカヤ、オミナエシなどで、秋の七草

また、造花の花を、大間々の花屋が大きなザマを背負って売りに来た。ほかに色紙、カワラケ、マコモなども持ってきた。古い盆花は、送り盆のときに、もしてしまふ。（上桐原）

山からキキヨウ、オミナエシなどの盆花を取ってきて盆棚に供える。（塩原）

造花の盆花は大間々から行商の人が売りにくる。草の盆花は秋の七草を山から採ってきて盆棚にそなえる。ききよう、おみなえし、なでしこ、かるかやなどが主なものである。盆送りの時は新しい造花の盆花は仏壇にしまっておき、去年のものを燃やしてしまう。（上神梅）

盆花は山へキキヨウ・オミナエシ・カルカヤ・ボウズなどを取りに行く。前には上の原に生えていたが、今は無くなった。（上神梅）

無縁仏 ショウリヨウ様は一人前にならない子供の霊で、上にあがれない。茅で小さなゴザを作り、盆棚の下に祀る。供え物は同じ。（小平）



盆棚の下に飾るオシヨウリュウサマ (狸原)
(板橋春夫 撮影)



盆棚の下に置かれた無縁仏の供え物 (小平)
(長沢利明 撮影)

シヨウリュウサマは子どもの仏様のこと。この仏様の位牌は、ほかの仏様と一緒に棚の上に置くが供えものは棚の下にする。ここへは、小さいぼたもちをつくって、かわらけにのせてあげる。位えものをするときに、「シヨウリュウサマにあげます」といってあげる。(長尾根) 畑を人から買った時などに隅に墓地がついてくることもある。これが無縁仏で、盆棚の下に小さく供え物をしてまつ。(塩原) 無縁仏は行き倒れなどの精霊や、縁故のない仏をいい、無縁場という墓地もある。盆棚の下にカワラケを置いて、ボタ餅を2個ぐらい供える。「無縁仏がいるから」という。(上神梅)

留守居仏 位牌を出した仏壇にも、留守居仏と言って同じ供え物をする。(小平)
盆のあいだは、仏壇には留守居仏といってお茶とかごちそうをあげる。ここへは線香とかおあかりはあげない。(浅原)

位牌を移した仏壇にも盆棚同様に、供物をあげる。留守居仏がいるという。(塩原)

イキミタマはしない。

地藏盆もしない。(上神梅)

盆むかえ 遠い人は十三日の午前中から行く。ふつうは十三日の午後。だれでもすきなのがむかえに行く。むかしはいい着物を着て行った。

お寺へはお金と投灯をもってむかえに行った。提灯にはお寺で火をつけて、墓へおまいりしないで家へ直接来た。玄関から入って、棚に火(行火に火をうつした)をつけた。お茶をお寺でくれた。それをもたらってきて仏様にお茶を入れてやった。(門火なし)

このあと、夕飯を食べた。

新盆の場合には、お寺へ草履と笠とお金をもって行った。これは旅仕度という。(浅原)

むかしは十三日に盆むかえに寺(桐生市の川内町、雲禅寺)まで盆迎えに行つて提灯にあかりをつけてきたが、寺まで一里もある。今は世話人が代表で盆むかえに行つてくれる。各戸から、塔婆を書くかどうかを聞いて、希望があればその代金とあとは灯明代として五百円ずつあつめて寺へ納める。寺からはマッチを一箱ずつ各戸へよこした。このマッチで盆棚のお灯明へあかりをつけた。それはそのうちのおとなの仕事である。これが、現在の盆むかえのかたちである。

新盆のうち十三日にお寺まで盆むかえに行く。お金と、サイダーなどの飲みものをもって行く。塔婆を書いてもらってきた。むかしは、笠とぞうりをお寺へもって行つたという。

なお、むかえてきたあかりは、縁側からあがつてつけるのがふつうである。中には玄関から入つてつけるうちもある。(長尾根)

この村の寺は三寺、雲祥寺（桐生市川内町―曹洞宗）自音寺（大間々町高津戸―真言宗）日輪寺（大間々町浅原―天台宗）である。盆迎えはお寺に役員（寺の世話人）が代表で行き（元は希望者が一〇〜三〇円持って）寺ではマッチ棒を三本包んであるのをくれる。戦前は米、戦後は麦を一升、寺から寄越したエコウ袋に入れて持って行く。（寺では他村では米を搗いてくるのに長尾根では搗いていないというので、それではやらないといって持って行かなかった事もある。）寺の仏壇に燈明がついていて、それをもらって帰るべきなのだが遠いので、燈明の代わりにマッチ三本くれた。今は五〇〇円を納める。これで寺では先祖代々の塔婆をつくって、十六日に拝んで盆送りのときくれる。遠いから送ったあとで持つてくることになるので、これを先にもつてくる。以前のこと、マッチ三本は馬鹿げているというので、代表がマッチ小箱を皆にくれたことがある。それからはこのマッチを寺で作るようになった。その後五〇〇円納め大きいマッチを寺ではくれるようになった。

新盆のとき寺へのあげものは、昔は施主が菅笠、ワラジ、ゾウリなど、今ではコウモリを納める。寺では塔婆を作ってくれ、僧侶が拝みに来たとき包む。普通の先祖代々の塔婆は三尺位のだが、新盆の塔婆のは五〜六尺位のである。

新盆迎えは施主が行く。昔は提灯を持って、寺の本堂に入った所の前の座敷にある盆棚の燈明から火をつけてきて、自宅の盆棚に移した。盆棚はチガヤの縄で囲み上の二段には色紙・ホオズキを飾り、棚上にはスイカ、カボチャ等を供える。お膳は台の上に置く。一人前にならないで死んだ人も盆棚に祀る。（長尾根）

八月十三日、盆棚を作ってから、寺へ盆迎えに行く。城の正円寺まで、提灯を持って車で行く。帰り道に墓へ回る。弓張提灯に火をつけて来て、玄関から入り仏壇の明かりをつける。「迎えに来たよ」といって迎えて来て、家へ着くと、「連れて来たよ」というわけになる。迎え

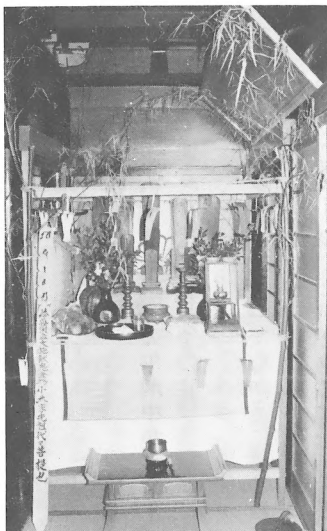
火は焚かない。

盆むかえは八月十三日。寺へお包（金）を納めて、ちようちんに火をもらう。寺からは、お茶と菓子ができる。墓場へ行き「お盆だよ、いっしょに行くべ。むかえにきた。」といって仏様を連れて家に帰る。門火はたかない。明りは家の玄関から入る。ちようちんは盆棚の前にかざる。

新盆の時はお包のほかには笠と草履をお寺に納める。（上神梅）
迎えは七月十三日にお寺まで行き、ちようちんに火をつけて、家まで案内してくる。その火を盆棚の灯明にうつす。御先祖さまが、ちようちんに入ってくる。（神梅）

十三日午後、覚成寺（盆迎えに行き、お布施を三百〜五百円も包み、棚から提灯の火を貰って来る。（下神様）

八月十三日が、迎え盆。朝盆棚をつくり、ぼた餅を作り、夕方定紋付きの提灯を持って、お寺へ迎えに行く。寺では、新竹につるした高灯籠を上げておく。これを目じるしに先祖の霊が集まってくる。寺から迎え火をもらって提灯のローソクに火をうつし、墓に立てた行燈に灯りをつけて、家へもどって来る。家に入る時、玄関から入らず直接盆棚を祀った部屋から上り「こんばんわ」と言っ、盆棚のローソクに灯を移す。（大間々）



寺の盆棚（上神梅覚成寺）

新盆 施主は、なにがしかの金と、傘と草履を寺に持っていく。そして盆を迎えてくるが、寺では茶と口



新盆棚奥の台上に遺影を飾る。
（下神梅）（関口正巳 撮影）

新しい提灯
（岐阜提灯）
を買って、盆
棚の前につる
しておく。（長
尾根）
新盆用の管
笠・ぞうりを
持って、寺へ新
盆迎えに行く、
「これはい

水をかけるまねをした。（浅原）

新盆の場合は盆棚は同じ。新しい仏様は同じ棚にならべておく。



盆の墓詣り（上の台）（板橋春夫 撮影）

ソクをくれる。
盆棚は新盆の時に直す。
（小平）

新盆の場合も盆棚は同じであつた。ただふつうとちがうのは、岐阜提灯を、盆棚の前にさげるとか、縁先にさげるとかした。

新盆の場合の位牌は、古い仏様の位牌の前列の中央にならべる。

盆中に和尚さんがまわってくるのは新盆の家、そのあと一般の家をまわった。盆棚の前でただおがむだけ。仏様に

て来て下さい」といって、寺へ納めて来る。（上神梅）

新盆見舞 昔は井とか麩、ウドンなどを持っていった。ウドンを沢山貰つてもかびてしまう。今は金になった。

新盆の時の挨拶は「この度は新盆でお淋しうございます。」と言う。普通の盆には、「結構なお盆様でおめでとうございます。」と挨拶する。（小平）

盆のあいさつは、けっこうなお盆様で、おめでとうございます。という。お盆様がお客にくるので、このいい方がある。新盆にはいわぬ。

（上桐原）

新盆のときには見舞客が来る。会葬に来た人くらいは見舞に来た。むかしは、麩とか干うどんとか、井などをもつて来た。最近では、コップなどの器とか、お金をもつてくる人が多くなつた。しかし、むかしも今も、新盆見舞に来る人は茶碗類をもつてくる。

あいさつは、「結構なお盆様です。」という。

お見舞に行った人は線香をあげた。近親者はごちそうを食べたが、一般の人はお茶を飲んで帰るだけ。（浅原）

ふつうの盆の場合は、親戚のものが見舞にくる。これを線香立てに來るといふ。このときの挨拶は、「結構なお盆様です。」という。もつてくるものは、果物とか、砂糖とか、お金など。

新盆の場合には、葬式に立ちあつた人が来るのが本来の形というが、それほどの人は来ない。親戚の人とか、近ばの人が来る程度。このときの挨拶は、「新盆様でおさびしゅうございましょう。」という程度。

お見舞としてもつてくるものは、むかしは、うどんとか輪麩、瀬戸物（どんぶりとか茶碗など）をもつてきた。今は砂糖折とかお金。

なお、新盆のときには、坊さんが来ておがむ。（長尾根）

アラ盆のあつた時は棚も新しく作りかえる。盆見舞のあいさつは、「こちらはアラボンで、おさびしゅうございましょう」と言う。新盆見舞はソウメンを持っていくものだが、今は砂糖、金の包み、スイカ

などを持っていく。(塩原)

新盆の場合、葬式に立ち会った範囲くらいの人たちが挨拶に行く。その時、砂糖の折箱を持っていく。これにお返しをする地区もあるが深沢(上神梅)ではお返しはしない。

挨拶は「新盆でおさびしゅうございませう」という。ふつうの盆の時は「けっこうなお盆さまですね。」というような挨拶をする。(上神梅)

新盆の家には、水をたっぷり飲んでもらうというので、どんぶりを持って行く。普通の家同士では、さとうを持って行く。(神梅)

新盆見舞は組合では十三日、ふつうの人は十四日に、新盆の家(線香あげに行く。千円くらい包んで行く。清めに酒を出す、精進揚げに、キュウリもみ、ナスもみなどの料理が出る。

寺へ話せば、坊さんが拜みに回って来る。

挨拶は「結好なお盆様でございませう」

新盆見舞は「新盆でおさみしゅうございませう」。(上神梅)

普通の家では「お盆さまで、さぞさびしいでしょうねえ」、新盆の家では、「さぞ、おさびしいことでしょう」という(神梅)

中日 七月十五日。下神梅では、この日に送った。(神梅)

盆送り 十六日の午後、お昼を食べてから、墓まで送って行く。盆棚をかたしてから送って行った。位牌は仏壇にかえた。

うち中で送って行った。お客に来ていられる人がいれば、その人も一緒に送って行った。門火はたかなかった。

このときもって行くものは、ムギわら、竹、なわ、うま、花、シヨウリョウボトケにあげたもの。これらをござに包んでもって行った。ただ、ござは、あとでもちかえった。そのほか、線香、だんご、水をもって行って墓にあげてきた。

墓地の空地で燃した。このとき竹がはねるといいといった。そなえものを燃やすけむりにのって仏様はかえるといった。

遠い人は三本辻までおくって行った。(浅原)

十六日の午後、お昼を食べてから送って行く。うち中のものが墓地まで送って行く。このとき持って行くものは、だんご、線香、水、花(前年に買った造花の盆花ももって行く)と、盆棚の図囲に立てた青竹、ナスでつくったウマなどである。送り方は家によって方式がちがう。

三本辻でムギわらと青竹をもやす家もあるし、墓地で同様に青竹をもやす家もある。三本辻で青竹が三回はねるまでもやして、それから墓までおくって行く家もある。青竹をもやしたけむりと音にのって、仏様はあの世へ帰るのだといっている。ナスでつくったウマは、墓にか三本辻へすててくる。(長尾根)

送り盆は三本辻で竹その他を燃す。生の竹を燃すとよい音がでる。その音に乗って仏様が帰るといふ。

馬だけには火をつけないで、別の所に置く。(小平)

送り盆は十六日の午後墓地の近くの三本辻で火をたいて送る。神葬祭の人も同じ。

迎え盆は寺に行き火をもらって来る。

神葬祭の人は貴船神社から幣束をもらって来る。塩原、塩沢、穴原に二十三軒ある。

十六日の昼飯時に「しよい繩」といって、盆棚の竹にうどんをひっかけける。

夕方、盆棚の四方の竹をまとめてサンボン辻に持って行って焼く。その火で線香をつける。竹がドカンと鳴って、その音とともに仏様が出発する。音が大きいほど良い。そのあと、線香、花、ボタモチを持って墓詣りに行く。(塩原)

盆送りは八月十六日。最後のうどんを打って盆棚に上げてから送り出す。むぎわらを燃やして門火をたく。きゅうりやとうもろこしをそなえ、香炉を持ってきて線香をたて、鐘を燃えつきるまで叩きつけける。この時、なすで馬を作ったものをそなえる。この馬が供えたもの



盆送りナス馬、茶、盆花、竹を外して送り出す。(下神梅)
(関口正巳 撮影)



盆送り、ナス馬、盆花、茶を持ち出して灯明と線香をあげ、茶を注ぐ。
(下神梅) (関口正巳 撮影)



盆送り (上の台) (板橋春夫 撮影)

を運んで行くという。また、去年の盆花や、盆棚にかざったものも一緒に燃やしてしまう。それから墓地に行き、線香をたてダンゴを上げる。
送り火は盆棚の縄などはずして、三本辻で焚いてから、墓へ送りに行く。

盆送りには三本辻に麦わらを置いて、ボンボンと送り火を燃す。今は墓地の前で燃す家もある。(上神梅)

送り火は、むぎわらを持っていった。かざりをもやし、竹がはねるとその音で御先祖様が、十萬億土に帰っていくとされた。きゅうりとなすの馬をそばに置いておいた。(神梅)

下神梅では十五日午後、ふつうは十六日午後、盆送りをする。朝ボタ餅、昼うどんを供えて、二時か三時ごろ、盆棚をこわして竹や供え物を持って、三本辻の元地藏様がたった所(中井の辻)に行く。何軒かモヨッテ集まり、麦わらを燃しつけ、竹・盆花その他を燃やす。芋の葉にのせたナス・キュウリ

などの供え物を置く。盆棚に上げたお茶を膳ごと持って来て、こぼして供える。仏様が乗って帰るナス・キュウリの馬に、餌としてナスを細かに切って里芋の葉にのせて出す。

十五日に盆送りする所もある。(下神梅)
十六日に早くうどんでもぶって送る。

高津戸橋で灯籠流しをしたこともある。(上神梅)
盆様に供えたトウモロコシを送り火で焼いて食べると、デキモンがでない。風邪をひかないという。

送り火の煙で顔・腹・膝などなでて、痛みを持って行ってもらおうように呪う。

仏様のものは変えるものではないといって、昔からの古い茶椀や銅碗などを用いて、茶を供える。(下神梅)
八月十六日が、送り盆。早おひるを食べて、家の庭で送り火をたく。

盆棚の飾りものや、供えものすべてを燃やしてしまう。笹竹が燃える時に、ポーンポーンと音がする。この音を合図に、ホトケサマは、煙に乗ってあの世へ帰って行く。

送り火がすむとお寺へ行く。新盆の家では、道中が暑いだろうというので、菅笠、履物をお寺さんに上げる。親戚から贈られた岐阜提灯なども寺へ納めてしまう。(大間々)

正月と盆の十六日 この両日にうまやごいを出したことがあった。うまやごいを出すのは若い衆で、この仕事をしてから遊びに行った。

(浅原・長尾根)

盆の十六日の晩に、かてめしをこしらえて神様？(ジオウサマ)にあげたことがあった。(浅原)

盆の十六日は出かせぎ人も来て、ゆっくりする。馬屋肥いを取る日、五目飯でも作れといい、生臭物を食べてもいい。馬にはくれない。



盆の飾り物。ナスの背に五円玉がのせられている。(上の台)
(板橋春夫 撮影)



盆の飾り物に火をつけるところ。(上の台)
(板橋春夫 撮影)



送り盆。川辺で盆棚の竹を焼く。(小平)
(長沢利明 撮影)

(上神梅)

盆の食習 盆にボタ餅、昼はウドン、夜は米の飯トウナス汁よ。(小平・長尾根)

盆中の食物は、「朝はボタモチ、昼間はウドン、夜はコメの飯、トウナス汁。おらちは盆だちうにナスの皮のおじや」と、盆踊唄にある。

(上桐原)

十三日は、朝と昼はいつものとおりで、とくべつのごちそうはない。夜はいくらかごちそうをする程度。

十四日は、朝はぼたもちが多い。昼はうどん、夜はごはんとうなす汁。

十五日の朝はぼたもち、昼はうどん、夜はこわめし。

十六日の朝はぼたもち、昼はうどん。これをひるばてえといふ。盆様のしよいなわといつて、盆棚の前にかざる。晩にはかてめしをする。



盆送りもと地藏様があった辻へ数戸が集まって送り出す。(下神梅)

十七日は盆がらといって、半日ぐらい仕事を休んだが、とくべつのごちそうはない。(浅原)

十三日：朝はとくにきまりなし。ふだんと同じ。昼も同じ。夜はごはんとうどん。トウナスのもの(トウナスは買ってあげた)。

盆の十三日の晩には、かつぶしを食べるといわれた。このときは魚を買って食べた。こうすると、仏様に口をすわれないという。これは、家中で食べた。仏様は、魚をきらったというが、盆魚はかならず食べるものだといった。新盆のときにも同様。

十四日：朝はぼたもち、ひるまはうどん、夜は米のめしをした。

十五日：朝はぼたもち、ひるまはうどん、夜は米のめしか、ありあわせのもの。

十六日：朝はすしとかかわったもの。(これはぼたもちであきたからである。)ひるは、朝こしらえたもので間にあわせるか、うどん。よるはべつに用意をしなかった。ありあわせのものを食べた。なお、夜、かてめしをつくるうちもある。これは、ジオウサマにあげるといって、仏壇にあげた。(長尾根)

十三日の朝、昼はふつうの日と同じ。夜はご飯をあげ、トウナスの煮たのをあげる。この日は、仏様に口をすわれないようにと、うち中でさかなを食べる。

十四日の朝はぼたもち、昼はうどん、夜はごはんトウナスの煮たもの。

十五日の朝はぼたもち、昼はうどん、夜はごはんトウナス。

十六日の朝はぼたもち、昼はうどん(おひるごはんを食べてすぐ盆様をおくりだす)、夜はしょうゆめしをたいて仏壇にあげる。これは、ジオウサマにあげるといふ。

十七日のことはボンからといって、食べものはかわったものはしないが、仕事を半日休んだ。

盆の十三日の晩には、なまぐさのもの(くさいもの)を食べるといふ。

この晩は、家中のものが、さかなをおかずにして、トウナスをにて食べた。こうすることは、仏様に口をなめられないようにということである。(長尾根)

盆の食事は「朝はボタ餅、昼間はうどん、夜は米の飯・トウナス汁よ」と歌われ、盆の間はこのとおりに作る。(上神梅)

うどんとおはぎ。朝はぼたもち、昼はうどん、夜はごはんとおはぎ。

(神梅)

盆の食事は朝ボタ餅、昼うどん、夜白飯しろめしを十四、十五日と続ける。

(下神梅)

盆踊り 盆踊りは毎晩やっている。最近納涼おどりになった。出しものは八木節が主であった。八木節のことは、むかしは関東節といった。むかしは石投げおどりとか田植おどりもやった。八木節は四つあし、八つあし(八歩いってどるやり方)といつて、なにをやってもおつた。(校庭でやっている)。(浅原)

盆踊りは寺か神社で行なった。昭和以前は松源寺の庭で、それ以後は貴船神社、八幡様で、昭和二十年以降は学校の校庭でやっている。今は八木節だが、ずっと昔は関東節をやった。のんびりした感じの曲で、文句は同じだが曲が異なる。栃木の方の民謡である。踊り手は村の青年達で、ヤグラを立てて、早々と練習を始める。

昔は、柏山、花輪、川内、小平、仁田山、新里、諸町の方まで盆踊りの見物に行つた。歩いて行くので帰りが夜明けになることもあった。各地区毎に日がぶつからないように日をずらしてやっていた。(塩原)

盆踊りは音頭取りが太鼓をたたいて歌い、猫もしやくしも参加して踊つた。堀米源太も貴船神社にきた。一時低調になつたが、最近復活して、景品を付けるようになった。(上神梅)

盆踊りは埼玉県の方の口説みたになつたと八木節。国定忠治、佐倉宗五郎、乃木將軍、しづくし、宿めぐり(黒保根村の)など。場所は、寺や庭の広い家を借りてやった。(神梅)

八木節後援会ができて、青年に中学生も参加して踊る。ここ二、三年で青年が勤め人になり、最近は中学生が中心になってやる。(下神梅)

盆ガラ 八月十七日を昔は盆ガラといって農休みをしたが、今はお蚕があつて休めない。

盆中は生ぐきを使うものではないといつて豆や豆腐など精進料理を食べる。(上神梅)

十七日は盆ガラで念仏をする。鉦をたたき、鈴を回して、「ナムアミダンプツ、ナムアング」と唱えながら、毎戸を回る。お金を貰つて、最後にお寺にいき、その金で菓子を買つて帰る。昔は大人がやつた。今やっているのは、折の内と中組だけである。昔は皆やつた。(小平)

十七日は盆がらといつて、午後の半日休んだ。一把線香を庭に立て、十五様を名ざしてあげる。夜はショウユ飯をたく。馬(牛)小舎のこやしをだす。(上桐原)

盆がらには仕事をしないで、休養をとる。

両親がいるうちは、嫁は盆のうちはお客にやられなかつた。盆がら(十七日)になつてお客に行つた。(上神梅)

嫁に來た年には、盆には里へ帰るものではないといふ。盆が来るから、嫁を(盆前に)里へお客にやれといつた。(浅原)

盆中の不幸 シラジ(流れかんちよう、白と赤、赤はふつうのお産)をかぶしてお棺に入れる。皆きているのに行ってしまふので、避けて先へ送るといふことはない。四十九日にならぬものは皆シラジをかぶせてだした。(上桐原)

観音様(十七日) 石尊様と同じ日に祭る。ここは足尾路の東三十三札所の二十番、如意山観音寺で、渡瀬川を流れて來たといふ石仏を二体祭っている。

お産と目の神で、よくお願をかける。歎音・薬師二体が並んでいる。(下神梅)

九月

二百十日(一日)

百八灯 赤城神社に集つて、この日に百八灯をたてた。神社の回りに、しのの先にろうそくを立て、火をつけた。作物の豊作を祈願するのだともいつた。これは役員の人たちが行なつた。(塩沢)

(旧八月十七日) 山上の石尊大権現の石宮の所へ、新井の近所の者が百八本のろうそくを持って、回りの木の技にろうそくをさして明かりをつけてくる。主に子供たちが登るが、夕方、竹にホコを入れたタイマツに火をつけて持つて行く。警防団員も火の用心のために行く。下の観音様の宵待で、お参りして一緒に祭るが、こちらでは百八灯はしない。

そうそくは封筒を回して寄付を集め、近所の人が世話をしつて買う。山上で百八灯をともしたあと、花火を上げて楽しむ。終つて、下におりてから、地主新井家の庭にむしろを敷いて、大人は酒、子供はジュースなどで、一杯飲む。この行事をしないと、不幸が多いといふ、マが悪いので続けてやる。(下神梅)

八朔(一日) もとは、ハッサクオドリといつて踊りなどもやつた。嫁は盆には里に帰らずに、この日に帰る。親に何かを持っていく。(塩原)

ハッサクは嫁ぎ先でできた野菜や粉をもつて、ヨメが実家の両親のご機嫌うかがいに行く日である。この日の里帰りは、泊ることが許される。実家からは、竹で編んだミ、ザマ、ショウギなどをお返しとして、もたせる。(上桐原)

ハッサクは九月一日、婿が嫁の実家へゴボウやショウウガを持つてお客に行く。帰りにメカイやザルをもらつて来る。(中神梅)

嫁とりして、始めてのハッサクには、行く時、ゴボーを持つてつた。

帰ってくる時にメカイを買ってきた。

「ありゃ新ムコだ」なんてひやかされるから、嫌だった。メカイの代りにザルでもいい。うちはゴボーがなくて、買って持ってた。(中神梅)

ハツサクには葉シヨガを二束持つてく。カタイ家がやる。ハツサクに実家へ行く、なんて家はそうはない。(中・下神梅)

十五夜 (旧八月十五日)

供え物 オマルとススキを十五本、野菜、サツマイモ、サトイモなどをお月様に供える。子供が竹に釘針を刺した道具を作り、遠くからオマルを突き刺して取る。これをやらないと子供達の仲間入りができない。十五夜の供え物は子供にさげられた方がよいが、家によっては盗まれたといって騒ぐ。(塩原)

十五夜はお月見大根(美濃わせ)ができるので、大根の初を供える。子供たちが供え物を下げに回った。家では下げられるように、戸をあけておき、行くと分けてくれた。今の子は欲しがらなくなった。(上神梅)

十五夜にオマルを米の粉二升で十五個作って供える。あとで切って焼いて食う。代りにふかしまんじゅうを作る家が多い。

子供が「下げてもいいかい」と回って来るので、「お月様が下げに来た」といって、供え物を分けてやった。十年も前のこと。(深沢)

八月十五日。山からすすきをとってきて、ダンゴを十五作って、柿やくりをそなえて、月を見る。子どもが、竹の先に針をさしたものを持つてまわり、だんごをさした。とられるほうもよろこんでとられてやった。見て見ぬふりをした。(神梅)

十五夜には、オマルをさげにいった。竹にクギのついたものを使用する。十五夜をすれば、十三夜もしなければいけない。片月見はいけないという。(小平)

社日 小泉、大泉の社日様は百姓の神様で、お祭の時には農具の市

が立つ。遠いからあまり行かない。(塩原)

十月

神送り (十月一日) 神送りだといって氏神様(八幡神社)へお詣りに行く。(塩原)

オクンチ (旧九月九日、十九日、二十九日) 九月には三回オクンチがあり、合わせてミクンチという。赤飯をふかして早朝、われ先にと競って八幡様にあげに行く。重箱一杯持つて行って神様の口につめこんでくる。また、クンチナスといってナスを煮て食べる。(塩原)

オクンチはむらの氏神様の秋まつりのこと。むかしは旧九月九日、現在は十月十五日。この日は赤飯をつくってあげる。(浅原)

はるか昔のオクンチは、九月の九日、十九日、二十九日の三日間だった。神明様のお祭り、十四日、十五日、十六日と三日間やった。産土様のお祭り、おコワをふかす。この日、おコワを一番早く神前にあげたひとに、ご利益があるといわれ争ってあげた。十二時すぎれば、その日の分だからと、十四日はよい祭りで、お社に日番がとまる。十五日は一日中、飲んだり食ったりし、十六日は後かたづけをした。現在は昔の気分はない。(上桐原)



六合神社 (上神梅) (関口正巳 撮影)

十三夜 (旧九月十三日)



天神様の祭日に立てられたの
ぼり旗(小平)(長沢利明撮影)

根、芋、ニンジン、ゴボウなどを表の縁側へ供える。オマルやうでまんじゅうも供える。(上神梅)

片見月 片見月は悪いので、十五夜を自宅で見たら、十三夜も自宅で見るとする。祭り方は十五夜と同じだが、数は三個にする。(深沢)

十五夜と十三夜 十五夜に曇りあれど、十三夜には曇りなし。十五夜に雨が降ると大麦がはずれる。十三夜に雨が降ると小麦がはずれる。十五夜にはカキヤクリを供え、ススキを五本か、十五本上げる。十三夜にはイモ・大根を供え、ススキは三本か十三本上げる。(深沢)

十一月

神迎え(十一月一日) 神様が帰ってこられるので氏神にお詣りに行く。(塩原)

七五三(十五日) 三歳と七歳が帯とき、女の子。五歳がハカマギで男の子。十一月十五日に神社におまいりした。(神梅)

供え物は十五夜と同じだがススキは十三本。十五夜によその家に客に行ったら、十三夜にも行く。片見月はするものではない。

(塩原)

十三夜には大

次女以下はお祝いをしない。親戚から、女なら髪飾り、履物、お金などを贈られる。お返しには赤飯をたいて重箱に入れ、定紋入り、又は鶴亀などの入った袱紗を上に乗せて持って行く。重箱返しには、豆とつけ木を中に入れる。(大間々)

十日夜(旧十月十日) 十日夜には、わらのつとつこにきりもちを二コずつ入れて、地神様、稻荷様、荒神様、坂の稻荷様などに、名ざしであげた。(浅原)

トウカンヤといい、旧十月十日。もちは九日の晩についた。四角のもの(サイノメギリ)と、まるいのと二色つくった。

四角のものは、二センチぐらいのサイノメにきったもので、これをわらのつとつこに三コずつ包んで、むら内の神様とか、仏様にあげた(屋敷の稻荷様、神社、墓場、自分の信心する神様とか仏様など)。一カ所に二本ずつあげた。

まるいものは、十コつとつこに一列にならべていれて、わらでからげた。それをたけとか田にあげた。一つぐらいのこして、あとはもちかえった。

もちをあげに行くのは十日の朝、だれがあげに行ってもよい。ただ、うちの神様には主人(としとりをする人)があげる。うちの中の神仏には、おはちとか皿にのせて、かさねないおそなえもちをあげた。

うちのものが食べたのは、きりもちとかあんびん。これは神様などにはあげない。

だんごは作らない。

麦まきが終ると続いて十日夜である。餅をついて二センチ位のさいのめ型に切り、二、三ケツトッコに入れて各神様(墓を含め正月のオマツをあげた処全部)井戸、物置、お稻荷様、蔵、馬小屋等家屋敷の中、部落の神に進げる。ツトッコは二十位つくる。またお供え餅を田、畑に十ヶ供える。これは一、二ヶを残しあとは持帰る。この日アソビ餅もつくり、これは家族でたべる。

神様全部にお供えをするのは、正月にお松、初午（赤飯）節分（大豆）五月節句（赤飯又は餅、外にシヨウブとヨモギ一本ずつ）オクンチ（赤飯）などである。（浅原）

トウカンヤという。旧十月十日にまつる。

「九日餅に十日だこ」といい、もちは九日の晩についた。もちのことは、トウカンヤモチという。

もちは、たてよこ二センチぐらい厚さ一センチぐらいの大きさに切って、わらのつとつこに入れて、はたけと田の神様に供えた。もちの数は、三、五、七、九コというようにつとに入れて供えたうちもあるし、二つ入れたうちもある。食べるもちは、あんびんにしたり、きりもち（ひらもちともいう）にした。

もちは、十日の朝、神仏に供えた。大体、お正月のときにお松をあげたところに供えた。はたけと田には、うちから近いところへそれぞれ供えた。供えるのはその家の主人で、十日の朝に供えた。

そのほかに、おそなえを神棚、仏壇に供えた。また、台所に積んでおいた米俵の上にもおそなえを供えた。

だんごは、十日の朝、米の粉でつくった。これはうちの神様だけに供えた。

餅をサイの目に切りツトッコにはさんで田・畑に置いた。シンは藁だけのワラデッポウをつくり、「十日夜のワラデッポウ」といいながら土をはたく。大根がよく抜けるようにというのである。ツトッコは十二様その他の神様にもあげた。たべる餅はアンピン餅である。（長尾根）

十日夜は旧十月十日にする。九日夜に米の餅をついて、つけない家には分けてやった。十日夜餅はあん餅・ひら餅など、二、三臼つく。モグラツサギといって、餅を桑の葉にのせて、畑に持って行って、畑の真中に供えた。畑の神に供えるもの。大根は供えない。

餅二個をワラットコに挟んで、外の神様に供えて回った。天神・庚申・八坂・屋敷稲荷など。（深沢）

トウカンヤのモチは九日の夕方につく。形は家によって違う。話者の家では、切りもちを作る。七センチ×五センチほどの大きさ。神棚に丸いはちで、二個ずつ。食べるもちとそなえるもちは同じ。特に名はない。丸いもちをそなえる家もある。（神梅）

のし餅の断ちっぱしを刻んでダンゴとまぜてツトッコに入れたものを、十本も十五本も作り、お神に上げた。屋敷稲荷、村の氏神、その他、十二様などに一本ずつ上げて回った。（下神梅）

十日ダンゴ トウカンヤの日に作った米の粉のダンゴ。神さまにあげるが、数は決まっていない。（神梅）

ウルチ米の粉でダンゴを作り、ますに盛り上げて、床の間のオシラ様に上げた。初年に同様にして供えるが、十日夜にはしないという家もある。墓場にも行って、二粒ずつダンゴを墓に供えた。（下神梅）

九日もち、十日団子（十日夜モチ）といって十日夜の前日九日には、モチをついて、畑に供えたり、川端に供える。十日には、団子をつくる。（上桐原）

ワラデッポウ ムギまきが終わるとすぐ十日夜になる。

わらでつぼうをつくって、子どもが庭などをはたいてあるいた。そのとき、「十日夜、わらでつぼう」といった。これはモグラよけという、

モグラはこの音がきらいだからという。

もちをついて、さいのめに切って、わらづとにニコずつ入れて、屋敷の神様から、むら内の神様（お正月のときにおまつをかざったところ）まで、二十カ所ぐらいあげた。

わらでつぼうをつくって、子どもがたたいてあるいた。わらでつぼうは新わらでつくった。中にイモガラを入れるといい音が出るといった。これは、子どもががつくったりした。うちの庭をたたいたが、近所の子どもがくると、よそへもたたきに行った。これには唱えごとがあつたが忘れてしまった。

ムギについては、十日だねをおろすものではないという。その理由

はわからない。十日夜までにムギまきをしておけといった。

十日夜にはモグラ退治のまじないのために、わらでっぼうで庭などをはたくのだという。(浅原)

十日夜にはわらでっぼうをつくった。新わらをなわでしばった。中には、いい音がでるようにと、イモガラを入れた。これは、大人がつくってやった。子どもたちが、むら中たたいであるいた。このときの唱えごとは、「十日夜のわらでっぼう、もちくって、ひっぱたけ」というもの。これは、モグラをかためるわけだという。大根は、わらでっぼうの音をきいて首をもちあげるとか、ぬけでるといった。

シンにイモガラを入れたワラデッポウを作って、土をたたく。畑、田、庭など。モグラ退治ともいい、これで大根がよく伸びるともいう。土をたたくときの唱え言は「トウカンヤ、ワラデッポウ、モチクツチャ、ブツタケ」。そして餅を小さく切って、ツトッコに入れ田の神と畑の神(正月に幣束を立て、お松を立てた所)にあげる。家の人は四角のノシモチをたべる。(長尾根)

イモガラに藁を巻いて、家の庭を子供らが集まって叩く。ワラデッポウがちぎれるまで叩く。これはモグラを退治するためのまじないである。

十日夜にはわらといもがらで、わら鉄砲を作って地面をはたいて回った。

もぐらを防ぐまじないだった。もぐらは土手の中を通して土手が崩れる危険が多かった。しかし、畑の虫を食べてくれるのでよいといわれていた。(塩沢)

新わらに芋のジクを一本入れて巻き、ワラデッポウを作って、庭先で地面をたたく。麦蒔きを終えて、モグラ退治の呪いにする。

「十日夜、十日夜、夕飯食ってぶったたけ」
大根などは供えない。

旧十月十日はトウカンヤで、子供が藁にイモガラを入れて、藁鉄砲

をつくり「トウカンヤ、トウカンヤ、ムグラ鉄砲、ブツバナセ」といながらたたいた。もぐらふさぎであるという。(上神梅)

トオカンヤには藁でこしらえた藁鉄砲を四五人でトツカン、トツカンと「トオカンヤのワラデッポウ」と唱えながら打って歩いた。昭和十年頃にはイモガラの太いのをとってきて藁鉄砲のかわりにやった。この頃は唱えごとはなくなっていた。(二軒在家)

ワラデッポウはミヨウガ、イモガラを入れる。音がよくなる。その音を聞いてもぐらが逃げていくという。子どもがワラデッポウをつけて、村の各家をまわって庭をたたく。家では、何も出さない。

「トウカンヤ、トウカンヤ、モグラモチはお宿にか。」といってまわった。(神梅)

子供がワラデッポウを作って、地面をたたいて回った。「九日餅二十日ダンゴ、サンザクツテブツタケ」と唱える。家の回りをたたけば、モグラがもたせない(持ち上げない)という。(下神梅)

子どもたちが、十日夜、十日夜のワラデッポウ、といいながら、ワラ鉄砲で地面をたたく。シヨウガの葉を芯にすると、よい音がでる。

モグラたたきだという。ダイコンとの関連をいうこともある。使ったあとのワラ鉄砲は、特定の場所ではなく、そこらに拾てる。(上桐原)

大根の年取り トウカンヤのことを「大根の年取り」ともいう。「ココノモチとトウカダンゴ」といって、九日に餅をつき、十日には団子を作る。切餅を二個ずつ藁のツトに入れ、氏神、大神宮、機神、稲荷などいろいろな所に供える。十日夜には麦をまくものではない。(塩沢)

十日夜には近所の庭を回って、「トウカンヤ、ワラデッポウ、ヨウメシクツテ、ブツタケ」といってたたく。

十日夜の餅をつく音で大根が育つといわれている。(小平)

十日夜は大根の年取りという。縁側には供えない。(上神梅)
ダイコンの年とりで、トウカンヤのもちをつく時に、からみもちを

食べた。まいて百十日くらいでとれるから、とって食べてもいい。

トウカンヤにカカシを立てることはなかった。

トウカンヤに山にのぼることはなかった。麦まきなどで、「十日たねは、おろすものではない」といわれた。よくないことがあるといつてきらった。

よそに出てくる人が帰ってこなくてはならないということとはなかった。(神梅)

十日夜に縁側のハナ(先端)にススキや花を飾り、まんじゅう十個、十五個を供えた。箕に野菜をもったり、大根二本入れたり、栗・柿・サツマイモなども供える。庭には供えない。(下神梅)

イヌコ餅 麦まき終わった時に、餅をついて畑に持って行って供えた。モグラがもぐらないように、モグラプサゲとして畑の真中に置いてきた。今はダンゴを作って汁粉にして食べたり、ふかしまんじゅうを作って食べる。(深沢)

イノコさま、イノコモチ、聞いたことがない。(神梅)

恵比須講(二十日) 一月二十日は朝恵比須。これは、えびすさまが商いに出かける日だという。朝、赤飯をたいて祝った。一月のえびすこうはいそがしかった。

十月二十日は夜、米のめしで祝う。

このときは、えびすさまが帰ってくるので夕飯にごちそうをした。えびす大黒の掛軸をかけて、サンマ(尾頭付)の生なまをあげ、けんちん汁、ミカン、カキなどをあげた。えびす講にはたねのであるものをあげるものだという。(浅原)

十月、えびす講という歌があるが、えびす講を実際にやるのは、十一月二十日である。この日には、ひのみや神社におまいりする。塞銭をあげるほかに、塞銭箱からこぼれたものを、種銭として拾ってきて、翌年のえびす講に二倍にかえす。えびす様には、金福のご利益がある。あまりぱつとしないと、塞銭をたんとあげないから貧乏してい

るのかな、などという。すると家内安全以外何も頼んだことはないからね、とやり返す。

家内のおまつりとしては、えびす様に新鮮なタイ(例が少ない)やサンマ、いくらかのご馳走、それに上げ底した一升ますに、家族それぞれが持前の金をお高盛りにしてあげたりする。また、家内のもの同志で、家でかざったさざげものを買って風習がある。ごはんのお高盛とか、鯛のお魚とか、かきあげとか、おみおつけとかを何百万円と値をつけ、それぞれ買ったものがいたたく。(上桐原)

エビス講は旧十月二十日、新十一月二十日。春と同じ。一月二十日に家を出たエビス様が稼いで帰ってきた祝をする。作物が何でもできる頃なので、いろいろなごちそうを作って供

える。柿、けんちん汁は必ずあげる。(塩原)

エビス講は十一月十九、二十日。この日の前に畑仕事を終わすように、目標をたてる。(深沢)

十二月二十日の恵比須講の日は、はだかにならないようにと、お湯に入らなかつた家がある。(高津戸)

正月と秋のえびす講のときには、桐生のえびす様へお参りに行った。ここから、気のあつたものとつれだつて、あるいて行った。(長尾根)

エビス棚 えびす様はかせぐ神なので、台所へ北向きの棚を作って上げる。斜めに北を向ける。南向きに上げると、金が出るという。棚

の下は人が通り歩かない所がいい。

エビス講には床の間で祭る。(上神梅)
エビス様に宝珠の玉の形にシメ縄を作って供える。(深沢)

十一月

川ビタリ餅(一日) この日はカビタリモチだといって餅をつく。(塩原)

十二月一日には、カワビタリモチをつく。カビタリモチともいう。モチをつく音で、ネズミが逃げる。もちを供える場所は、神様、仏様、おかま様などであるが、現在は、ほとんどつかない。(上桐原)
カワビタリモチは十二月一日について食べるもち。河童に、おさわらないためという。

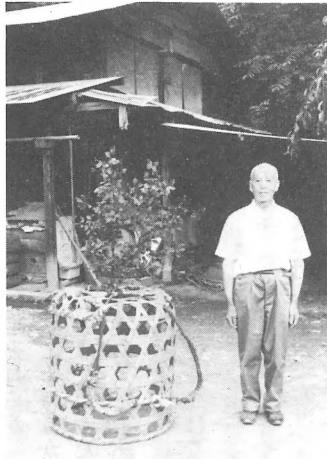
十二月二十八日につき、正月のしたくとしている家もある。(神梅)
川ビタリ餅は金子イッケでしていた。(下神梅)
ツジユウ餅 新井イッケは正月の餅がつかないで、暮に餅をついた。豆木に餅を二個つけて、トボにさしたが、名は不明。サマダンゴについては知らないという。(下神梅)

コト八日(八日) 春と同じ。十二月のことは「コト始め」で、正月のことを始める日。(塩原)

事八日は十二月八日、直径三尺ほどのキノハツカゴに柀を一本挿し、地面にかぶせておく。ダイマナクをよける。(塩原)

シマイコト八日。ヒイラギを、目かえにさして、目かえを、長竿の上につるす(いつける)。この日、来る魔物のことを、大目玉といった。かまは出さない。(上桐原)

霜月十五日(十五日) この日は祝いで、なんのお祝いをもしてもよいという。七つ



事八日のキノハツカゴ(塩原) (撮影 上野勇)

のおびときもこの日神社へおまいりに行く。(浅原)
十二月十五日をシモツキ十五日という。(神梅)
冬至(二十一日)ユズをとってきて風呂に入れる。

トウジトウナスといってトウナスを煮て食べる。コンニャクも必ず食べる。コンニャクは土払いといって腹の中の泥を吸い取る。また、トウジソバといってソバを食べる家もある。(塩原)

冬至と霜月十五日は暦をみずい日であるという。トウナスを食べると中気にならないという。ユズ湯に入る。この日ユズをミソヅケにして、それを節分に豆と一緒に食べる。また、この日にコンニャクを食べる。「一年中の砂はらい」といって、腹の中の砂をはらうという。(小平)

カボチャをにて食べた。コンニャク、ユズも入れた。冬至トウナス、ユズユニタエルに通ずるといふ。(神梅)

ススハキ(二十三日) 十二月二十三日は日を見なくてよい。建前でも普請でも何でもしてよい。ススハキも大抵この日にする。(塩原)
すす払いは、もちつきの前日、あるいは、前々日に、家中総出でする。ふつうは、二十六日である。(下桐原)

ススハキは十三日が一般的であるが、それにこだわるということはない。竹でホウキを作つてやる。神棚から先に特に丁寧にする。その年の幣束を集めて、川に流したり、屋敷稲荷におさめたりする。(谷田)
すすはらいは二十五、六日の都合のいい日にする。(神梅)

煤払いは冬至にした(十二月二十一日か二十二日)。(高津戸)

歳末諸事

暮の市 暮の二、七の市(十二月二十二日と二十七日)で正月用品を売り出す。トビ職のおかしらが、門松、輪飾(ワジメのこと)などを街の一角に小屋がけて売る。買って来た飾りものは三十日に正月棚その他にかざりつける。輪飾りは、稲荷様、神棚、仏壇、門口に松の枝とともにかざる。ていねいな家では、井戸、便所、カマド、墓の入口などにもかざる。(高津戸)

大間々の暮の市で、正月の供え物をのせるオシラキを買う。(上神梅)
歳暮(十五日〜二十日) 塩びきシヤケ、ミカンなどを贈る。お返しにはネギの束でも返す。大体半額くらいのものを返す。返さない家もある。(塩原)

餅つき(二十八日、三十日) クンチモチ(二十九日)とイチヤモチ(三十一日)はつくものではない。トウモロコシモチ、アワモチもよくついた。(塩原)

もちつきは十二月二十八日。九日もちはずくものではないといわれた。十二、三人の家で一俵はついた。(神梅)

餅つきは十二月三十日。臼の下に藁を十文字におき、白にはシメ縄をはる。餅は、米の餅(白米だけ)、ツキマゼ(米と粟・黍・蜀黍などを混合したもの)などをつく。米の餅はお供えと、来客用につき、ツキマゼ餅はふだん家の者の常食用につく。(高津戸)

一夜もちをつくなといひ、三十一日のもちつきは避ける。たいていは、二十八日から三十日のあいだに、つきあげる。(下桐原)

もちつきは、二十三日の夜がいちばんいい。たいていは、二十八日につく。二十九日は、九日もちというのでいけない。三十日もよい。三十一日の夜ももちつきはいけない。一夜もちは、よくないという。(上桐原)

餅は二十九日か三十日につく。(谷田)

門松迎エ(二十八日、三十日) 餅をつく日に、お松様も迎えてくる。アキノカタの山に行つて松を切つてくる。シメ飾りは家で縄をなつて作る。輪飾りはオエビス様、大黒様に、シメはミカン、和紙をつけて各所に飾る。大神宮にはコブをつけたシメ縄を飾る。(よろこぶの意)
大間々では二十七日から正月市が立ち、オシメなどを売る。(塩原)

お松迎えは日のいい日と方角をみて決める。二十八日



正月用のシメ飾りを売る出店(大間々)
(長沢利明 撮影)



歳末になるとシメ飾りの市が立つ(大間々)
(長沢利明 撮影)

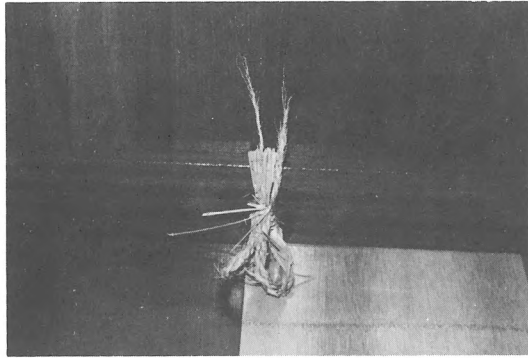
がふつうである。(上桐原)

十二月二十五日。山へ、おさごと、ごまめの頭つきを持って行き、山の神様におそなえして、松の枝を切つてくる。しんは切らず、枝をとった。(神梅)

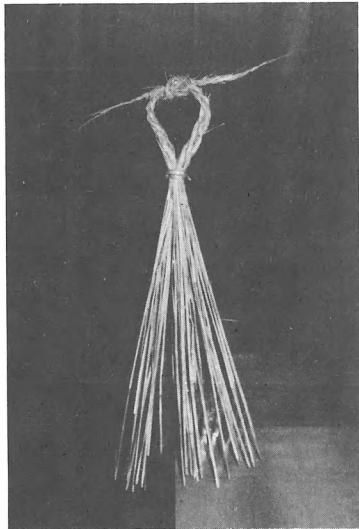
松迎えは十二月の二十五日頃山へ枝松をとりに行った。どこの家の松でも咎められなかった。オサゴと頭つきをもって山の神様(石宮がある)にあげてから伐つてきた。この山神様を十二様とも呼んでいる。(高津戸)

十二月二十五日が、お松迎え。山へ入つて正月の門松にする松の枝を伐つてくる。どこの家の持ち山の松でもよい。別にとがめられるということはない。オサゴと、おかしらつきを山の神様(石宮が祀つてある)にあげてから伐つた。(高津戸)

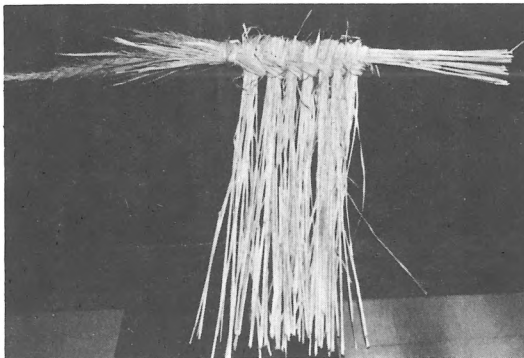
三階松がいいとされている。いい日(大安日)とアキの方をみて松を迎える。(小平)



大黒様のシメ飾り (神梅)
(井野修二 撮影)

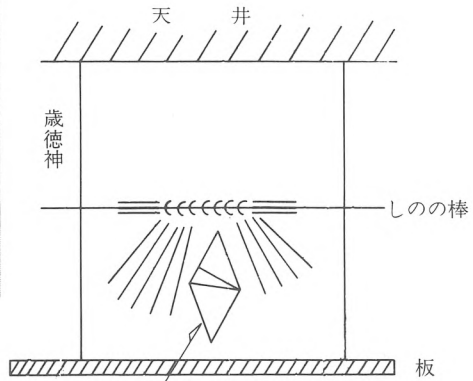


シメ飾り (ふつうの神様用)
(神梅) (井野修二 撮影)

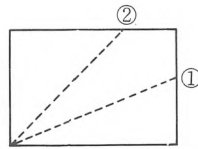


歳徳神のシメ飾り (神梅)
(井野修二 撮影)

写真のもの



半紙を折ったもの。右が
前になるようにおいた。



シメ飾り わらで宝船を作つて供える家もある。宝珠の玉飾りを作つて、エビス様に上げる。(上神様)
三十日にしめかざりをする。一夜かざりをしてはならないといわれた。うすにもしめなわをかざつた。(神梅)
しめなわ作りは十二月二十七日。歳徳神、大黒さま大神宮、おいなりさま、他の神様用と四種作つた。(神梅)
しめ飾りは、二十八日に作りはじめ、三十日までには、お飾りできるように準備する。藤生本家では、ふつうの神棚はこぼうじめを飾る、また、毎年恵方の角に、三角形の棚をつくつて、歳神様をまつり、そのむかい側に御魂様をまつる。その三角の棚に鳥居ができていて、その鳥居のかっこうのしめ縄をつくる。(下桐原)
松飾りは一夜飾りは良くないといつて、大みそかの日は避ける。ふつうは、二十八日である。九の日もきらつた。主人が、自分の山か共

有山に出かけて、枝の小さいのをとって来る。同じ日に、しめ縄やしめ飾りも作りはじめ、三十日までには、お飾りできるよう準備する。

門松を一对とほかに、屋内では、歳神様、神棚、大神宮様、多比す様、かまど神様、屋外では、屋敷稻荷様、井戸神様、家畜小舎、ご不浄などに飾る。

現在では、おそらく、ふつうの家では、ひとの山からもらってまですることは無いということになって、神棚を飾ればでんになる。さらに簡単なのは、門松と、あとは床の間に生花でいどとなる。

神棚の松は、ていねいには、三尺くらいのナラの木の細いのをうちつけた上に、三がいの松をとりつけて、しめ縄を一本張ることになる。
(下桐原)

上神梅の福田勘助家では餅つきも、お飾りつけも、すべて十二月三十一日にやった。普通は一夜飾りをするものではないというが、福田家は家例として一夜飾りである。(上神梅)

正月飾は冬至後都合のよい日にした。主に二十八日から三十日にする家が多く、正月の餅をつく日に飾ること大部分である。オシメを太神宮、恵比寿様、竈神様、機神様にあげた。竈神様のところは、荒神様の分もあげるので二本あげ、機神様は機あしにあげた。

門松は、松の外に竹のシンコ(新竹)をあげる。この外に屋外では稲荷様、庭、井戸、物置、倉などにも飾った。(高津戸)

神棚 正月様をまつる神棚は、三角板になっていて、部屋の間の上

に吊した。年によってアキノカタをみて、その方面に吊した。(高津戸)
歳神 オシメサマ(神明宮―大間々の鎮守)から、伊勢神宮のお

礼を受けて来る。歳徳神と印刷されている。トシガミサマは、卯の日の卯の刻に来て、卯の日の卯の刻にお帰りになる。(高津戸)
餅を供える神 年神、大神宮、エビス様、オカマ様、コウジン様、井戸神様、水神様、稻荷様、床の間、玄関、機織を職業としている家では機神様。(谷田)

松を立てない家 妻沼の聖天様を信仰している家では松でなくクヌギを立てる。聖天様を信ずると、七代先の福を先取りしてしまうという。(谷田)

大晦日(三十一日) ミソカツバを食べる。(塩原)

晦日ソバを食べると小遣い銭に困らないという。(小平)

大みそかにはそうじをするくらい。年こしそばを食べ、早く寝てしまふ。朝までおきていたことはない。(神梅)

ミソカツパライ 年中パライともいって、不幸のあった家では、成満院で幣束を作ってもらって、三本辻に持っていくっておさめる。(小平)

除夜の鐘 せいおん寺では、大みそかに、住職と近所の若い衆が除夜の鐘をついた。一月三日のお祭りがあるので、近在のひとは、元三大師とよんでいるが、子どもたちは、かんがん大師といっていた。鐘は、戦時中供出して、現在はない。

ぜんしろう寺は、壇家の衆が集まり、鐘をついている。(下桐原)

オシラキ 正月神様に食事をお供えする木の皿のようなもので、正月前にどこから売りにきた。(高津戸)

奉公人の休み 十二月の末日から、正月十五、六日まで。鬼の首も許されるといわれた。(神梅)

口頭伝承

はじめに

伝説は、道玄の娘・伊勢ころがし・腰掛石・狸石・念仏石・弘法水・桜峠・山中・オイドその他の地名伝説が集った。伊勢ころがしは問答に勝って伊勢神宮の御神体を、塩原に遷したという話である。他に類話があれば知りたいものである。

昔話は、すずめとつばめ・めめずとへび・ほととぎすの兄弟・猿掣入・蛙と猿の餅競争・馬鹿掣・和尚と小僧などと、雑煮、戌の日に麦蒔きをしないいわれが集った。「時鳥と兄弟」の昔話は、旧の四月下旬から五月上旬にかけて夜通し鳴く時鳥の悲しい声を耳にする生活、やがて厳しい田植え期を前に、たまたま賞味すべき山芋を掘って節句を祝う生活を通して実感されていたものである（「昔話研究入門」三弥井書店）という文を、最近読んだので、興味を持ったが、ここでは山芋ということは、すでに失われている。

怪異には、きつね・むじな・かっぱ・山犬・人魂・あずきとぎが登場する。他ではあまり出て来なかったむじなが、ここでは顔を出す。

命名の、採集されたあだ名の中には、ツーツートキさん（どんな話でもすぐ通ずる）へーラのイサさん（いつもへーラへら笑っている）などユーモアのある名が多いが、中でも、しらみのいきどりひょうきんたんごと呼ばれる人の、しらみをつかまえると、赤城山へ行って子を産んで来いといって、逃がしてやる話はおもしろい。

諺には、一種二肥三手入、家畜なければ肥料なし、米は土で作れ麦

は肥料で作れなど、これまでの調査地と比較して、農業に関するものが特に多かった。

「小さい時はお父さんに似て、大きくなるとお母さんに似るものなんぞ」の答はあけびという謎を、私は始めて聞いた。「ことば遊び辞典」を見ると、この謎と同じ謎が、津軽と越後とにある。あけびの生えるところには、同じような謎が生れるものか、それとも伝播者がいるものか興味がある。なわを手でなうことがなくなれば「拝めば拝むほど長くなるものナ―ニ」という謎も、使われなくなれば、させる。かぎ竹の謎も、やがては姿を消すだろう。

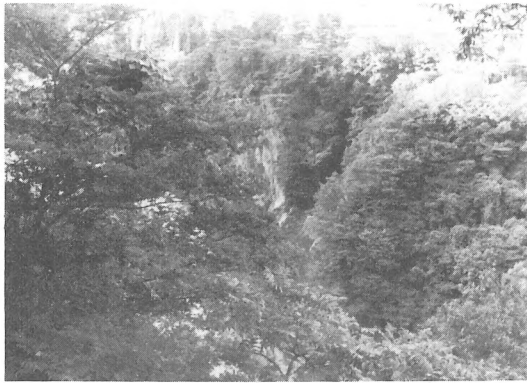
私が渡良瀬川流域の方言調査に歩き始めた昭和十四、五年頃は、虫のあめんぼのことを、足尾の子どもたち（小学六年の男女）の四四％はアベカワといい、東村の沢入ではカヤが四二％、花輪では七四％、黒保根では三四％、福岡では一一％、黒保根ではカヤカリ（三九％）ともいい、大間々はカツブシ（六〇％）だった。その他、川内・相生・桐生ではほとんどがマンガだった。しかし二十年経って、同じ地域を廻ってみると、どの地域も、アメンボ・アメンポーの一世になってしまった。今度の調査では、中下神梅でカヤ、小平でカルカヤの報告を得た。カルカヤは、私のかつての調査には、見出されなかった貴重なものである。（上野 勇）

一、伝説

道玄の娘 赤堀道玄の可愛い娘、赤城様を信仰して生れたので



伊勢ころがし (塩原) (上野勇 撮影)



渡良瀬川の対岸から見た伊勢ころがし (上野勇 撮影)

あった。十七才になって赤城に行きたいという。行かないようにとい
うがどうしても行くとい、しょうがないので連れて行ったが、沼に
入ったきり姿が見えないので大騒ぎになった。ひとときりたつたら大蛇
の姿になって湖の中から出てきた。道玄は金があったから干してしま
うといって干した。このとき小沼から粕川、新里村を流れている川も
堀ったのである。

どこの村でも娘が十七才の時には赤城に登るものではないという。
そして道玄の娘が湖に入ったのは四月八日であったので、毎年一回そ
の日には赤飯をたいて重箱に入れ、沼に浮べてやる。するとスーッと
沼の真中に渦を巻いて入り、あとで重箱は空になって浮いてくるとい
う。道玄の娘は大蛇の生れ代りだったのである。湧丸のお寺にはこの
娘の用いた帯があるという。(浅原)

伊勢ころがし 伊勢参りの代参が行くと、今年の上州の人の問答を
受ける番だつて、問答つてのは、昔神社仏閣でやった。絶対に向うが
勝つわけになつてた。負ければこつちがいくら奉納するつて、神社
が奉納金を取る手だつた。その時も問答立てた。その時こつちが
勝つた。負ければ御神体をかける。こつちは千両箱二つ。絶対勝つと
思つて、誓約書をと리카わした。行司役が上州が勝ちだと、勝ち名の
りをあげた。当時連中はこれが立つわけだ。こつちがよもや勝つわけ
がない。腕づくで取ろうつて、忍者まがいのが追手になつて来た。
その当時この川(渡良瀬川)には、橋がなくて、渡しなんだけど、こ
こへすぐ入ると、判るつてんで、それをくまますために、向の袈裟丸
山を登つて、それからこつちへ移つて、八木原通つて入つて来た。ど
こをどう通つて来たか、ここへ来て気がゆるんだのか、地元のものも、
その御神体を奪われかかった。その時渡良瀬の河原の渚で、それを切

つたんだつて。それが抱いたまま川へ飛び降りた。それが
伊勢ころがしという場所で、お伊勢さん抱いたまま飛びこ
んだから、塩原に神明の森つてあつた。今は畑になつてい
る。そこへ持つて行つて祭つた。当時は立派だつた。上野
十二社つてのがあつて、その一つだ。問答は、身ぶり手ま
ねでやる。その時は、天文のことが出た。天文のことは専
門だつたのが行つた。(塩原)

大岩の蛇 大岩に蛇が巻きついてた。今は埋まっちゃ
つて、ほんの一部出ているだけだ。わたしのおふくろのじ
いさんが、鉄砲でぶつた。ぶちはぶつたが、ぶちはぶつた
がと、三日間いい通して、もつこやみで死んだ。(塩原)

神明様 伊勢の天照皇大神宮のご神体をまつつていた。
それは、松島小平太信清という人の先祖が伊勢に行き問答
に千両箱を賭け、相手が、皇大神宮のご神体である曲玉、
剣、鏡を賭けて、勝つたので持ち帰つて祭つたといわれて



妙見様（権現様）の腰掛石（下神梅覚成寺）
径 130 cm × 95 cm 高 65 cm （関口正巳 撮影）

という。（桐原）

妙見様（権現様）の腰掛石 日光に徳川家康を祀る時、天海が家康の骨を背負って裏街道を来たが、坂を下って右へ行くか、左へ行くか、迷ってフンチガエをした所がある。そこをフンチガエと呼び家号もある。道の傍に天海が腰掛けた石があった。そこに妙見様を祭っていた。今はその石を覚正寺の境内に移してある。

妙見様は亀に乗って、地を守る仏で、天海が寄進するため持って来たという。

天海は金の独銚を置いて行ったが、今は紛失した。（神梅）

神梅 昔、安倍貞任がそむいたのを討つため、源義家を通つた時、土地の人が梅の花を棒げたので、神梅と名付けたという。（神梅）

いた。地名に「伊勢転し」というところがあり、それを持って来た時、後をつけて来た人を取り返しをする中に転んだところだという。ご神体は、その後盗まれた。（塩原）

渡良瀬川のアワ測というところに大蛇がすんでいた。これを先祖がしとめて家に持って来たら、みんなたまたま腰をぬかしたという。頭の骨だけを切つて保存し、雨乞いに使つたが、のち新里村の常広寺に収めたところ、同寺が火災にあつていっしょに焼失してしまつた

狸石 高瀬友平家の裏に狸石と呼ばれている平らな大石がある。正月の飾り物などはみな、ここへ収めた。（狸原）
念仏石 セドガ原と桐原の間の山林中にある。昔、石がうなり出したので、尼さんが折つて「南無阿弥陀仏」と書いて供養したら、うならなくなった。（桐原）
念仏石の銘
元禄十二大八月
南無阿弥陀仏 靈位

梵怒禪定厄〇〇〇〇（桐原）
八王子様と嵯峨宮 小平川をはさんで二つの神社があるが、昔神様同士が戦争をして、八王子様が、胡瓜畑で足を取られて敗けたという。だから八王子様の氏は胡瓜を作らない。氏子には穴原という姓が多い。（谷田）

あまんじやく 塩原にあまんじやくという地名がある。ここに祭つてある庚申様は、道ばたに置くよりいまま少し奥の方に寄せた方がいいだろうと、七八人かかつて、やつと移したが、元に戻りたいというので、戻す時は、実に簡単に来た。（塩原）
薬師様の弘伝水 弘伝水という名だけで、伝説はなし。湧水をわか



あまんじやくの庚申塔（塩原）
（上野勇 撮影）

して鉱泉にして人を入浴させたことがあつたが、風儀をみだすとてとりやめになつた。（桐原）
石原の三本兄弟松 石原ミネ家には尾



背面の塔申庚のくじゃま
（塩原）（上野勇 撮影）

敷内に大きな松があり、火事があったも登れば、どこでも見えるというのがある。これは三本の兄弟松で、上桐原と間坂にあった。大

昔、石原本家からワカサレになった時に植えたものだという。（桐原）
弘法大師の杉 桐原山際に弘法大師の杉があった。そこには水がたまっていた。（桐原）

メンドリ畑 あまり税金が高いので作りきれなくなった。誰ももらい手もなかったのでメンドリ一羽をつけてやったという。（桐原）

矢畑 手振山では、上杉謙信が手をふったという。この山に上杉がこもり、要害山と戦争をしたとき、この畑に両軍の矢が落ちて来たという。（桐原）

観音堂 寄せっこするのに、膳碗を借りたいというと、出して寄こしたが、どこかで痛めてなしたら、それから貸さなくなった。（塩原）

桜峠 小平から川内へぬけて、小倉峠を越えて桐生へ通う道の峠のこと。正福寺（天台宗）と雲祥寺（曹洞宗）との間でもめぐことがあり、峠で口論して福寺が勝って、小平の阿久津家は正福寺の檀家になったという。（谷田）

山中 大間々の方から見て黒保根村や東村の方の全体をさして山中（さんちゅう）という。渡良瀬川流域の黒川郷をさしている。小平でも茂木や狸原は山中的な所である。（谷田）

オイド オイドは昔、要害山と手振山とで戦争があった時分に偉い

人が飯んだので御井戸と称している。また、一説には黒保根村城の河久沢能登守のやかたを攻めにいく軍が、良い水はないかと武士が捜しまわったところ、良い水が出ていたので、その水をさし上げた。それで、その井戸をオイドと尊称したので、この地名が生まれたという。オイドは桐原上ノ台にある。（上の台）

白井権八供養の燈籠 粕川氏墓地にあり。粕川家は、白井権八に穀を送っていたので、権八が殺されたとき、その供養のためにつくったと伝える。（桐原）

桜田門の変 うちのひいばあさんが店番してたら、わたしは江戸から来た。今朝井伊掃部頭さまが殺されたって話を聞いて出発した。現場は見えない。その頃廻りくねって三十里ある。それを歩いて、夕刻ここに着いた。どこへ行って泊りかって聞いたら、花輪へ行って泊る。大雪の中を歩くのが早いから、胸につけた饅頭籠が落ちなかった。（塩原）

カロウト畑 成満院の上の畑で、空洞があつて、そこに宝物が埋められているという。実際に土方が掘ったこともある。（小平）

ミソと小判 エバラ大尺は、軍用金を運ぶのに、ミソにみせかけたということである。（小平）

二、昔 話

むかし、いろいろばたで、おばあさんたちから、むかしばなしを聞いたことがある。時期はおもに寒いころであった。

長い話してくれという、「天上から長いふんどしがさがつてきた。いくらたぐっても、たぐっても、たぐりきれなかった。それで市が栄え申した。」といった。これが長い話だという。

話が終ると、「市が栄え申した。」という。

この辺で聞いたむかしばなしとしてはつぎのようなものがある。しばらくのあいだ話していいないので、こまかいことは忘れてしまったが、

聞いたことのある話のあらましを記してみることにする。

○ネコのはなし

お釈迦様が病気で寝ているときに、お母さんが、きんちゃくにを入れて天から薬をさげてくれた。それをネコがとんでいって、薬を食べてしまったという。そのために、ネコはどこまでもおにだといわれている。(吉原シモさん、明治二十二年一月二日、浅原の生まれ)

○スズメとツバメのはなし

むかし、親がなくなつたときに、スズメは着のみ着のままかけつけたという、ところがツバメは紅白粉をつけて着かざって行つたのでおくれたという。

そのために、スズメは米をさずかつて、米が食べられるが、ツバメは泥で巣をつくるようになったという。(吉原さん)

昔、お釈迦様の具合がわるい時、あらゆる鳥に通知がいった。雀は着のみ着のまま、すぐに駆けつけた。燕は、ちゃっかりお化粧して燕尾服を着ていった。雀はおかげでお釈迦様の死に目に会えたが、燕は間に合わなかった。

そこでおつきの人は、雀には、どこに行つてもある穀類を餌に与えてやった。が、燕の方には、「お前にやるものは、地上には何もない。」といった。それからのち、燕は、寒い国から暑い国まで飛び歩いて、虫を食べているのだ。(桐原深沢富四郎さん)

○馬鹿むこのはなし

馬鹿むこが嫁さんのところへ行つて、だんごをごちそうになつた。あまりうまくつたので、その名前を聞いてきた。忘れないように家へ帰る途中、あるきながら、「だんご、だんご」といっていた。ところが、途中に堀があつたので、「どっこいしょ」といって渡つたところ、そのあととはどっこいしょといいいながら家へ帰つてきた。うちへ帰つてきて、

嫁さんに「どっこいしょをつくつてくれ」といったら、そんなものはないといわれたという。(吉原さんの話)

馬鹿むこが、あついお茶をこうこ(沢庵)でかきまわせば、お茶がさめるといふことを聞いていた。あるとき、風呂があつたといつたら、そのむこが、こうこをもつてきたという。(福田ハツさんのはなし、明治二十六年十月十八日、浅原の生れ)

○ホトトギスのはなし

あるところに兄弟がいた。あるとき弟が兄にいいもの(おいしいもの)をくれた。兄は、弟がこんなうまいものをくれるのなら、弟はどんないいものを食べているんだんべえというので、弟ののを切つた。腹の中から、山芋なら、あおつくびというまじりところがでてきた。兄は弟に申訳ないというので、わびのために、「ぼつとつきました、ぼつとつきました」と鳴くという。

ホトトギスのことはボウコンドリともいう。この鳥は姿がみえないという。夜中でも鳴いていて、一日に八千八声鳴くという。(福田さんのはなし)

○ほととぎすの兄弟

昔、兄弟のほととぎすが住んでいた。兄はめくらだった。兄はひがんで、弟は自分でうまいもの食つて、自分にはまずいもの呉れる、といった。そこで、弟ののをさいてみたら、自分よりまずいものだったので、それからのち、ボット ツツキッタと鳴くようになった。(桐原深沢富四郎さん)

○さるむこのはなし

むかしあるところにおじいさんがいて、はたけで草むしりをしていた。おじいさんが、「このはたけの草をむしってくれれば、三人いる娘のすきなのを(嫁に)くれる」といった。それをサルが聞いていて、草をむしってくれた。

サルは一番しまいの娘をくれてくれてくれといつてきた。おじいさんは末娘をサルに嫁にくれてやった。

娘が実家へお客に来ることになった。途中に花が咲いていた。その花を折ってくれと娘はサルにたのんだ。サルが木にのぼって、枝をさしてこれかといったら、娘はまだその上だといった。そうしてサルはだんだん上の方へのぼっていつて、とうとう枝が折れて、サルは木から落ちてしまった。サルは川に流れながら

「猿沢に流れる命はいとはねど、妻の気持は無情、無情」といったという。(福田さんのはなし)

このほかに、へビ婿のはなし、桃太郎のはなし、メメズとへビのはなし(むかしはメメズに目があり、へビには目がなくなつたをうたっていた。あるとき、目とうたを交換した。それから、メメズは土の中でうたをうたい、へビは目があるようになったという。)利口な小僧のはなし(和尚の外出したあとでぼたもちを食べてしまつて、それを仏像がたべたことにして、口のまわりにあんこをつけておいたという)などがあつた。(浅原)

○アマンジャク

昔、アマンジャクの父娘がすんでいた。父の誕生祝を、娘は派出にしてやろうと思つた。併し、父は、派出にするといえ、いつも何でも反対のことをいう父のことだから、というので、その時は、誕生祝はしない方がよい、と言つた。そしたら、その時は、その方がよい、ということ、ついにお祝いはしてもらえなかつた。(桐原)

○蛙と猿

昔、昔、蛙と猿が大間々の市に行った。道に稲の穂が落ちてたんでそれを拾つた。そこで、ふたりで、田んぼつくるべやということになつて帰つた。

さて田を耕そうと蛙がいいだと猿は頭が痛い、といつて出ない。

蛙はやむなくひとりで耕した。ナエオコシ(種播き)をしようと蛙がいうと、猿は腹が痛い、蛙さんやってくれやあという。これまた蛙がひとりでやった。田植えの時も、田の草とりも、何とかかんとか理由を構えて猿は働かなかつた。そのたびに蛙はひとり仕事をした。稲はどんどん成長してたいへんできがよかつた。いよいよ刈ろうとしても、また猿は駄目、稲こなしもだめ、結局、作業という作業は、みんな蛙がしてしまつた。

いよいよ米になつたので、これで餅をついて食んべやということになつて、これはふたりでついた。蛙は、仲良くふたりで分けようといつたが、猿は、ひとり占めにしようと思つて、白ごと荒神山に担ぎあげ、転がり落としてとつたもんバッコ(がち)にしようと言ひ出した。蛙が反対しても、お構いなしにひとり白を荒神山に背負い上げてしまつた。止むなく蛙もついて登つた。

山頂につくと、「用意、ドン。」で、蛙は白を転がり落として、その跡をまっしぐらにつけて下りた。餅は白からこぼれ出してあたりの木々にひっかかつたが、それに気づかない猿は、構わず白のあとをつけた。白が止つたところに駆けつけたときには、白は空っぽになつてゐた。

一方、蛙は、木にひっかかつた餅を食べ食べ下つた。しかし、とつたもんバッコということだから猿には権利がない。いかにもほしそうにしてしたが、やがて「餅は、縦に食うもんじゃあないよ。横に食うもんだ。」といった。蛙は「縦に食おうが、横に食おうが、おれの餅だもの、勝手さ。」といつてひとり食べていた。(桐原深沢富四郎さん)

むかしばなしの結語

「市がさげえもうした」という。(浅原)

笑話 大間々の市は、昔から二七の市だった。昔、沼田から大間々の市に、馬をひいて来た人がいた。その人の股引の間からチラチラ出ているものがある。通行人が言つた。

「出たね。」

その人答えて

「ああ出たよ。市だもの。」

通行人「黒いね」

その人の馬の背には黒やきのかげが着いていた。そこで

その人「ああ、本やきだよ。」

通行人「デッカイネ。」

その人「大一番だよ。」(桐原深沢富四郎さん)

戌の日に麦まきをしないいわれ 昔中国から足のひらを割つ麦の種をつめて、わらしをはいて来た。その家でくだんという犬を飼っていた。犬が鳴くので切り殺したが、くだんは、人が盗んだから鳴いたので、うそはいわなかった。それで証拠のしまいにもって行って、うそをいわない証拠に、よつてくだんの如しと書くようになった。この日蒔くと、食わない人ができる。(塩原)

雑煮のいわれ 昔、となりの国と戦争した時、となりから虎を向けてよこした。それで、こつちでは虎より象が強いから餅で象を作った。食べものがなかったので、象の中をえぐつて煮て食ったので、餅を食うことを、ぞうにというようになった。(塩原)

三、怪 異

狐の嫁入り 昔はよく村中の人狐の嫁入りだといって向う山に明が見えた。

老人が説明してくれた。「あれが長持、ちようちん持ち、嫁ご、はさみ箱など」と聞いた。日が暮れて宵の中の一時間ぐらい見えた。(塩原)

向うの山にあかりが見えるが、今頃お祝があるわけがない。けれど年寄りが説明する。先に行くのが先達だ。あとから行くのが長持かっいで行くんだ。あかりがあつて先四つ見えて、そついわれると、その通

りに見える。今度は嫁御さんだ。下から上行くまで一時間もかかる。何十人も火が見える。日が暮れきつたという時間、宵のうちだ。十人も十五人も見える。(塩原)

貴船の山に出た。(神梅)

二軒在家の出はずれに上んちといわれる家があった。裏に細い道があり、そこを通ると、とくに雨の降る晩などは、フク、フクという声がする。あれは何か化かしているのだ。

その近く、夜な夜な提燈が見えた。川面山から要害山に抜けるあたりに、狐のヨメドリといっていた。提燈は点いたり消えたりしていた。

(相原)

狐火 穴原でオトウカ(狐)の嫁取りを見た。火がチカチカチカチカと、あつちこつちに行つたり来たりしていた。昭和二十四、五年ころである。(神梅)

狐に化された話 戦後から来て二十四年間も手伝つてくれて家の者と同じように生活していた独身の田中榮四郎さんが、時々、小遣をねだつては町へ遊びに出たが、ある時、帰りにいわしを買つて来た。

次の朝、自分が昨夜地下タビをぬいで、風呂にはいり、たしかに手拭をかけておいたが誰かがかたづけたかと家中の者に聞くが、どこにも見つからない。本人は本気で、ねえちゃんも風呂に入ったわけだ、確かに見たと言ひ張つたが、見つからず。友人と昨夜来た方に見つけに出かけたところ、あらせ稲荷の近くの杉林に、ちゃんと地下タビがそろえてあり、木の枝に手拭がかけて、着ていたハッピまでかけてあつた。これは狐に化されたということであつた。いわしを取られたときに裸にされたことがわかつた。(塩原)

夜中に帰つてくると、月もないのに、杉山の中が明るい。火がもえているのとも違つのに、ぼつと明るい。石を投げてみたが消えない。通りぬけたら頭がせいせいしたが、渡り出したら、頭の毛が後ろに、ひっぱられるようだった。(神梅)

鍋木イチゾウさんが赤銅街道の日光坂を、えびす講のサンマを買ってきて、こえようとしたり、そこに水たまりがあった。そこまできたら、サンマがえらくヒクヒクするんだって。それでおもしろくなつて、水たまりに入れておよげといたら、すーっと向こうへ行くんだって。それでみんなおよがして、なくなつた時気がついたが、もうみんな持っていかれたあとだった。(神梅)

「おお深けえ、おお深けえ」といって、山を分けて歩いて、山奥に入っていく。(神梅)

ムジナの嫁入り 水沼の役場(黒保根村)から見た。しめっぽい霧雨がふつたり、霧雨がまいていような日だった。(神梅)

むじなの話 むじなは、子どもが五六人で、しゃべっているような声を出す、そのうち笑う。その声がものすごくよくする。終戦後土方が石をぶち割って運ぶ。大勢人が来ていて、排便をうちの下の藪でした。むじなはその排便を食べに来る。三月ぐらい続いた。残飯はあるしするので、むじながふえた。土方が終つたら、うちの藪の下に、むじなのためぐそつていうでしょ、極端にいうと、三〇キロも四〇キロもあった。古いや新しいのや。うちのそばを通つて、河原へ子どもが、がやがや遊びに行く。日が暮れちやいそうなのに、早く帰らないと、うちの親が心配するぞ、むじなとは知らないから、そう思っていた。そのうちに、わざわざ笑つたり、きやあきやあいつたりしている。どうも聞いていると、道からはずれている。子どもが藪の中に入っているはずがない。こりやむじなのいたずらだなどと思つて、上から大きな石をまくつた。そうしたら、びたりとやまつた。それが幾日も続いた。

提灯ぶら下げて便所に行った。兄貴達がいろいろの所で、見ていた。すると便所通り越して、階段まっすぐ行つちやう。こちだ、こちだ、こちだ、こちだ、今少しで土手におこちる所まで、連れて行かれた。後で大きな声でどなつたんで判つたんで、便所でなくて、いくらでも

先へ引っぱられちやう。むじなが、提灯の蠟燭を食べる。(塩原)

むじなは人に化けないで、しゃべっているような声を出す。

終戦後、川で土方が仕事をしていた。石運びの作業だったが、むじなは土方の糞を食べに来た。又、弁当を捨てたものも食べに来た。あるとき、がやがや、子どもがさわぐような声がある。しかし、子どもが遊ぶ場所とは違う方向なので不思議に思つたのでわざと大きい石を投げたら声がとまった。確かに、しゃべるような音を出す。(塩原)

河童 盆に水あびに川に行くと、カッパに引き込まれて、肛門が開いて死んで浮いてくるから川へ行くなといわれた。(塩原)

かっぱの昇天 下神梅の渡良瀬川のふちに、観音寺というお寺があったらしいんですね。今は、もうないんですが。

その下に、観音寺ヶ淵というのがあって、かっぱが住んでいたんです。竜も住んでいたんです。

かっぱは、どうしても天にのぼりたいというので、どういふふうにしたら、天にのぼれるかなあというので、いろいろ考えたすえ、竜神に、何か、おごつても持つて、話を持ちこんでやろうというので、いろいろごちそうを作つて、毎日毎日持つてつて。

そしたら、竜が、わかつた。

そして、てめえは、いつ、おれが天にのぼるからと。おれが天にのぼる時は、あたりがすっかり暗くなつてくる。霧がずっとまいてくる。霧にのつて、おれが天にのぼるからと。その時は、必ずおれのしっぽにつかまって、のぼれと。

そしたら、いく日かたつて、霧がまいてきて、霧の中に、竜が入つていったというんですね。

その時だというんで、しつかりと、しっぽをくわえていったんだそうです。

ところが、その竜が、一生懸命ふつて、ずーと、ずーと、いったんだけど、何がおかしいのか、はつと思つたひょうしに、しっぽをはな

しちゃったんだそうです。

くわえてたしっぽを、口をはつとあいたもんだから、下へ、だーんと、落ちてきたんだそうです。

それでもその、かつばは、さらは割らずに、淵の中に、ぼかんと落ちたんだそうです。それで、かつばは、

「ああ、おれは、天に住むものじゃない。この淵に在るものだなあ。」
と言って、始めて、天上へ行くことをやめたそうです。(神梅)

人魂 ヒカリモンともいう。兄貴は大工で山の方に行っていて一人の時、人魂が出た。またつるといのが死んだ時は、三人いたが三人ともみて青くなって帰って来たことがある。魂が遊びに出るといふこと

だ。人魂は、成年式までに見なければ一生見ないもんだという。(桐原)

十一月末頃のおじいさんが死ぬ前の夜の夜十時頃、夜学の帰り道で人魂を見た。

鳥のとび方とは違っていた。高くなく、低くなく、明るくなった玉が見えた。相当のきよりはあったと思う。(塩原)

山犬様 昔は山道来ると、山犬様に後を付けられた。波の花(塩)

とお散米を出して置くと、食べて帰った。米つきの帰り道で、馬が動かないので見たら、山の上から山犬が見おろしていた。その帰りにも山犬の前を通ったが何でもなかった。前で転がると、一口に喰われて

しまう。山犬は夜十二時前にはいたずらしないが、十二時過ぎると食われるという。犬より大きいなりをしている。(神梅)

あずきとぎばあのはなし 晩方になると、橋の下で、おずきとぎばあが、「あずきとぎうか、人としてくおうか」といつているという。

これは、夕方、子どもが早く家へ帰ってくるようにいうわけである。(浅原)

犬の生れかわり 大間々の桐原で、大きい犬を飼っていた。ある時、村の若い衆に、えらいしうちを受けて殺された。太郎という犬、その殺った人が子どもに太郎って名をつけた。その犬の生れかわりだ。そ

の犬の脇の下に痣があった。その子にも痣があった。むごいことしたから、生れかわって出た。大正年間の話だ。(塩原)

四、命 名

三四次 男の子で三番め、女もませると四番めに生まれたので、名付けた。(神梅)

あだ名

ちようしのふくさん 歌でも何でも、調子よく自分の調子に合わせる。

部隊長 がかいことばかりいう。

陸軍そうさん 始めて陸軍にとられた。

穴原の八軒ぐるわには、ほとんどあだ名がついていた。

はやがねおええ、うまかたぜんとく すけべのしんとう はたやの

ゆきさん こびきのおとさん くりげのもたさん じだまのかつあ

ん となりがごけどん。

しらみのいきどりひょうきたんごといわれた人は、奥沢丹後という

人で奥嶽と号した。しらみをつかまえると、赤城山へ行って子を産ん

で来いと逃がしてやる。

○ペテンのハッチャン

○ツーツーのトキさん (どんな話でもすぐ通ずる)

○へらのイサさん (いつもへらへら笑っている)

○グイ飲みジッさん (酒飲み)

○ジッチのジッさん (まじめ)

○ペタリチョーさん (餅屋)

○クセンマヒツさん (くせ馬を扱うのが上手)

○オヒラのセンさん (頭が平たい)

○お茶菓子コーさん (お茶菓子をばさまないと気にいらぬ)

○アヤメのサダさん（美男子だった）
○ボタモチイマさん

○オニギのワゴさん（ニギリツペをするのがくせ）

○キタムキタヘイさん（なんでも反対した）

○いつでもイコネルフジヤのトラさん（いつでも理くつをこねる）

○ヨメゴのタカさん（いつでも長い着物を着ていた）

この人は、毎朝東を向いて、次のように唱えて拜んだ、「来れ災難、来たらば来たれ、逃がれる災難、逃がらせ給え。」

○オハジキツネさん（いてえか、といて、すぐ人を指先きではじく）

○ダンマリブンさん（しゃべらない）

○スネナガカゾーさん（すねが長い）

○観音山タケゴロー（芝居の観音山の役をしてから）（上神梅）

人を批評することば

けちな人に対して、ドケチ根性の強い人にはシブA、シブBなどのあだ名。

ギンナガシ 長裾や何か着て仕事に精出さない人。

うそつきな人に対して千三ッ何々さん、万カラ何々さんなど言って信用しない。千いってもほんとうは三つさり、万言つてもすべて空であるから。

ビシヨッタネー だらしない人

夜中の長さん 夜半までカセイだ人。（桐原）

地名（小字名） 手振山、雷電山、天狗山、蚤影山、なぎのくぼ、

花坂、おたかもり、上の上、下の山、赤羽、上の原、中村、高松、上堂、中堂、下堂、荒瀬、下具戸、あまのじゃく。

利根郡利根村の穴原に対して、塩原の穴原のことを利根の人たちが「サト穴原」と呼んでいた。山に対して平地の穴原という意味をもっていた。（塩原）

狸原という地名は狸が原にいつばいたからだという。（狸原）

五、諺

餅は乞食に焼かせろ。ちよくちよくかえすから。

さかなの一つかえし、餅の千かえし。

あずきは馬鹿に煮らせる。燃したり燃さないでも煮える。

うす田で米とれ、厚田で藁とれ。

親の意見と茄子の花には無駄がない。

木もと竹うら

木六竹八堀十郎

土用にてれば豊作。

こごみ鉦にそり鎌。柄を上げる時にいう。切れ味がちがう。

こごみ女にそり男。

土用布子に寒かたびら。桑原の手入れは、夏の暑い時に土をよせ、寒い時にはさらす。

彼岸過ぎての麦の肥、土用過ぎての稲の肥。（塩原）

○あずきは馬鹿に煮らせる：火をもちたり、消したりするので、よく煮るといふ。

○一種、二肥、ご手入れ：一番の基礎は種子である。そのつぎが肥料が大事、あとは手入れ次第で作物はよくとれるといふ。

○うす田で米とれ、厚田で藁とれ：稲はうすく植えろといふこと。そうするとみはりがいいといふ（実がとれる）。厚く植えろと、実がとれずに、わらがとれるといふこと。

○大雪に不作なし：雪が多く降ると水が豊富であること、特に苗代に関係がある。

○寒肥ききめあり：寒肥はムギにも桑にもよい。とくにムギ作によいといふ。

○家畜なければ肥料なし：家畜を飼育することによって、堆肥ができ

る。農業をやつていく上には、堆肥と金肥は両方なければだめであるという。有機質のところには堆肥（だごえ）が必要であった。堆肥の入っている土地はこなれもよかつた。

○寒九の雨：寒に雨が降るのは悪い。これはあたたかい証拠である。雪のほうがいい。寒い霧がまくのもだめという。

○木もと竹うらら：これは、木を割るときはもとのほうから割れ、竹を割るときにはうらのほうから割れということ。

○米は土で作れ、麦は肥料で作れ：米は地力がなければだめということと、麦はこやしでつくれ（麦には追肥がきくということ）ということである。

○とり入れ、しつけ：とりこみ、しつけともいう。収穫すべきものは早くして、まくものは早くしろということ。とりこみにしても種まきにしても、時期をなくすなということである。

○におい松茸、味しめじ：松茸は味よりにおいがよい、味はしめじのほうがいいということである。

○ひでりに不作なし：雨ばかり降っていると作物はとれない。同じなら照つたほうがいいということ。

○麦の十七刈り：ムギは早く刈れということである。おそくまでおくと品質がおちてしまうという。

○お天道様と米の飯はついてまわる：真剣に仕事をやれば、どこへ行っても食えるということである。

○タマネギの茎は踏倒すといい：立ったままだと、栄養が茎のほうへのぼるので、茎をねせて、根のほうへ栄養をやれということ。

○春雪は麦だわら：二月末に雪がうんと降ると麦が沢山とれるという。（長尾根）

○嫁は台所からもらえ、むこは財産のあるところからもらえ。（浅原）
○桐生着道楽、足利の食い道楽。（浅原）

柿はいじめると成りがいい。（神梅）

朝茶のむと、今日の難儀をさけられる。

管原道真が、太宰府に行く時、一軒の家によつて、茶をもらった。そのお茶がとてもにがいに梅干しが出て、それを食べている間に刺客をやりますごした。そこで、朝、茶を飲むといいという。（神梅）

生木生味噌割の損

生味噌食うようじゃあしんしょは残らない

青野の北風三日もたず

大霜の三日目雨が降る

朝雨と女の腕まくりにたまげるな

二月の空つ畑（麦が見えないくらいの方がよい）

青田と馬鹿はほめられない

木元竹ウラ

トシヨリッ子は三文安（桐原）

青野の北風三日もたず

東雷 雨降らず

ミカボの三束雨

長ぶりの夕空……良くなるように見える。とくに梅雨の候。

鼻取半人前（桐原）

秋山春里 秋は山、春は里が元気がよければ、元気はよくなる

隣りのものは糖香煎

親が死んでもゴク休み

彼岸すぎの麦の肥

三杯汁は馬鹿が吸う

めんどりがときをふくとしんしょうがつぶれる

遠くのシンより近くの他人

遠くの上田より近くの下田（桐原）

物臭者の節供働き（桐原）

六、謎

なぜなぜ遊びを始める時には、なぜをやるべとか、それなんぞ、やれなんぞといつてから始める。それなんぞはそろばん、やれなんぞは矢立てのことである。答えられない時は、ながしたという。(塩原)

昼は小屋の中、夜は一列に並ぶものなんぞ 雨戸

小さい時はお父さんに似て、大きくなるとお母さんに似るものなんぞ あけび

三里先の大火事なんぞ きせる(塩原)

つかうときにいらなくて、つかわないときに用なものナニ 水がめのふた

一ツ目小僧に足一本ナニ ぬい針

足一本で立っているものナニ 山田のかかし

拝めば拝むほど長くなるものナニ なわ

用のあるときたかかれるものナニ 木魚

朝起きて細い道通るものナニ 雨戸

朝、庭をなせまわすものナニ 竹ぼうき

いつも人のあとをついてくるものナニ かげ(長尾根)

家中の力持ちなあに カギ竹

さかさ井戸から大蛇がとび出す、コブナがとび出す、なあに カギ竹(茂木)

朝早く一本道通るもの 雨戸

池にそり橋、ダンゴチンコなニ 鉄瓶(桐原)

アメンボ カヤという。(下神梅)

水スマシ スーメン。(下神梅)

上杉謙信の馬 塔の本の石塔の所に、上杉謙信の首なし馬が埋かっているという。「朝日が早くあたり、夕日がいつまでもさす所」だとい

う。梨木館には上杉謙信の馬の足跡岩がある。(下神梅)

雪の日 学校が高いところにあつた。ゲタじゃ決まるところんだ。タビハダシで学校へ行つた。タビも、ももひきもびっしりぬれる。

タビのはきかえを持つてつた。(中神梅)

立つた 一月正月松が立つ。二月は初午旗が立つ。三月は節供でひなが立つ。四月八日にやあ釈迦が立つ。五月五日はほうやの節供で

のぼり立つ。六月は天王様でさかき立つ。七月は七夕祭りで竿が立つ。

八月は十五夜様ですすき立つ。九月オクンチ旗が立つ。十月は神無し

(神有り月)月で神が立つ。十一月は霜月でたつべがたつ。十二月は

借金取りが門に立つ。(上桐原)

ひとだま 青いような赤いような玉が、ゆらゆらとお墓の方へ飛んで行つたのを見たことがある。あれが、ひとだまということは、あと

できいた。そう知っていたら、もっと注意もできたらうと残念だ。ヤマドリ

の年老いたのも、その尾を光らせて飛翔する。(上桐原)

芸能

まえがき

大間々町の今回の民俗芸能の調査部門では予測し期待していた資料が得られなかった。地方歌舞伎や人形芝居はもちろん、神楽や獅子舞なども現在行なわれているものは皆無であった。これはきわめて珍しい現象である。ただわずかにその痕跡をさぐる程度にとどまったのである。この点が本地区の芸能の特色と言えは言えるかも知れない。

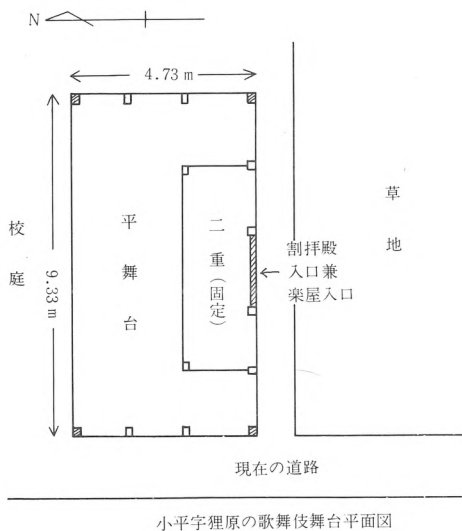
しかし、予想しなかった収穫がなくはなかった。その一つが農村歌舞伎舞台である。しかも利根地方の舞台と共通する幾多の点が判名した。これだけの舞台を持ちながら地芝居は現存者の記憶以前に消滅してしまったのである。旧大間々町では祇園で山車屋台を利用して地芝居が行なわれたことが文献資料でわかったが、これも勿論現在地芝居が絶えてしまっている。

民謡やわらべ唄については別に酒井調査員の手で進められたが、この面でもやはりこれという収穫は無かったようである。したがって、民俗芸能では、主として歌舞伎舞台についてやや精細な調査ができたにとどまったのである。他の部門と違い、最早や民俗芸能は調査の時期を逸してしまつてすべて後手にまわつてしまつたという思がした。このことはやがて他の部門においても見せられることであろうが芸能はその消滅度がいかにも速い。

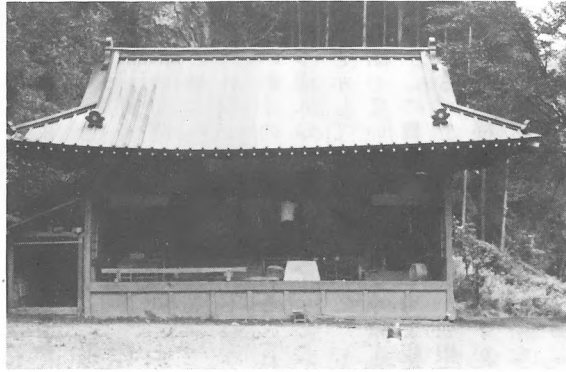
(萩原 進)

一、農村歌舞伎舞台

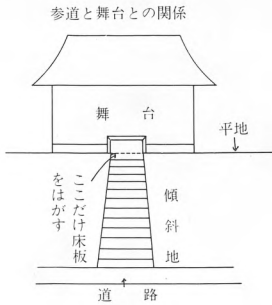
概観 群馬県における農村歌舞伎舞台の分布は、赤城山中腹の勢多郡と利根郡、沼田市、吾妻郡などに多く遺されている。しかし、山田郡、太田市、新田郡、桐生市、邑楽郡、館林市地方のいわゆる東毛地方には極めて稀れにしか見られない。ところが、本調査地区の旧福岡村には現存するものが二つ、すでに取毀したもの一つ（以上は常設舞台である）と組立式舞台が一つあったことが確認され、少なくとも大正



期までは四つを数えたことがわかる。このように、農村歌舞伎舞台の分布から見ると、大間々町の福岡地区と黒保根地区は利根・吾妻郡型の中に入ると思われる。しかも、福岡地区の舞台は利根郡水上町藤



狸原の舞台全景



原や昭和村具之瀬に見られる割拝殿型式の舞台であることがわかり興味深い。さらに、水上町藤原の現存舞台と似た観客席の型式が見られるなど、平坦部としての農村歌舞伎舞台が利根郡方面と共通する特色が指摘できる点も大きな特色とい



狸原の舞台（軒組み）

えよう。以下個別に調査概要を記すことにする。

小平狸原の舞台 現在廃校となった旧福岡東小学校庭の南に北面している。もとは、校庭の西側に東面して建てられていたものを校庭の拡張工事の際に移転した。校庭の東側は山の傾斜地となっており、石階を登ると馬頭観音堂が西面して祀られている。屋根はトタン葺きで左右は切妻破風造りとなっているがもとはカヤ葺きであったという。移築の際に小屋組を現在のように直したものである。したがって屋根組みは腕木から上部の梁は後のものである。垂木は神社建築のように二重垂木であるから屋根の張りは大きく外方に伸べり美しい線を見せている。間口九・三三メートル、奥行四・七三メートル、床の高さは九三センチである。尺では間口五間、奥行二間半床高三尺の構造である。正面上部の虹梁は巨木からとった一木であるこ



狸原の舞台（内部）



狸原の舞台（側面）

とは他の舞台と同じである。紅梁が右と左の柱に組み込まれた先端の繰り鼻は唐草の彫刻がされている。建立年代は不詳であるが明治初期かそれ以前と見てよいであろう。

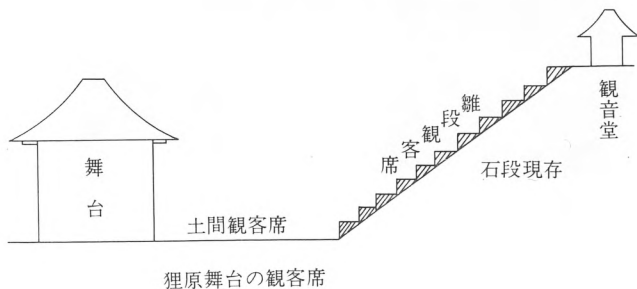
この舞台の特色は三つある。一つは、背後にまわってみるとよくわかるが、中央に縁の下の入口があり、その入口の上部に唐草の彫りのある紅梁がある。これは、校庭の西側にあったとき観音堂への参道入口になっていた、ここから舞台をくぐって堂へ往来した、構造を示しているものである。いわゆる割拝殿型式の舞台であること物語っている。上図のように、傾斜地に建てられ、下から登ってゆくとこの舞台の下をくぐって観覧席に出られるように工夫されたものである。これと似た型式が利根郡水上町綱子と同郡昭和村貝之瀬にある。この様式は、社寺の多くが傾斜地にあり、その前庭を利用して舞台をつくることか思い付いたものとみてよい。実際に舞台を使用するときは、床板をもとのように並べ、割拝殿として使われた通路は楽屋の出入口としたと思われる。ちなみに割拝殿というのは神社の本殿しかない初期の神社建築に用いられたもので、本殿と一直線上に並べられ、お籠りや祭典の式場として使った。後に本殿と渡廊下で接続



狸原の舞台（背後）

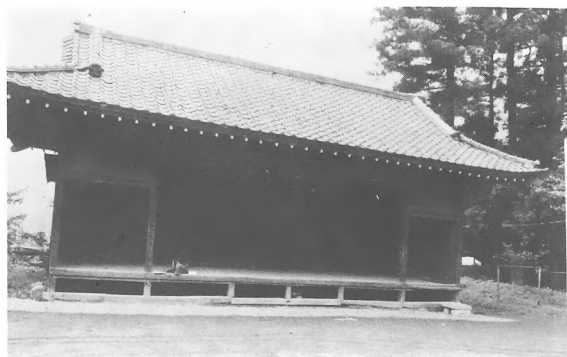
して拝殿を付けるようになる。割拝殿は姿を消していった。利根郡片品村花咲の武尊神社、藤岡市本郷の土師神社には今も古い形式の割拝殿が遺されている。寺院でも、吾妻郡中之条町は日向見薬師堂にも同様の割拝殿がある。先年解体修理のとき一直線上から外して右側へ直角に移した。小平の舞台の割拝殿型式にはこうした信者の休憩場、お籠り場としての利用目的があったかも知れないが確認できなかった。

第二に本舞台の特色は、平舞台の奥に設える二重が固定式になっていないことである。県下の多くの舞台は、一重（上段）が固定式になっていない。利用の都度一段高い二重をつくるものが多いが、この舞台ははじ

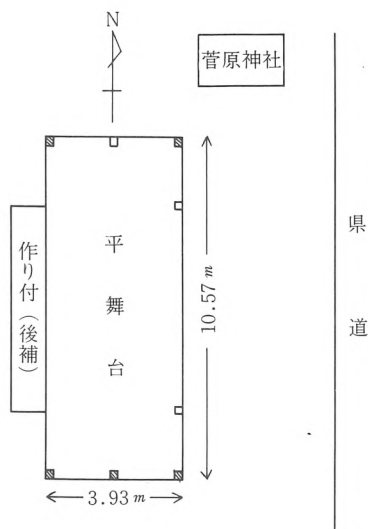


めから固定してある。これと同じ例は、利根郡水上町藤原の舞台で見られた。例の少ないものである。

第三には、この舞台の観覧席が、正面僅かの土間において傾斜している地形を利用して雛段式に見られるようになっていたと推定されることである。平面図にする別掲のような構造である。観覧席の構造では、四国に国の重要民俗資料になっている舞台が雛段式として有名である。これにはちゃんと石で段々の腰かけがつくられている。この場合はそうした段は見られないが、明らかに雛段式の観覧席であったと見られる。この例は第二の特長の例として記した水上町藤原の舞台に見られる。



浅原の舞台全景



浅原舞台の平面図



浅原の舞台(軒組み)

柱は四隅の主柱のほかに、左と右側面に中間支柱が二本ずつ、背面にも主柱の間に二本の支柱がある。正面にはもちろん柱は現在もない。つくり付けの二重にも天井の梁とつないだ支柱が左右に一本ずつある。壁間はすべて板のみで壁を使

っていない。
この舞台が地芝居に使われたのは大正初期までであったという。その後は買芝居をやったが、買芝居は昭和四十一年頃までやった。大道の襖などそのときはあったというが現在は遺っていない。四十一年のときの引幕は役者の一座が持参したものを使った。現在この舞台の中には地元の人々の猟銃を競った鉄砲の額が掲げられていたり、旧東小学校で使った体操用具や机椅子などの物置になっているが、建物はまだしっかりしており、保存には十分耐えるであろう。

浅原の舞台 浅原の菅原神社の境内にある農村歌舞伎舞台である。県道のすぐ脇にあり、神社(南面)の左側に東面して建てられている。間口一〇・五七メートル、奥行三・九三メートル、床高六四センチである。尺に換算すると、間口約五間半、奥行二間、床高二尺である。小平の舞台と比べると間口はやや大きく、奥行は狭く、床は低いことがわかる。したがって、全体的に見て美しく見える。屋根はもとカヤ葺きであったが、現在は瓦で葺かれている。このとき勾配を緩やかに、軒は垂木を張り出したために建築物としても美しく見える。二重垂木ではない。建築年代は不詳であるが、小平より幾分古いかも知れない。



大門の舞台跡（鳥居のあたり）

どやはり保存してゆきたい舞台である。

小平大門の舞台跡 小平の大門にある嵯峨神社の鳥居が県道に接して西側にあるが、その鳥居から石段を登ると平地に出る。その石段を登ると一直線に神社に通ずる参道があるが、その石段を登り上げたところに歌舞伎舞台があった。狸原の舞台と同じく割拝殿形式の舞台であった。構造その他について詳しいことはわからないが、取こわしたのは昭和三十年頃というからまだそう古いではなかった。平地はいま田となっているが、この平地を利用して歌舞伎舞台が神社に面してつくられていたことがわかる。聴書によると、狸原のものと同じようであったという。大道具などもすでに失われている。

深沢の組立式舞台 上神梅の深沢の一番奥の墓地の的に舞台倉があり、そこに組立式舞台が一式あったが、大正一〇年頃になくなってしまっ

い。主柱は四隅に四本、左右の側面に中間の支柱が一本ずつある。正面は梁は一本の虹梁であるが、左右の袖に支柱を建てて区切っているのは、社務所などに利用するための改造であろう。土壁は使わず板で三側面がつくられている。くわしいことについては地元の伝承者が得られずわからなかったのは残念であった。保存状態は極めてよい。特に切妻の破風などはまことに立派であるし、軒の四隅の肘木の構造が二手先となっていて軒を長く張り出している点な

たという。組立式舞台は勢多郡の赤城山中腹地帯に多く見られるが、常設舞台と違い、その都度移動してどこでも舞台が設けられるということで各地でつくられたものである。現在は富士見村不動堂に一組ある。この舞台の規模その他についても全く不詳であるが、農村歌舞伎舞台の分布上注目されるのでここに記しておくことにした。

このほかに、塩原の赤城神社境内に歌舞伎舞台があったが、日露戦争の頃に解体してしまったという。また小平の中組に割拝殿形式の舞台があり、通路の渡り棒は九尺位あったが、戦後になって解体消滅してしまったという。

二、人形芝居

人形芝居については、旧黒保根村の深沢で、一人遣いの豆人形の存在が確認されたにとどまった。その人形一式は大正十四年の火災のときに消失したという。黒保根村地区には、湧丸の豆人形、清水の三人遣い人形が現存しており、それらの関連で比較できればと思ったがやむを得なかった。詳細については話者の誰もが知らなかったのである。

「深沢人形、城神楽」といって、昔、深沢では義大夫による人形芝居をした。新里へも巡業に行った。酒を買って出して、聞いてもらったという。道具は火事で焼けてしまい、舞台の材木は残っている。曾祖父の頃身代をつぶすほどしたというが、今の人は知らない。（深沢）
「深沢人形・神梅義太夫、神権ボタ餅」といい、神梅ではよく食べた。（神梅）

三、武 三 番

下塩原に、以前白式尉と黒式尉の翁の面があったというから、この地方で式三番が行なわれていた痕跡は知ることができる。しかし、現物は散在して現在見ることはできない。

四、大間々の祇園

由来・徴証 大間々町の祇園は県下でも有名なものの一つであった。高草木家文書や大泉院記録から見ると寛永年間から始まったものらしい。

寛永六年正月八日

初市の祭祀

寛永九年六月廿四日

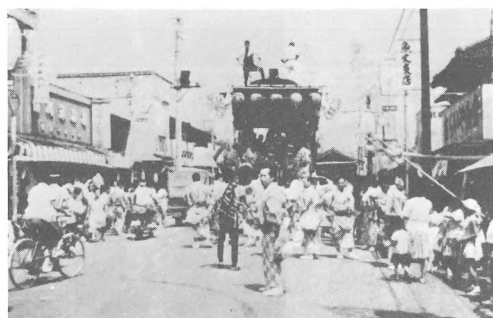
祇園の祭祀（八坂神社日記）



最近の祇園の山車



最近の祇園風景



最近の山車のおねり

とあり、寛永九年六月二十四日にはすでに祇園祭祀のことが見える。大泉院の神明宮祭典日記には、「寛永六年正月八日牛頭天王の社を祭ると言ふ」とあり、市神としての牛頭天王を祭ったことがわかる。八坂神社日記の初市の祭祀の意味が牛頭天王社を祀ることにあったことがわかる。同じく神明宮祭典日記に、寛永九年六月二十四日に市を立て始む、祭祀を始むと言ふ、とあり、祇園祭祀が市神の牛頭天王の祭として行なわれたことを伝えている。

高草木家文書によると、「寛永年中より慶安之頃迄は毎年御輿みなかは（注みながわむしろのことか）にてかり屋を作り、あとへ轆などを付、黎初（ねりはじめ）に致候。其外母衣思ひ付こしらへ子どもを出し二三十年は右之通り祭祀致候」（大間々町祭祀黎切り之事）とあり、当時はすでに仮屋を作り、そこへ御輿をおさめ、轆などをたてておねりをし、母衣などを身につけて行列をしたことを伝えている。万治元年に江戸から神輿を新調をしたが、そのときの祇園の行列は上町は頼

朝の富士の巻狩の帰還の行列をし、三丁目四丁目では三宝院門跡あずま下りという行列をやり、山伏の装束行列、五丁目六丁目では子供に母衣をつけさせて御輿の渡御をしたという。大間々町の本町、三丁目から六丁目ごとに出しものを工夫して実施していた。渡御には神島が出された。（これは祇園に共通している）この神島は河原毛の島と定められていた。ついで町内を一丁目二丁目を一組、三、四丁目が一組、五、六丁目が一組とな

り、三組に分けて祭礼を分担した。
元禄時代になると、十四年六月二十四日の祇園にはじめて町内有志で踊狂言（芝居）が行われた。そのときの外題の演し物は大間々における地芝居の最初だったらしく

大間々踊初り候とて近村より見物の人々来り大評判をとり申候。此時近郷之踊初に御座候而六月祭賑はしく繁昌致し、踊上町より始まり申候。

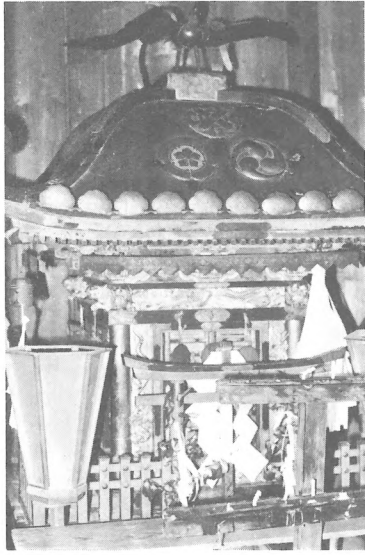
世話人 師匠宿 星野仁兵衛

（大間々町祭礼黎明之事）

元禄年間より三組で分担したものを上三町、下三町の二組に変え、祇園の神幸は大名行列、花万燈を加えてはなやかに変わった。この上町と下町によって一年交替で祭を主宰した。

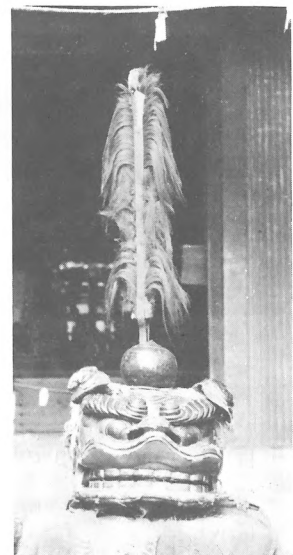
しかし、幕末から明治初めにかけて衰微したが、明治十年後足尾銅山が古河市兵衛の手によって開発されると同時に、銅の輸送で活気を呈したというが、その後もまた衰退したり盛んになったりして現在に至っているのである。

現在の祇園 江戸時代の六月二十四日が、明治以降の太陽暦の実施以後は七月二十四日となったが、後に八月一日二日三日に変更となり



神輿

現在に至っている。昔は七台の屋台が出たが、いまは二台しか出されない。あとにはトラックに屋台を載せておねりをする。一



獅子頭（此獅子）

時牛車であったがいまは子供によって引かれる。

上三町

（一、二、三丁目）と

下三町（四、

五、六丁目）が交代でやったが現在は上三町が主体をなして下三町は補助するかたちで行われてきた。七丁目は屋台を持たず「割出し」とよばれた。四、五年前に危機におち入ったので五丁目を中心で保存運動をはじめ、今年で六年目である。いま再び全町の行事に戻そうと努力している。

屋台に飾る人形はスサノオの尊、太田道灌などが多かった。上三町組は富士の巻狩、下三町は金がなく浴衣がけて加わったこともあった。昔から世良田の祇園、沼田の祇園、大間々の祇園が上州の三大祇園といわれたという。

祭礼の模様 市神さまの天王様は昔は三丁目にあったが、後に神明宮の境内に八坂神社として移された。現在の祭礼はつぎの日程で行われている。

七月三十日 当番町に仮宮がつくられる。順序は賽を使って決めた。

八月一日 午前五時集合して祇園の準備に入り、午後五時三十分には式典が行なわれる。この宵祭り、宵宮といって仮宮に町民は参詣する。

八月二日 午後一時集合、午後一時三十分式典のあと午後二時より御輿渡御がはじまり、一丁目から七丁目へとお



神楽殿に代用された五丁目の屋台



獅子頭（雄獅子）

八月三日
 ねりが行われる。午後五時に御輿の遷御となる。この日が本祭り。
 午後二時に出発して「御札参り」をしたあと、午後五時集合して五時三十分祭りを終了する式典となり、祭りは終了する。
 行列の順序はつぎのようである。
 切幣を持った神宮（二人）—金棒（二人）—祭典長—大太鼓（二人）—拍子木（二人）—賽銭函—地区役員代表—稚児（一五〇人位）—山車と獅子頭—天狗（一人）—大傘（一人）—本部役員崇敬者代表—招



旧五丁目の屋台正面破風



旧五丁目屋台背面の装飾

待者—各区の付け祭の山車（予定四台）
 となっている。途中休憩的（御旅所）は第一区、第五区、第七区の三カ所である。
 以前は踊り屋台があり、町内ごとにこの屋台を使って御神楽をやったこともあった。曲目は「にんば」「ねんねん」「かく」などであった。（注この曲目からみて神楽の中の火吹男踊の系統と見られる）
 このほか以前は「神馬（じんば）」といって生きた馬が大きな御幣束をつけ、天王さまの渡御の前に霧払いとして一丁目から七丁目まで駆けた。そのあとに町民が続いたものである。神馬の出るときは、大榊が午前九時頃出てそのあとに太鼓が続ぎ、太鼓のあとに神馬がつづいて町内を回った。
 神明宮境内の屋台 神明宮の境内に五丁目に使っていた屋台が神楽

殿に代用されて現存している。昭和二十二年維持できなくなり神社に寄付し、神楽殿として利用している。間口二・八三メートル（一間半）奥行は四・三メートル（二間二尺）、軒高は四メートル（一三尺）あり、背の高い祇園屋台の特長を見せている。切妻造りの屋根で、破風にはみごとに三頭の竜の半肉彫が飾られ、その下の虹梁もの彫刻も、木鼻も立派である。背面には牡丹に唐獅子の彫刻が破風にあり、その下にあかりとりの格子障子がはめこまれている。この屋台に木札がつけられている。その札に、

大正七年七月吉日

棟梁 斎藤儀八 脇棟梁 佐藤安平
青木門三郎

とあり、世話人として細川栄太郎、田村太一、高橋啓太郎、角田歌次、栗田儀助、藍原菊児の名がある。寄付金は最高四五円、最低一円で七〇名の寄付金でつくられた。昭和二十二年六月に神楽殿に改造したときの札には

神楽殿改造

薦職 荻原盛太郎 工匠 荻原金次郎
宮司 斎藤堯祐

昭和二十二年六月

とある。床には舞台でいう二重（上段）がつけられており、これを利用して芝居や的作事がやられたことを示している。以前の祇園祭礼の日の豪華な一面を伝えている珍しい屋台である。この神楽殿も現在は神楽がやれなくなり、空しく遺されているのは惜しい。五丁目では山東を失ったので、昭和二十七年に勢多郡新里村山上から現在のものを二万円で購入ってきて使っている。

神輿 神明宮境内の宝物庫に、祇園祭礼に用いる御道具が一括保存されているが、その中に御神輿がある。記録にある万治年間江戸で買ったものではなく、その後の新調であろうと思われるが県内でも数少な

い立派なものである。

獅子頭 同じく宝物庫に保存されている。雄雌二体あり、高さ雌獅子が五〇センチ、雄獅子が五二センチ、奥行は四六センチと四八センチある大きなものである。用材は桐材と思われたが箱表には「白檀」とある。布張り朱漆塗りである。二つとも頭の頂部に写真のような毛のついた飾物をつけている。雄獅子は角、雌獅子は宝珠を載せている。唐草の風呂敷も保存されている。獅子箱を取める箱に墨表で、

文政十二年丑六月新造之

白檀 獅子頭雄

と雄雌別々に納められており、寄進者の氏名もある。したがって、この獅子頭は文政十二年につくられたことがわかる。祭礼のときは今も行列の中に加わって町中をねる。

このほか、渡御の行列に使われる天狗面、大太鼓なども一しよに保存されている。

（資料提供者は高村梅吉、石原輝久、小林惣左久の三氏）

五、遊 戯

子供の遊び 竹馬、スゴロク、オテタマ、オハジキなどのほか、「タケガエシ」というのがあって、これは、竹の短冊を四本つくりそれぞれ様々な遊びをした。十六武蔵、紙鉄砲、杉鉄砲などもつくって遊んだ。（大間々一〜二丁目）

指あそび 左右の指と指を合せながら歌う。子どもと子どもと喧嘩して、薬屋さんが止めて、なかなかとまらねえ。人たちゃ笑う。親たちやおこる（おどす）（塩原）

こま よく廻って、こまの心棒が一本に見えるのをスワル、不規則になって倒れそうになるのをミスリという。（塩原）
フジマワシ 藤の新しい葉をこいで、まくと、穴ができる。その穴

にさわらないように藤の葉の板を入れる。沢山入るほどいい。

ペタ(めんこ) 武者絵が多かった。大間々の玩具屋から買った。シカクツペー、マルツペーとある。ペタといって、ペーとはいわない。

オタマ(お手玉) 中に入れるのは、とうもろこし、あずきが一番いい。たびのこはぜを入れると、いい音がする。(塩原)

童 戯

男児 こま、たこ、ビー玉、タケンガエシ(女の児より男の方が多かった) 竹馬、ペタン(めんこ)

女児 まりつき、お手玉、キシヤゴ。(桐原)

昔の子は、今の子どものようにはげしくなかったから、女の子は、赤いきれさえみれば、人形の着物を縫ってくれという、貧しい家では、きれっこさえないから、往生する。一度縫ってやれば、ほかに、遊ぶものもなかったから、いつまでもあきずに遊んでいた。

男の子には、縄で木と木を丈夫な棒でしばって、ブランコをつくってやり、誰にでもかすんだよといってきかせると、皆で仲良く遊んでいた。(下桐原)

村に来た人々

毒消しや 新潟から

おき薬 富山、大和から

ゴゼ 新潟から

ヨカヨカアメヤ 飯台を頭にのせ、旗を立て太鼓をたたいて廻ったどこから来たか判らない

マキ運び職人 新潟から(長尾根)

他所から来る人

アメヤ どこから来たか判らないが村に泊って商売していた。

浄瑠璃 大間々の大夫が来た。好きで来るのだから無料(浅原)

六、その他の芸能・娯楽

獅子舞い 正月にきた。二銭か一銭をくれた。泊らなかつた。(神梅)

警女 新潟県蒲原郡からやってきた。宿をしてくれる家に泊った。

二、三人で、中に少し目の見える人がいた。おセキさんという人がいた。民謡と口説をやった。(神梅)

明治末年まで越後蒲原郡から二―三人一組で来た。ゴゼが来ると唄っている間にサシ(カンジヨリに文久銭を入れる)を廻し、これをゴゼに与えた。泊る家は決ってなく、陽が暮れると「泊めてくれ」という。すると「今日はゴゼが来たから聞きに来ないか」と触れて廻る。

ゴゼはオヒネリをおいて、隣の村に行く。小平ではゴゼの泊る家はワサビヤ(茂木、黒田氏)カヤ(茂木、鹿沼氏)胡桃具戸の福田氏宅などであった。(浅原)

昭和初期まで来た。四、五人連れで一人はいくらか目の見える人が混っていた。越後の西蒲原より来たといった。歌、じょうりなどをやり楽しませてくれた。(塩沢)

少し見える者か片眼見える者が先頭で来た。宿では、かならず土間にねた。食事やお茶は上でいただが、休むときはかならずむしろを借りて土間ときまっていた。

食事には、コウセンを背負って来た。湯や水をもらってかいて食べていた。(塩原)

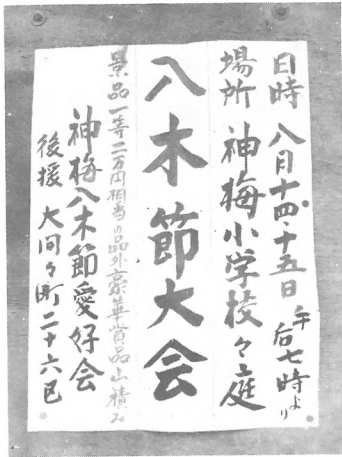
祭文語り 「エー、デロレン、デロレン」と言いながら、ホラ具をふいた。間に、国定忠治などをやった。一晩人を集めてやり、行った人は、花をやった。(神梅)

祭文語り 「エー、デロレン、デロレン」と言いながら、ホラ具をふいた。間に、国定忠治などをやった。一晩人を集めてやり、行った人は、花をやった。(神梅)

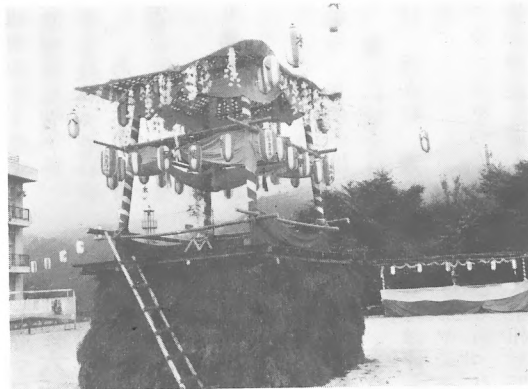
祭文語り 「エー、デロレン、デロレン」と言いながら、ホラ具をふいた。間に、国定忠治などをやった。一晩人を集めてやり、行った人は、花をやった。(神梅)

祭文語り 「エー、デロレン、デロレン」と言いながら、ホラ具をふいた。間に、国定忠治などをやった。一晩人を集めてやり、行った人は、花をやった。(神梅)

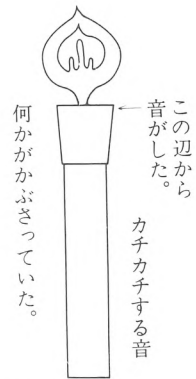
祭文語り 「エー、デロレン、デロレン」と言いながら、ホラ具をふいた。間に、国定忠治などをやった。一晩人を集めてやり、行った人は、花をやった。(神梅)



八木節大会ピラ
(関口正巳 撮影)



盆踊りのヤグラ (神梅) (関口正巳 撮影)



この辺から音がした。
カチカチする音
ふった。合わせて
この調子を聞いた。うよ
ホラをつけて、唄うよ
な感じを語った。

万才 (三河万才) 宿の家にとまり、笠は馬場の家にあずけた。大
夫の名は沢井雄次郎といったが、才藏の名は不詳。愛知県碧海郡から
来た。宿の家では三十銭から五十銭、普通の家で十銭ほどを出した。
懇意な家には、豊川稲荷大明神のお札を持ってきてくれた。(神梅)
村尽くし 花輪から室町まで下って行く所の地名を読みこんだ歌が
ある。ほかに、「母と娘」、「馬鹿と利口」(漫才)、「警察官」の歌など
があった。(深沢)

盆踊り 八木節が盛んで、八月十四、十五日の
夜、盆踊りの八木節大会が、神梅八木節愛好会の
主催で行なわれる。(神梅)

機織唄 (桐原新井コトさん 明治三四年九月二九日生)

- 中日牡丹餅 食いたくないが
ならば半日 あずびたい
- 色に持つなら おけやをお持ち
はなればなれを 丸くする
- いきな男だ ほつかぶりはへたよ
ほんにお出でよ おせてやる
- あんな男に ほれたじやないが
時のせいなん 気のまよい
- 花のさかりに しんとめられて
しおれ花とは わしのこと
- 山で赤いのは つつじにつばき
咲いてからまる 藤の花

○ゆんべ来たのは よばいとかが猫か
猫が下駄はいて くるものか
○なくなげくな 日影のみみじ
いくら泣いても 日は照らぬ
○かわいがられた 竹の子でさえも
いまにや割られて 桶のたが

(注) 新井コトさんの年季奉公は、生産
生業・社会生活にあり

機織りうた
山になりたい 高くら山に
阿久津 山同 日の下に
機が織れない 機神さまよ
どうぞこの手が 上がるよに
かわいいあの娘が 仁田山通い
桜峠が さびしかる (細谷戸)

民家

はじめに

この民家調査は予備調査と本調査の二回に分けておこなわれた。予備調査は七月中旬に二日間の日程で、町教委の小池政之助氏および地元文化財調査員の方々の御案内によりおこなった。予備調査では町内全域をくまなくめぐり、主に明治中期以前の民家にたち寄りながら、ただき、昔の家業および母屋の建立に関する伝承等を聞き取りながら、家の周囲および主にダイドコロ内や大黒柱等をながめさせていただき本調査の対象民家を選定した。その結果、上毛電鉄線以南は新開地のため本調査対象民家を全く見出すことができず、これより北部に限られてしまった。

大間々町も他の町村と同様に、近年における近代化は顕著で、道路は相当奥地まで舗装化され、廃家となった草葺民家が山間部で目に映った。古老の話によると町内の民家は街路ぞいの町家を除いて昔は総べて草葺であったというが、町内全域を廻ってあまりにも少なくなつた草葺民家に驚かされてしまった。そこで本調査では予備調査で廻つた草葺民家は総べて対象民家としてとり上げた次第である。

本調査は八月五日〜八日までに行うことを心掛けたが、予備調査の結果そう遠くないうちにとりこわして新築したいという家がいかに多いことを知つたので、明治中期以前の民家はできるだけ多く本調査の対象民家としてとり上げた。そのため本調査の日数は十日を要した。なお、本調査に際しては大間々町文化財調査員板橋春夫氏及び日本大

学大学院生田島豊穂君に連日ご協力をいただいたのでここに記して感謝の意を表します。
(桑原 稔)

一、調査民家の形式分類と編年

本調査を行った民家は表一に示す四十四棟で、これらを平面形式より分類すると八つの形式に区分される。四十四棟の調査民家のうち、伝承等により建立年代が判明あるいは推定できた遺構は二十一棟になり、その比率は四十八パーセントになる。

編年はこれら建立年代の判明あるいは推定できた遺構の原形の示す各特徴と、他の民家の平面・構造・細部等を比較・検討して編年の指標を求め、全体の編年系列をつくつたのが表一である。

ここに大間々町内における調査農家遺構の平面形式を溯源的に順次列挙すると次の①〜⑦のようになる。⑧は農家ではなく昔の商家を指し、その平面は俗に「通り庭式」とよばれるもので、土間（トリーとよぶ）が表から裏まで縦長に通じており、各室は土間に面して表から裏へ縦に配されるため、全体の平面も縦長を示すものである。このような町家は農家とは逆に古くから人口の密集地に建てられ、しかも商店が多いため、特に改造が激しく往時の姿をとどめることは極めて少ない。しかし大間々町では繁華街の中に数棟ではあるが、古風な感を与える町家を残しており、これらが往時の風情をほそぼそと今日に伝えている。

今回の調査では四棟の町家をとりあげたが、一棟は改造激しく復原

表-1

大間々町民家遺構

所有者	所在地	間取の形式						構造						柱間装置				設備仕上その他										
		一間取型	二間取型	広間型	喰違四間取型	不整形田字型	多間取型	多間取型	町家	大黒柱なし	の逃げあり	表側の二間	柱間のふき下し	表側のせがみ	土台なし	の有無	の壁あり	表側の全開放	テートの閉鎖	ナンド半閉鎖	の境全開放	ザシキ建	イドコ境	トコ	大黒柱あり	の仕上	の併用	二階
正田 猛	高津戸	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
石原 岩三	桐原	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
久保田吉松	"		○						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
金子 元治	長尾根		○						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
正田 猛	高津戸	○							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
高瀬 好夫	小平			○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
須永 武男	浅原			○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
関口 宗佑	小平			○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
穴原 和郎	"			○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
小池考太郎	上神梅			○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
星野 幸作	浅原			○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
小野 雅造	桐原			○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
高瀬 恭平	小平			○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
金子 定夫	浅原			○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
高瀬 友平	小平			○					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
小倉 元男	塩沢				○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
小倉 玉吉	"				○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
福田 勘助	上神梅				○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
高草木増次	塩原				○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
小池政之助	"					○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
深沢 順磨	"					○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
星野 邦次	小平					○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
鹿沼 利夫	"					○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
関口三郎司	塩原								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
赤石 康	小平					○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
深沢 豊次	浅原					○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
松島 和男	塩原					○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
福田 富三	浅原					○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
漸田良一郎	塩原								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
高草木昭夫	"					○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
鏑木多真喜	上神梅					○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
高草木春吉	塩原					○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
萩原 一郎	浅原					○			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
星野 清一	小平						○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
奥沢 実	塩原						○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
小倉真佐留	"						○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
星野 与市	浅原						○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
水島松次郎	塩沢						○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
藤生二三夫	浅原						○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
小野里公男	塩原							○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
金子 正次	長尾根						○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
須永善十郎	3丁目																											
野口信三郎	"																											
岡直三郎商店	4丁目																											

の形式分類及び編年表

(M:明治、T:大正、S:昭和の略)

		建築について		
不明	再建されたもの、 建立されたもの	職業・家柄 役割など	推定(紀) 建立年	建立についての伝承等
○		農家	19初	旧母屋、現在は養蚕場として使用、13年前77才没の先祖も知らなかったほど古いものだと伝える。
○		"	19中	当主(69才)の親が住んでいたが建立については不明。
○		"	19初	150年以上は経ている。
○		"	19中	不明
	○	"	20中	持主が移転したため、買い取り移築した。間取・規模は移築前と全く変わらないという。
○		"	17中	不明
○		"	17末	不明
	○	"	"	ダイドコロ部分はおじいさん(M29年生)が18才の時大改造し2階をつける。他は宗佑さん(T・9年生)より13代前に建てた。
○		"	18初	
○		"	18中	この辺では最も古い家であると伝える。
○		"	"	
○		"	19初	当家は雅造氏(T・12年生)で6代目になるという。
○		"	19中	
○		"	"	
○		"	"	
○		"	18初	
○		名主	"	
○		"	18中	村方覚書帳(正徳6年)により、正徳の頃当家の先祖が名主を勤めていたことが明らかである。
○		農家	19中	
○		組頭	18末	
○		農家	19初	
	○	"	19中	宗平(天保12年生)が当地へ移築して住んだ初代という。
○		"	"	
	○	"	19末	安政6年(1859)生れの人が16才の時結婚してこの家をつくって住んだと伝える。
○		"	19中	
	○	"	19末	豊次さんの祖父(T・8年76才没)がたつた。建立時期はM中期と伝える。
	○	"	"	S・45年75才没の親が移築した。
	○	"	"	当主の祖父がM・20年頃移築した。S・10年頃土間の方を3間位もぎとる。
○		"	"	火災にあい、2年前81才没の人が腹にあるとき建ったもの。
○		"	"	M・28年の建立と伝える。
○		"	"	大間々町内でみられた赤城型は当家だけであった。但し福田富三郎は復原すると赤城型になる。
	○	"	20初	前兜造、M・34年生の人が5・6才の時古家を買って移築した。グシはクレグシだったという。
○		"	"	2階で主に養蚕を120貫もとれた。S・2年の建立、建築費2千円、出桁造。
○		"	19中	馬次郎(M・15年74才没)が建った。年代は祖母(S・8年86才没)が10才の時建ったという。
	○	"	"	当主(51才)の3代前に火災にあい建て替えた。
○		"	19末	
	○	"	20初	前の家が古くなったのでM・33年に建て替えた。
	○	"	"	大正3年(1914)建立、前兜造。
	○	"	20中	S・16年(1941)建立
○		名主	18初	
○		農家	19初	S・51年に92才で没した人が20才で嫁に来た時93才のおじいさんがおり、その人が3才の時建替えた。
		商店	19末	M・28年の大火でもえ、翌年の29年に建ったもの。
		"	"	"
		"	"	"

の全く困難なものであったため、この報告書では三棟をとりあげておいた。

- ① 一間取の民家
- ② 二間取の民家
- ③ 広間型の民家
- ④ 喰違四間取の民家
- ⑤ 不整形田字の民家
- ⑥ 整形田字の民家
- ⑦ 多間取の民家（室数が四間以上あるもの）
- ⑧ 町家

次に以上の各形式について、その特質を遺構例を解説しながら順次述べることにする。

二、一間取の民家

この形式に属する民家は正田猛家と石原岩三家の二棟が発見され、その復原平面は図1のようである。

わが国における民家の発展を考える時、その出発点は堅穴住居になると考えられている。

円い堅穴住居から生成した民家平面は、次に外壁をめぐらした矩形の平面となり、これが直家の出発点と考えられている。当初の内部は堅穴住居と同様に土間であり、片側に干草や藁をぶ厚く敷きつめて寝所としたものであろう。これがやがて土間の一部にころばし根太の床を張るようになり、さらに東で支える床土部分に発展し、土間と床土部分に分割された一間取の民家が発生したものと推察される。

このようなどころから、一間取の民家は現在残されている近世民家のうちで、最も原始的な形態を伝える遺構として極めて貴重であると考えられる。

正田猛家は梁間二間、桁行五間であるから建坪は十坪であり、トボーグチを入ると左手の二間四方を東で支える板張りの床土とし、他は土間としダイドコロとよんでいる。床土とダイドコロの境は建具を用いず開放とし、構造も極めて単純で古い形式をよく伝えている。当家は現在、近くに母屋を新築し、当遺構は主に蚕室として使われている。

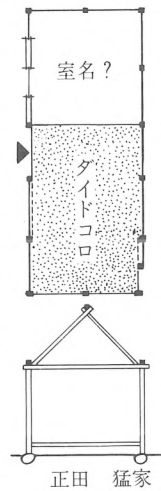
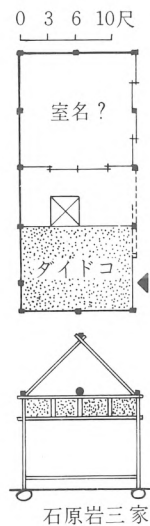


図1 1間取の民家（復原図）

建立年代については、十三年前七十七才で亡くなった先祖も知らなかったほど古いものだと言えるが、具体的な建立年代は不明である。しかし、構造及び細部の特徴などから一九世紀初期頃の遺構でないと推定される。

石原岩三家は梁間二間桁行四半の規模であるから、建坪は九坪である。トボーグチはダイドコロの妻側の外壁に接して設けられ、ダイドコロと床土の室境では差鴨居を用いて建具を嵌め込み、室と土間の間に幅一間の板張部分を設けて、ここにイロリ備えている。当家は前述の正田猛家より新しい特徴を示しているところから、およそ十九世紀中期頃の遺構と推定する。

近代化の波が農村の隅々まで押し寄せ、町内全域を見わたしても草屋根の民家はもはや数えられる程の少数になってしまった今日におい

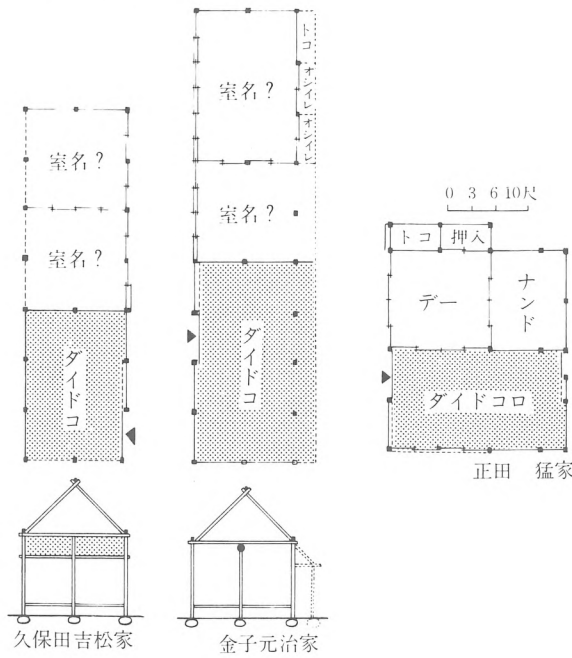
て、ここにとりあげたような一間取の民家を調査できたことは奇跡に等しく、民家を研究するものにとって全くありがたいことであった。

三、^{フタマ}二間取の民家

二間取の民家は三棟を調査し、それらの復元平面及び復元断面図は図12のようである。

久保田吉松家は梁間二間、桁行七間で桁行方向に二室並べた細長い造りである。室名は二室とも不明で室境には中間（棟下）に柱を建てている。上手の室境では建具を嵌め込んでいるが下手の室とダイドコ境は建具を用いておらず開放されている。当家の建立年代についての

図2 二間取民家（復原図）



伝承は、当主によれば一五〇年以上経ているものという。建築の各部の特徴から推察しておよそ一九世紀初期頃の遺構とみて穏当であろう。

金子元治家は梁間二、五間、桁行九間で久保田吉松家よりさらに細長い平面を示している。当家も上手と下手の室境及び下手の室とダイドコ境の棟下に中住を有し、下手の室とダイドコ境は建具を用いず開放している。しかし、トコ・オシイレを備え下屋を設けているなど新しい特徴もみられるところから、久保田吉松家より新しく、一九世紀中期頃の遺構と考えられる。

正田猛家は一間取の民家所有者と同一の所有になるもので、十年前頃近くに住んでいた旧所有者が移住して空家となったため、その母屋を買い取り、全く旧態のまま解体移築したものといい現在は物置に使用されている。したがって移築年代は二十世紀中期となる。

久保田吉松家や金子元治家のような桁行方向に並んだ二間取の民家は、県内ではめずらしく、今のところ他地域で見られないめずらしい形式であるといえる。

正田猛家のような二間取の形式は県内他地域でも数多くみられるもので、二間取の一般的な形式と考えてもよいであろう。

いずれにしても二間取の民家は庶民住宅の発達史上、一間取の民家に次いで発展したと推察される平面形式として、極めて貴重な有形的史料となるものである。

四、広間型の民家

調査遺構四十四棟のうち、十棟がこの形式に属し約二十三日が広間型の平面形式を示していることになる。

広間型遺構の中で最も古い様式を示しているのが高瀬好夫家である。高瀬好夫家の規模は梁間三間半、桁行八間半余で、その平面は開

口部少なく、極めて閉鎖性の強い特徴を示している。例えばデーの表側は半間の開口部を設けているだけであり、ナンドはジャシキ側に設けられた半間の出入口以外を土壁で閉鎖していたものと考えられる。そしてナンドの出入口は他よりも敷居を高めて（痕跡では床上よりシキイメチ上端まで四寸一分）帳台構えとしていた。またジャシキでは表側の半分にサマを設けているのも古い手法である。

各室の機能について述べると、ナンドは寢室に相当する部屋であった。寝るためには暗く静かな、そして外部から色々な危害を加えられない心配のない空間が求められるのは文化程度の低い時代にあつてはいうまでもないことであろう。恐らくそのような配慮から、丈夫な土壁を四周にめぐらし就寝のための小空間をつくつたものと思われる。寢室内では干草や藁をぶ厚く敷きつめ、この上に横臥し簡単な布をかけて就寝した。ナンドの出入口で敷居を一段高くし帳台構にするのは、ナンド内部に敷きつめた干草や藁が出入の際外へ出るのを防ぐために考へ出された古い建築手法の一つである。したがって社会が進歩し、多くの庶民が就寝の際、敷きぶとんを敷きその上に寝るようになる、やがて帳台構えはその必要性を欠くために建築手法から消えていくのである。

当家は建立に関する記録及び伝承等を残していないが、平面・構造・細部等の特徴から十七世紀中期頃まで溯る極めて古い遺構であると推察される。

須永武男家は梁間四間、桁行九間半の規模をもち、デー表は半分を開放し高瀬好夫家より多少開放的になつてゐる。ナンドの出入口はやはり帳台構えとしてゐるが、当家の場合は床上よりシキイのメチ上端まで九寸もある高いものである。

デーは接客の間ともいわれ、公けの性格をもつた空間と考えられてゐる。そのため畳敷にされるのもこの部屋が最も早く、後になるとトコ・タナが付けられるのもこの部屋である。

調査の結果当家のデーはすでに畳敷とされていたようである。

ザスキは家族の居間であり、食事室でありユカ上の仕事場でもあるが、また日常の軽い訪問客のための応対にも使用されるという雑多な兼用空間であつた。このためザスキには必ずガイドコロ寄りのほぼ中央にイロリが設けられ、ガイドコロとの境ではまだ建具を嵌め込んでおらず、ザスキはガイドコロとの結びつきが強かつたことを示している。そしてザスキ表の半分に格子を嵌め込みサマとするのも古い手法である。

当家は建立についての記録および伝承等もないが、建築の平面・構造・細部等の特徴から十七世紀末期頃の遺構と推定する。

関口宗佑家はガイドコロ部を大正三年（一九一四）に大改造し、二階を増設しているためこの部分の復原は困難であつた。しかし、ユカ上部分の特徴は須永武男家と類似しているところから、当家は須永家とはほぼ同年代頃のものと考えられる。

宗佑さん（大正九年生）の話によれば、ユカ上部分は十三代前につくられたということである。したがって当家のユカ上部分は、十七世紀末期頃の建立とみれば穩当であろう。

穴原和郎家は表側の柱を中古に入れ替え、ガイドコロの妻側を四尺五寸程もぎとつてゐるため、完全な復原は困難であつたが、関口宗佑家に次ぐ古い遺構と考えられるところから、十八世紀初期頃の建立とみてよいであろう。

当家は中古に採光のため妻側を少し切り上げ、切り上げた妻側から桁行に約二間の幅にわたつて、土間を約三尺程掘り下げハタバとしてゐる。古老の話によると、織物を織る場合湿度を多くすると織り易いのだといひ、そのために織物を織る場所を地面より低く掘り下げ、そこでイザリバタを織つたのだと伝えている。そしてその昔、小平のハブタイは相当名が知れており、越後方面から織子が多勢出稼ぎに來たのだといひ伝えている。当家では昭和八、九年頃までガイドコロで機

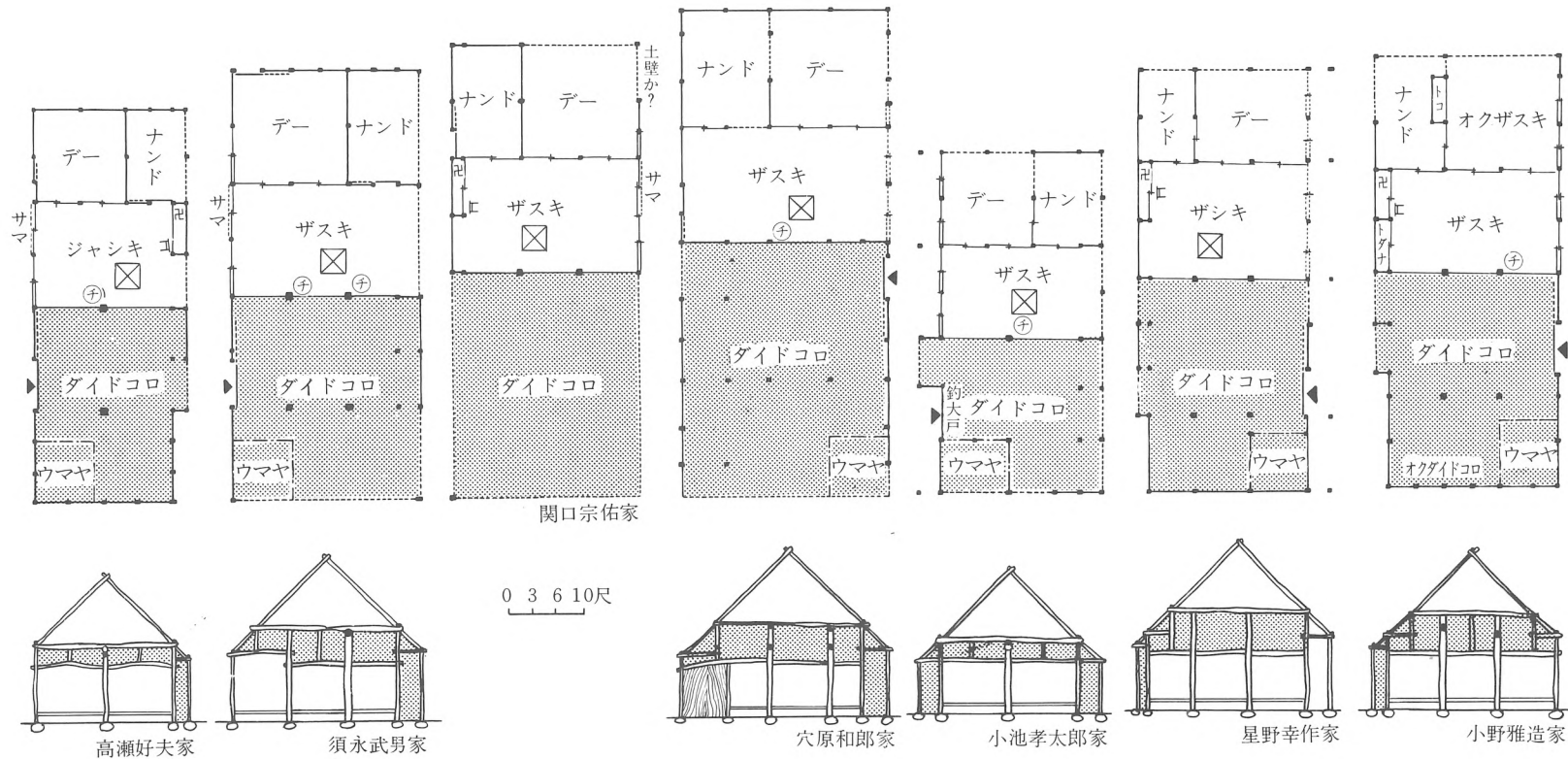


図3 広間型の民家（復原平面・断面図）

織をしていたといふ。

小池孝太郎家・星野幸作家は類似した特徴を示す遺構である。この期の遺構になると、デー表の土壁が消滅し、デーとナンド境では半分の土壁が消滅し、ここに建具を入れて表側からデーを通してであるが、ナンドに採光するようになる。

小池孝太郎のトボーグチの大戸は部戸シロミドのように内側へ釣り上げるもので、引戸のように引き込む壁を必要としない長所があり、トボーグチの新しい開閉方法として採用されたものであろう。

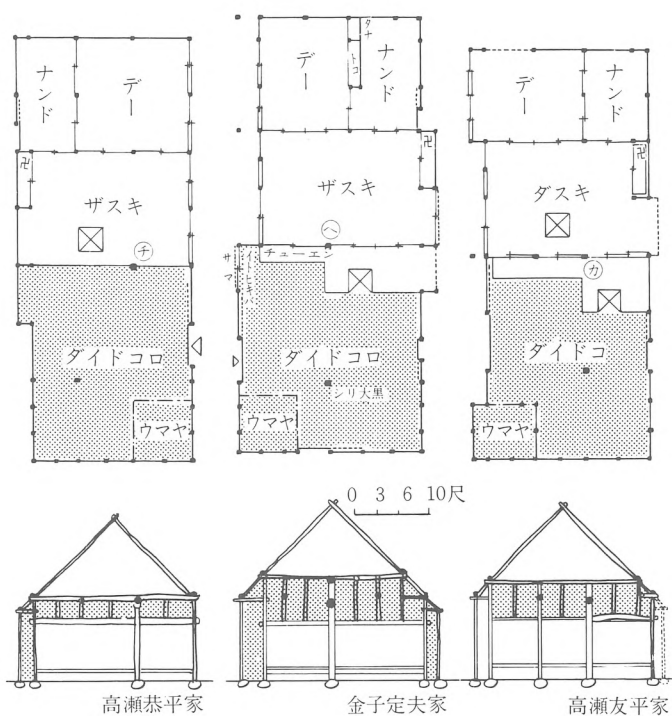


図4 広間型の民家（復原平面・断面図）

小池孝太郎家・星野幸作家とも建立に関する記録及び伝承を残していないが、建築の特徴から一八世紀中期頃の遺構と推定される。

小野雅造家は小池孝太郎家・星野幸作家より幾分新しい遺構と考えられるもので、オクザスキ（デー）とナンド境にトコを設けている。

当家に前述の広間型六棟の遺構と同様、本百姓の家柄で名主等の役職を勤めた家柄ではない。しかしオクザスキ（デー）にトコを付けていることは、時代の進展によって幕府の禁令にもかかわらず、本百姓層ではすでにトコを設けていたことを示すものであろう。

当家は雅造氏（大正十二年生）で六代目になるといふことから、一九世紀初期頃の遺構とみてよいであらう。

高瀬恭平家・金子定夫家・高瀬友平家は共に類似の特徴を示すもので、建立年代は一九世紀中期頃のものと考えられる。この時期の遺構になると、開放性が目立つようになりデーとザスキ境では中柱を除去し差鴨居を使用するようになる。また、大黒柱は四面をカンナで仕上げられるようになり、土間側に逃げをうって据えられるようになる。

大黒柱が土間側に逃げるのは、ザスキに畳を敷きつめるようになったからであらう。古い手法はザスキとタイドコロ境の間仕切芯に大黒柱の芯を合わせて据えるため、他の柱より太い大黒柱はザスキ側になりはみ出すことになる。（写真11参照）。このような状態で畳を入れようとする場合、大黒柱に当る部分の畳を凹字形に欠くか、大黒柱自身を欠くかしなければ畳が入らないことになる。そこで太い大黒柱を敷居の内側に合わせるため、ザスキとタイドコロ境の芯より幾分土間側へ寄せて据えるようになるのであり、このような場合に大黒柱の逃げがあるといふのである。（写真17参照）。

したがって大間々町の民家の場合、ザスキに畳を敷きつめるようになるのは一般の本百姓民家の場合およそ一九世紀中期頃とみてよいであらう。ザスキに畳が敷きつめられるようになると、これまでザスキに設けられていたイロリはタイドコロに張り出した板張り部分に移行

するようになり、ザスキとダイドコロ境には建具が入って、ザスキはダイドコロから独立した空間として意識されるようになる。

さらにこの時期になるとダイドコロの表側に格子棒を嵌め込んだサマを設けてここから採光し、その内側で糸をひいたり、機を織ったりするようになる。そしてサマの内側を今日でもイトヒキバあるいはハタバ(ハタヤともよぶ)とよんでいる家が多い。

五、喰違四間取の民家

広間型の民家における広々としたザスキは作業に適していたが、種々な用途が重なり合っていたため不便なこともあった。例えば食事の来客には困ったことであろう。そこでやがてこのザスキから、食事室の独立が計られることになり、ザスキが分割されて裏側にチャノマが設けられるようになる。この形式が図5に示す喰違四間取の民家である。

小倉元男家はデーとナンドの境を土壁で閉鎖し、大黒柱の逃げもないことなどから比較的古い遺構であろう。しかしデーにトコを設けているところから、名主程度の格式の高い家柄であったと思われる。

小倉玉吉家は名主を勤めた家柄と伝えるが、デーとナンド境は閉鎖され、ザスキ表にはサマも残している。しかしデーとナンド境にトコを設け、ザスキ・ダイドコロ境の柱に逃げがあるなど進んだ手法も示している。これは名主という立場のため、進んだ手法を受け入れ易かったことも考えられるところである。

小倉元男家・小倉玉吉家とも建立に関する記録・伝承等を残していない。しかし、建築の特徴及び農村における当時の階層差を考慮する時、一八世紀初期頃の遺構と考えてもおかしくないものと推察する。

福田勘助家も名主を勤めた家柄である。オクリとナンド境は幅一間を開放し建具を嵌め、この片わらにトコを設けている。またチャノマ



図5 喰違四間取の民家(復原平面・断面図)

の奥行が広くとられており、ザスキの発展を窺い知ることができ。当家も建立に関する記録及伝承等を残していないが、建築の特徴と階層差を考慮して、十八世紀中期頃の遺構と推定しておく。

高草木増次家は本百姓層の遺構である。デー・ザスキ境及びザスキ・チャノマ境は中柱を省略し、差鴨居を用いており、大黒柱はカンナ仕上げとし、逃げもある。当家も建立に関する記録及び伝承を残していない。しかし建築の特徴からおよそ十九世紀中期頃の遺構ではないかと推定される。

六、不整形田字平面の民家

喰違四間取の民家の初期における形式は図一5の小倉元男家及び小倉玉吉家のように、ザスキの裏側に設けられたチャノマの奥行がせまいため、チャノマとザスキ境の間仕切はナンドとデー境の間仕切線より裏側へずれて設けられるために喰違いを生じていることがわかる。調査遺構より推察するところによれば、大間々町における不整形田字の民家は、初期喰違四間取の民家におけるザスキとチャノマ境の間仕切線が、デーとナンド境の間仕切の延長線上まで前進して生成した形式であろうと考えられる。

本調査で不整形田字の民家に属する遺構は十四棟の調査を行ない、調査遺構中の各形式のうちで最も多く、約三十二%に達した。

不整形田字の民家に属する調査遺構の中で最も古い遺構と思われるものが、図一6に掲げた小池政之助家である。当家はデーとナンド境にトコを設けているため、デーとナンド境は全部開放されるまでに至っていない。このようにトコが設けられる位置として、古いものではデーとナンド境に設備し、新しいものではデーの妻側に設けられるのが一般的である。当家はデー・ザスキの表側及び各室境の間仕切に中柱を有し、大黒柱は土間側をチョーナ、他の三面をカンナ仕上げと

しているが、逃げはある。また、チャノマの裏側は総べて開放し、ナンドの妻側にも半間余りの開口部を設けているなど新しい手法もみられる。

当家は文政十二年の記録によれば、組頭を勤めた家柄であり、大司オツカサという屋号も有している。しかしながら建立に関する記録や伝承等は残されていないので、階層差を考慮した上で建築の各種特徴から推察すると、およそ十八世紀末期頃の遺構と推定してよいであろう。

深沢順磨家はデーとナンド境の半分は土壁を残し、この部分に古い様式の名残を伝えている。しかし、ここ以外における内部の室境の間仕切では、総べての個所で中柱を省略し差鴨居を用いている。大黒柱は四周をカンナで仕上げしており、逃げもある。ダイドコではウマヤを裏側へ配し、表側の外壁にサマを設けてここより採光し、サマの内側部分をハタヤとよんで昔はここで機織をしたのだと伝える。

当家も建立に関する記録や伝承を残していないので建築の平面・構造・細部等の特徴から判断すると二九世紀初期頃の遺構と推定される。

星野邦次家ではデーとナンド境に土壁がみられず、中柱を有するが建具を嵌め込み二間を開放している。デーとザスキ境及びザスキとアガリハナ境の間仕切では中柱を省略し、差鴨居を用いているが、デー及びザスキの表側では相変らず中柱を有している。

大黒柱は裏側とダイドコロ側をチョーナとし、他の二面をカンナで仕上げているが逃げはない。また、トボーグチより妻寄りの二間は下屋まで取り込んで、表側をサマとしこの内側をイトヤとよんでおり、ここで糸ひきをしたのだと伝える。サマの窓台（敷居）までの高さは地上から約二尺程で、ザグリで糸をひく高さと同程度である。

当家は先祖の宗平（天保十二年生）という人が、古家を買って当地へ移築して住んだ初代であるといひ伝えているところから、十九世紀中期頃再建された遺構とみてよいであろう。そして、再建された遺構

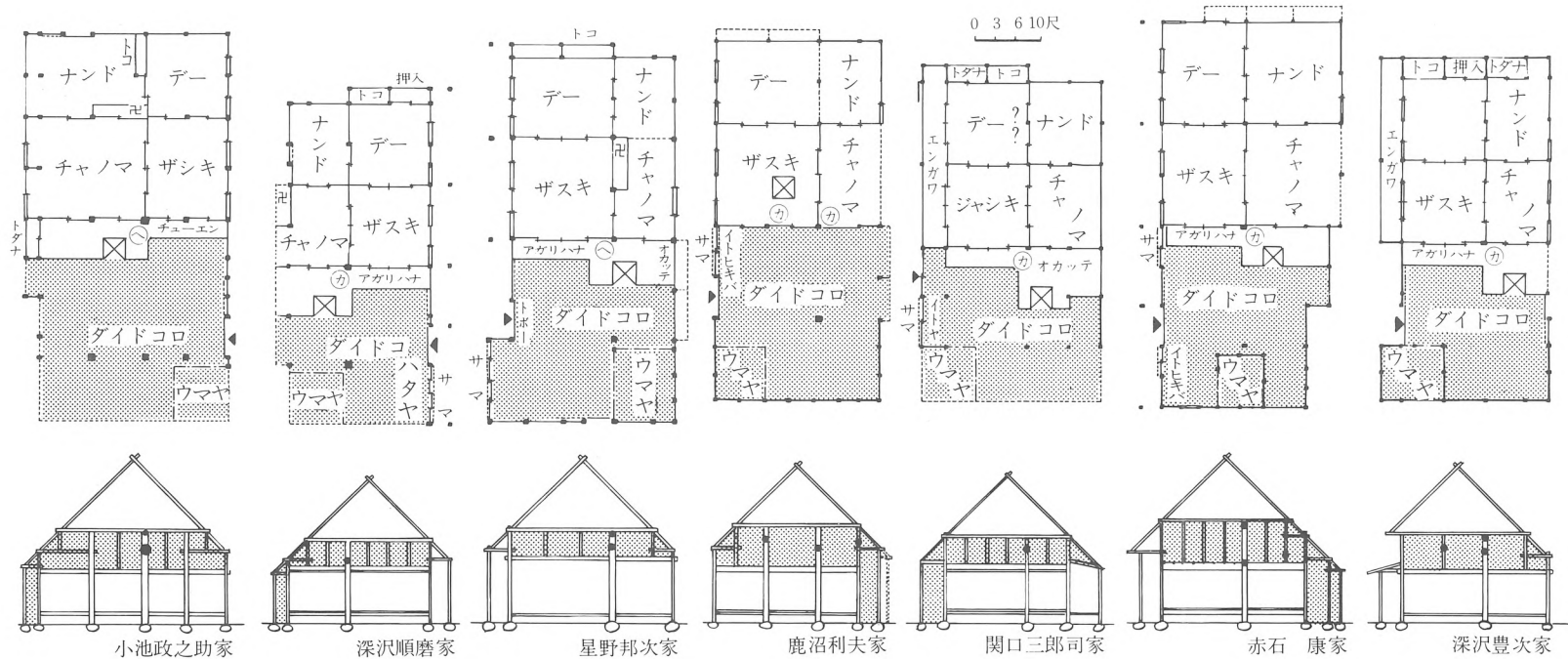
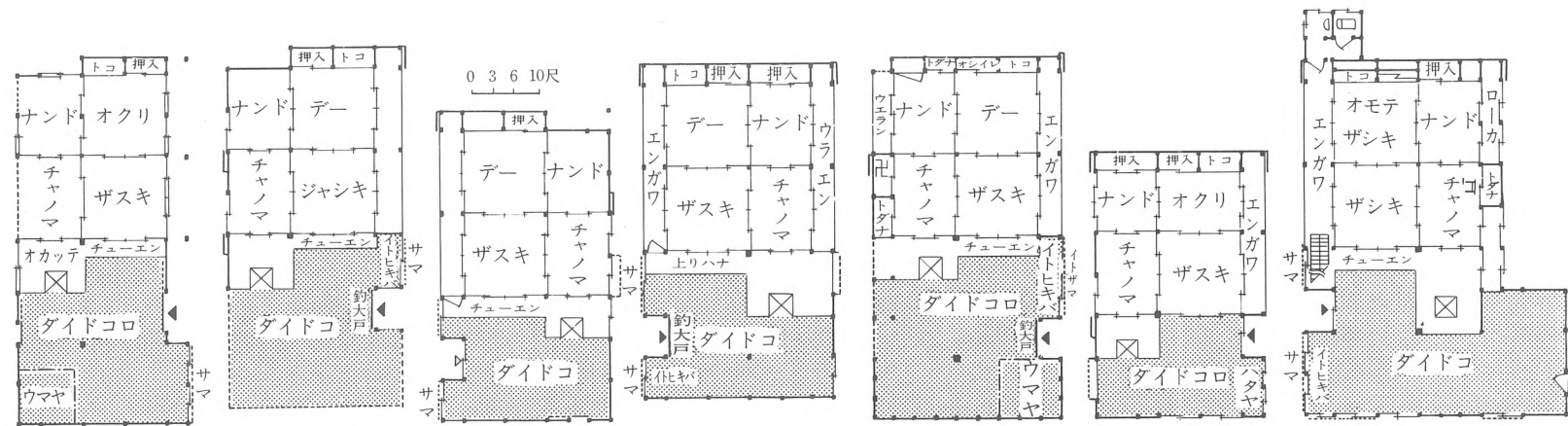
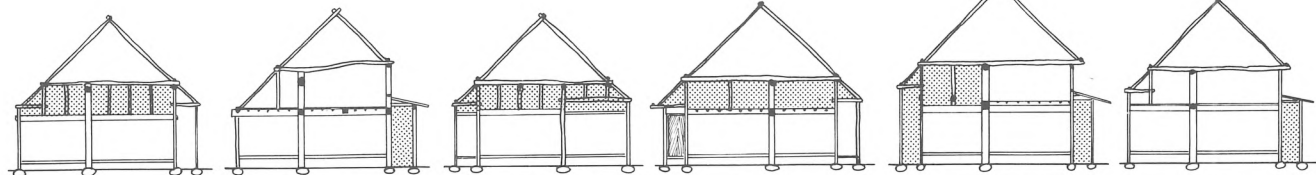


図6 不整形田字平面の民家（復原平面・断面図）



荻原一郎家



松島和男家

福田富三家

漸田良一郎家

高草木昭夫家

鏑木多真喜家

高草木春吉家

図7 不整形田字平面の民家（復原平面・断面図）

とはいえ一九世紀中期頃の特徴をよく表現している。

鹿沼利夫家はデーやザシキ表ばかりでなく、各室境にも中柱を有しているが、ガイドコロと床上境にたつ二本の太い柱はカンナで仕上げられている。しかしこの二本の柱は逃げを有していない。デーとナンド境では中古に差鴨居を入れて中柱を除去し、差鴨居を受けている左右の柱の内側には、板を打ちつけているのでこの部分における間仕切の復原を明らかにすることができなかつた。

当家における新しい特徴はナンドの裏側を半分開放し、裏側よりナンドへ直接光していることである。

当家では建立に関する記録及び伝承等を残していないので、建築における各種の特徴を総合的に判断して、一九世紀初期頃まで溯る可能性を否定しきれないが、一九世紀中期頃の遺構と推定しておけば無難であろう。

関口三郎司家はデーとナンド境に中柱を残しているが、他の個所の間仕切では差鴨居を用いて中柱を省略している。また、当家はデーとジャシキ表にエンガワを設け、エンガワの外側に引き通しの兩戸を付けている。

当家は安政六年（一八五九）生れの人が十六才の時結婚し、この家を新築して住んだと伝えるところから、明治八年（一八七五）の建立ということになる。そして棟の上には昭和二十五年まで草をはやしていたという。これは土手の芝を土を付けたまま、取ってきて棟の上のせたもので、「クレグシ」とよんでいたという。古老の話によると昔は草葺家の多くがクレグシであったという。

赤石康家はデー・ザスキ境とザスキ・チャノマ境及びザスキ・ガイドコロ境の中柱を省略しているが、他の部分では中柱を残している。当家はザスキ・ガイドコロ境より桁行に小黒柱までと奥行は大黒・小黒間を結ぶ部分の表側上部に根天井を張って、六坪ではあるが屋根裏利用を考えている。この屋根裏利用の方法は、上屋柱の丈を高めて軒

下端と二階床間に丈の低い開口部を設けて、ここから採光すると同時に、外からこの開口部にハシゴを掛けて上り下りしたもので、屋根裏利用（二階造り）の初期的形態を示している。

トボーグチの右手ではウマヤを梁間中央部まで後退させ、約四尺五寸幅のサマを開きイトヒキバの空間をつくり出している。

当家は建立に関する記録や伝承等を残していない。しかし以上のような建築的特徴や建築の構造及び細部等の特徴から、およそ一九世紀中期頃の遺構と推定する。

深沢豊次家は豊次氏（七十六才）の祖父（大正八年七十八才没）が明治の中期頃、建立したものと伝える。外観は草葺総二階造りにしているが、二階を利用できるのは床上部分だけで、ガイドコロの部分は天井も張られていない。

明治中期になってもオクザシキの表側とオクザシキ・ナンド境に中柱を残しているのは注目される場所である。また、当家はウマヤを表側の外壁に接して設けており、ガイドコロにサマもないところから、明治中期頃の農家であっても、ガイドコロにイトヒキバやハタバを設けなかつた農家もあつた一例である。

松島和男家は昭和四十五年七十五才没の親が移築したと伝えるところから、十九世紀末期頃に再建されたものと推定される。ナンドは妻側と裏側の両方を開放し、薄暗い室というイメージを脱している。

ガイドコロではオカッテに接する裏側を開放し、ウマヤを裏側へ押しやつて前面の幅二間をサマとし、下屋まで取り込んで内側をハタヤとしている。当家は移築当時屋根裏利用を考えていなかったが、その後ガイドコロ・床上部分とも根天井を張って、屋根裏を利用できるよう改造している。

福田富三家は当主の祖父が明治二十年頃移したと伝え、土間は昭和十年頃妻側の三間をもぎ取ってしまったものという。デー・ジャシキの表側はもちろん、各室境では総べて中柱を省略し、差鴨居を使用し

ている。トボーグチでは左右の土間部分を下屋まで突き出してあるため、引大戸にできないので釣大戸にしている。当初より二階造りとし、当初の二階では土間・床上境より上手へ三間の開口部をとり、赤城型の屋根形式として採光していた。しかし、今日では二階の開口部をもっと広くっており、赤城型の外観を示していない。

瀬田良一郎家は火災にあい二年前八十一才没の人が腹にある時建つたものと伝えるところから、明治二十六年（一八九三）の建立ということになる。各室境では総べて差鴨居を使用し、デー・ナンド・ザスキ・チャノマに接する床上中央部の柱を長者柱とよび、ダイドコの表側片隅のイトヤではサマ鴨居の内側に糸ひき神様の幣束と並んで、赤・緑・白の紙でつくった機神様もまつられている。また、ダイドコの裏側中央の壁にはオカマ様（竈神様）をまつたシメナワが多数束になってまつられていた。

高草木昭夫家は明治二十八年（一八九五）に建立されたといわれる遺構で、ダイドコ上部の表側半分に根太天井を張って、二階を設けている。当家は表側だけでなく、裏側にもエンガワ（ウラエンとよぶ）を設け、ナンドの裏側も全部開放している。トボーグチは釣大戸とし、トボーグチの左右の表側をサマとしそれぞれの内側をイトヒキバとよんでいる。

鍋木多真喜家も高草木昭夫家と類似の平面を示すものである。二階の設けられている箇所は、大黒柱より表側の部分でデー・ザスキ境から小黒柱までの部分であり、この部分には根太天井を張っている。外観は赤城型としトボーグチから上手へ三間の開口を設けて、二階へ採光している。

当家は調査時に留守であったため、建立に関する伝承等を聞くことができなかった。しかし、建築の特徴からみてそう古いものでなく、一九世紀末期頃の建立とみて穏当であろう。

高草木春吉家は明治三十四年生れの人が五、六才の時、古家を買っ

て移築したものと伝え、棟はクレグシであったという。このことから当家の再建された明治四十年頃に至っても棟をクレグシで葺いていたことが明らかとなった。

当家の外観は前兜造りであり、大間々町内では後に述べる水島松次郎家と共にめずらしい例であった。

萩原一郎家は昭和二年（一九二七）に建立されたもので、建築費は二千元であったという。

切妻瓦葺総二階で表側は二階の面積を広く取るために出桁造りにしている。エンガワの上手突当りに内便所を設け、エンガワの下手には二階への階段を付けている。ダイドコの表側は総べてサマとし、妻側も開放的にしているため、ダイドコ内部は大変明るくなっている。また、ダイドコの表側隅部では低いサマを矩の手に廻して、内側をイトヒキバとよんでいる。小屋組は和小屋にしているが、二階も総べてサオブチ天井を張っているため、断面図を採取できなかった。

養蚕は主に二階で行ない、一回で約百二十貫もとれ、普通年に二回行なったという。当家では大黒柱に対応してダイドコ中央部にたつ柱をシリ（尻）大黒柱とよび、床上中央にたつ柱をチョージャ（長者）柱とよんでいる。

七、整形田字平面の民家

この形式の民家平面は表側と裏側の室の奥行を等しくとるため、床上の四室はほぼ同じ広さの室となる（図一八参照）。

不整形田字の民家平面はいずれも表側の室の奥行より、裏側の室の奥行を狭くとっているため、前後の室の大きさにアンバランスを生じている。このアンバランスを修正し、裏側の室を表側の室と同じ広さに発展させたものが整形田字平面の民家と考えられる。

この形式に属する民家は六棟を調査したが、どれも十九世紀中期以

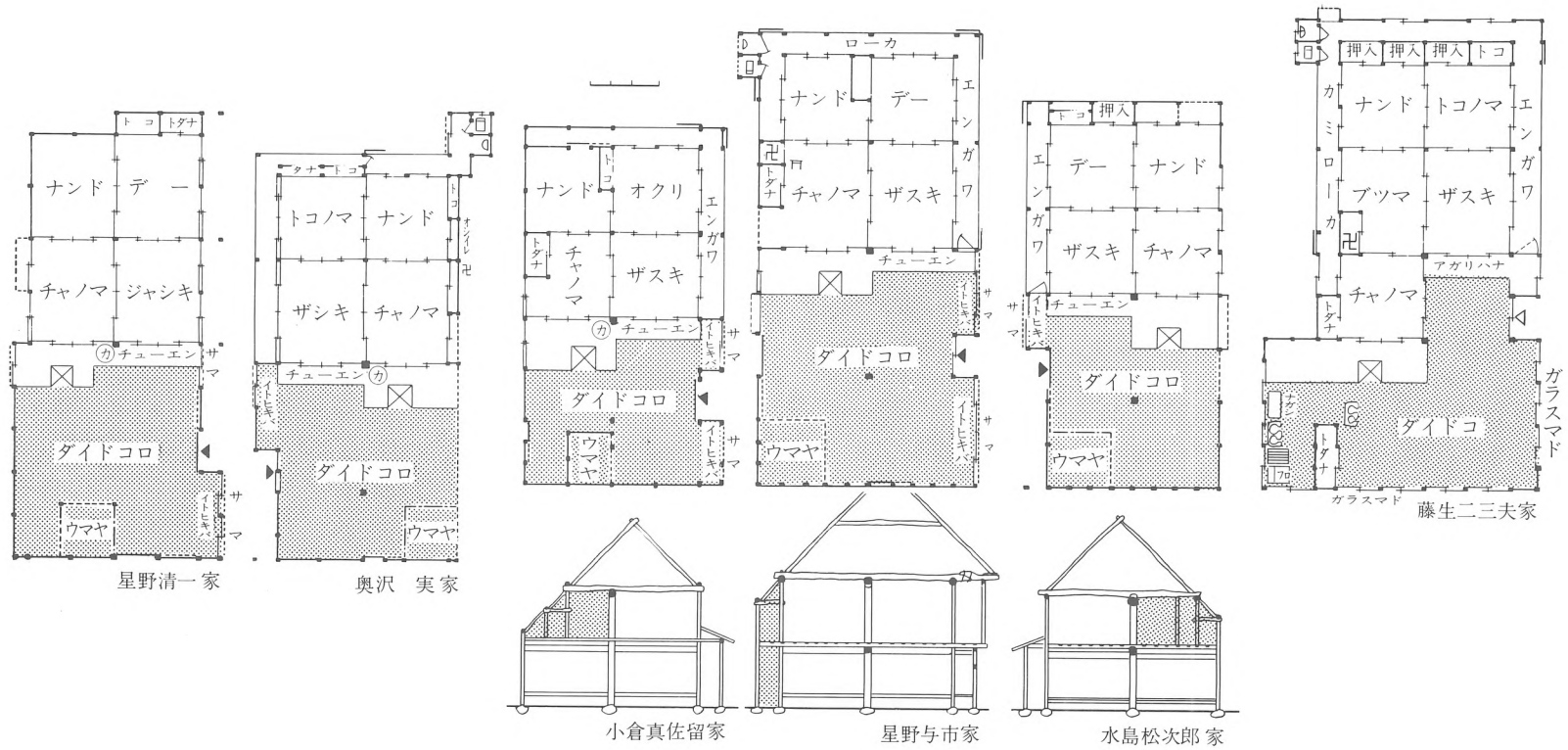


図8 整形田字平面の民家（平面・断面図）

降に建立されたと考えられる新しい遺構であった。

星野清一家は小屋組を改造し、現在瓦葺にしているが、これは昭和三十年頃におこなった改造によるもので、改造前はクズヤ(草葺家)であったという。当家の建立は昭和八年に八十六才で亡くなった先祖が十才の時建ったものと伝えるところから、安政四年(一八五七)頃の建立となる。そして、大工は東村の花輪にあるお寺を建った大工と同じ人であると伝えている。

梁間方向に架けられた梁の、イロリの上部に当るところに荒縄を四五回まいているのが目に映ったので聞いてみると、これは泥棒よけのまじないだという。このように土間のイロリに近い太い梁に荒縄をまいた例は、宮城村や他地区で数例みたこともあるが、そのいわれを聞くことができたのは初めてであった。また、当家は母屋の西に棟の低い別棟のイトヤを有しており、ここでは二十年前頃まで、さかんに糸をひいたのだという(写真39参照)。

奥沢実家は当主(五十一才)の三代前に火災にあい。建て替えた遺構と伝えるところから、およそ一九世紀中期頃の建立と推定される。床上の表側をはじめ各室境では差鴨居を使用し、ナンドにまでトコを設け、ナンドの西に便所を付けている。

小倉真佐留家は草葺二階造りで、一九世紀末期頃の遺構と推定されるものである。棟はクレグシとし、調査で訪れた時黄色い山ユリが棟上できれいに咲いていた。前にも述べたように、当地方の草葺民家は当家のように、土を厚くつけた土手の芝を棟にのせて、頂部の雨もりを防いだものであった。しかし、今日残されている草葺民家の棟は、瓦あるいはトタンでおおわれ、昔の面影を伝えるクレグシを見ることができたのは当家が唯一の例であった。

星野与市家は草葺総二階出桁造りで、規模も大きい。ガイドコロの表側は総べてサマとし、その内側をイトヒキバとしている。当家は前の母屋が古くなったので明治三十三年(一九〇〇)に建て替えたもの

と伝えている。

水島松次郎家は大正三年(一九一四)に建立されたものと伝え、草前兜造りの外観を示している。柱間の内法は十二尺びったりとし、ナンド・チャノマの裏側も開放的につくられている。

藤生二三夫家は田字平面の間取のダイコにチャノマを突き出したもので、室数は五つになるが、平面の基本は整形田字なので、整形田字平面の民家を含めたわけである。当家はローカを三方にめぐらし、ダイドコの表側はサマでなく、腰高のガラスマドとしている。幕末に名主役を勤めた家と伝えるが、母屋は昭和十六年(一九四一)に建立されたものである。外観はトボーグチより上手を瓦葺出桁造りの二階とし、トボーグチより下手を平家になっている。母屋の南には道路に面して長屋門がたち、名主の家柄をしのばせている。

八、多間取平面の民家

四間取より室数の多い遺構を分類の都合上多間取平面の民家と仮称したわけであるが、調査遺構四十四棟のうちこの形式に相当するものは図19に示す二棟であった。

小野里公男家は名主役を勤めた家柄で、ザスキ表に式台を設け、比較的古いわりに立派な造りをしているなど、各主の役柄が建築にも反映している。床上は上手一列と次の列を三室つづきとした六間取の平面を示し、デーに相当する室をジョウダン(上段)とよび、トコ・タナを付けている。

差鴨居の使用がみられず、各柱は一週間隔に建てられており、ジョウダンとナンド境の間仕切は半分を土壁で閉鎖し、ガイドコロでは採光用のサマも設けられていないなど古風に様式を示している。これは建立年代が古いことを示す証拠である。また、構造的にはサス組内に棟束をたて、二階の利用も考えられていないのも、平面の特徴と同様

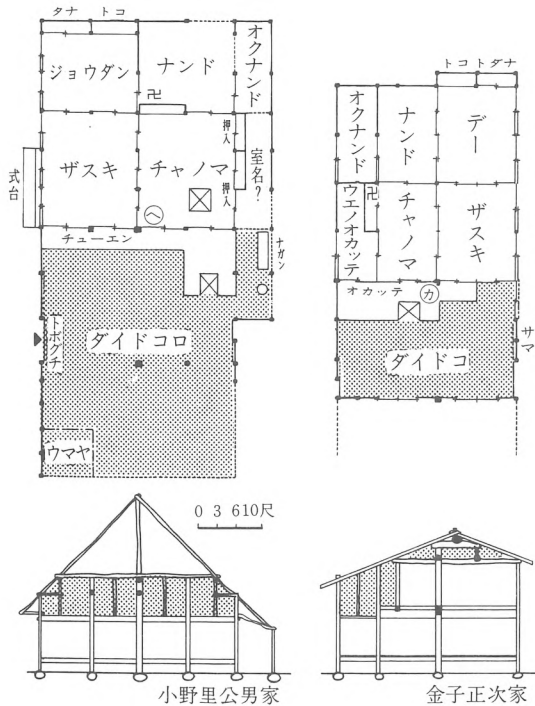


図9 多間取平面の民家（平面・断面図）

に比較的古い造りを示す証拠であろう。
 当家には明治三十四年の年号が記されている絵図面と、これよりかなり古いと思われる二種の絵図面が残されているが、残念ながら古い方の絵図面には年号がなく、また痕跡と比べると建立当初のものでもないらしい。

当家には名主役に関する古文書が、いくつか残されているが、母屋の建立に関する記録や伝承等は残されていない。そこで階層差を考慮した上で、建築の平面・構造・細部等の特徴から建立年代を推定すると、およそ一八世紀初期頃まで溯るものと思われる。そして比較的改造も少ないことから、名主役宅として貴重な遺構であろう。

金子正次家は小野里公男家と全く同様な間取を示すが、規模は一廻り小さい。切妻造り鉄板葺二階家であるが、当初は板葺であった。ナ

ンドの裏に設けられている細長い室をオクナンドとよび、この室は主に出産と死者を安置した室であれという。チャノマの裏の細長い室はウエノオカッテといい、主にカッテ用品を収納する室であるという。当家は昭和五十一年に九十二才で亡くなった人が二十才で嫁に来た時九十三才のおじいさんがいたが、そのおじいさんが三才の時火災にあい建替えたのが現在の母家であると伝えるところから、逆算すると文化十一年（一八一四）に建立された遺構ということになる。

九、町家

大間々町の街中には道路に面してたつ古風な瓦葺土蔵造りの家がいくつか残されている。いずれも店屋で表側開口部に格子戸を嵌め、重厚な瓦葺と厚い白壁が印象的である。

街中には住む古老の話によると、大間々の街は何度となく大火に見舞われているため江戸時代に入るような古い建物は少ないのだという。一番新しい大火は明治二十八年で、この時も相当広い範囲を灰にしてしまったと伝えている。

図10に掲げた三棟も明治二十八年の大火後、すなわち明治二十九年に建てられたものといわれている家であり、これらが街中で古い建物の部類に入るのである。

須永善十郎家・野口信三郎家は相接してたつ遺構で、両家とも平面が屈折している。これは敷地がそのように曲っているために、敷地いっぱいには建てる町家は、家の恰好も敷地の通りの恰好になってしまうのだという。

町家とはふつう町人の住む家のことを指すが、大間々町のように街道筋の町人の町は、ふつう表通りに面して商家、奥まったところに職人の家を並べた。商家の家は通りに面した表を店とし、通常低い二階をもつ平入で、一方に片よって入口が設けられた。入口からは奥まで土

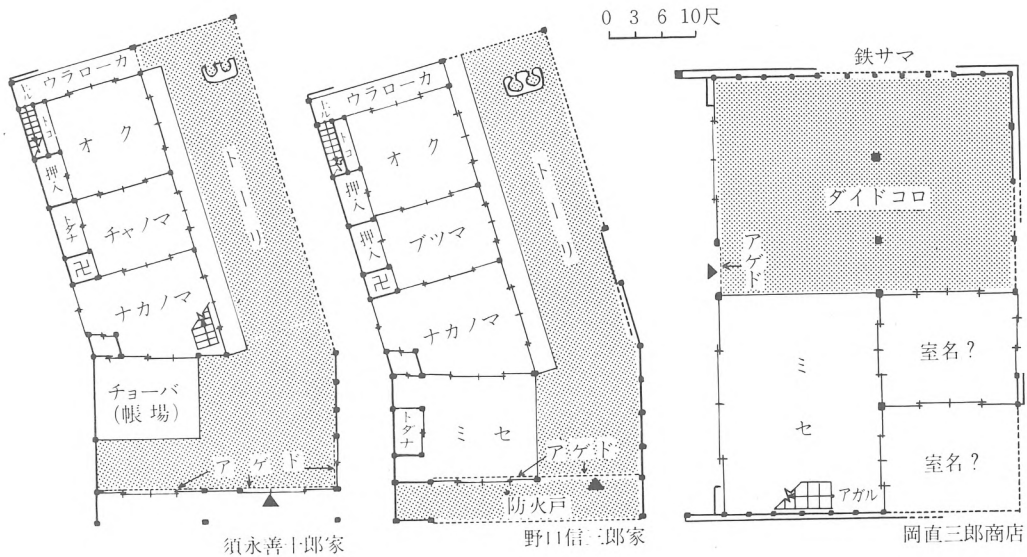


図10 町家（平面・断面図）

十、主な柱のよび名について

岡直三郎商店も明治二十八年の大火後に建てられた土蔵造平入りの店家であるが、通り庭式のものでない。その平面は農家造りと類似し、桁行の半分を土間（ガイドコロとよぶ）とし、他を床土としてその表側半分をミセに当てている。岡直三郎商店は滋賀県の出身（近江商人）で天明七年二月の創業という古い酒造業者である。会社の組織は支配人制度をとり、支配人は単身赴任を原則としているため、店はそのための宿舎をも含んでいるのだという。恐らくミセの裏側隅の室が支配人室であり、雇人達は多勢で二階に宿泊していたようである。

民家には多く柱が使われておりいろいろなよび名が付けられている。しかし、今日では大黒柱は知っていても、それ以外の柱名を知る人は極めて少ない。そこで、ここでは主な柱のいくつかについて、そのよび名を紹介しておく。

図11において①の柱はミヤコ柱・チョージャ柱・ダイジン柱などと呼ばれていたが、当地方ではミヤコ柱・チョージャ柱などのよび名が混在しているようで、ダイジン柱とよぶ例は一例だけであった。

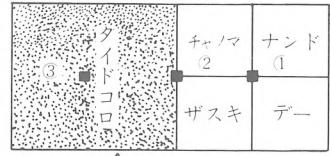


図11 柱の名称

また、チョージャは「長者」のことを指すものと思われる、「都」と「長者」は庶民の感じるイメージに何か共通なものを与えるのではないだろうか。

図11における②の柱は、ダイコク柱とよばれ、これ以外のよび名を聞くことはなかった。ダイコクは大黒と書き、三宝を愛し五衆をまもり飲食を満たす神である「大黒天」から来たものと考えられ、①の床上の中心柱と違って②の大黒柱は家の中心に据えられる柱のことをいう。そしてここから転じて世間で俗に「大黒柱」という時は、一家あるいは団体の中心となる人物を指すような言葉にまでその意味が発展したものと推察される。

③の柱は大黒柱に対応して土間の中程にたつ柱で、ショコク柱・シリダイコク柱・フクダイコク柱等の名称でよばれていたが、ショコク柱とよばれている例が普遍的であった。ショコクとは「小黑」と書くものと思われ、大黒に對比して用いられるようになった名称と考えられる。

この他にカマ柱とよばれる柱もあった。例えば図5の福田勤助家のように、グイドコロの裏側にたつ上屋柱のうち、イロリに近い柱をカマ柱とよび、カマ柱には幣束をゆわえてカマ神様をまつっていた。

即ち、カマ柱とは「竈柱」とかき、かまど神をまつった柱を指すものと考えられる。

十一、イトヒキバ及びハタバ

幕末に建築されたと思われる遺構の大多数は土間の表側に低い格子窓(サマとよぶ)を設け、サマの内側をイトヒキバ・イトヤ・ハタバ・ハタバなどとよんでいる。以上の四つのよび名のうち最も多く聞かれたよび名は、イトヒキバでそこは主に糸ひきがおこなわれた場所で、そのための採光窓としてサマが設けられたものだと思われられている。

大間々町内の農家にみられるサマは写真1のように低い位置に開口している。これはザグリで糸をひく高さにサマ台を合わせたもので、イトキバとして合理的な採光方法であろう。このような低いサマは県内他地域ではみられないもので、大間々町地域に限ってみられるイトヒキバ用の特有なサマとみてよいであろう。

このようなサマはいつ頃から農家のグイドコロ表に設けられるようになるのか。調査遺構から検討してみよう。

調査遺構の中で土間表にサマを設けている最も古い例は深沢順磨家で、建立年代は一九世紀初期頃のものである。当家はウマヤを土間の裏側隅部に設け、土間表の隅部をハタヤとよんで、表側に低いサマを設けている。このように土間表にサマを開け、イトヒキバあるいはハタヤを設けている例は一九世紀初期のもの一例、一九世紀中期のもの六例、一九世紀末期のもの七例、二十世紀初期のもの四例の計十八例であった。以上のことから当地方に於て、糸引あるいは機械が農家の副業としておこなわれはじまる時期が、一九世紀初期頃で、一九世紀中期から末期にかけて最も盛んに行なわれたことが建築遺構を通して窺い知ることができる。また、このことは農家経営の中に占める養蚕の拡大

とも深く関連しており、養蚕空間の確保から出現した二階造母屋の出
現時期とその後の発展期ともほぼ一致するようである。

有形民俗資料

はじめに

編集分担項目は有形民俗資料となっているが、実際には、共通の聞きとり調査を担当しているために、各分野への報告はかなりの量を出しても、有形民俗資料のカードの受取りは極端に少なく、今回は編集するだけの分量もないので、再調査もできないまま、カードを並べることとした。この種調査の弱点をさらしてしまったこととなるが、次回調査においては十分注意したいものである。

(阪本英一)

桑プルーイ

養蚕の稚蚕期には、桑の葉をこまかく刻んで給桑するが、そのとき桑プルーイの中に入れて蚕座の上でゆすって平均されるようにする。掃立時のもつとも目がこまかく、日数が経つとやや粗くなるように三段階ぐらいの桑プルーイがある。ここに示したのは粗いものである。

ヌカプルーイ
稚蚕期飼育では、蚕座を乾燥させて蚕を病気にかからせないようにするために、モミガラを焼いてつくったヤキヌカをふりかけることをすることがある。ヌカプルーイはヤキヌカを入れてふるいかける道具である。

コノメ
養蚕は、母屋の二階などの蚕室でする例が多い。蚕室には、コノメといわれる棚や養蚕カゴを入れて、棚飼いで行なうことが平均的であった。継に十枚のカゴが入られる棚が基本で、二列ならば二十棚、三列ならば三十棚といわれる。県西部ではコワクという。

養蚕火鉢
春蚕に火力を使用して飼育するのが普及するようになるのはひかく的新しいことで、手軽に火を使う道具として養蚕火鉢が出現する。写真の資料は、火鉢の縁が割れたために、竹のたがをかけて補強したものである。火鉢は太田市南の小泉焼きである。

モジアミ
蚕室にコノメをかいて、養蚕カゴの中で飼うカゴ飼いで、たちまちたまってくる蚕糞蚕沙をとる除沙作業(ウラトリ)に、糸網を使って蚕をなくさないようにした。稚蚕期はこまかい糸のモジアミで、壮蚕期になると、縄でつくったモジアミ(ワラミ)を使用する。最近ではビニール製のものが主力になっている。

養蚕木鉢
蚕の上簇時に、熟蚕を一匹ずつ拾いこんで入れる容器として戦前ま



写真1 星野与市家のサマ、この内側をイトヒキバという。

できかんに使われたもの、県内では、利根郡下と、吾妻郡六合村で生産されたのが有名だが、写真の資料は、利根系の彫り方である。菊花状の彫りあとが美しい。もう一つはコネバチ状の彫り方をしている。

マブシ折り器

ワラ製のマブシを多用する地域では、昭和初年からシマダマブシを折るマブシ折り器が普及しはじめ、手で折ってつくるマブシにかわって「ガチャンガチャン」と能率的に折れるので好評だったが、シマダは一回限りで捨てるのでその筋から改良マブシ（トウカイマブシもその一つ）が指導され、そのためのマブシ折り器（B）が導入された。トウカイマブシは何回も使えるようになった。

スプザル

隣接の利根村で生産されるもので、桑を入れても、穀類を入れても、食器入れにしても丈夫で、使いやすい万能のザルで、現在も多用される。

マユカケザル

竹製の浅いザルで、給桑にも使う家があるが、マユカキをするときや、マユを入れて目方をはかる容器として使うことが多い。

背負子

シヨイコ、シヨイダイとこつの呼称があるようであるが、背中があるところの下のところにあるコより下がかなり長いことが注目される。荷をつけて背負い出すときや、休息するとき楽なようなくふうであらう。

セエブク

背負に袋ということからの呼称かどうかは不明であるが、他の地区でビクとか、シヨイツカリとよんでいる草で編んだナツプザックである。土地の人も編むというが、利根の方の人に編んでもらうことが多い。

テカイ

背中に背負ったり肩にかけるのでなく、腰に下げることが注目される。またメカイでなくテカイとよぶところもおもしろい。

セエカゴ

背負い籠が二つ示されたが、大形のは草刈りや、落葉を背負う籠、やや小さ目のもの（人の背負っているもの）は、弁当や肥料作物などを背負うものとして必要品であった。

イモカキグルマ

イモはカゲノタワラといわれ、食生活の相当の物分を占めていたが、食べるためにはよく洗う必要がある、そのために川（用水など）に一種の水車をかけ、その中に入れたイモが自動的に洗えるくふうをした。写真は、イモカキグルマの軸を外して立てたものである。

木 鉢

雑穀を粉として食べる時、こね鉢として使用する木鉢は必需品であり、ウドン・ヤキモチ・マンジュウなどはこの中でこねられ、形をつけられて加工された。餅をついたときもこの中へ入れて処理することもあった。

マルシヨウギ

スズ竹でつくられたマルシヨウギは、水きりが早く、汚れないので食器かごととしてきかんに使用されてきた。

ユトウ

人寄せをして食事を提供するときに、汁を注いで歩いたり、湯を注いでまわる道具。かつてはウドンブルマイは祝儀の席に欠かせないことで、ユトウの中にオスマシを入れて使用するので、村の旧家には数多く用意されていた。

オシラキ

神仏へ食物を供えるための器、トチの木やその他の木を板にし、ざつと削った上にもようを彫りこんで、盆前とか、歳暮に売りに来た（市で求めることもある）。これに供えものを盛って供え、祭りが終ると捨

てた。

桶ズルス

没落した旧家の土蔵の片すみに放置されていたもので、下の方の竹のたがは崩れて落ちてしまっていたが、かつては、モミスリの道具としてさかんに活やくしたことがある。桶のようにつくられている。

麦ぶるい

穀類の選別道具。曲げ物の丸枠に金網を用いた節が出現する前にさかんに使ったもの。

俵編み器

穀類を保管、運搬したりする容器としての俵は、農家の人たちが冬の農閑期に自家用分くらいは編んでおいたもの。脚はうまくみつけた二又の木を二つに挽き割って、これに角材を利用して繩をかけるものをつくっている。編みながら落ちないように繩がはさまこめるようにくふうしてあることも特色。これで炭俵も編んだ。

モロコシボウキ

トウモロコシではない穂モロコシ（コウリヤン？）のからを利用して、自家用のボウキとして作ったもの。茎を長く利用して柄とした。一種の草ボウキである。

ハナカキナタ

小正月のときにつくるハナ（ケズリバナ）を作るための専用の刃物。刃の先端についているカギのところがハナをつくる大切なところで、手をのばして向うの方から手前へ引いてハナギをけずってハナを作る。最近では作る人が少なくなった。

大 鎌

山の下刈り等に使用する大形の鎌で、一メートル以上の長い柄をつけ、夏山の下刈りに振ったりする鎌。普及したのは戦後ということである。

写真にはワラジも一緒に写っているが、大きさから見ると馬のワラ

ジとしては少し小さい感じがする。蹄鉄をつけなかった時代には欠かせないものであった。

タカツナ

竹を細く加工してつくった繩。竹を細く割ってもなう、ことはできないので湯で煮てからなうというが、萱ぶき屋根のなわとしては最高のもの。かつては荒物屋でも売っていたが、現在は見られない。

商家の家具

大ぜいの奉公人を使用していた商家では、奉公人の引出しをたくさんつけた家具をつくり、めいめいの名札をつけて使わせた。また部屋を活用して使うために、「階段」として作らず、家具として引き出しのついた階段ダンスのようなものを利用した家が多い。一般の民家でもやる家があったが例は少ないようである。

日掛貯金箱

納税用の貯金として、地元の金融機関と特約して日掛け貯金をした時の貯金箱、一戸毎に金額を記し、穴があって、そこへ現金を入れて隣りへまわすしくみだった。



写真5 金子元治家(2間取)



写真2 正田猛家旧母屋(1間取)



写真5 高瀬好夫家(広間型)



写真2 正田猛所有の移築建物(2間取)



写真6 須永武男家(広間型)



写真3 旧石原岩三家(1間取)



写真7 関口宗佑家(広間型)(大正2年にグ
イドコロ部分を改造し2階とする。)



写真4 久保田吉松家(2間取)

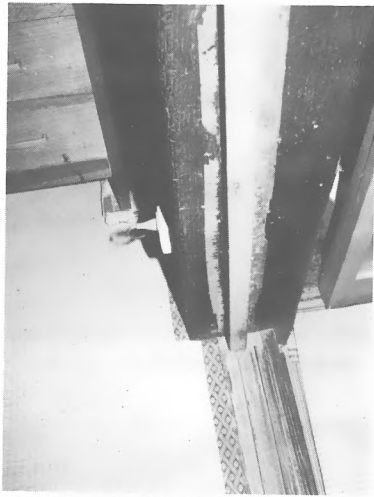


写真11 小池孝太郎家の大黒柱

大黒柱には逃げがない（室境の芯に柱芯を合わせている）ため、他の柱より太い大黒柱は敷居の内面より室内へはみ出してしまふ。このような室へ畳を入れる場合は、当家のように畳を凹字形に欠くか、大黒柱の畳の当る部分を切り欠くかしなければならぬ。このような大黒柱の据え方は古い遺構によくみられる特徴である。



写真12 星野幸作家（広間型）



写真13 小野雅造家（広間型）

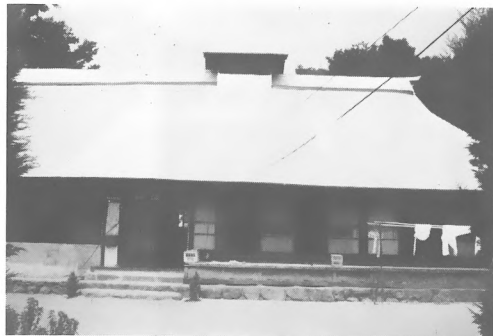


写真8 穴原和郎家（広間型）



写真9 穴原和郎家

中古にダイドコロの妻側寄りの土間を幅約2間深さ約3尺位掘り下げ、ここでイザリバタを織ったこうすると適度に湿気が保てて織り易くなるのだというこの写真は掘り下げられた部分の土間をみたところ。



写真10 小池孝太郎家（広間型）

20年位前にクズヤネをセメント瓦に改造したもの



写真17 金子定夫家の大黒柱

写真11の大黒柱と違って柱芯をダイドコロ側に寄せて大黒柱の内面と敷居の内面を合わせている。このような大黒柱の据え方は新遣構にみられるもので、大黒柱に逃げがあるという。こうすることによって大黒柱のところで畳を欠かなくとも済むようになる。



写真14 高瀬恭平家（広間型）



写真18 高瀬友平家（広間型）



写真15 高瀬恭平家のいろり
最近ではいろりを残している家が少ない。



写真19 小倉元男家（喰違4間取）



写真16 金子定夫家（広間型）



写真 24 深沢順麿家（不整形田字平面）



写真 小倉玉吉家（喰違 4間取）



写真 25 星野邦次家（不整形田字平面）



写真 21 福田勘助家（喰違 4間取）
クズヤネを大正 4 年、瓦葺に改める。



写真 26 鹿沼利夫家（不整形田字平面）



写真 22 高草木増次家（喰違 4間取）



写真 27 関口三郎司家（不整形田字平面）



写真 23 小池政之助家（不整形田字平面）



写真 31 松島和男家（不整形田字平面）



写真 32 福田富三家（不整形田字平面）



写真 33 漸田良一郎家（不整形田字平面）



写真 34 高草木昭夫家（不整形田字平面）



写真 28 関口三郎司家
トボーグチより土間正面をみる。正面の屋根根と桁の接する部分にシメナワがいっぱい下っているが、これは竈神様をまつたもの



写真 29 赤石康家（不整形田字平面）



写真 30 深沢豊次家（不整形田字平面）



写真 39 星野清一家にみられた別棟のイトヤ（手前の低い瓦葺建物）



写真 35 鎚木多真喜家（不整形田字平面）



写真 40 奥沢実家（整形田字平面）



写真 36 高草木春吉家（不整形田字平面）この地方ではめずらしい前兜造である。



写真 41 小倉真佐留家（整形田字平面）



写真 37 荻原一郎家（不整形田字平面）



写真 38 星野清一家（整形田字平面）昭和 30 年頃クズヤネを瓦屋根に改造する



写真 45 藤生二三夫家（整形田字平面）



写真 42 小倉真佐留家の大黒柱
約沢角で四面にカンナがかけ
られ逃げもある。



写真 46 藤生二三夫家の長屋門
当家は幕末に名主役を勤めた家で、この長
屋にはそれを裏付ける生きた資料である。



写真 43 星野与市家（整形田字平面）



写真 47 小野里公男家（多間取）
名主役を勤めた古い家柄である。



写真 44 水島松次郎家（整形田字平面）
この地方ではめずらし前鬼である。



写真 51 野口信三郎家 (町家)



写真 48 小野里公男家の式台



写真 52 岡道三郎商店 (町家)



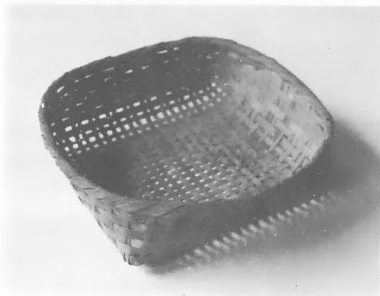
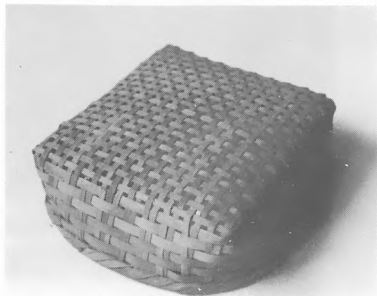
写真 49 金子正次家 (多間取)



写真 53 奥付酒造店 (町家)
当家は外部の写真撮影だけで、内部の調査は行なっていない。



写真 50 須永善十郎家 (町家)



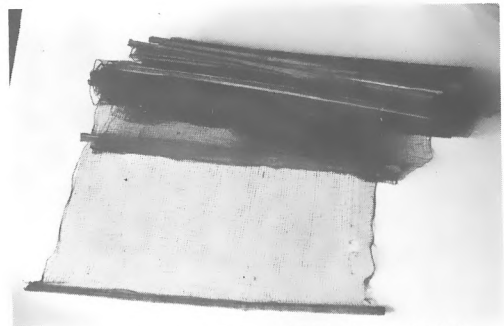
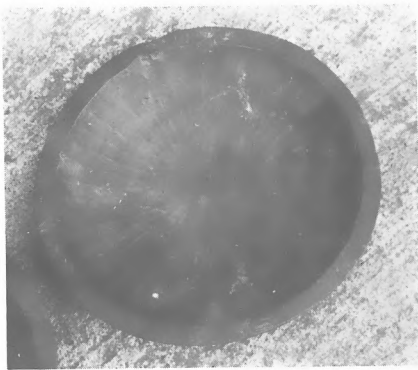
ヌカブレイ (小平) (阪本英一 撮影)



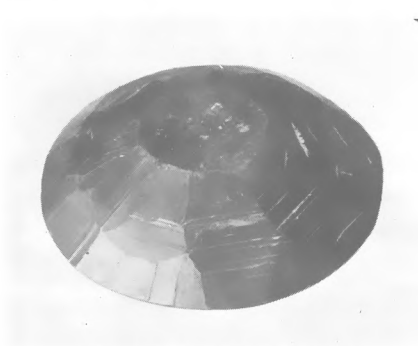
養蚕火鉢（小平）
（阪本英一 撮影）



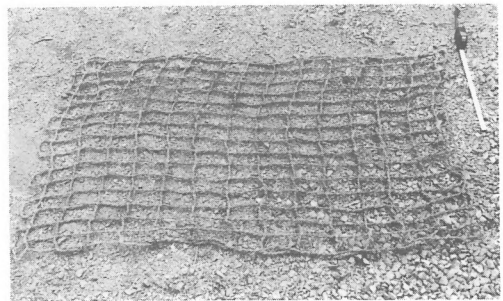
コノメ（狸原）（板橋春夫 撮影）



モジアミ（小平）（阪本英一 撮影）



養蚕木鉢（小平）の裏と表
（阪本英一 撮影）



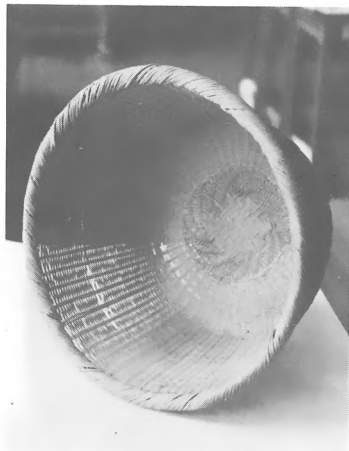
ワラミ（狸原）（板橋春夫 撮影）



マブシ折り器B（狸原）
（板橋春夫 撮影）



オコアゲの時に使うキバチ
（狸原）（板橋春夫 撮影）



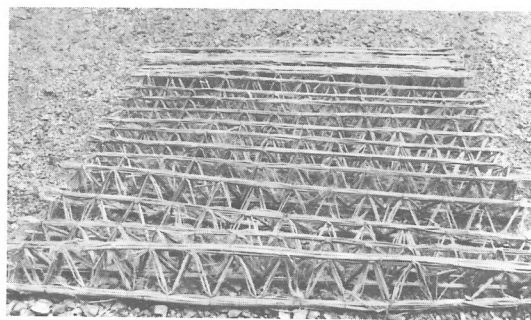
スズガル (小平)
(阪本英一 撮影)



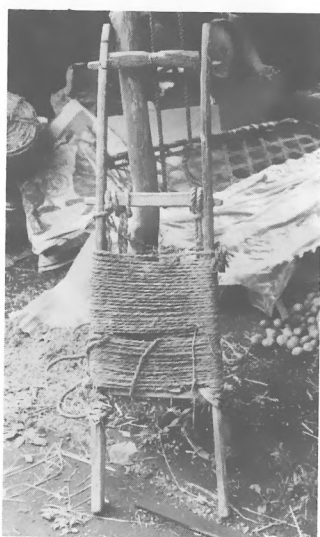
マブシ折り器A (狸原)
(板橋春夫 撮影)



ショイバシゴ (上神梅)
(板橋春夫 撮影)



トウカイマブシ (狸原) (板橋春夫 撮影)



ショイバシゴ (上神梅)
(板橋春夫 撮影)



マユカケザル (狸原)
(枝橋春夫 撮影)



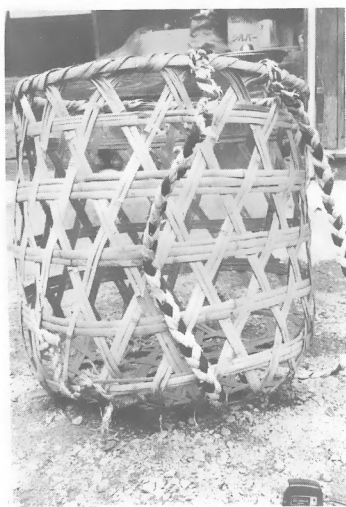
テカイとその使用法 (狸原)
(板橋春夫 撮影)



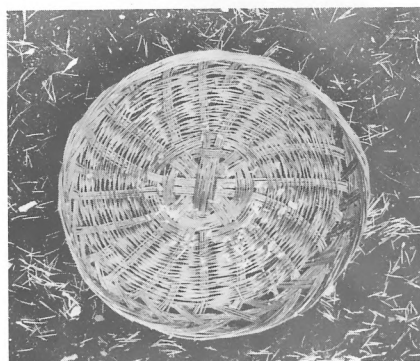
セエブク (狸原)
(板橋春夫 撮影)



セエカゴ (狸原)
(板橋春夫 撮影)



セエカゴ (狸原)
(板橋春夫 撮影)



洗いザル (神梅) (関口正巳 撮影)



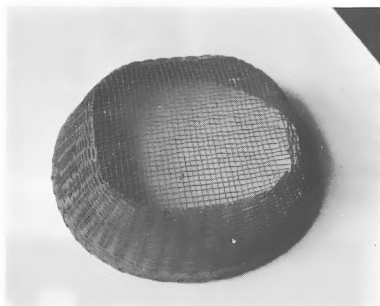
キバチ (狸原)
(板橋春夫 撮影)



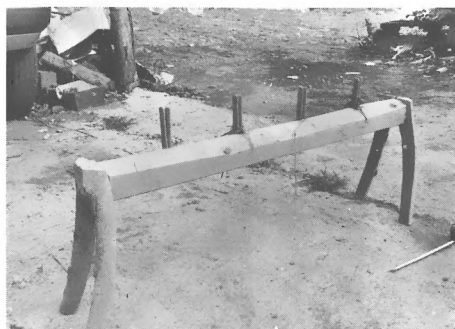
ユトウ (小平)
(阪本英一 撮影)



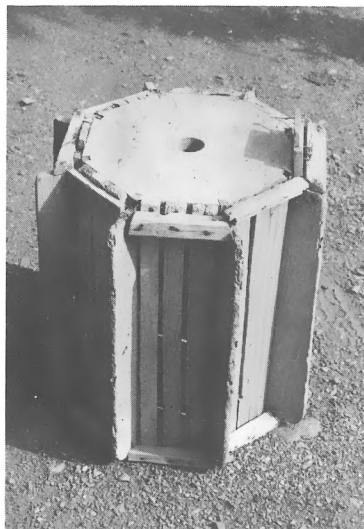
オシラキ (小平) (阪本英一 撮影)



フルイ (小平) (阪本英一 撮影)



タワラアミキ (小平)
(板橋春夫 撮影)



イモ洗い車 (上神梅)
(関口正巳 撮影)



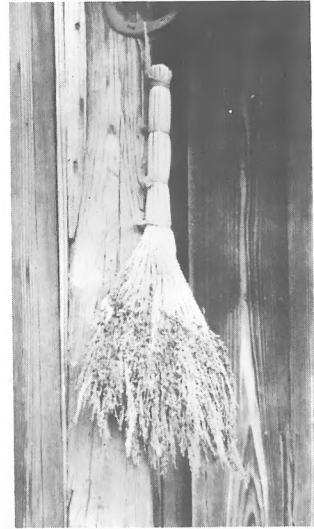
木ズルス (小平)
(阪本英一 撮影)



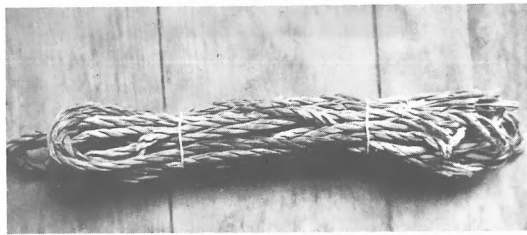
フルイ (小平) (阪本英一 撮影)



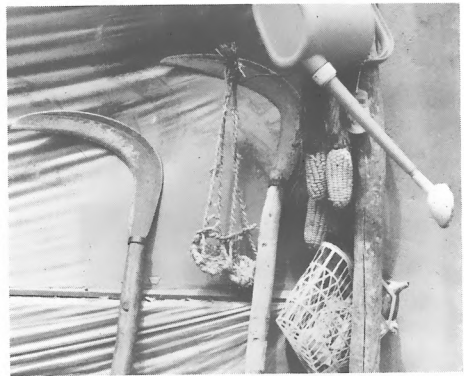
ハナカキナタ (狸原)
(板橋春夫 撮影)



モロコシボウキ (狸原)
(板橋春夫 撮影)



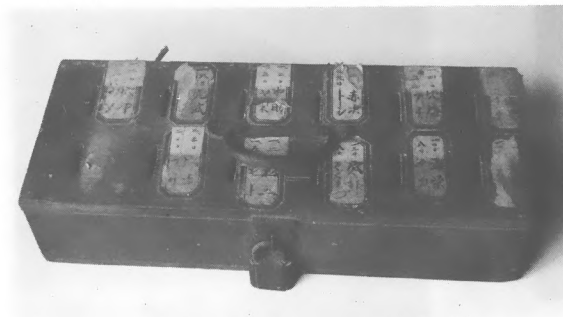
タカツナ (竹綱) — (小平)
(阪本英一 撮影)



ウマのワラジと大鎌 (浅原)
(板橋春夫 撮影)



奉公人が使った引出し。(岡直三郎商店) (八間々)
(板橋春夫 撮影)



日掛貯金箱 (小平) (阪本英一 撮影)



引出しのついた階段 (大間々)
(板橋春夫 撮影)

—神	6, 32, 35
ヤタ	49
ハツ飯	28
ヤツデ	32, 80
柳のまな板	185
屋根	38, 81
—替え	39
—ふき	38
—ムクリ	95
—屋	39, 113
矢畑	229
ヤブ入り	61
山犬様	234
山入り	184
ヤマガンピョウ	20
山グワの木	189
—の神様	185, 187, 223
—の開き	199
やんめ	87
ゆ 行	
ユイ	95, 112
結納	141, 155
—おさめ	155
—金	141
ユイツギ	100
夕食	27
湯灌	142, 167
遊芸人	74
雪の日	237
ゆず	86
—湯	86
輸送	69
ユトウ	270
指遊び	246
夢	78
一封じ	78
よ 行	
夜遊び	106, 141, 151
良い夢	78
養蚕	41, 43, 51
夜えびす	192
夜カゴ	269
夜木鉢	269
夜火鉢	269
ヨキ	60
よそいぎ	5, 7
ヨソ村との交際	113
予兆	76

ヨッコ	95
四ツ身	11
四ツ飯	6, 28
夜泣き	86
ヨナノカ	174
夜ナベ	61, 63
夜這い	117, 152
ヨビモドシ	164
ヨムシ	85
ヨメゴ	85
—のお茶	141, 160 161, 162
—のつとめ	114
ヨメ三年婚八年	142
嫁入り支度	12
—衣裳	153
—道具	12
—前	152
嫁取り	152
嫁の着物	7
—の権利	153
—の里帰り	162
—の正月	191
—の生活	152
—のつとめ	152
—の年季	153
—のみやげ	161
嫁迎え	157
嫁婿の村まわり	162
ヨリアイ	100
ヨロク	73, 95, 116
ヨロケ病	2, 68
四十九杯	173
ら 行	
ライサマ	77, 124
雷電木	82
—よけ	82
り 行	
リガク	65
利尿済	89
りゅうばしら	37
料理番	161
リング箱	66
る 行	
留守居仏	209
るすんぎょう	25

れ 行	
恋愛	153
恋愛結婚	153
—の仲人	153
蓮生坊	25
ろ 行	
老人クラブ	117
六月の忌日	199
六合神社	120
六算様	88
六算除け	88
—の唱えごと	84
六部	74
炬ばた	36
—ぶち	36
わ 行	
若衆ギンザ	161
—組	140
若水	179
一餅	190
ワジメ(輪飾)	222
ワセタンバ栗	65
綿帽子	157
わたまし	38
渡瀬川	1
薬市	70
わらい話	231
わらじ	10
—づくり	64
ワラデッポー	219
わら人形	175
ワラビ	20
ワリダシ	96, 186
ワリムスビ	20
悪い夢	78
綿入れ	8
ゆ 行	
湯灌	167
ユキノシタ	20
湯沐	187
よ 行	
ヨメゴのお茶	161, 162
嫁のみやげ	161
嫁婿の村まわり	162

御鉢の三東雨……………76
ミカンの皮……………89
右ずまい……………32
ミクンチ……………217
ミコシ……………126
水泳ぎ……………150
水ごり……………200
ミズナ……………20
水ブサ……………185
ミズブサの木……………36
水を大事にした話……………105
味噌……………25, 32, 66
ミソカソバ……………225
ミソカッパライ……………225
みそずけ……………18
ミソツチル……………17
ミソと小判……………229
ミソハギ……………206, 207
道刈り……………101, 204
道普請……………102
水車……………30
三ツ絞……………6
三ツ身……………11
三ツ峯講……………109
ミツメ……………162
ミツモリ……………29
ミナガワ……………54
ミナノカ……………174
峯八軒……………96
ミノカサ……………122
ミヤコ柱……………266
耳がかゆい……………77
—だれ……………87, 88
—の異物……………90
—ぶさげ……………83, 143, 175
ミョウガ……………20, 44
—餅……………6
—タケ……………19, 20
—バカ……………19
妙見さま……………148
—の腰掛石……………228
苗字分布……………114
民間療法……………86
民俗知識……………75

む 行

六日ドロ……………185
無縁物……………208
迎えイチゲン……………157
迎えダンス……………157

迎え火……………203
迎え盆……………176
ムカデ……………63, 66, 87, 90, 123
麦刈り……………47
—夕……………49
—作り……………41
—の諺……………47
—の品種……………46
—ふみ……………47
—ふるい……………271
—まき……………46
—まきを忌む日……………47
—めし……………16
—わら帽子……………10
ムグラ鉄砲……………220
ムコ……………152
ムジナ……………85
—の嫁入り……………233
—の話……………233
虫歯……………88
虫封じ……………86
ムシロ編み……………57
息子たちと戦争……………117
結び方……………10
娘かぶり……………15
棟木……………38
ムナノカ……………174
村仕事……………101
—尽くし……………248
—に来た芸能……………113, 117
—に来る商人……………113
—に来る職人……………113
—の開発……………94
—の組織……………94, 98
—の費用……………100
—の役……………99
—の連絡……………100
—八分……………30
—まわり仁義……………141

め 行

銘仙……………9
めかい……………163
目かご……………87, 88
めくら暦……………91
メッツケガミサン……………142, 164
目のゴミ……………87
メハジキ……………142, 171
メハジヤ……………171
メマシ……………164

メリンス……………9
メンズ……………146
めんどり……………77
メンドリ畑……………229
メンパ……………27

も 行

モーカ木綿……………12
モウソウ竹……………20
モグラ退治……………220
—ツブサギ……………22, 48, 219
モジアミ……………269
餅……………23
—家例……………184
—ぐさ……………199
—つき……………223
—を供える神……………225
—をつく日……………23
—モロコシ……………44
モッケ病……………88
モトバタヤ……………55
モノヅクリ……………187
喪服……………7, 173
モヨッケ水道……………30
もらい湯……………39
もりっこおび……………10
モリワタシ……………25
モロコシボウキ……………271
—モチ……………23
もんつき……………5, 7
モンペ……………9

や 行

夜学……………151
ヤキカガシ(ヤカガシ)……………193
ヤキモチ(焼き餅)……………21, 22, 202
ヤギリ(焼き穂)……………47
厄落し……………151
薬草……………88, 90
厄年……………150
—子……………149
厄除け……………150
火傷……………88, 89
屋号……………68
厄病除け……………32
焼ケ十二……………25
八坂神社……………126
八坂祭……………125
屋敷稲荷……………35, 119, 130, 141, 151
—内の木……………34

ふだん着 ……5, 6, 8, 9
 フツームスビ ……10
 二日め ……162
 ブッツケナノカ ……143, 173
 舟場 ……69
 フナ餅 ……23
 フナマイダマ ……17, 24, 53
 フナヤスミ ……24, 51
 あぶぎ ……11
 二間取の民家 ……253
 冬の仕事 ……63
 フレヲマワス ……100
 フルシキ ……118
 風呂組 ……104
 ——に入る順 ……39, 117
 ——の位置 ……39

へ 行

幣束 ……158
 兵隊検査 ……6, 150
 へソクリ ……95, 116
 へソの緒 ……86, 144
 ベタ ……133
 ベタ ……247
 へツツイ ……131
 別当職 ……133
 へビ ……66, 85
 ——の抜け殻 ……86
 勉強道具 ……118
 便所 ……32
 ——の神様 ……132
 弁天講 ……109, 112
 ——待 ……112
 弁当箱 ……27

ほ 行

ボウウチ ……47
 簾 ……113
 一神様 ……140, 143
 奉公人 ……56, 61
 ——の苦勞 ……57
 ——の休み ……225
 ほうそう神送り ……83, 140
 ホウツキ ……176, 206
 ホウツキの根 ……148
 ホウバイ仕事 ……95, 112
 ——ツキアイ ……95, 112
 坊主結び ……10
 ほおざし ……32
 ホカイ ……38, 141, 155, 175

ホカケ ……31, 50, 141
 ボク迎え ……187
 補習学校 ……151
 ホタモチ ……21, 206, 207
 ホトトギスの兄弟 ……230
 ——のはなし ……230
 ほどやき ……22
 ——を作る日 ……24
 ホマチ ……73, 95, 170
 ボラ ……44
 ボロカクシ ……39
 盆 ……203
 一市 ……205
 一送りの食習 ……214
 一打ち ……203
 一踊り ……215, 248
 一買もん ……205
 一ガラ ……216
 一ゴザ ……205
 一棚 ……176, 206
 一中の産死 ……175
 一中の不幸 ……216
 一中の墓参 ……203
 一提灯 ……203
 一月 ……203
 一の供物 ……203
 一の中日 ……212
 一のぼたもち ……24
 一の埋葬 ……203
 一の用意 ……204
 一花 ……203, 205
 一迎え ……203, 209
 本善 ……108
 ボンゼン ……83
 本裁 ……11
 ボンデン ……125, 143
 ホンビ ……162
 ホンフラン ……9

ま 行

マイダマ ……24
 マイ葬 ……171
 前掛 ……9
 まえすべり ……10
 マカナイ方 ……161
 まき銭 ……171
 枕返し ……78
 一団子 ……167
 一直し ……166
 一飯 ……166

マクリ ……148
 孫だき ……146
 呪い(まじない) ……82
 マス ……18
 まぜごはん ……17
 間違い地蔵 ……135
 町の組織 ……99
 町家 ……265
 町割り ……96
 マツカン ……59
 松を立てない家 ……225
 間取り ……35
 間引 ……145
 まぶし ……53
 マブシ折り器 ……270
 マミ除け ……171
 マムシ ……91
 マムシ酒 ……89
 豆まき ……194
 マユカケザル ……270
 まゆかき ……191
 マユダマ ……53, 188
 ——の販売 ……55
 マユ玉をゆでた水 ……189
 魔除け ……32
 まるおび ……10
 マルショウギ ……270
 マルブキ ……38
 アルマゲ ……157
 まるめ年越し ……189
 まわし ……116
 まわし肩 ……70
 マワタ ……14
 マンガアライ ……50
 マングワ ……49
 満光院 ……125, 137
 万才 ……248
 まんじゅう ……21, 23
 マンダルク ……82
 マンドウロク ……82
 アンドモウセ ……51
 マンリョウ ……80

み 行

ミ ……163
 見合 ……153
 ミウト ……161
 ミオクリ ……171
 ミガキコ ……66
 ミカゲ石 ……69

八十八夜の祝い	150	春彼岸	198	——の神	123
——の別れ霜	199	ハンゲ	50, 199	皮ふ病	90
八幡神社例祭	198	——坊主	50	広間型の民家	253
八寸ば	10	ハンタクオビ	8	ヒメコ	51
初市	186	バンダイ餅	6, 23, 25, 124, 187	ヒモカワ	21
初うぶ毛	86	班長	98	ヒヤス	151
初絵売り	193	ハンテン	8	ひやめしぞうり	10
初午	192	半纏半日	13	百観音	134
ハッカとギョウザ	80	馬場平	132	百度参り	164
二十日正月	192			百八燈	139, 216
ハツカリメン	15			ひょう	77
八朔	31, 163, 216	ひ 行		評議会	100
初正月	148	ヒイラギ	32, 195	——員	94, 100
八将神	138	ヒエ	17	病気は気から	91
初節句	148	ヒエメエダマ	44	火よけ	39
ハツタリ	16	火があがる	193	ひよっとこかぶり	14
初誕生	148	日掛貯金箱	271	ヒヨトリ	54
ハツツキトウバ	143	ヒカリモノ	234	ひより下駄	10
八丁ジメ	200	彼岸ダンゴ	198	肥料	41, 44
初穂	48	——のボタ餅	24	ヒル	85
初詣	180	ひきわり	15, 16	ひるばてえ	21
初夢	78, 180	日暮の明星	84	ヒルメシ	27
ハナガキ	187	備荒食	30	拾い子	149
ハナカキナタ	187, 271	日乞い	83	ヒワ	80
鼻血	91	ヒザムスビ	10	びんかき	9
ハナドリ	64	ヒシ餅	23	びんだし	9
花祭り	80, 198	ヒショマイ	53	びんつけ油	9
花むすびぞうり	10, 61	左膳	33		
花嫁衣裳	8	左ずまい	32	ふ 行	
花輪	68	ヒツコクリ	10	フェルト	10
ハネタキ	113	ヒツジサル	34	深沢の組立式舞台	242
はねをつける	155	ヒツパライ	10	——の大火事	102
バヒフ	88	ひとえもん	8	——人形	242
馬糞	88	ヒトカタケ	16	ふかしまんじゅう	162
破魔弓	148	ヒトケツクリ	46	フキ	20, 80
腹帯	143	一ツ身	11	ふきごもり	39
腹下し	89	ヒトダマ	115, 237	福岡村	1
原の井戸	103	ヒトナノカ	173, 174	武家屋敷	96
原の風	77	——の飾りつけ	171	福区长	98, 99
はらみ箸	24, 81, 187, 188, 190	一間取の民家	255	複合家族	117
ハラミ女	143	ヒト寄せの時	113	福茶	88, 194
バラマキ	47	人寄せのときの料理	29	腹痛	88
張板	12	一人一日の仕事量	109	福豆	195
針供養	13, 196	雛市	3, 197	フジマワシ	246
針箱	12	ヒナタヘビ	66	扶持持ち	164
春ゴ	51	ヒナ祭り	197	藤森稻荷	130
春駒	114	ヒノキ笠	10	不整形田字平面の民家	258
ハルタ	46	火に立つ	196	フダイ	115
榛名の三東雨	76, 77	火の番組合	102	フタケ	49
——の雷	76	火吹竹	150	フタナノカ	174
		火伏せ	166		

—からのお歳暮	154
—とのつき合い	154
—のお礼	154
—のぞうりきらし	141, 154
—のナナデンボウ	141, 154
ナシ	80
梨木温泉	70
ナスウマ	206
謎	237
名付け	147
—親	147
ナツタ	49
七色ギモン	149
七草ガユ	185
七つ坊主	86
七つ星	84
ナナ晩焼き	203
七夜着	11
七日ザラシ	14, 175
浪波節語り	113
ナミノハナ	79
菜めし	17
ナレアイ	153
ナワシロ	49
なわない	109
ナンテンの箸	87
—の葉	89
ナンド	36, 144
—の神様	132
—の掃除	193
に 行	
握り飯	25
ニコニコの伴天	9
二・七の市	72
二十三年忌	174
二十三夜様	112
—マチ	109
ニシン	19
日光裏街道	68
二の市	66
荷馬車	70
二番草	49
ニボウトウ	21
ニホンゴメ	19
入棺	168
乳歯	86, 148
庭	32
ニワオキ	51
ニワトコ	90, 187

人形芝居	242
妊娠	143
—しての注意	143
—中の夢	78
—中の禁忌	145
—と馬の手綱	79
—とほうき	79
—と便所	79
—と禁忌	78
人足仕事	102
ぬ 行	
ヌカブルイ	269
ヌルデ	187
ね 行	
ネーロ	66
ネギの北枕	82
猫供養	137
—地藏	137
—のさか毛	77
—のはなし	230
ネズップサゲ	48
ネズミ除け	85
ネバ土掘り	66
ネブツ	88
寝まき	9, 12
年始回り	181
念仏	173
—石	228
—玉	142, 173
—団子	142
の 行	
納棺	142
農耕	41
農耕の禁忌	81
農事暦	91
農村歌舞伎舞台	238
農休み	23, 163, 202
ノガエリ	171
ノシ買い	55
ノシ取り	73
ノゾツコミ酒	161
ノッペラボー	85
ノデンボー	24, 185, 188
のどのとげ	87
野辺	171
ノボリコミ	159
ノボリ身上	114

飲み込んだ異物	90
ノラクラ	64
ノラボウ坂	98
ノリデマ	95

は 行

歯	86
ばあさんかぶり	14
羽織	7
墓掃除	204
一直し	142, 172
墓場	173
—の団子	87
袴	7
馬鹿むすこの話	230
秤	60
掃立て祝い	54
はきもの	10
履物の俗信	11
バクチ	134
馬喰う	42, 65
ハコベ	88
ハサミバコ	157
破傷風	87
柱	36
機織り	5, 13, 43, 55
—唄	248
—の暖房	57
機神様	2, 5, 13, 119 126, 138, 203
ハタケ	46
畑入り	193
畑の神	48
秦野刻煙草	68
機屋	56
—の休日	57
—の正月と盆	57
—の食事	57
—の賃金	56
—のふんどし	57
—の奉公人	56
—の夜なべ仕事	56
肌ジュバン	9
ハタムスビ	10
働き着	8
蜂	85
—さされ	89
—の巢	76
八王子様	120, 228
—の祭り	122

地まつり	37, 138	寺への年始	181	トコバン	142, 168
地名	235	てんかん	88	戸沢	99
茶の間	36	天気まつり	49, 83, 122	年男	179
ちゃぶだい	27	天狗様	124	年祝い	150
茶屋	113	でんぐり返し地藏	86	年占い	195
中気	87	——薬師	134	歳神	225
チュウゲン	141, 157	天候の子兆	76	年神様	195
チュウバ	10	——の子報	77	年越しそば	86
中風	89	デンジ	46	どじょうのヒボリ	66
チュウマイ	53	天神様	120	——ばさみ	66
長者柱	36, 266	——の祭典	120	年とり	195
チョウチン	53	デンシュウロク	65	土蔵	34
チョウムスビ	10	天井上げ祝い	60	ドテモグラ	6, 22, 48
ちよいちよい着	5, 6	天南草	90	ドドメ	51
チョコダンゴ	174	テンボシ	78	となえ言	85
チョッポマキ	47			トマリゾメ	141, 151
		っ 行		トムライ	195
っ 行		十日ダンゴ	219	——ジメ	
ツキコ	66	十日夜	218	(トムライアゲ)	143
ツキマゼ餅	223	——のワラデッポウ	219	トメアナ	142
つけ菜	18	——餅	23, 219	トメトウバ	143, 174
漬けもの	19	ドウギミモチ	28	ともぼらみ	149
ツゲ	80, 166	道玄の娘	226	土用	200
ツジュウ餅	222	銅蔵	68	——みつめ灸	88
頭陀袋	168	銅山街道	68	——餅	23
頭痛	87, 89	トーザン	12	トラノオ	46
つばうら	78	冬至	222	トラム	165
つばき	87	——のトウナス	90	トリアゲバアサン	144
ツブシムギ	16, 50	——の日の食べもの	88	——水	146
ツボ庭	32, 34	桶ズルス	271	トリムスビ	141, 161
ツミッコ	21	道祖神	87, 190	トロロ	90, 185
つめりっこ	22	銅問屋	68	ドンドン焼き	190
つわり	143	道中着	12	呑竜がえり	48
		トウナス	88, 163	——様	86, 147
て 行		糖尿病	90	——坊主	83
出あいイチゲン	158	塔婆のタテジマイ	174	な 行	
手打うどん	21	トウモロコシ	17, 28, 44, 223	苗クバリ	49
デエ	32, 36	ドブロク	29	苗バ	49
テカイ	270	トボグチ	85, 252	長尾根	1, 96
デキル	142	とがくし	9, 109	長居する客	84
テクノボー	170	戸隠様のお札	77	長生きの相	150
テコバコ	89	毒消売り	73, 74, 113	流しびな	198
テッコ盛り	192	トクサ	80	ナカノカイト	128
手伝い	93	どくだみ	88	中の寺	132
デッチ	61	毒虫	88	中宿	152
手っぷり水	92	とこあげ	145	長持	12
テッポリタンボ	102	ドコウジン	131	流れ灌頂	175
出針	14	床とり	161	——星	84
テバタ	55	床の間	36	仲人	154
テマツカリ	95	床柱	36		

生理帯	146	そこひ	89	辰の日	50
セエカゴ	270	ソテツ	89	タツミ井戸	32
セエブク	270	ソトサン	6, 15, 16	タツミカド	34
石尊様	124, 139, 216	外便所	34	たてかえの手伝	39
赤飯	17	ソバ	17, 32, 44	タテガン(棺)	168
—家例	184	—ガレイ	184	タテジマイ	143
—をつくる日	23	—エンギ	116	たてば	65
石板	118	染物	13	タテマタ	60
セチ餅	23	反町の薬師様	150	タドガイト	97
石灰	65	た 行		棚上げ餅	174
セツタ	10	田植え	49, 50	棚ざらい	184
節供の贈答	198	田植えのときの食事	31	七夕	202
—ばたらき	82	大火	102	—祭	203
節分	82	大黒	20, 36	狸石	228
—の豆	195	大根のきりぼし	19	種蒔き	41
セミの脱けがら	88	—の年取り	220	田の神	48
セリタタキ	185	—のひば	19	足袋	11, 92
世話方	161	—まき	91	—屋	72
—役	100	大食漢	114	卵を飲んだ蛇	85
善慶寺	204	大神宮	138	多間取平面の民家	264
仙台平	6	台所の石	76	魂よび	142, 146
洗濯	9, 14	大日堂	132	タマンマイ	53
—板	5, 12	大日様	84	ため	44
先達	126	堆肥	44	たらい	5, 12
せんてい	81	台風の被害	117	たらし	22
センドモウセ	51, 83	大福餅	163	—焼き	22
洗髪	9	ダイマナク	197	タロッペ	20
膳箱	26	ダイマナク除け	197	俵編み器	271
センブリ	88	タイヤのお膳	142, 168	俵神様	132
ゼンマイ	20	タカガイト	97	ダンゴ	21, 24
染料	67	タカサゴ	160	タンス	12
そ 行		タカヅナ	271	タンジュウ	46
総会	100	たかはり	10	誕生	143
贈答	198	タカミ	97	—餅	148
雑煮のいわれ	232	薪	39	ダンジン柱	266
葬儀の知らせ	169, 170	—取り	66	丹毒の特効薬	89
—の日取り	165	たくあん	18	タンポポ	88
葬式の後	165	竹馬	246	タンボ	46
—の分担	165	竹ボウキ	184	ち 行	
葬送	167	タケヤスミ	51	近戸神社	198
葬制	164	タゴイ	45	チガヤのゴザ	176
葬列の役割	170	だし	26, 126	力石	106
葬式のわらじ	78	タスキ	8	チカラクラベ	141, 151
双体道祖神	119, 137	—結び	10	地震の時刻	77
相談役	98	裁ち板	12	チタケ	20
ゾウニエンギ	116	タチ餅	148	チチグサ	20
ぞうり	83, 109, 171	駄賃つけ	65	チチババ	30
ソガイ	54	タツウタ	237	血止めの呪い	84
俗信	75, 76	タツガシラのノリ	50	チブク	79, 145

七年忌	174	——棚	183	身上の評価基準	114
七の市	66	——のおかず	18	——まわし	114, 142
七の膳	172	——の供えもの	86	しんぞう病	89, 90
しつけ	79, 92	——の不幸	175	シンツキトウバ	143
シニガラス	77	商家の家具	27	新築の家と植木	80
死人の夢	78	上州の三大祇園	244	シンノミ	20
死の子兆	164	ジョウスイ	49	神明様	119, 151, 227
篠切り	65	ショウズカバアサン	137	人力車	69
四・八の市	70	焼香	170		
シビレ	87	定済屋	73	す 行	
シブ紙	37	上棟式の唱えごと	84	スイカと天ぷら	80
シマイコト八日	222	商人	65	水車	97
シマイ正月	193	正福寺	133, 137, 150	水田	49
シマダマブシ	270	ショウブ	199	水道	118
シマヘビ	85	——湯	82, 199	スートメ	49
シメ飾り	224	成満院	125, 131, 137	数代家族	117
下神梅	1	醤油	25, 32, 66, 113	スエノカサ	142, 167
ジモグリ	66	ショウリウ様	176	菅原神社	98
シモの病	87, 90	ショウリョウサマ	207, 209	すきぐし	9
霜よけ観音	134, 198	浄瑠璃	247	スグアミ	60
社会生活	94, 117	ショイコ(背負子)	270	すげ笠	10, 160
ジャガイモ	18, 63, 88	ショイダイ	69	スケツト	39, 64
ジャクリ	86	ショイブクロ	67	スゴヤ(直屋)	252
蛇頂石	78	食	5	スゴロク	246
ジャラ	15	食事の格	17	スショウ	162
ジャンボムスビ	10	——の作法	92	鈴香神社	132
ジャンボン	165	——のしつけ	28	——大明神	123
祝儀着	12	——の量	16	スズショウギ	67
十五日ガユ	191	——の席順	27	ススハキ	222
——のあづきがゆ	81	食習あれこれ	29	スズメとツバメの話	230
十五夜	23, 217	食制関係の俗信	29	すすりだんご	28, 44
——の供物	217	諸職	41	ステバ	168
十三夜	23, 217	処女会	151	スプザル	270
十三年忌	174	除夜の鐘	225	住まい	32
十三念仏	173	白髪染め	9	炭のこぎり	60
出棺	170	白井権八供養の灯籠	229	炭焼き	43, 59
——後	171	白砂	66	——道具	60
十二様	2, 60, 119, 127, 128, 138, 140, 143	白滝神社	2	スリエ	148
——の木	128	シラタキ姫	126	坐り産	140, 144
——の供え物	25, 59, 184, 187	シラハギの枝	189		
十二祭	6	尻大黒	36	せ 行	
十八ガユ	192	じりやき	21, 22	生業	41
十郎もち	41, 48	二郎の一日	193	整形田の字平面民家	262
シュウロクデンジ	188	シロエン橋	113	精根人	43
十六マユ玉	188	シロカキ	49	青年	106
修験	119, 137	白ナンテンの実	89	——会	106, 117, 151
主食	15	ジンカン皿	29	——集団	94, 106
出産呪術	3	——盛り	29, 139	生前供養	175
正月様	179	神経痛	90	精米	50
		信仰	119	——所	50

コシヤリ	53
五十肩	89
小正月	187
五節供	163
替女(ごぜ)	74, 113, 114, 247
—のしょうべん	74
子育地藏	86
コタネガイ	25, 191
小平大門の舞台跡	242
コトジマイ	123
コトハジメ	123
子どもの遊び	246
—の行動範囲	149
琴平様	123
コト八日	197, 222
諺	235
子なきは	114
こなもち	23
コニタ	59
子のできない人	145
コノメ	269
コノメの間	54
琥珀	10
コバユリ	20
ご飯を食べた茶わん	79
ごぼっぱもち	23
コマ	246
コマイ竹	65
コマカ	16
—餅	16
ゴマメ	29, 143
ゴマヨゴシ	20
ゴムグツ	11
米	16
—カイザシキ	36, 117
—の祝い	150
—のめし	10
子守り	150
小屋	32
コヤシ神さま	21
ゴロ	53
婚姻	152
—圏	153
金剛油	88
根生大明神	137
コンニャク	88
婚約	154
婚礼の祝儀受帳	157

さ 行

細工	67
財産のつくりあい	117
西福寺	204
歳暮	163, 223
裁縫	9, 13
—関係の俗信	13
—の一人前	13
材木運び	43
歳末諸事	222
祭文語り	247
嵯峨宮	119, 228
さかな	18
坐棺	168
作業	91
サク入れ	47
作神様	48
サクキリ	47
サクダテ	47
桜田門の変	229
サクラ峠	229
ザクロの根	89
酒	161
鮭	18, 19
サシ萱	38
さし木	81
ささひき	166
さしみのつま	88
雑穀食	17
サツマイモ	18
—のかんそう	29
サトイモ	18
里ばら七日	30
サナ	47
さなだ虫	89
座盃	160
サボテン	90
サルスベリ	80
猿田彦	123
サルのコシカケ	89
猿まわし	114
—ムコのはなし	230
沢入り	68
サワガニ	89
三ガ日	80
産育に関する禁忌	78
—俗信	149
産衆(サンシ)	147
サンダワラ	149

産見舞	146
三回忌	174
産後の食事	145
産衆(サンシ)	147
三・七の市	70
三社様	120
三十五日	174
三十三年忌	174
サンショウ	20
産泰様	143, 150
三東雨	2
山中	229
サンド蚕	51
三番草	49
山王様	124
三本辻	212
サンマ	18, 19
ザンマタ	60
サンミンサン	51
三夜様	112
三夜待	112
サンリンボ	84

し 行

痔	90
椎茸	20
—の塩づけ	19
ジオウサマ(十王様)	3, 30, 191
塩鮭	18
塩沢	1
塩マス	19
式三番	243
式服	7
敷き物	37
嗜好品	19
ジゴクボシ	77
仕事着	5, 6, 8
私財	117
死産児	149
死者となまぐさ	30
—と猫	175
シジャスミ	51
獅子舞	114, 247
四十肩	89
四十九日	173, 174
死装束	168
自然暦	91
下着	9
七・五・三	150, 218
七十七の祝い	150

き 行

喜応丸……………73

祇園祭……………3, 163, 200

キキョウ……………208

飢饉の食べ物……………30

着ゴザ……………8

気象の子兆……………76

きちがいまぶし……………53

キツネ……………85

——ツキ……………84

——に化された話……………232

——の嫁入り……………85, 232

——火……………232

絹の市……………1, 70

きのこのシロ……………20, 31

キノハツカゴ……………197

木鉢……………270

——屋……………74

岐阜提灯……………211

貴船様……………124

——神社……………77

——の天王様……………202

ギボウシ……………20

キナムシ……………66

着物……………79

きもの季節による変化……………9

キャラブキ……………20

旧正月……………179

旧福岡村……………140

キュウリの水……………89

キュウリモミ……………19

経帷子……………168

行商……………73

鏡台……………12

共同飲食……………29

共有地……………101

——林……………101

清め酒……………166

桐生三尺坊……………109

切り傷……………88

桐の葉……………88

桐原……………1, 68, 98

——会員名簿……………107

——青年共和会……………106

——と沼田……………108

——の会旗……………107

——の活動記録……………107

——の仕事……………106

——の寄合……………107

禁忌……………78

近所まわり……………154

近親結婚……………154

ぎんだし……………9

ギンナガシ……………235

ギンナンの実……………90

キントン……………161

キンピラ……………19, 29

ギンボウス……………48

く 行

クアイ……………49

食う競争……………31

食い合わせの禁忌……………79

食いぞめ……………140, 147

草刈り……………45

——場……………101

草取り……………49

グシ……………38

グシ餅……………38

クズかき……………44

クズ餅……………23

クズ屋根……………39

クズマイ……………53

薬売り……………73, 117

クゾフジの根……………30

クチガタメ……………141, 154

クチナシの実……………90

口封じ……………82

区長……………98, 99

区費……………100

雲……………76

組合ツキアイ……………113

蔵開き……………186

クリカン……………59

クリゴワメシ……………17

栗飯……………17

暮の市……………222

——不幸……………175

くわ入れ……………180

クワダテ……………186

桑切鎌……………54

——コキ……………54

——の根……………89

——つ桑餅……………6, 22, 28

——ブルイ……………269

クンチナス……………217

クンチモチ……………223

け 行

ケサガケ……………144

けすじ……………9

下駄……………10, 92

——箱……………12

結婚式の料理……………161

結婚年令……………153

血族結婚……………153

結髪……………14

ケツマンザイ稲荷……………114

ケヤキ……………82

下痢……………88

現在の隠居……………118

元三大師……………180

げんのしょうこ……………88, 89

ケンチョン汁……………17

こ 行

小泉焼……………269

光栄寺……………134, 150

郷倉……………97

高血圧……………89

交際……………112

コウジカビ……………54

洪水の被害……………117

講習ガマ……………59

講集団……………94, 109

ゴウシュウヤ……………113

庚申講……………109

——様……………109, 119, 137

——塔……………110, 137

——マツリ……………109, 110

——待……………16, 110

荒神様……………138

コウデ……………49, 86, 173

弘伝水……………228

弘法大師の杉……………229

コーモリ様……………137

——薬師……………135

洋傘なおし……………113

五月節供……………199

古稀の祝い……………150

五・九の市……………70

国防婦人会のたすき……………118

告別式……………173

子さずかり……………149

ゴザイマキ……………60

腰あげ……………11

——巻き……………10

オナメ……………26
 鬼の豆……………195
 おねしょ……………91
 オハオリ男……………59
 オハジキ……………246
 帯……………10
 オビアキ……………140,147
 オビトキ……………5,7,11
 帯解祝……………5
 オヒヤ神参り……………146
 お百度参り……………134,139,142
 オヒヤマイリ……………140,146
 オビヤキ……………144
 オブスナ様……………145
 オブタキごはん……………146
 オブヒボ……………10
 お便所参り……………148
 オベントウ……………170
 オボタテ……………146
 お盆……………163
 オマチ女房……………161
 オミキスズ……………128,187
 オミタマサマ……………190
 オミナエシ……………208
 オモト……………38,80
 主な店……………72
 母屋……………32
 オンナイチゲン ……141,158,162
 オンナシの年始……………191
 女の子のももひき……………10
 女の仕事……………62
 女のしつけ……………93

か 行
 カイコ……………51
 ——祝い……………58
 ——のはなし……………58
 ——の病気……………53
 カイコビヨウ……………54
 会計……………100
 カイド……………32
 ガイト(ゲート)……………94,97
 カイバ……………55
 買物……………73
 回覧板……………100
 改良マブシ……………270
 蛙と猿……………231
 柿……………81
 ——と秋刀魚……………80
 ——薬師……………134

書き初め……………180
 カキ花……………187
 カギ竹……………37,80,195
 カクシゼニ……………168
 カクスコ……………66
 角地蔵……………134
 各地の市……………73
 神楽……………114
 かくらん……………87
 籠屋……………113
 駆け落ち……………154
 カザリダンゴ……………168
 カシ……………81
 カジ……………77,84
 カジノキ……………80
 鍛冶屋……………65
 カシワ餅……………23
 果樹園芸……………65
 カスリ……………12
 カズゾーリ……………12
 カズノコ……………29
 風の神……………83
 ——道り……………83
 風邪の高熱……………89
 火葬……………173
 家族生活……………114
 ——の私財……………116
 かたあげ……………11
 カタイタ……………60
 カタショウジン……………25
 カタツケ……………20
 片見月……………218
 勝抜坂……………69
 カツキリ……………60
 学校通……………118
 カツブシ……………145,146
 ——ミソ……………145
 カッパ……………233
 河童の昇天……………233
 門謡い……………159
 ——送り……………159
 角地蔵縁日……………198
 門付……………193
 門松……………181
 ——迎え……………223
 カニババ(カナババ)……………148
 カノヤキ……………43
 かぶりもの……………10
 鎌が風を切る……………82
 釜が鳴る……………84

かまど……………37
 カマノクチアケ……………202
 神送り……………83,217
 ——棚……………35,225
 ——迎え……………218
 上神梅……………1
 ——桐原……………99
 髪洗い……………14
 ——洗粉……………9
 ——結道具……………9
 雷……………76
 紙屋……………65
 亀印……………68
 カミガミサマ……………131
 カヤ……………14,81,226
 ——ツリグサ……………49,89
 ——場……………101
 ——番……………60
 カヤ山……………60
 カユエンギ……………116
 カユカキ棒……………187,188,191
 カラウス……………30
 烏……………77
 ガラ焼き……………59
 刈りあげ祝い……………50
 軽いお産……………79
 カルウト……………173
 カルカヤ……………208,226
 カルマン……………65
 カレイ……………116,184
 枯レッコ……………66
 カロウト畑……………229
 川……………34
 川魚……………19
 川内村……………1
 カワラケ……………207
 川ビタリ餅(カビタリ餅) ……221
 間食……………28
 官地……………101
 カンヌキ結び……………10
 観音講……………133
 ——様……………191,216
 ——堂……………229
 神梅……………228
 ——義太夫……………242
 ——寿会……………102
 ——神社……………198
 漢方薬……………90

——繩……………105
 ——番帳……………105
 ——を埋める時……………34
 稲作……………41
 稲荷……………138
 ——様……………195
 イヌコロ餅……………221
 犬の生れかわり……………234
 犬の遠吠え……………77
 戌の日……………48, 143
 ——の麦まき……………232
 稲の品種……………48
 いのり釘……………84
 位はい……………173
 衣服の俗信……………14
 イブリ……………60
 イボ……………87
 イモウエザクラ……………74
 イモウエツツジ……………80
 イモカキ車……………31, 270
 イモガラ……………19, 220
 イモデンガク……………196
 イモヨウカン……………161
 イモはかげの俵……………18
 忌み切り……………174
 ——餅……………142
 入れ雲・出し雲……………76
 いろり……………36
 ——の禁忌……………80
 ——の席次……………177
 岩穴観音……………122, 132
 イワシ……………19
 イワシバ……………67
 インキマメン……………116
 インキョ……………114
 飲料水……………30

う 行
 植木の禁忌……………80
 上杉謙信の馬……………237
 魚雑貨市……………73
 うぐいすな……………44
 ウシトラ……………34
 ウチサン(内三)……………6, 15, 16
 打ち身……………90
 ウツギ……………44
 ウデマンジュウ……………21
 ウデモチ……………21
 うどん……………17, 32
 うどん粉……………21

——の食品名……………21
 うなぎと梅干……………80
 うぶき……………7, 146
 ウブスナ様……………147
 ——の笑い……………148
 産湯……………146
 馬……………66, 80
 生れかわり……………149, 175
 梅干……………18, 19, 88, 89
 ウラトリ……………52, 269
 ウリッパ……………20
 うるう年……………77
 うろこ雲……………76
 噂話……………117

え 行
 エエガエシ……………63
 絵かき……………113
 易を見る……………114
 オシブトン……………12
 江戸楼……………6
 エビス講……………3, 16, 192, 221
 ——様……………131, 138
 ——棚……………221
 エボムスビ……………10
 エンガウナイ……………61, 109
 縁起……………30, 81, 95, 116
 ——の良い夢……………78
 エンキリ繩……………171
 エンジの木……………80

お 行
 オイド……………102, 229
 大岩の蛇……………227
 大鎌……………271
 大杉まさ……………77
 大山祇神……………25, 144
 大間々市(イチ)……………73
 ——の井戸……………103
 ——の気質……………113
 ——の祇園……………243
 ——町の成りたち……………95
 ——六人衆……………96
 オオヨギ……………13
 大晦日……………225
 オカイチョウ……………73
 オカシラツキ……………128
 おかず……………18
 お勝手仕事……………28
 オカボ……………44

オカマサマ……………190
 オカミアゲ……………141
 オガミヤサン……………119, 137
 送りイチゲン……………158
 送り盆……………176
 オクマンサマ……………123, 138, 140
 ——まいり……………140, 149
 オクンチ……………127, 163, 217
 オケ屋……………113
 オコアゲ……………51, 54
 オコモリ……………119
 オサキ……………28, 179
 ——つき……………84
 オサゴ……………130, 131, 137
 143, 146, 187
 お産……………144
 ——のブク……………127
 オシイ……………109
 お七夜……………146
 オシメ……………146
 オシヤカ様……………122
 お酌着物……………157
 オシヤクコ……………160
 オショウジン……………139
 ——の食事……………25, 152
 おしょうばん……………158
 オシラキ……………130, 223, 225, 270
 オシラサマ……………180, 189, 196
 オシラ祭……………188
 おすましのだし……………26
 お先達……………138
 オタイギ振舞……………141, 161
 オタカ盛……………161
 オタナアゲ……………142, 165, 173, 174
 ——イタ……………187
 ——サガシ……………184
 小平狸原の舞台……………239
 オチカヅキ……………158
 オチツキのモチ……………159, 161, 170
 お乳……………148
 雄蝶雌蝶……………160
 お通夜……………142, 168
 オッキリコミ……………20, 21
 夫のつわり……………140
 おでき……………88
 お天狗様……………64
 男の子の初節供……………82
 お年玉……………184, 246
 オトミマク……………140
 オトミマケ……………143

索引

<p>あ 行</p> <p>アーボーヒーボ ……188</p> <p>アオジソ ……88</p> <p>青大将 ……76</p> <p>青物市 ……73</p> <p>赤城おろし ……76</p> <p>——神社 ……2, 83, 119</p> <p>——様 ……122</p> <p>——代参 ……122</p> <p>——の神 ……123</p> <p>——の雷 ……76</p> <p>——のむかで ……85</p> <p>——山 ……199</p> <p>——登山 ……198</p> <p>赤いはんてん ……150</p> <p>——帽子 ……150</p> <p>アカザの杖(つえ) ……87</p> <p>赤堀道玄 ……3</p> <p>赤ん蜂 ……85</p> <p>赤ん坊のとまりそめ ……147</p> <p>アキアゲ ……31</p> <p>あきの方 ……146</p> <p>——の山 ……223</p> <p>アクヤ ……97</p> <p>アクヤマ ……97</p> <p>アゲクサ ……49</p> <p>朝雨 ……76</p> <p>朝エビス ……192, 221</p> <p>朝草刈り ……41, 109</p> <p>アサヅクリ ……45, 63</p> <p>麻の葉のきもの ……144</p> <p>朝藤夜繩 ……80</p> <p>浅原 ……1, 98</p> <p>——の神仏 ……132</p> <p>——の舞台 ……241</p> <p>朝メシ ……27</p> <p>朝焼け ……76</p> <p>朝湯 ……180</p> <p>足入れ ……155</p> <p>足尾街道 ……41</p> <p>——線 ……68</p> <p>——銅山 ……2</p> <p>アジサイ ……81</p> <p>足膳 ……27</p> <p>あしだ ……10</p>	<p>アシツカワセ ……14</p> <p>アシナカ ……11, 83</p> <p>——ぞうり ……11</p> <p>アズキトキババアの話 ……234</p> <p>あずきめし ……17</p> <p>アゼヨク ……46</p> <p>愛宕精進 ……119, 123, 192</p> <p>あだな ……234</p> <p>頭の毛 ……14</p> <p>暑け ……88</p> <p>あつため粥 ……190</p> <p>小豆がゆ ……24, 81, 109</p> <p>——の分量 ……24</p> <p>——めし ……24</p> <p>後産 ……145</p> <p>あとば ……10</p> <p>穴原共有林 ……101</p> <p>アナマワリ ……142, 170</p> <p>油いり ……19</p> <p>一祝い ……5</p> <p>一みそ ……19</p> <p>一モモ ……65</p> <p>阿夫利神社の祭 ……124</p> <p>雨乞い ……2, 51, 82, 83, 122</p> <p>甘茶 ……80</p> <p>あめ売り ……74</p> <p>あまんじゃく ……228, 231</p> <p>アラコ ……46</p> <p>新盆 ……176, 206</p> <p>——見舞 ……176, 211</p> <p>——迎え ……176</p> <p>荒物屋 ……73</p> <p>アララギ ……89, 90</p> <p>アラレ ……76, 82</p> <p>アリジゴク ……89</p> <p>あわせ ……8</p> <p>アワ ……17, 44</p> <p>——餅 ……17, 223</p> <p>アンコメンコ ……21</p> <p>安産祈願 ……143</p>	<p>育児 ……148</p> <p>池の鯉 ……76</p> <p>医光寺 ……73</p> <p>居酒屋 ……65</p> <p>石臼 ……3</p> <p>石垣 ……69</p> <p>石工 ……123</p> <p>石原の三本兄弟松 ……228</p> <p>石山観音 ……191</p> <p>衣・食・住 ……5, 7</p> <p>衣生活に関する禁忌 ……79</p> <p>伊勢講 ……109</p> <p>——ころがし ……227</p> <p>板割り ……65</p> <p>市 ……70, 73</p> <p>イチゲン ……141, 157</p> <p>——座敷 ……158</p> <p>——まけ ……158</p> <p>イチゼン飯 ……79</p> <p>胃腸病 ……89</p> <p>一日の食事 ……27</p> <p>一人前の仕事 ……64, 91</p> <p>一年忌 ……173</p> <p>一番草 ……49</p> <p>イチヤモチ ……223</p> <p>五日正月 ……181</p> <p>イッケ ……114</p> <p>——稻荷 ……115, 119, 128</p> <p>——の禁忌 ……115</p> <p>——の結合 ……114</p> <p>一升ツカ ……43</p> <p>——マキ ……43, 49</p> <p>——マスに財布 ……192</p> <p>五つ紋 ……6</p> <p>一食の基準 ……27</p> <p>一周忌 ……174</p> <p>一斗マキ ……43, 92</p> <p>いっちょうら ……9</p> <p>イツナノカ ……174</p> <p>一般座敷 ……157</p> <p>イッポン ……20</p> <p>井戸 ……2, 32, 34, 39, 94, 102</p> <p>——替え ……103</p> <p>——神様 ……2, 34, 131, 138</p> <p>——組 ……94, 95, 102</p> <p>——組合 ……103</p> <p>——綱 ……103</p>
--	---	---

群馬県民俗調査報告書第十九集

大間々町の民俗

昭和五十二年三月二十八日印刷

昭和五十二年三月三十日発行

(非売品)

編集兼発行者 群馬県教育委員会

発行所 前橋市大手町一丁目一―
群馬県教育委員会事務局

前橋市元総社町六七

印刷所 朝日印刷工業株式会社

電話 (51) 四三六七